

---

# 臥龍転生《がりゅうてんせい》

有坂 蚩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

がりゆうてんせい  
臥龍転生

### 【Nコード】

N2316E

### 【作者名】

有坂 蛍

### 【あらすじ】

“ 我は毘沙門天の化身なり ” かの有名な上杉謙信公の生涯を、史実をおりませ創作中心で展開しています。主人公は、昭和からの転生者。前世からの記憶をもち、女性だった身が男性へと性別をかえ、軍神と呼ばれる“ 上杉謙信 ” となり、過酷な戦国時代を切り開く物語です。なお本作品はあくまでも架空の小説であり、登場する名称や団体との関わりはありません。

## 序章（前書き）

これから綴られる『上杉謙信公の物語』は、あくまでも作者の妄想による物語です。正史にのつとた解釈とは隔絶したところが多々あり、許容出来る方のみお読み下さいませ。

なお本編の主人公は、第二次世界大戦戦後の日本における昭和史を生きた女性であり、性別を換え戦国時代に長尾景虎として生まれ変わった転生者です。前世の記憶はありますが、戦国時代の歴史については、ごく一般的な知識しかありません。

## 序章

吉

数日前より、降りつづいた豪雨が、妻女山に築いた陣屋の縁先に、ひっそりと咲くヤマホトトギスの、その小さな白い花弁を、無惨に散らしていた。

陣屋の片隅で、ただ精一杯の生を営んでいただけなのに……。

一片の散らされた花弁は、この胸をしめつける。転生した世界の理不尽さを重ね合わせ、私は無心に琵琶をかき鳴らす。

なんの因果か、私が生まれ変わった、この世界のありようは、力をもたぬ弱き者に厳しくて、随分と平和だった前世の記憶と比べれば、とうてい許容出来ない倫理観の違いに、目の前が真っ暗になった。

なぜ神仏は、世の理からはずれた生を私に与え、このような理不尽な世界に生かしているのだろうか？

気がつけば、いつも絶望と恐怖をかかえて生きてきた。この世界の理から目をそらし、運命を呪い抗った時もあった。しかし今は静かに燃え猛る青白い焰ほのおを胸に秘め、来るべき時をまつ。

たとえ間違っていようとも、信じる道を貫くのみ！！

弐

決意を内に秘めた私の目の前に、ものものしい鎧に身に包んだ宇佐美定満が、おだやかな好好爺のおおをして、この縁先にあらわれた。

「お屋形様、高台から面白いものがみえますぞ」

「んっ……宇佐美か？武田方にうごきがあつたな」

答える声に、モノクロームに凍りついていた私の視界が、在るべき色彩をはつきりと取り戻す。そして新たな運命の歯車が、軋んで回りはじめる予感がした。

やってきた決断の時に、私がゆるりと立ち上がると、気を察し室内にひかえた小島弥太郎は、のそりと縁先に現れ琵琶をうけとつた。

「お虎様、やっと動くのだろ？久々に腕がなる！！」

さぞかし今まで退屈だったのだろう、私の腹心は赤鬼のような顔を期待でさらに赤く硬直させて、二の腕に力瘤をつくってみせる。

「さてな、どうであろう」

弥太郎の言葉をはぐらかし、私はすこし首を傾げ思考を巡らせた。そして閃くままに縁先へ飛び降り、いまだ降る小雨のなか敵陣がみわたせる高台へと駆けだした。

いま決戦の時が近づいて来た！！ドキドキと心の臓が高鳴る！！身のうちに燃え上がる青白い焰！！この度こそ、決着をつけるのだ！！

「おやおや……まるで子供ようじゃ。お屋形様、足元に気をつけなされ」

宇佐美は、無邪気な顔つきで走り行く主の背に声をかけた。そして振り向いて弥太郎と視線を交え、確信をもってひとつ頷くと、走り去った主の後を追う。

参

高台にたどりつくと、私は敵陣から立ち上る煙をチラリと見て、切れ長の目を細め、唇の端をつりあげた。それは絶望と恐怖、忌まわしい狂宴のはじまりだ。

胸のうちに静かに燃えさかる、青白い焰が本来の私をのみこむと、すぐさま頭に、驚異的な数の戦術パターンが、つぎつぎと浮かび駆けめぐる。

そつだ絶望と恐怖をあたえる、青白い焰に飲み込まれ、私は『戦さ人』になる。

宇佐美が遅れて高台につくと、すでに雨はあがり、ぼっかりと浮かんた冴えた月が高台の主を照らす光景が見えた。

その主のうしろ姿は、誰もが畏怖する魔性をやどし、噴き出す青白いオーラが世界を侵食していくような、錯覚をおぼえさせる。

彼は、はやる鼓動を強引に抑えつけ、ことさらゆっくりとした足取りで、主の隣にならび立つ。そして、世間話でもするようにならび、主に問いかけた。

「あの煙、敵はどうかやら、明日攻めてくるようですね。いかがいたしますか?」

「ふっ……あやつらしびれを切らしたな。明日は面白い戦が出来そうじゃ」

満足そうに言うと、明日の戦を占うように天を見上げた。すると、雨が上がっている事に気づいて、私は口角をニイとあげた。

「んっ……どうやら天は、我に味方するようだ」

「しかり!!地元のものに訪ねました所、雨が止んだ翌朝は濃い霧が出るそうです。丁度、敵が陣をはる八幡原は、濃い霧で一寸先も見渡せなくなるそうです。我らには好都合ですね」

私は好戦的な視線で、並び立つ宇佐美を見ると、声あげてクツクツと笑いだした。

理不尽に奪われ続ける者たちを、平和を願う力なき者たちを守りたい。

「宇佐美!!軍義の支度をせい!!」

両手を真っ赤に染めて、我は毘沙門天の化身となる。

序章「完」

## 序章（後書き）

初めまして作者の**有坂**<sup>ありさか</sup> 蛍<sup>けい</sup>です。拙い文章ですが、興味を持って読み初めて下さった皆さんありがとうございます。御座います。

本作品は、私個人の運営するHP上にて公開している小説を加筆修正したものになります。ですから更新はゆっくり目になりますのでご了承下さいませ。

また最近、筆をとったばかりの初心者ゆえ見苦しき点多々あり誠に申し訳ない限りです。出来ましたら本作品の質を向上させるためにも、ご意見ご感想など頂けたら幸いです。

## 第1部・誕生編 第1章・前世（前書き）

### 第1部・誕生編

#### 第1章・前世

上杉謙信に生まれ変わる前、つまり前世の記憶について、おおまかに書いています。

#### 誕生編の脚注

この頃の越後では、府中お館たてにすむ守護しゆいの事を『お館様』と呼び、府中春日山城に住む守護代しゆごだいを『御実城様おみじょうのみま』と呼び習わしております。

小説内では上杉謙信公が越後国主となった時に、『お屋形様』と呼ぶようになる予定です。

第1部・誕生編 第1章・前世

吉

澄み渡る五月晴れの空に一陣の風が、墓前にそなえられた線香の清雅な薫りをくゆらせ吹きぬけた。

静かに漂う時間に身をまかせ、そつと瞼をふせて手をあわせる。脳裏には、過去の回想が走馬灯のように浮かんでは消えていった。

納骨の儀式がおわって、和尚やほかの家族が本堂へいった後も、私は墓前に佇んでいた。肩を遠慮がちにぼんぼんと叩くと同時に優しく気遣うような声がかかる。

「母さん、もう帰ろう」

ふと我にかえり後ろを振りかえった私の目に、20代後半になった娘の美佐子の困った顔がうつる。

予想以上に長居してたから、心配でむかえに来てくれたのね。

「……待たせてごめんねえ。さあ行きましょう」

小高いやまの中腹にたつ高台寺、その本堂へつづく登り階段をめざし、美佐子が片手に墓参用の桶を持って歩きます。そして、私もつられて立ちあがり、彼女について歩きはじめた。

その階段は、満開の臈月に色鮮やかにいろどられ美しかった。階段のなか程で、眼下に規則正しく佇む墓のむれを、ぼんやりと眺め

ていると、意図しないつばやきが漏れてしまう。

「……いつか私があのお世に行ったら、一緒にお茶でも飲みましょね」

数カ月まえ、私たち家族に使途不明の多額の負債をのこし、18年もの間行方不明になっていた元夫が、交通事故で入院したと一報がはいった。

私は子供たちの反対の声をふりきって、元夫が収容されてる病院にかけつける。しかし元夫は、昏睡状態に陥ったまま数日のうちにあっけなく亡くなってしまった。

「……母さん、ぼっーとして大丈夫？ごめんね、本堂へ早く行かないと、兄貴達が痺れ切らしてるかもしれないし」

「……あ。ええ、そうね。少し急いで行きましょうか」

私は美佐子の声に促されてまた歩きだした。

弐

娘はふりかえりつつ、私を気遣いながら足早に歩く、その後ろ姿に幼かった日の娘の姿を、懐かしく重ねあわせた。

子供達がまだ幼かった頃は、笑い声のたえないごく普通の家庭だったのに。

実家に反対されての駆け落ち結婚だったが。会社員の夫と私は、二人の子供にめぐまれて平凡な日々を送っていた。

今から思えばあのときは幸せの絶頂だったのかもしれない。

私たち家族に変化が訪れたのは、ちょうど美佐子が小学校へ入学したばかりの頃だった。

上昇志向の強い夫は、家族になんの相談もなく脱サラ。そして数カ月の修行へ行っただかと思えば、勝手に自宅を改装し、ラーメン屋をはじめ準備をする。

もちろん貯金は店の改装資金で空っぽです。私は不安なきもちをおし隠し、破天荒だけとお人好しな夫の夢を、一緒に叶えようと開店準備にいそしんだ。

あの頃の夫は未来の夢を信じ、目をかがやかせ『昇龍軒』と名銘（しやうりゆうけん）作っただばかりの小さな店舗を、満足そうにみわたすのが常だった。

「俺も一国一城の主、ラーメン屋で一発あて成功してみせるぞ！」

力強くいう夫の口癖をききつけ、たのしくおもう反面、商売の先行きや子供たちの将来をおもい、不安な気持ち、水辺の波紋のように広がり、私を弱気にさせた。

やはり不安は、つぎつぎと現実となり。私達を取り巻く環境も最悪の一途をたどる。

始めたばかりの店は、明日の仕入れのお金さえつづかない。山下家の食卓にのぼるのは、店の残り物だけというありさまに胸が痛くなった。

救いは、気に入って通って下さるお客様が、少しづつ増えていたことだけ。絶望的な状況のなかで、私はこの窮地を乗り越えなくては、夢は一生叶えられないと、なおいつそう仕事に勤しみました。

一方夫は厳しい現実から目をそむけ、しだいに仕事を疎かにするようになり。あげく逃げるようにパチンコや競馬にのめり込んでいった。

夫はこの時期から借金を重ねていったのかもしれない……

…。

今から思えば、もっと早くに彼の状態を察して何とかしていれば、最悪の事態は防げたのにと、後悔がつのります。夫が放棄した店を支え続けることが、精一杯だった私に、何が出来たというのだろう。

私達家族が地獄の淵に立たされたのは、ラーメン屋を始めて4年後のことだった。

弐

やがて私たちは、高円寺の本堂につづく広縁にでた。すると迎えに現れた孫たちが見えた。すぐに私たちを見つけた2歳になったばかりの美佐子の末っ子が、無邪気な顔で笑って呼ぶ。

「ばあばあ ……」

「あっちゃん ……」

両手を広げふらふらした足取りで近づく孫を、腰をかがめながら

両手を広げて受け止めた。

「ごめんね、待ちくたびれちゃったかな？」

そして最近では良くなつてくれるようになった残り3人の孫たちも、そばに走りよってきた。私は、周りを取り囲こんだ孫たちに頬がだらしなく緩む。

ここ最近はかわいい孫と遊ぶのがゆいつの楽しみだもの。

長男の息子が何か言いたげに、私のスカートを引っ張って遠慮がちに言う。

「ねえお祖母ちゃん、パパがさつきから怖い顔してるのは、ボクらのせい？」

この少年は聡い子で、大人の態度にびんかんな反応をみせる子供だった。私は彼と視線をあわせ、優しく少年の頭を撫でた。

「きつとおばあちゃんが帰ってくるの遅いから怒ってるだけよ」

すると傍で話しを聞いていた美佐子が憤慨ぎみに口を挟む。

「ああ……子供にまで変な心配させて、兄貴はいつまで拗ねたら気がすむんだろ。よし！！おばちゃんがガツンと言ってきてあげる！！」

止める間もなく、ドシドシと床板を踏みしめて本堂に入って行く娘。私は慌てて孫たちを連れて後を追った。

すぱーんっ。

ふすまを乱暴に開ける音が、本堂に響き渡る。つかつかと兄の克つやの前に歩みより、ぐいっと兄の耳を引っ張る美佐子。

「いい加減にして！！いつまで子供みたいに拗ねてるつもり！！」

慥然とした表情の克哉は、美佐子の手を振り払い耳をおさえた。

「痛いぞ美佐子……………あいつがお袋に迷惑かけるのが悪い」

克哉は鼻柱にしわをよせて、さも嫌そうに低い声でボソリと言う。かたくなな兄の態度に失望して肩をすくめる美佐子。

「わざと痛くなるようしたのよ！……………ねえ兄貴、周りの事を考えてよ！みんなが嫌な気持ちになるの解ってるの？」

参・義人 side

ああ、なんだろこの雰囲気。

突然、乱入してきた美沙子が、いきなり兄弟ゲンカをはじめた。二人とも良い年だというのに、大人げないだろと思いつつ、俺はお節介で頑固者の山下家独特の気質が、けっこう気に入ってたりする。

だからって日常茶飯事に行われる、こいつらの兄弟ゲンカを仲裁するのは遠慮したい。小心者な俺は、愛須あいの 義人よしひとと言います。そして、襖を狂暴に開けた美佐子の夫やってます。

少し遅れ、孫達を連れて本堂に入って来た義母の山下 登美子やましたとみこさんと目があつた。や、やばい！！俺は義母の期待するような眼差しに弱いんだあ。

とりあえず、夫として嫁くらい宥めてみようかと、二人を刺激しないようにそろりと近づいて、美佐子の肩を後ろから柔んわりと引き留めた。

「まあまあ……美佐子もおちつけ。義兄さんもきつと解ってるんだよ」

俺は美佐子をなんとか宥めすかし、その場に落ち着いて座る様に勧める。一方の義兄を見ると決まり悪るそうな顔して、座りなおしていた。

やはり義兄も気持ちの切り替えが効かないんだろうな。

俺は困惑と少し好奇心で、義母の顔をそつと伺う。意外にも優しい笑みを浮かべて二人を見ていた。この人の懐の大きさには、俺はいつも驚かされる。

義母は孫達に、安心させるような笑顔を向けると、そつと俺に目くばせをして、子供たちを預ける仕草をしてみせる。きつと何か考えがあるのだと、俺と義兄の妻の真理まじさんとで子供達を保護した。

義母は落ち着いた素振り、兄弟の間に何食わぬ顔で割って入って座り。各々の手を取り合ひし、両手で包み込みんでいた。そしてさも嬉しそうに、ニッコリと笑うと鈴が転がす声で笑いだした。

意外な義母の態度に、二人の兄弟は毒気の抜かれた顔を見合せ、

少しだけ苦笑いを浮かべた後、ブフツと吹き出して笑いあった。終いには俺も義姉も側にいた子供達でさえも、安心したのか声をあげて笑っていた。

あの無愛想な義兄が笑ってる???この場を笑顔ひとつで変える義母は不思議な人だと思う。

#### 四・義人 side

俺の聞いたところによると、義母の人生は波瀾万丈に充ちている。何百年と続く老舗の織物問屋の娘に生まれたと言ってたな。

貧乏学生であつた亡き義父と大恋愛の末駆け落ち結婚という当時は大胆な行為を成し遂げてしまう。

まったく世の中が自由な気風の高度成長時代のなかにあつても旧来の因習に縛られた実家をよくも飛び出せたもんだと関心するよ。

そして夫の裏切りとも言える行為にも屈せずに、持ち前のど根性でラーメン屋を存続させ。そのうえ、もともと商才があつたのだから、バブル期にはラーメン店を手始めに居酒屋なども経営し、昇龍軒を大手飲食チェーン店に押し上げてしまった。

驚嘆すべき偉業を成し遂げたパワーは、この小さい体の何処から出てくるんだろう?

義母の堅実な会社運営と斬新な企画力、人材育成方法の巧さには多くの経済人からの支持を集めている女傑である。

ちなみに現在は社長の椅子を長男克哉にゆずって、商品開発や仕

入れのために海外を飛び回っている。まあ趣味と実益ってやつだらうな。最近は孫の面倒をみるのが楽しいらしく、めったに仕事はしなくなった。本当にごく普通の孫バカ婆ちゃんになってしまったようだ。

俺達家族は義母が大好きだし、いままで苦労してばかりだったから、せいぜい長生きしてもらって、いっぱい親孝行してやりたいなと思ってたりする。

#### 四

ひとしきり皆で笑いあった時に、和尚さんが太った体を震わせて笑いながら近づいてきた。

「あははは……登美子さんご苦労様じゃったな。家族は仲良くせんといかんぞ」

小じわの寄った目で悪戯っ子みたいに皆を見回す。

「あらいやだ……見てたのですか？和尚さんも人が悪いですよ」

私は少し上目遣いに和尚さんを睨んだ。いったい何時から見ていらっしまったのかしら？

克哉がもっともらしく咳払いをし、美佐子が克哉の後ろに隠れようとしていた。

兄弟の微笑ましい様子に、和尚さんと一緒にまた笑ってしまった。

そして私たちは、和やかな雰囲気の中、納骨のお礼をすまし寺を

引き払うことにした。

帰り際、住職に呼び止められ暖かい労いの言葉をもらった。

「登美子さん幸せになったの……あの時に子供を置いて自殺しなくて良かったじゃろ。あんたも苦労したぶん、これからは第二の人生を楽しまなくてはいかんぞ」

実はあの地獄の様な日々にかけて、自殺を考えた事がある。私たち夫婦を仲人してくれた和尚さんへ、子供達を託すため高台寺を訪れていた。

思い浮かべた過去の追憶に涙腺が緩みそうになった。私は、言葉にならず深々とお辞儀して子供達の後を追いかけた。

「さあみんな、納骨も終わったから美味しい物でも、食べに行きましよう。何がたべたい？」

家族それぞれが食べたい物を挙げていく。みんなの声を聞きながら幸せを感じていた。

しかし運命の女神のいたずらか本人の思枿をよそに、大きくきしんで回りはじめた。

奇しくも元夫の納骨式の帰り、車道へとびだした二歳になる孫をかばって、大型トラックに接触し即死。山下登美子享年62歳。

第1章、前世「完」

## 第2章・胎動

吉

栄華をきわめた室町幕府は、応仁元年より後継者をめぐる『応仁の乱』が勃発し、戦乱は長きに渡り続いた。

その戦で、京の都は荒廃をきわめ、追い討ちをかけるように飢饉や天災が頻発し、室町幕府から急速に人心が離れ……

それ以降、執政で成り立つ室町幕府の権威は著しく失墜していった。

その事を受け地方では、室町幕府の地方官である守護大名が、実質的な支配力を持った守護代や、国人衆こくじん「豪族達」に、とって変わられる『下剋上』の世の中にうつり変わってゆくのでした。

そして越後にも、『下剋上』の嵐は容赦なくやってきた。

越後の国人衆から支持を集めた、守護代の長尾為景ながおためかげにより、力を失いつつあった守護の上杉房能つえすきふさよしは滅ぼされる。

その事態を重くみた、関東管領の上杉顕定つえすきあきただは為景らを討伐するため、越後へと攻め入った。しかし、これも又返り討ちにあい、上杉顕定は討ちとられる。

これにより関東管領の職責をめぐる、山内上杉家の後継者争いが勃発し、上杉氏の越後における覇権は失しなわれた。

永世7年（1510年）、長尾為景は、傀儡政権として守護に擁立していた上杉定実を、したたかな朝廷工作のすえ幕府に正式な守護として認めさせたのです。

これで越後における争乱は静まり、表面的には安定期をむかえます。しかし水面下では、古くから土地にねざす国人衆は侮りがたく旧体制側の抵抗も続いていきました。

また、隣接する信濃では、頭角を表しつつあった村上氏が勢力をのばし、越中では先代から続く、一向宗の門徒との争いが多発。越後は予断を許さない状況でした。

上杉二君を弑虐した乱世の奸雄、長尾為景は下剋上のし烈な時代を、鬼神のごとき苛烈さで戦場をかけぬけ、越後地域における支配を北へと拡大して行くことになる。

その為景のかたわらには切れ長のひとみを冷酷に煌めかせた美貌の女武将が、つねによりそって戦っていた。その武勇はかぎりなく、戦場を舞うがごとく、みごとな太刀筋であったと伝えられています。

その女武将こそ『栖吉のお虎』

為景の後妻にはいり一男一女をもうけ、のちの世に聖将や軍神とあがめられる、上杉謙信公の産みの母、虎御前の若かりし頃のお姿であります。

風雲、急をつげる越後に時代の寵児が生まれるまであと少し。

享祿二年（1529年）ともなると、為景に反抗し兵をあげた守護の上杉定実も、春日山城の奥深くに幽閉され、長尾為景は魚沼・中越地方をほぼ支配し、名実ともに越後の支配者となりました。

そんな一時の平和を謳歌するように、この雪ぶかい越後にも春のきざし福寿草が、めばえ始めた頃のことです。

春日山城の三の丸の侍屋敷よりいちだんと高い二の丸曲輪うち的主殿、虎御前の部屋へ灯りをもって向かう侍女がおります。

「虎御前さま、夜も更けてまいりました。そろそろ、お休みになられませ」

虎御前が栖吉すよしから嫁入りした時に、付き従ってきた侍女の萩野はぎのが心配そうな顔をする。虎御前は、時をわすれ観音菩薩像と向き合い一心に祈っていたようだ。

「栖吉が跡継ぎを心待ちにしよう、妾も努力せねばのう」

彼女は古志長尾ふるしながお氏のたった一人の直系後継者で、栖吉長尾の後継者を産むという、使命があります。しかし女子はすでに出産したが、いまだに男子を産むことが無かったのです。

虎御前はままならぬ現実に、そっと溜め息をつき本尊に手を合わす。そして心配そうにする萩野にむきなおり、疲れたような微笑を浮かべる。

「萩野や心配するでない、妾も気をつけよう。ところで綾あやはどうじや？」

「はい、綾姫さまは乳の吸い付きもよく、良く眠っておいでになます。虎御前さまも早くお休み下さりませ」

奇しくも主従がたわいない会話をかわした夜中、虎御前は不思議な夢を見た。

観世音菩薩がおわす妙高山からやって来たと言げ、目元のすずやかな修験者が、夢枕にあらわれ願いを言った。

「あなたさまの胎内しばし、お借りできませんか？」

虎御前は意味がわからずに、夫のある身なので断わろうとされたが、僧はまた告げる。

「では、夫の為景殿に、この事必ずお伝え下さい。また、明日の夜に参ります」

その言葉を残し、僧はまぶしい光りと共に消えた。あたりには何ともいえない清雅な香りがたちこめる。

すぐに夢から覚めた虎御前は、部屋に夢のなかと同じ香りが残さされていると気づき、夢ではないと確信を深くした。しかし得体の知れない怖さから背筋がゾクリと冷え、夜着を握りしめた。

これは観音様のお告げに違いない。さつそく、我が殿に吉夢を見たとお知らせしよう。

参

朝はやくから浮き立つ気持ちごとまらない虎御前は、つい含み笑

いをもらしてしまっ。

「何か良いことがあったのですか虎御前様？」

最近の虎御前様は男子をさずかれなくてお悩みでしたのに。

「ふふふ、良い事があったのです。まずは、我が殿に申し上げねば」

はなやかな京風の小袿をはおり、小刀を腰にさした虎御前は、まれにみる極上の笑みを浮かべた。久しぶりに見るご機嫌の良さに荻野の口元も、しらずとほころんでいた。

「では、先に荻野が取り次ぎに行つて参ります」

政務が終えてなければ待たされる時もあるので。荻野は、ひとつお辞儀をすると軽い足取りで評定の間へと向かいます。

「御実城様おみじつぐさまにお取り次ぎくださいませ。虎御前がお渡りにございませ」

評定の間にいる近習衆に声をかけたつもりだったのだが。以外なことに為景が自ら機嫌よく言葉を返したのだった。

「なんとお虎が来るか？それは丁度よい、さっそく呼ぶが良い」

荻野は、かしこまって案内に戻る。

それにしてもいったいなぜ為景様まで機嫌良いのだろう？

うってかわり侍女が来るまでの評定の間では、為景がおもな腹心

をあつめ林泉寺の住職から星占ほしうらの報告をつけていた。

林泉寺は長尾家代々の菩提寺。そして住職の天室光育てんしゅうこういく禪師は、軍略や星占で為景につかえる軍師ともいえる存在でした。

「昨日、妙高山の方角に彗星が生まれました。星占によりますと、観音の導きにより越後に吉兆がもたらされると出たのです」

感情をまじえず淡々とつげる光育に、珍しく喜色をにじませ為景は問う。

「それは良きこと！して、吉兆とは何んだ？」

「拙には、まだ分かりかねます」

光育は少し大きさに首を左右にふり、為景はしかたなく控える重臣たちをみまわしてみる。しかし誰からも答えが得られずに困っていた。そんな時に、侍女がふすま越しに虎御前の訪問を告げたのでした。

## 第2章・胎動

### 第3章・確執

吉・晴景 side

わしは女のくせに生意気な虎御前がきらいだ。父上も、なぜあんな女狐を側におくのか。

女など男にかしずき、城の奥で大人しく暮らしておればよいのだ。

そうすれば、少しは継母として優しく接してやらんこともない。しかし、なぜ父上も重臣たちも、あの女狐のいやみな口をとじさせようとは思わぬのか？

為景の亡くなった本妻の子、きへいじ長尾喜平次晴景は次期後継者として、父と共にいくども戦場に出ていた。

しかし、めだつ功績がない自分に嫌みな口調でネチネチ教育的な指導をする虎御前に内心はらが立ってしょうがなかった。

たかが後妻の分際で、嫡男であるわしに言いたい放題。かた腹痛いわ女狐めっ！！

晴景は、もとから体が弱く喘息の持病があり、武将としての器がない反面、知識にすぐれ文化人の側面を持っていた。

わしは戦などすかぬ。あんな野蛮なことは、家臣にでもまかせておけば良いのだ。

晴景は二十歳、まだ歳若い彼には、父である為景の威光にひれ伏す国人衆を当たり前のように思っている。

おそれおおくも朝廷から認められた越後守護代家だぞ。国人衆ごとき恐れるものではない。

まさか、恭順しひれ伏した国人衆が内心それぞれ守護代家に反意を持っているとは一辺も思いつかなかつた。

「喜平次様こんな所で立ち止まり、いかなされた？」

廊下に立ちつくしても思いにふけつてしていると、重臣である直江実綱おえさねつなが、眉をさげて心配そうな顔つきで問いかけてきた。

わしはわたり廊下を広間にむかつて歩いていたはずだが？

「だいじない」

と、そっけなく言放つ。

「まあ……それなら直しいのですが？きょうは天室光育どのから星占についての報告があるらしいですぞ。さあ、まいりましょう」

「わかった、参るぞ」

無然とした表情を、家来ごときにさとられるのが嫌だと思い。手に持っていた扇で顔をかくし、評定の間へむかうのだった。

式・晴景 side

ああ……朝から女狐めを思い出すとは縁起がわるい。綾が産まれてからは、めったにみかける事がなくなって嫌な思いをせずに住んでいたのにな。

このまま一生、子育てに専念してくれたら、どんなに清々するか。

大切な評定の間でこんな事をつらつらと思つてたわしは、久しぶりに虎御前が広間にやってくると知つて、イライラと手元にある扇を開いたり閉じたりと繰り返す。

「さすが虎御前、図つたように来られるとは。きつと良きことにはかなりませんぞ実城様」

武辺者の柿崎景家かきざきかげいえが、大きな地声でうれしそうに言う。まるであの女に尻尾をふる犬だ。

きにくわぬ。

「まこと柿崎の申すとおりよ」

父の期待のこもつた言い様に、わしは眉間にしわをよせる。広間は虎御前を期待をもつて待ちわびる者ばかり。

満をじしてあらわれた虎御前。背筋をピンとのばし、趣味のよい小袿をキレよく軽くさばいて、きつい切れ長の目で、広間にいならば重臣たちを見回した。

「おや、評定はまだ終わつておらぬのか？たまさか悪鬼がそろいぶみで、何の悪だくみをしておつたのやら」

女狐の偉そうな物言いににやにやと笑う父や重臣たち。あの暴言を気にした様子もなく次々と頭を丁寧に下げていく。

こんな戯れ言、みなはらが立たぬのか？こしめけめ！！

虎御前は、小袿をはらうと優雅なしぐさで為景のかたわらまで足を運び。父に膝まづき、ゆったりと深く頭をさげた。父は、ヤニさがった顔で頷くと、咳払いをして威厳のある声で皆に声をかけた。

「みな面をあげよ。お虎ようきた。みな首を長くして、そなたを待っておったぞ」

機嫌がいい父は、さき程の女狐のいよいよを気にもかけていないらしい。重臣たちも、あいつの毒舌を平気で聞き流し、嬉しそうに大口をあけて笑っていた。

重臣どころか父上まで女狐にだまされている。わしが威厳を示さねば。

「ええい、いくら虎御前とはいえ、悪鬼とはききずてならん！！」

ちらりとこちらを見た女狐は、鼻で笑うと嘲った目でわしを見た。

「これは、許されよ。尻のあおい雛鳥殿もおった」

わしは、怒りで目の前が真っ赤にそまり、持っていた扇をぎゅっと握りしめ、肩をブルブルとふるえさせた。

ほんに我が跡継ぎながら短慮なことよ。あのように他愛ない毒舌くらい、へいぜんと聞きながせばよいのに……………。

お虎とて、真から嫌いだからと毒舌を吐いているわけではない。嫌いなら存在さえ歯牙にもかけてもらえぬわ。

ワシの顔色を敏感にさつちした直江は、この場の不穏なけはいを納めるために晴景をいさめようと言葉をつらねた。

「……………まあまあ喜平次さま、お虎様の軽口は、今に始まったことではありませんぞ。落ち着いてくだされ」

直江が、晴景の顔をつぶさないような遠回しな説得をするが、いっこうに聞く耳をもたない。焦れたように柿崎が言い放つ。

「雛を雛とゆうてなにが悪い。まして、悪鬼とは、我らを誉めた言葉じゃ！！何か文句あるか若造！！」

「……………か、柿崎殿なにもそこまであけすけに……………っ」

武辺者らしい柿崎の、齒に衣をきせぬいいざまに、直江は言葉をつまらせた。羞恥をつのらせた晴景は、険しい表情で柿崎をにらみ返す。いならば重臣たちもまさに一触即発の事態に、ゴクリと生つばを飲んで見守っていた。

この場にいる皆の気持ちをだいべんする柿崎に、同意する気持ちはあるが。さすがに我が子を貶されてワシも気分が悪い。ポンポンと膝頭を打って皆の視線をひきつけた。

「もうよい柿崎、そのへんにいたせ。晴景も意味がわかったである」

晴景は、なにもいわずうつむき肩が僅かにふるえていた。武辺自慢の家臣と反りがあわないのはいつもの事、大事無かるうと思ひ、もういっぽうのお虎をみた。

「お虎、晴景にはしかと申しておくゆえ機嫌をなおせ」

「いえ、妾はなにも思つてはおりませぬご心配なされるな我が殿」

みため冷たい表情のお虎だが、内心は情深い女。ワシは、妻と言ふより我が同盟者とも思ひ、心から頼りにしている。

なぜ晴景にはお虎のことがわからぬ。これではわしは、うかと隠居も出来やせん！

精鋭の栖吉衆をひきいる総領娘。ワシは何度も戦場で助けられた、戦鬼の背後を安心して任せられるのは、お虎だけ。

これが女だったからこそ、妻だからこそ裏切りのない心強い味方。

これが男であつたら古志長尾家を敵にまわし、まだ越後を平定するに至つていなかつたに相違あるまい。

武にひいでた栖吉の血をひくお虎との間につよい男児が早く欲しいものよ。さすれば、晴景をささえ、栖吉衆をまとめて越後を守ってくれるであらうに。

「ほつほほ……相変わらず豪気なお方ですな。お虎御前、お久しぶりでございます光育にござります」

光育禅師が、暗くなった広間に快活なわらい声をあげる。

「なんじゃ光育もおつたのか？久しぶりじゃな」

信仰に熱心な妻は、ふるくから親交がある光育がいる事を知って喜色をあらわにしていた。

「はい、先年の綾姫出産のおり以来かと。……そういえば、急なお渡りのご用件は何でございましたかな？」

「そうじゃ、ワシも気なるの。如何したのじゃ申してみよ」

上手い具合に光育が話しを持ちかけてくれたので、ワシも同調しておいた。評定の間にいる重臣どもも安堵した顔付きをしているようだ。

#### 四・直江side

その場合は、虎御前の話しを聞いて騒然となった。とっぴでもない内容に、否定的な目でみる者もあったが、ほぼ好意的にとらえられたようだ。

信憑性をもたらしたのは、天室光育による星占の結果との符号。実城様は、大のり気で、くだんの僧に会おうと光育に準備をととのえるように申し付けられ評定は終わった。

信憑性があるうがなかるうが、体勢に影響がなければどうで

も良い。

いまや権力が一元化した越後に、要らぬ波紋が起ころぬか、見定めるのがわしの努め。実城様の見た夢が、やっと形になったばかり。些細な事でも瓦解する恐れはあった。

「あの父上の喜びようはなんだ、皆はあの女に騙されている!!」

「……まあまあ喜平次様、抑えてください。御実城様に反意をいだいてると受けとる浅慮な者がいるかもしれませんぞ」

わしは、憤懣やるかたない晴景様の愚痴に、付き合わされていた。日頃は、理性的に物事を考える晴景様なのだが、虎御前とは決定的に相性が悪るすぎた。

親戚筋である栖吉衆との同盟、これがなければ実城様でも越後の平定は難しかっただろう。特にあの戦術眼にたけた虎御前が、女だったからこそ良かったとわしは思う。

あの方が、晴景様にハツパをかけるのは、継母としての心ずかいだと思っただが、みての通り効果は反転している。まあ、あの方もあんな気性だから仕方ないのか……。

なさぬ仲というのは難しい。お二人には、もう少し歩みよって欲しいものだ。

かくて、騒々しい一夜はすぎ。閨に籠った為景夫妻は、くだんの僧に対面して子種を貰ったという。

腹の子は『神仏がえらばれし、定めの子』と呼ばれ出産が、待

ち遠しく望まれたのでした。

### 第3章・確執「完」

## 第4章・産声

吉

御実城様と虎御前のあいだに『神仏がえらばれし、定めの子』が宿った。本来なら目出度い話だろうが、立場によって受け取り方は様々あった。それは憶測をよび、よからぬ噂が城内のあちこちでささやかれた。

「直江、聞いたか？あの噂」

「はて、何のことでしょう」

「神仏が、あの女の腹の子に、越後の未来を託したと言う噂ぞ。よもや、知らぬはずはあるまい……！」

「……いやはや、それは断じて初耳ですぞ」

「またこう言う噂もある。父上は、まだ産まれてもないあの女の腹の子を跡取りにするとか。まさか本気で考えておられるのか？」

直江は、晴景から詰問され答に窮していた。どこでどう尾ひれがついて、そのような噂になったのか？

「そのような戯れ言、実城様は思ってもおられぬでしょう。それに考えても見て下され、なんのために、喜平次という名をお与えになったのか」

「ふん、口ではどうとも言える。しよせんわしは、出自しゅじのしれぬ

母から産まれた子だからな」

晴景は、母の出自に劣等感がある。

「喜平次」を受け継ぐにあたって、親戚筋の上田衆ともよく揉めたものだ。

あちらは、しいて言えば長尾氏の本流にあたる。上田長尾の房長ふさながは、息子の政景まさかげこそ次期守護代にふさわしいと横ヤリを入れてきた。

あの頃は、もう一方の栖吉衆の後ろ楯があつたから、実城様もしりぞける事ができたが……その栖吉衆に、為景の血を受け継ぐ跡取りが誕生する。

晴景の心情からすれば、生まれてくる子が、地位を脅かす存在にみえるだろう。だが客観的にみれば、今から誕生する子に家督を譲れるかという点、実質は年齢に無理がある。あきらかに、いま現在二十歳の晴景が優位なのだ。

いくら神仏の加護があつたとしても、幼年の君主に越後守護代の重責はつとまらない。まして上田と栖吉で越後を割るような愚かな選択肢は実城様でない。

その場をお茶をにごして退出した直江は、為景の言質げんちをとると、波乱の芽をおさえるために、重臣たちと謀り、よからぬ噂の規制をはじめた。

そして晴景はというと、ヤケになったのか、素行の悪さが目立つようになり。重臣たちを困らせる事態を度々かさねるようになっていった。

明けて享禄3年（1467年）1月21日虎年、春日山城に新たな産声があがる。赤子の名は、生まれ年にちなみ虎千代と名付けられた。

『神仏がえらばれし、定めの子』が産まれたとの噂は、権力者たちの思惑をよそに、こっそりと人づてに伝えられ評判はうなぎ登り。

なにより熱狂的な評判をよんだ理由には、神仏の加護を思わせるような、五体満足で健康そのものな体つき。

そして神仏に愛されたような容姿は、赤子とは思えないはつきりとした目鼻立ち、利発そうにひき結ばれた薄い唇、切れ長ですずやかな目元の若君であったからです。

さて、そんな越後の民の期待を一身にうけて生まれおちた赤子は、今ごろどうしているのでしょうか。二の丸郭うちにある主殿を覗いてみましょう。

「御前様、やっと若君が静かにお休みになりました」

疲れが目元にあらわれた乳母のお猪が、虎御前に赤子のようすを報告をしている所のようにです。実をいうと、虎千代は生まれおちた瞬間から、春日山城中に響きわたるほど、甲高い泣き声でよく泣く赤子だったのです。

「お猪や、虎千代の癩の虫が強く苦勞をかけますね。あの子の目が覚めるまで、そなたもゆるりとするがいい」

慈愛のこもった目で、乳母をみる虎御前は、詫びの言葉をかけた。

「はい、ありがとうございます。しかし若君といったら、私が今までに見たことがないくらい、癩の虫がつよいのです」

泣きすぎる若君に、途方にくれる乳母のお猪。彼女も、すでに子供を何人も生んでおり、育児には手慣れていたはずなのだが……。

「ほんに、よく泣く子じゃなあ。ああ……荻野、お猪を休ませてやりたい、かわりに虎千代の寝所にひかえておれ」

侍女に虎御前が目くばせをすると、荻野は主人の意をくみとり静かに部屋を出た。そして再びお猪をみると、虎御前はすまなそうな顔で話した。

「とりもなおさず光育に、癩の虫を押さえるまじないを頼むとしよう。しばらくの辛抱<sup>しんぱう</sup>じゃ。よいなお猪」

乳母はすこしホツとした表情で頭をさげて部屋をさがっていった。虎御前は、持仏である観音菩薩像に向かって一人ごちる。

観音菩薩よ、我が子を守らせたまえ。虎千代は、この世にうまれたのが悲しいのでしょうか？

参

うってかわり守護代の為景は、祝いに訪れた親戚筋や恭順した有力な国人衆のあいさつを評定の間で受けていた。

祝いに訪れた者たちは、内心では噂の真相を探りにきていたらしい。ただ、無条件に祝いにきたのは栖吉枳尾城の城代家老、本庄実乃ねよりと親戚筋である信濃の高梨たかなしくらいのもだろう。

やっと祝いの人々も引き揚げて、為景が一息ついたところへ直江がやってきた。

「お疲れさまでございましたなあ御実城様。ほう……揚北の本庄、色部、中条までも来ましたか。おや、珍しい琵琶島の宇佐美もきましたな」

為景の威勢を反映して、きらびやかに並ぶ祝いの品々を見まわすと、意外な名前をみて驚く直江。

「いやいや、あやつら敵情視察にのこのこ巢穴から出て来たまで、本気で恭順しようとして来た訳ではない」

「まあ、来るだけマシですな。気になるのは守護様の甥むすこにあたる条上定憲じょうじょうでしょう」

為景は、直江と目を合わせると意味ありげにニヤリと笑った。

「どうやら為景にとって、祝いに来る来ないは、国人衆の品定めにはかならない。さすがに奸雄と呼ばれた男だけはある。」

「そういえば、晴景はどうしている」

「喜平次様ですか。実城様にさとされて、さすがに反省されたのか、いまは大人しくされてるご様子ですが……」

直江の頼りない返答に、為景は大きくため息を吐いた。

「どうやらまだスネておるな。ワシが虎千代を跡取りにするはずがないというのに……。やはり目の黒いうちに晴景を守護代にするしかないな？！直江、そなたは晴景とさほど年は変わらぬはず。晴景をたのんだぞ！！」

「ははあ、承知致しました」

長尾為景の手による越後の完全なる統一の夢は、まだまだ先になるようだった。

第4章・産声「完」

## 第4章・産声（後書き）

有坂です、ここまで読んで下さって本当にありがとうございます。こちらで第1部・出産編は終わりになります。

今回は、第2部・幼年編になります。読者の皆様、安心して下さい。やっと主人公の登場です（どんだけ待たす・笑）

実は自サイトの小説は、一時更新を止めています。それは何故か？あまりに真面目に順をおってエピソードを含め書いたもので、なかなか完結に至らないと確信したからです。だから、こちらで改めてプロットの再構成をして、加筆修正する予定です。

有坂は、本作品で初めて小説を書きはじめました。動機は一昨年の大河『風林火山』の G a c k t 謙信に惚れたから。かなりミiserable 一です（^。^；）

とりあえず、ストックのある間は、更新は2〜3日に一回程度の予定をしています。どうか今後とも宜しくお願い申し上げます。

お詫び

小説はかならず推敲して掲載していますが、句読点がおかしかったり、言い回しが悪く意味が伝わりにくかったり、何度も改訂をしています。物語に特に影響が出ないように直して居ますので、大目に見てくださると嬉しいです。

まだ未熟な有坂ですので、感想はもとより、出来れば発見した年代のミスや、矛盾する箇所、初歩的なミスでも結構ですので、ご指

摘頂けましたら、謙虚に受け止めて、執筆の糧としたいと思います。  
どうかよろしくお願い申し上げます。

2009・03・22記

2009・03・25改

第2部・幼年編 第1章・出生（前書き）

第2部・幼年編

第1章・覚醒

第1章は主人公の視点になります。第2章以降はもとに戻す予定です。

第2部・幼年編 第1章・出生

吉

ゆるやかな眠りの世界が私を包みこんでゆく。辛かった想いや楽しいかった想い、様々な想いがゆっくりと消えて、はるか遠くに流される。

かつて、私が何だったかも今では思い出せない。

そして流れついた先は、ドクツドクツと心音が規則正しく響く場所だった。まるで、ぬるま湯の中に浸っているようで、ひどく気持ち良かった。

ずいぶんと時間がたったとき、ナニモノナイ空間に、ゆらりと青白い焰が灯った。それは、いつの間にか近かづいて、私を飲み込むほどの、大きさになった。

やがて、ゆらぐ青白い焰のなかに、墨染めの衣をまとう一人の僧侶をみつけた。その人は、切れ長の涼やかな目元で、感情をうつさない冷たい目をして私を見た。

「んっ……すでに先客がいたか」

「先客？あなた誰？」

なんだろう、人をジロジロ見るなんて！

「ほう……意識があるか？かくも興味ぶかい、御霊は初めてじゃ！」  
みたま

興味深いって何が？

「えっと、意識って……普通、誰でも持ってるんじゃないの？」

彼は、私の問いに答えたりせず、思考のなかに深く沈んでいくように瞼を閉じた。

「んっ　そうか?!そなた、随分と新しい御霊のようだ」

「何のこと?」

「いまに分かる」

聞いた事のない呪文をつぶやくその人は、数珠をもった右手を私にかざす。すると、その手からフラッシュのような、白く輝く光を放出した。

「ああ……眩しい!!」

光を浴びると、脳裏に次々と映像が浮かび上がり、膨大な映像がコマ送りのように移り変わる。映像に登場した人物は、何だかひどく懐かしい顔をしていた。

そして私は、すべての想いを受け止めた。最後の断末魔の瞬間までも……痛みと共に思い出した。

式

胸がつぶれる、うああ　身体中が痛い!視界はグルリと反転し

て……ありえない方向に曲がった腕を、何かしら叫ぶ娘にのばそうとして、急に暗転した。

「うああ……ああ」

酷い痛みで、身体をくの字にまげようと、手足をバタバタしてもがいた……つもり……だった。しかし柔らかい湯のような中では思うように身動きが取れない。

「痛むか？すまぬ、あれはただの記憶だ。少し落ち着けば治まるう」

そういうと彼は、胸元から宝珠を出して何かを唱える。すると、私の感じていた痛みが、潮が引いていくように治まった。

「うっ……はああ……な、何んで……こんなことしたの？」

息が荒い、いくら痛みが引いても無理に身体を動かしたから。あちこちがきしんだ。

「そうだな……しいて言えば、そなたに興味があつたゆえ」

「もう　いい加減にして！！興味ってなに？あなた何者？何で、コナナコトしたの？」

その時代がかつた言い回しといい、胡散臭い呪術のような道具。まして何者だとも名乗らずに、何が起きたのか解るように言わない。勝手すぎる！！

彼は、私の問いかけを返すでもなく、眉間にシワをよせ顔を近づけた。そして一方的に怒る私の顎を、彼は指先で持ち上げ観察する

ように眺めると、感心したふうに呟いた。

「ほう……そなた定め神子の器か？なかなか、よい御霊の色をしている」

「……はあつ？」

一瞬怒りを忘れて、彼の涼やかなかな目元をみつめ返した。

「探していたのだ神子の器を！！私としたことが、灯台もと暗しとはな、……暫しそなたの器を借り受ける！」

「えっ……ええっ？」

抵抗する暇もなく、彼は青白い焰となって、私の口の中に飛び込んだ。そして暫くたつと、私の胸の中に焰がポツと音をたて、灯つたように感じた。

神子よ覚えておくが良い、我は刀八の毘沙門天なり。

参

良く分からない事だらけだ。この胸に灯る青白い焰は、刀八の毘沙門天と名乗った。ほんとに何だったのだろうか。

考え込んでいた私は、周りの湯のような何かが、緩やかに波立ち始めた事に、気付くのが遅れた。ようやく気付いた時には、すでに大きな奔流にいいように弄ばれて流された。

強い。強い力に圧され、奔流に流されて、巻き込まれたら渦

巻に呑み込まれた。

「うわああ」

丸や四角や三角の幾何学もようが、脳裏にひらめくと組み合わせられた。とつても不思議な光景だった。そして私は光の真中まなかに飛び出した。

「オギヤア……オギヤア……」

光の真中は、凄くまぶしくて。目をぎゅっと閉じて、指を握りこんだ。

近くで、赤ん坊の泣く声がする。

「おお！産まれた」

「お虎御前さま。男子おのこでございます」

「おめでとござります」

「ああ……めでたい」

なんだろ？煩いなあ。誰かテレビでも、つけてるのかしら？

絹づれの音と人の話し声、バタバタと行き交う人の足音が遠くに聞こえ、そして閉じた瞼に光を感じた。

「……オギヤア……ウツク……オギヤア」

よく泣く赤ん坊だこと。ああ、誰かいないのかしら？

断続的につづく赤ん坊の声を聞いていると、孫たちの顔が脳裏に浮かぶ。あの子は無事だったのかしら？夢うつつの中で、耳にはいつてくる物音を聞きながら、ゆるやかに深く深く、意識の底に沈みこんで行った。

風雲たなびく戦国乱世に、時代の寵児が誕生す。祖は、神仏がえらばらし、定めの子。

#### 四

はじめは、意識が混濁していたようで、しばらくすると、脳裏をおおっていたかすみが晴れて、バラバラな記憶のカケラが、一つ一つ現れ消えた。

そして、一番最後の記憶のカケラは、何かを叫ぶ娘の顔。拡大されたトラックのバンパー。……あれは事故？！

あっちゃんは……大丈夫かな？怪我したかな？

しだいに流れるような映像になり、私はそれをぼんやりと眺めていた。すると大雪が降った日に感じる、シンとした冷たい空気を感じて、ブルリと身体を震るわせた。

感覚がある！！もしかして、生きてるの。

雪の日の匂いとはまた別に、赤ん坊を抱いた時の、ほんのり香る、甘いミルクのやさしい匂いが、フンと鼻先をかすめた。

ああ、匂いも感じるんだ。私、生きてるみたい。確認しなくちゃ。

ゆっくりと、意識して目を開けようとした。なぜだろう、目を開けた先は、薄白いような、透明な膜がはっていた。視力が極端に悪くなったのかしら？

ここは、いったいどこなの？ぼんやりとした視界と動きづらい体が歯がゆい。そして、すぐに眠たくなることに、苛立ちを覚える。

「おぎゃ … ホギヤ …」

また、赤ん坊が泣いている。きっとお母さんが居ないのね。

そば近くに人のけはいがしたので、私は声を掛けてみる事にした。あの子のお母さんと呼んであげてと……重なる赤ん坊の声？

もしかして?!私の声、赤ん坊の声になってる？

すごく変な感じがした。はじめはあの事故で、植物状態にでもなつて寝かされているのかと想像していた。だが、病院にありがちな消毒の匂いがしない、何故か焚きしめた、お香の匂いが薰ってくる。

本当に赤ん坊になったのか、確かめよう。

ぼんやりとしか見えない視界に、手を動かしてあたりを探ろうとするが、上手く動くわけもなく。おかれた状態に、情けなくて瞼が熱くなり、やがて頬に涙がつたう感じがした。

「うえっ ……うえっ ……」

ああ……私は、どうなってしまったの？

五

しばらくすると泣き疲れたように、ゆるやかな微睡みのなかに入った。私は微睡みながら自分自身の置かれている異常さを考える。

声を掛けようとしたら、声が出ずに鳴き声になる。体の位置をかえようにも寝返りさえ出来ない。極め付きは、さっきチラリと見えただけの小さな手だ。

まるで私が、赤ん坊になってしまったみたい。

まさか！あの時、孫を助けようとして、トラックに飛び込んだことは、今でも思いだせる。呼吸すら出来なくなるほど、あちこちが、引きつれて痛かった。

そうだ、あの場所に変な僧侶に会った。彼は、墨染めの衣をまとい、冷えた目で私を見ていた。

思い出すと、存在を示すように、胸の位置に青白い焔が灯った。この焔は何？彼と会ったことすら現実感がわかない、しかし胸に灯った焔は、あれは現実だったと私に教えるのだ。

違う！！これは絶対に夢だわ！！目が覚めたら、家族に笑って話そう、変な夢をみちゃったと……、酷い夢だったと。

私は、現実に堪えられなくて、元の家族のまつ夢の世界へ逃避し、うつらうつらと眠って過ごす。私が寝かされている部屋は、あまり人の出入りがなくて、静かな時間がゆるやかに流れる空間だった。

その空間にいつもと違う絹ずれの音が近づいて、ふいに、身体が持ち上げられる感覚がした。何が起きたのかと懸命に目をこらすと、女の人の輪郭がぼんやりと見えた。

よく側に来る人とは少し気配が違う。

見えないながらもじつと観察していると、目があった。相手の女の人もじつと私を観察しているようだ。私の手を指でそっと愛しげに撫でると話しかけてきた。

「おや……起きていやるのか？泣いてないとはめずらしい。虎千代や、妾がそなたの母ですよ」

えっ、母？……悪い夢だと思ってた。私は、この女の人から生まれたの？

第1章・出生「完」

## 第2章・綾姫

吉・虎千代 side

突きつけられた現実には、余りにも厳しくて……私の目は、驚愕の事実におおきくみひらかれ、表面張力で水面がふくれあがり、たまつた涙があふれ落ちそうになった。

「うっ ……ぐえっ ……ええ ……」

そうすると母と名乗る人も困っている様子で、泣きはじめた私を抱いて、オロオロ歩き回っているようだった。そんな時、遠くで廊下をパタパタと走る音がして、それはだんだんと近づいてくる様子だった。

「荻野や、外が騒がしい。虎千代が泣き止まぬではないか。静かにするよう言つてまいれ」

「はい、ただいま」

この母と名乗る人は、私の機嫌をそこね、これ以上泣かれやしないかと、苛々と外の騒ぎを気にしているようだ。そして泣いている私を宥めようと、軽い振動を私の身体に与え、優しく揺すった。

「ああ……泣くでない虎千代。男の子であろう」

男の子って？私が男ってこと？ありえない、赤ん坊になったところか、男になってたなんて……。

皮肉にも母と名乗る人のなぐさめがあだとなる。私は、受けとつた情報にますます混乱し、高く神経質に泣き声をあげる。そして抱き上げられて動きずらい体を、突きつけられた現実から逃れようと懸命にもがいた。

「綾姫さま　お待ちください。なりませぬ」

「いやじゃ　ははさまにあう」

「姫さま、いまは若さまがお休みになっておりますゆえ　しばしお待ちください……」

私が混乱のただなかにいるときに、その騒がしい足音が間近にせまり、だれかが言い争う甲高い声が、いつもの静かな空間をざわめかせ、不安が一気に押し寄せる。

いったい何が始まるというの、私は近づいてくる騒音に恐怖心を煽られ、火がついたように泣くしかなかった。

三

さても不思議な事が、この世には有るものです。産まれた子供に前世の記憶が有りました。それだけでなく、記憶のなかでは女だったのに、男の身体に生まれついたので。

彼女は木下登美子だった前世を終えて、虎千代と名付けられた赤ん坊になりました。彼女……ああ彼と言いまししょう。彼は、いま現実を受け止められなくて、葛藤は深まり大泣きしている様です。

さて、そんな虎千代の気も知らないで、運命の女神は新たな出会

いを運んできたようです。どうやら虎千代と二歳ちがいの姉である綾姫が、この騒動の素らしく。侍女がとめるのも聞かず、虎千代の寢所に駆け込んできたようです。

「ははさまあ ……」

大泣きしている虎千代を抱き上げ、困った顔をしてあやす虎御前をめざし、寢所に駆け込んだ勢いで、思いつきり抱きつく綾姫に、みな驚いた。

虎御前は生来の運動神経の良さで、虎千代を片手に抱きかえて、なんとか綾姫を片手でいなす。虎千代は加えられた衝撃で、驚いたように泣きやんだ。

「虎千代は、直ぐに泣く過敏な子だから、ここに来ては駄目だと、そなたに言っておいた筈ではなかったか？」

「あやは、ははさまに、あいたかったでしゅの」

母親から、ギロリと切れ長の鋭い視線を向ける向けられて。綾姫は舌足らずに言い訳すると肩をおとした。どうやら、まだ甘えたいさかりの綾姫は、出産後に会いにきてくれない母君に会いたかったらしい。

わたしの孫と同じくらいかしら。たどたどしい言葉が、可愛いわ。

前世の孫と同じくらいの子の声をきいて一瞬の混乱もおさまったのか、虎千代は口元をホロリとほころばせた。泣きやんだ子の笑顔をみつけた虎御前が、綾姫に赤子をみせた。

「まあ……虎千代がこんなに笑っていやる。綾姫こなたが弟の虎千代ですよ」

赤ん坊を始めて見る綾姫は、興味津々と真つ黒な目をくりくりとして虎千代を見つめた。

参

「トラチヨかあ……かわいらしいでしゅ。わたしはトラチヨのあねさまでしゅか……ははさま？」

「そうですよ綾、あなたはもう姉になるのですから、確りとしなくてはのう」

「うん、がんばゆ。トラチヨをまもりゆ」

可愛いらしい綾姫の『守る』という頼もしい発言に、侍女たちも明るい顔をして笑っていた。

久々に訪れた虎千代の笑顔に、みなは安堵のため息をついた。やがて虎千代は、泣き疲れたのか、口元がほころんだまま眠りにつきました。

「若君の笑顔がこんな愛くるしいなんて、始めて知りましたね御前様」

「ほんにのう、やはり子供は子供同士ということか、のう荻野」

以来、姉としての自覚を持った綾姫は虎千代のそばに居着くよう

になり。周囲は、それを公然と認めたのでした。

しかし、一方の虎千代の身になって考えると、かなり迷惑なことだったと思われます。まあ、そんなこんな騒動の後に、為景がやって来てきました。

「おお、虎千代が笑ったと聞いたぞ!!」

ぞろぞろとお供をつれての登場です。大きな地声を張り上げた為景が、虎千代の部屋へと入ってくると、すかさず綾姫が為景の前にでる。

「とうさま!!ちい　　でしゅ。トラチヨがおきるでしゅの」

「す、すまん」

人差し指を口元にあてがい、可愛い顔をしかめて為景をたしなめる。乱世の奸雄と呼ばれる男も、綾姫の前では形無しのようなのだ。

「これ綾、父上に対して礼儀をかいておる。申し訳ありません我が殿、妾がいたりませなんだ」

虎御前は、言うとすぐ綾姫の尻をペシツと叩き、一緒に座らせて、為景に頭を下げさせた。為景も、綾の勢いに一瞬謝ってしまったものの、気まずい顔を一つ空咳をして元にもどし、進められた上座に腰を落ち着けた。

「いや、なにかまわぬ頭をあげよ!綾の姉ぶりも板についてきたようじゃ。実はな、また戦に出ることになってのう。虎千代の顔を見ておこうと思っただまでじゃ」

「またぞろ、一揆が起こったのですか我が殿？」

越後は一向宗に煽られた一揆が頻発し、まだ定まらず混沌として、戦の火種はあちこちに燻っております。

第2章・綾姫「完」

### 第3章・寵児

吉

一向一揆と長尾守護代家との因縁は深い、虎千代の祖父・長尾能景は、討伐のため越中へ赴き般若野はんやので討ち取られた。

「あやつらの手口は、坊主とも思えぬ悪辣さよ。種耨たねもみまで布施と称して、領内の民から奪っておいて、全ては領主の治世が悪いと一揆を起こさせる」

為景は、鼻っ柱にシワを寄せて、さも嫌そうに言いはなった。虎御前は、眉尻を下げて心配そうに言う。

「刃を向ける相手は我が越後の民、我が殿のご心中お察しします」  
拡大していく一向宗の信徒による一揆は、越中に留まらず越後にも勢力を伸ばしつつあった。その為、越後では本願寺系一向宗の寺の肅正を行って対処していた。

「あれは、気分が悪くなる戦よ！鎌や鍬しか持たぬ民を捨て駒にして、本願寺の僧兵は高みの見物か？あやつら戦に来ても民の後方から弓を射かけるだけとは卑怯な奴等よ」

虎千代は、微睡みの中に聞こえてくる話し声を、意識を集中させて聞き取っていた。しかし、激昂した為景が床を打つ音に、うかつに泣き声をあげ、今は為景の腕の内に抱き上げられている。

「ほう……お虎と良く似ておるな。そのキツそうな目元などそっく

りよ！栖吉の血を継ぐ良き武者となろう、末が楽しみじゃ」

その場の緊迫した空気は和やかなものになり、為景は年を取ってからの子宝にご満悦のようだ。虎千代が泣くのも構わず、持ち上げたり髭をすり付け可愛いがる。

「ほほほ……我が殿、虎千代はまだ首が座っておらぬゆえ、無体はなりませんぞ」

笑いながら止めに入る虎御前に、きつと虎千代は、顔をひきつらせているのでしよう。まだ甘えたい盛りの綾姫が参戦し、難を逃れた虎千代であった。

弐・虎千代 side

あの事件いらい、私は綾姫にたいそう構われる事になった。姉としての責任感に目覚めた彼女は、四六時中私のそばにいます。

彼女は、拙いなりに子守りをしているようだが、なんだかこっちが反対に子守りをしてる気分になるのはなんでだろ……。

私にとっても、それは良い事だったのかもしれない。体の発達にともない、現状を把握できるようになった私は、生まれおちた世界の实情に、いまだ精神のバランスを欠くことがある。

この狂った世界でこの無垢な魂が、私のたったひとつの心の拠り所。

私に本を読んでもくると言って、先に寝入った綾姫。ふと、寝顔をみて笑みを浮かべると、不安定な体をおこし侍女に知らせるため

に這いずる。

「あつ ……ね…よう」

まだ口もまわらないながら、片言で控えの侍女の注意を引く。毎度のことに侍女は気がついて、綾姫をそつと抱き上げて下がってく  
れる。

庭へと続く縁先から見わたすと、よくみなれていた電柱の一本も  
ビルの影さえ見えないことに落胆した。まるで龍が狂暴なあぎとで、  
私を飲み込もうとするような、錯覚にさいなまれる。

蠟燭すら余り見掛けない、この世界の文明レベルは、おそろ  
く過去の日本のようです。まして戦があるなんて……怖くて堪らな  
かった。

胸の奥を絞られるような痛みが、私を容赦なく襲っていた。この  
世に生まれおちた体のなかには、恐怖を生む青白い焚火がぶずぶず  
と燃えさかる。

この世界に私はひとり。ひとり矛盾を抱えた体で生きねばな  
らない。

私は死ぬことなど恐れたりしない。いつそ体ごと業火にくべて正  
常な世界にもどしてと、見えない神に懇願する。なぜ歴史を逆行し  
てしまったのか？この世界は狂いに満ちていた。

「まあ、若君こんな所まで庭に落ちてしまいましたしょうほどに。さあ、  
もう中に入りましょうな」

私は侍女に軽々と抱き上げられ、部屋のうちに運ばれる。いままで居た場所を高い視線から眺め、庭に落ちれば死ねたかもしれない誘惑に苛まれる。

私は、死を恐れるものとは感じなくなっていた。なぜなら、生まれ変わってしまったから。前ほど禁忌を恐れを抱かなくなった。ただ、私が居なくなった後の綾姫の涙を、見たくはないと思うのだった。

参

かくて府中春日山城には見目麗しい姉弟の無邪気に遊ぶすがたがよく目撃されるようになりました。綾姫五歳、虎千代三歳の春もさかりの事です。

この頃の綾姫さまは、姫様修行のために、親交の深い京の公家方近衛家より、ひとりの老女を迎えておりました。名を芳野よしの、音曲や詩歌・茶華道はもとより行儀作法に通じた才女です。

虎千代は、姉とともに……いや勝ち気な姉にまきこまれるかたちで芳野のもとで、一緒に学ぶことになりました。芳野は厳しい所がありはするが、よく出来た方で子供達にあきさせることなく、諸事万端ぬかりなく教育を施していた。

場所は変わって虎御前の部屋に、芳野が子供達の事でよばれているようです。

「虎御前様、お召しにより参りました芳野にござりまする」

虎御前の部屋のまえの廊下で、そつなく平伏した芳野。

「芳野殿、虎御前様がお待ちかねでございますよ。さあ、こちらに」

まちかねた虎御前付きの荻野がふすまを開けて芳野を招きいれる。芳野は招かれた部屋にはいり再び平伏して虎御前の声を待っていた。

「芳野殿、面ををあげられよ。ここ呼んだは他でもない虎千代のことです。あの子はいかがですか？」

「若君のことでございますか？あの歳で、あれほど利発な方は、見たことがあります。風雅な事でも機知にとんで、びっくりする程お上手です。きっと立派におなりあそばせるお方と拝察いたしまするな」

虎御前は大きいため息を吐いた。芳野は動じることなく虎御前をみつめる。

「芳野殿、あなたが虎千代の才気に惚れこんで風雅なことを教えるのは良い、しかし長尾家は武門の出。あのように軟弱なことばかりしては困ります」

虎御前も肝が座った方なら芳野も肝が座った老女、動じることなくサラリと言いかえす。

「何をおっしゃいますやら、若君におかれましては千年万年に一度の神才に恵まれておいでになります。それは風雅事のみ発揮されるものではありません。いちどお試しになれば宜しいではありませんか？」

売り言葉に買い言葉、二人の女のにらみ合い。虎千代に言わせた

ら、大人だつたら当たり前だという事も、芳野には素晴らしい才能に見えるらしい。

「ならば、虎千代をためすとしましょう。荻野、虎千代を呼んでまわれ」

勘違いなのか、また過酷な運命の歯車が動く。さて虎千代になにが試されるのか……………？

#### 四

一方渦中の虎千代は、知らぬことはいえ綾姫とおままごに興じています。

このころは、二人の乳兄弟が近習衆として虎千代の側近くに上がっていた。一人は10歳になるお猪の長男で安実、もう一人は5歳になる次男の長実の二人です。

お猪の夫は、栖吉長尾に古くから仕える国人衆で荒川康実あらかわ やすさねという猛将でした。若いころは、虎御前の馬廻りを努めたほど、勇猛果敢な武人であった。しかし先年の流行り病にたおれ亡くなっていた。

お猪は栖吉長尾家から乳母を仰せつかると、共に子共らも虎御前の膝元に連れてきて、若君の側仕えにあげた。栖吉衆がどれほどの期待を虎千代にかけているかが分かるというもの。

「なあ、若さん。女子みたいな遊びはお止めになって下さいよ。長実もいい加減恥ずかしくないのか？おまえら」

兄の安実は、もうすぐ元服という年頃か、女子のような遊びは恥

ずかしくてたまらないらしい、顔を真っ赤にして、声をあらげているた。

「……兄者、僕だって嫌ですよ。赤ん坊役なんてまだ兄者の父上役のがましです」

情けない顔をして、ゴザに寝かされているのは弟の長実です。虎千代は安実の言葉を平然と受け流し、子供役になりきり、嬉しそうに綾姫が作ったご飯もどきを食べる真似をしている。

「美味しいですね母上。母上の料理は天下一ですよ」

「虎千代は美味しそうに食べてくれて、嬉しいわ。こら安実、はよう席につけ。父たるもの子に手本を示さねばなりません」

ギロリと虎御前ばりの切れ長の瞳で綾姫と虎千代がにらむ。安実は、しどろもに言い訳し、しおしおと膳の前につく。

最近の虎千代のストレス発散は、おもに安実、長実兄弟いぢめにある。心底嫌がる兄弟に、女子の遊びに参加させるのが、もっかの楽しみである。

孫たちを思いだし、心が和やかになる。

虎千代の不安材料は、大人たちの思惑にある。栖吉からきた傳役もりやくは、抜き身の刀のような金津新兵衛かなづしんべえという男。言葉使いやら何やらと細かく指摘して、いつもあの強面な顔で威嚇する。いつか斬られる殺されると、虎千代は、戦々恐々としていた。

神仏が選ばれし神子とか何とか期待されてもねえ、戦なんか

ムリだし！！

## 五・虎千代 side

私達がたのしく遊んでいる時に、虎御前の侍女の荻野がやってきた。何か私に用事があるらしい、拗ねる綾姫を宥めて、近習の荒川兄弟と本丸の虎御前の部屋へと向かっている。

私は、あまりアノ人が好きではない。いや、母だと納得出来ないと言ったほうが良いかも……何かにつけて期待たつぷりな、やりようが気に入らないのだ。

何もかも虚しすぎる。私に掛かる期待も大きすぎて、簡単に受け止める事など出来やしない。

その上この胸の焔は、どうしたことが怒りの感情の増幅に合わせて、私の理性を離れ狂ったように暴走させる。先日も、真夜中に月をみて産まれた理不尽さを呪っていたが、気が付けば、木切れを振り回したのか手は傷だらけ、その間の記憶はなかった。

この事は、誰にもまだバレていない様だが、酷く自分自身に不安を覚える。だから出来る限り、おだやかな軟弱な者のふりをする。戦などに連れて行かれたら、カツとなつて何を仕出かすかと怖くなる。

「若さん、なんだか恐い顔してるぜ、大丈夫か？」

安実は、以外と私を良く見ているらしい。すこし肩の力を抜いてから答えた。

「……ああ、心配をかけたな安実、大丈夫だ！」

「いひひ……さては若さん虎御前様が恐いんだろ？」

「おい、まて長実……すまん若さん」

そう言って、まぜっかえすのが長実で、いつも兄に鉄拳制裁をうけてしまうのだが……この二人にも、随分と慰められている。

それにしても急に呼ぶとは……最近は私の軟弱ぶりを見て、あきらめているようだったのに……芳野から何か漏れたのかな？悪い予感がする。

第3章・寵児「完」

## 第4章・覚悟

壱・虎千代 side

私は、この世界を生きるべき世界とは認めない、叶うなら逃げてしまいたい。

前世で高台寺の和尚に、言われた言葉が、胸に去来する。とんだ第2の人生になったもんだ。しかし、この世で生きてくなら、軟弱者と思われてもいい、諦めてもらえるなら若隠居したいくらいだ。

虎御前の部屋の前につくと、ゆっくりと気合を入れて深呼吸を繰り返す。私の母にあたる人の発する気は、武人だけあって凄みがちがう、腹のうちを凡て見透かすような目が怖いのだ。

怖がってどうするの、すっかりしなきゃ、相手は前世の娘くらしいの小娘なんだから負けたくない!!

「ははうえ、虎千代にござりますよ」

気の抜けたおどけた口調で挨拶をし、無作法に建具に手をかける。近習二人組は、慌て私をとめた。

「若さん、無作法です」

「あわわ……兄者のいうとおりですよ若さん」

「かまわぬ!!虎千代そこに座るがよい!!」

小声で注意をうながす近習たちの声を遮るように、部屋の中から虎御前の冷徹な声がして、咎め立てすらされずに部屋に導かれた。おかしい……ピンとはりつめた空気が私を押し包む。

ふと、隣をみれば老女芳野が控えていた。ペンキが剥がれたのか？ここは度胸をすえて、真正面から虎御前と対峙するしか選択の余地がないようです。

覚悟を決めて、私は子供の演技をかなぐり捨てた。そして、落ちて着いて虎御前の前に座り、丁寧なお辞儀して、虎御前の声にあわせてゆっくりと顔をあげ、ハシリと目を合わせた。

もう、偽りを捨てる。あの目に嘘など通用しないだろ、あとは意地を通す！！

虎御前の覇気の高まった痛いほどの視線に、真正面からさらされる。開きなおった私は、平然と顔色ひとつ変えず口角をつりあげた。胸のうちに、青白い焔がメラメラ勢いよく燃え上がる。

しだいに部屋の温度が高まって、周りの侍女や近習組が、ソワソワと落ち着かないそぶりをする。泰然自若としているのは虎御前と芳野と私だけ。水面下の腹の探りあいには、ふつふつと闘志がみなぎる。

嫌いじゃない腹の探りあいには。さあ、貴女の総てを見せてみよう……

青白い焔が、じわじわと正常な私を侵食する。内在する本能ともいえるこの焔に侵食されれば、この先どうなるかも分からない。気が狂うなら狂ってしまえ、死せるとしても何の後悔もない！！

泰然と座るわが子に、おもいがけない威怖さえ感じた。この小さな体が発する気配は、戦場での緊張感すら、はるかに凌駕する威圧じようが感がある。

あれは静かな微笑みをうかべてはいるが、底知れない恐怖を振り撒いて、部屋の空気を圧する。戦場を共に駆け抜けた愛刀が、緊張に堪えきれずに、カタカタと唸りをあげた。

愛刀の刃唸りに答え、とっさに妾は子に向けて、腰だめにした小刀を、居合いの烈拍で大きく振るった。部屋にいる誰もが、制止できない唐突な出来事に、皆は息を飲ん見守った。

「きええ　　!!!」

あれは薄笑いを浮かべ、瞬きさえなしに、ハラリ落ちる一房の前髪を、無表情に見ていた。そして、目があつと妾でさえ、ゾクリと冷えるような苛烈な焔がみえる気がした。

妾は刀を持ったまま、身動きすらとれなかった。一方あれは、何事も無かつたように妾に声をかけてきた。

「気はすまれたか？私を試すとは、面白きことを為される」

言つと、すくつと立ち上がり建具まできてから、流れる作法どおりの美しい所作で部屋を辞して行った。あれの一連の動作に誰しも目を奪われ、口も聞けずほうけてしまった。

あの気迫、人とは思えぬ。妾は母として起こしてはならぬものを、揺り起こしてしまつたやもしれぬのう。

あの子の居なくなつた部屋では、時が止まつてしまつたかのように、誰も立ち上がれない。

そんなとき廊下でバタンと大きな物音が響いた。時を巻き戻すかのように、その場に居るものが、あわてて廊下に殺到する。

「……た、大変でございます。若君が廊下でお倒れに……金津さまに介抱されております」

丁度、あの子が部屋を出た時に、異様なけはいを察知して現れたのだらう、倒れた虎千代を抱えて、嬉しそうに笑う金津がいた。

「これはしたり……流石は神仏が選びし、定めの子！ どうやら我らは、若に謀られていたらしいですな」

「くっ……そうじゃ！ 妾でも刃を抜いてしまつた程の豪胆さよ。未恐ろしい将の将たる器よ！！」

あれは先とはうって変わり、やすらかな寢息を立ていた。軟弱者だと思っていたら、妾を謀っておつたとは、たいしたものだ。

「虎御前様、鉄は早く打つが肝要かと思ひますが、いかに？」

「しかり！ 明日より武術を修めさせよう。将の将たる器にふさわしい教育をせねばのう」

参

夜の闇に、虎御前と金津の快活な笑い声が響く、そんな事をしらない虎千代は、張りつめた弓の弦が切れたように眠っていた。その顔は、先ほどと違い幼児らしく愛らしい、その場に居あわせた者たちもホッと息を吐いた。

「では某が、若君を寢所までお連れしましょう。これで栖吉も安泰ですな」

と言つて、彼にしては慎重に虎千代を運んで行ったようだ。珍しく彼の頬がゆるんでるのは、何から教えようかという期待の笑みだろうか？

「ようございましたな虎御前さま」

あの騒動のなかでも、動揺した素振りさえ見せなかった芳野が、口元を綻ばせて虎御前に言った。振り返った虎御前も微笑みを浮かべ、芳野に頭を軽くさげた。

「芳野殿そなたの言う通りじゃな、礼を言います」

「恐れ多いことでございます、私も見間違つておりました。それゆえ礼など必要ありません。おあいこですよ虎御前さま。明日からは、私も知識にたけた、新たな師範を求めて参りましょう」

「ほう…それは頼もしい。我が殿にも軍学を頼むとしよう」

やる気満々な大人たち。たぶん虎千代が目を覚ましたら、大変な事になつてるかもしれない。近習たちは、珍しく機嫌のよい金津の笑みを見て、何か恐ろしいものでも見たように震えている。

「な、なあ兄者、若さん大丈夫かなあ？」

「い、い、いな長実、若さんを守るのは我らの勤め。お前が犠牲になつてやればいい！！」

厳然と言い放つ安実に、長実の悲鳴が、春日山城に響き渡つたとかいないとか、それは皆様のご想像にお任せします。

第4章・覚悟「完」

## 第5章・逃亡

吉

虎千代はすべての気力を使い果たし、まる三日目の深い眠りのなかにあった。一方の、大人達といえ、虎千代の將の將たる器に気づき、打つべき手配に余念がなかった。

そんな大人達の一人、傅役の金津新兵衛といえ、いまだに深い眠りにある虎千代の寢所にあつて、槍を片手に無駄に恐い顔をして控えていた。

金津本人は、いたく機嫌良いらしいのだが、虎千代の寢所へ出入りする者にとっては、心臓に悪すぎる光景だった。そんななか主を心配したのか、荒川兄弟がやってきた。

「あ、あのお傅役殿、若さんはどう……あ、まだ起きられてない……失礼しました！」

「……ご、ごめんなさい」

寢所に入ったとたん、ギロリと鋭い視線をあびて、兄弟は即座に詫びをいうと、慌てて寢所を飛び出した。

「……ご、恐いよ兄者」

「……い、いうな長実！ だいたい、お前あそこで何で謝るんだ。早く若さんに事態を教えなきゃと言ったのは、お前だぜ」

「なっ……それは兄者だつて言つたもん」

安実に叱られて涙目の長実だったが、彼なりに言い分もあって、ギヤイスカと大きな声で兄弟げんかを始めてしまった。

「おい、聞こえてるぞ！近習ども！若が目をさました。虎御前様にさつさと取り次いでこい」

「ひいい……か、かしこまりました」

寢所の目の前の廊下で話していたものだから、寢所の中にはまる聞こえだつたらしいのだ。まあ、そのお陰で虎千代は目を覚ました。

弐

さても大変な事態になりました。自分を取り巻く大人達の思惑に、いまだ気がついてない虎千代は、いつもと変わらぬ朝を迎えました。

「ふあ……なんか良く寝たような気が・す・る……し、新兵衛？な  
んで、おま……ここに？」

寝ぼけた虎千代が、朝一番に目にしたもの、それは良い顔で口を歪めて笑う傳役の顔だった。虎千代の頬が一気にひきつって、起こしていた上半身はそのままに、尻からズルズルと後ろへ後退させた。

「やっと目覚めたようだな。若！待ちくたびれ申したぞ！」

「あ……えっ何を？」

傳役が、朝から寢所に詰めてる事を、飲み込めない虎千代は焦る。

やがて、駆けつけた虎御前の説明によって、事態は明らかになった。

「なんだ、この過熱ぶりは？ヤバい、この人達は本気だよ…」

…。

三日も寝ていたので、体力がもどるまでは本格的な武術の指南はなかったが、体力がもどるやいなや、傳役に引きずられて、死にそうになるまで稽古させられた。

剣術はもとより槍術・馬術・弓術はては、体力作りと称して相撲なんかもやらされて、虎千代は生傷の癒えるいとまさえなかった。

さらには、虎御前や芳野の呼び寄せた師範たちに、囲碁・連歌・作法など武将としての一流の教養を、みっちりと教育され、あげくに、戦から戻った為景も参戦し、長尾家に伝わる越後流軍学を手解きされ、いい加減ゲツソリとやつれた虎千代であった。

もう嫌だ！！武術を教えこまれるうちに、生まれ変わり身体能力が格段にあがったと自覚はできた。だが、いくらなんでも遣りすぎだ。

もともと戦を嫌って、若隠居に憧れていた虎千代の鬱憤は、たまるいつぽうだった。日々すすんでいく虎千代を、見かねた荒川兄弟が1日位ゆつくりさせてやりたいと、大人達から逃がす算段をする。

「しい　こつちですよ若さん」

「こんな事したら、お前たち只じゃすまないぞ、それでも良いのか？」

「若さんが、そんな顔してるのほっとけないよ。1日だけですよ、後は俺達で何とかしますから」

朝も明けぬうちから、虎千代の寢所に潜りこんだ兄弟は、主を起こすと逃げる準備を始めさせた。そして安実が、慎重に見張りをし虎千代をにがすと、長実が身代わりとして風邪で寝込んだふりをした。

参・虎千代 side

私は、二の丸郭内から逃げて、山の上へ向かって必死に走って逃げだした。ついに天守台の裏手にある、越後灘をのぞむ崖っぷちについてホッと一息ついた。

「まさか城の上手に逃げたとは、誰も思わないだろ」

さすがに登り坂はきつくて、私の今の身体能力でも息があがる。くたびれた私は地面にじかに座ると、逃げるときに長実から渡された包みをひらいた。なかには、竹筒と握り飯が二つ入ってた。

握り飯は、きつと二人が握ってくれた物だろう、形が不揃いで見た目が悪かった。きつと大変だっただろうと想像して、プツと思わずふきだす。そうして少しだけ気が緩んだのか、おもむろに竹筒をひつつかみ、なかの水をのんだ。

「ウマイ、こんな美味しい水飲んだの始めてかも……」

見上げると、すでに東の山から朝日が昇りはじめ、辺りを照らし出していた。その光はキラキラと波間に反射して、黄金色に海を照らしていた。今までのさんでいた心が、きれいに洗い流されてゆく

気がする。

「ああ、気持ちいい」

久しぶりの開放感にひたり、うんとひとつ伸びをして、バタリと大の字になって土の上に寝てみた。こうして落ち着いてみると、私は改めてお腹が減っている事に気がついた。再び起き上がり二人が握った握り飯をみつめて、かぶり付いた。

やはり想像したとおりの、塩っからい味だったけど、それはいつもより数倍美味しかった。

握り飯を食べていると、私の頬が濡れているのに気づいた。熱い雫そして心には後悔の二文字がぎざまされた。荒川兄弟にうながされたとはいえ、すぐに逃げてしまった自分自身が、ひどく情けなかった。

「……………すまない」

涙にまみれた握り飯を飲み込めば、あの二人の事が気になった。大丈夫だろうか、私が逃げたことで怒られたりしないか心配になった。

もう、こんなに朝日が昇っているのだから、誰かが私を起こしに来ているだろう。……もし新兵衛が来て、私が居ないと知ったら、酷い仕打ちをあの二人にするかもしれない。

だめだ、あんな子供にすべてを押し付けるなんて、そんな事私には出来ない。あの二人は、悪くない逃げ出した私がすべて悪いのだ。

やもたても堪らずに、元きた道をとつて返す。しかし事態はすでに思いがけない方向にすすんでいました。

#### 四

さて一方の近習達はどうしているのでしょうか。なんと行っても子供達のやる事です、仮病を使おうが何しようが、金津の目はふしあなどではない。近習の荒川兄弟は、彼らなりに最後まで奮闘したが、金津に動揺を見抜かれ、夜着を剥がされ御用となった。

「それで、若はどうした？」

「え、えつと……若さんは、今日中には帰ってきます。約束しました。だからお願いです金津様、若さんをそつとしておいてあげて下さい」

「若さんは俺達の約束破つたりしないもん」

二人は正座させられ、金津に事情を聞かれていた。彼らは必死に言い訳し、虎千代を擁護する。しかし、それはあっさり和金津に一喝された。

「馬鹿め、もし若が城外に出て、お命を亡くす事になったらどうする？もちろん護衛くらいはつけたんだろうな？ああんっ！！」

恐い、あまりに恐い顔だから近習達は、竦み上がる。だが、護衛など考えもしなかったと青くなり、いらぬ想像をふくらませうちひしがれた。

「す、すいません、護衛はつけませんでした」

気丈にも安実が、事実を述べた。いまさら嘘を言ったとしても、虎千代の身に何かあったら取り返しがつかないのだ。やった事の重大さが身に染みだした顔つきの近習たちに、金津はチツと舌打ちすると、事態の收拾をつけるため兵を集めた。

「これは栖吉の失態だ！！なんとしても早急に若を探しだせ！！」

金津と言う男は、名より実をとる主義だ。体面がどうかより、まず虎千代を確保する事を優先する。戦場で鍛え抜かれた男は、何かあれば自身が責をおうつもりでいた。

虎千代は、そんな大事になっているとは思いつかなかった。常識が違う、良い身なりをした幼児の一人歩きは、どんなに危険かと彼は知るよしもなかった。それほど前世とは格段に治安が違うのだ。

ましてや春日山城主である為景の御曹司であり。栖吉衆の後継者ともくされる人物だ。敵対勢力なら山ほどある、城内といえど油断は出来ない、まして城下町には他国の間者や盗賊に浮民までいる、子供一人の命など軽いものだ。

## 五・虎千代 side

二の丸郭に向かっていくと、物々しく兵が行き交っていた。私は異様な厳戒体制にとまどい、慌てて身をかくした。

私が居ない間に、何かあったのか？困ったな、これではこっそり戻ることも出来ない。

なんとか隙はないかと伺っていたが、兵の数は多くなっていくばかり。途方にくれて座りこむと、無性に荒川兄弟の事が気になりました。

こんな時に、私がいないとバレたら大変な事になる。それ以上、こんなところを見つかったら、二人に迷惑をかける。逃げなきゃ！

いま来た天守台に続く道も兵が塞ぎ戻れない。私は安全な隠れ場所を探して進んだ。用心に用心を重ねて、兵が居ない場所の予測をつけ、草木に隠れて地に伏せる。

やがて、私はひっそりとした場所に立つ屋敷を見つけた。どうやらここは表の門が閉ざされて、兵が見張ってはいるが、裏手に回れば隙がありそうだった。

あたりをつけて忍び込む、幸い身体が小さいから、垣根の下を潜れば問題なかった。垣根を潜ってみれば、そこは良く手入れをされた端正な庭だった。世の中の騒音から隔絶したように静かな場所だ。

ああ、静かで良いな。こんなところで隠居するのが理想だな。

「おやおや………小さなお客人、その垣根は玄関口ではないぞ」

緊張感がゆるみ、静かな庭にみとれていた私は、のんびりとした口調で声を掛けられ、ビクンと固まるとゆっくり首を回して、声の主を確認すれば、少し白髪混じりの髪で髭のある上品そうな爺さんだった。逃げようと後退あとすまる。

「逃げなくてもいい……取って喰やしないから、一先ず上がってこ

い

「どうしようかと色々悩んだが、すぐに何かされる心配はなさそうなので、あえて言われるがままに用心深く上がりこんだ。」

「お、お邪魔します」

「うん、なかなか素直でよいぞ！子供は素直が一番じゃ」

「やがて爺さんは、自ら干菓子を出してくれて、まあ食べると私に薦めてくれる。私は上目遣いに爺さんを見ながら恐る恐る干菓子に手をつける。」

「こつちに来てから干菓子など、お目にかかった事がないのだ。久しぶりの甘さが懐かしく嬉しかった。」

「……美味……しい」

「知らぬうちにまた涙が零れた。爺さんは、側にきてよしよしと私の頭を撫でると、膝の上に抱き上げ、泣き止むのを待っていた。」

六・虎千代 side

「いつまで泣いたか分からない、過去のことや現世のことを思い出しては、また泣いた。爺さんがいる事すら忘れたように泣いた。私が落ち着いた頃に、爺さんが話した。」

「よう泣く子じゃな、そなた為景の末の子じゃろ？噂くらいは聞いておる」

はつと爺さんの顔を見上げた。何故知っているのだろうと名乗った覚えはないのだが？

「何でわかったの？」

「んっ……そなたはお虎に良く似ておる。それに、見よこの家紋じや」

驚くと、マジマジと自分自身の着ている着物を眺めた。無地の着物には地模様がうすく入っていたが、これが家紋だったとは、つゆぞ知らなかった。そこでふと思った、私を知ることの爺さんは誰か？ 問いたげな視線を感じたのか爺さんは名乗った。

「わしは守護の上杉定実じや」

良く考えてみれば、父にあたる人の上役の守護は、反乱の咎で春日山城に幽閉されていると、聞いたことがあった。私は慌てて爺さんの膝から飛びおり、頭を丁寧にさげた。

「恐れおおくも、上杉の御館様とは知らず申し訳ありませんだ」

「そんなに畏まらなくてもいいわい。為景の姉は我が妻ぞ、まして晴景の妻は我が子じやし、長尾とは親戚みたいなもんじや！」

私には長尾家の親戚と言われてもピンとこない。もとは対立していた相手なのに？顔をあげて対処に困っていたら、爺さんがが笑いだした。

「ワハハこれはしたり……そなたは聡い子じやのう。かつてわしや為景の敵じやった。国人衆にのせられて、うかと敗軍の将となり幽

閉される身となった」

「恨んでおられますか？」

敵の子の私など、恨みもひとしおだろうと思った。だが爺さんは、ゆかいそうに笑いとばし、幽閉されて良かったと、守護であることは辛かったとも言われた。その気持ちは良くわかる気がした。

「それでじゃ、そなた名は虎千代と聞いておったが、何で供の者もつれず、かような所まで来たんじゃ。怒らぬからこの爺に教えてくれぬかの」

私は、なりゆきをポツポツと話した。まさか、二の丸の大騒動が私を探すためとは、この時点では気づかずにいた。

第五章・逃亡「完」

## 第6章・孵化

壱・虎千代 side

知らないうちに心にふりつもった鬱憤を、ひとつひとつ話します。ただ、生まれ変わった話しだけは、どうしても出来なかった。

「んっ……これはまだ心になにかわだかまりを持っておるな……虎千代は頑固そうじゃから、こんど言う気になつたら聞いてやるっ」

目を面白そうにギョロギョロ動かした爺さんは、よう言えたと私の頭をなでた。なんだか急に子供になつた気がした。

体が子供になつたから、感情までが引きずられるのかな？考えてみれば良く泣いてるし、感情が高ぶりやすかつた。

「のう虎千代や話しは変わるが、そなたの家臣は何人いると思うかの」

「えっ……私の家臣って居ませんよ。私には雇うお金ありませんし、それがなにか？」

アハハと大きな声で笑いだす御館様を不可解な顔をして見つめた。どんなに思いかえしても、父母という方の家臣しか見たことないし、私の家臣など知らない。第一雇えるはずもなく、首をひねるばかりだった。

「笑ってすまん。虎千代は賢そうにみえたが、意外と抜けておるなあ。そなたに金はなくとも、家臣は大勢いるぞ。よいか身の周り

を良く思い出すんじゃない」

「身の周りって、乳兄弟が二人と綾姫と、恐い傳役くらいだし……やはり居ません」

爺さんはフオッフオツと呼吸出来ないほど笑っていた。本当に失礼な方だなと私は睨み付けた。

「それみてみよ、今言った者たちは綾姫以外は、そなたの直臣じゃない。まして家臣は家に就くのじゃ、金なんぞで就くのは本当の家臣とは言わんぞ。では虎千代の家はどこじゃな？」

「ああ、そうか春日山城が家なんですね、じゃひよとして門番さんとか、ご飯作つてくれる方まで、家臣なんですか？……でも私は家臣などと思った事はないのです」

うん、と一つ頷いた爺さんは、良い子じゃ良い子じゃとて目細めて笑っていた。

式・虎千代 side

上杉の御館様から色々な話を聞いた。家臣のことも前世との考え方の違いに戸惑った。さきの爺さんは、私に話しをする事が楽しいと終始にご満悦で、あれこれ詳しく語ってくれた。

家臣団のことを要約すると長尾家は、越後地方の国人衆、いわゆる越後各地の有力豪族たちが、連合して成り立つ組織だった。種類別にわけると大まかなくくりは3つある。

まず栖吉衆や上田衆、不動山城主の山本寺氏といった親戚たちの

一門衆と呼ばれるグループがある。次に旗本衆と呼ばれる直江実綱を始めに、上越や中越地方の大熊、山吉、斎藤、本間一族（佐渡）、黒田、柿崎、河合など臣従した城持ち国人衆のグループが、主に中核の家臣団を形成していた。

あとは、いわゆる外様の国人衆を与力衆と呼んでグループ別けをしているようで、これには揚北衆や旧守護の家臣団など、臣従する体はするものの腹に一物をかかえたグループなのだと言明を受けた。

さらに一門衆をはじめ、旗本衆でさえ、各々に独自の裁量権で、戦が始まれば参戦するかを決める。そう完全に傘下に入っていると言うわけではないらしい。

教えられた事を考えてみるに、中央集権型の政策ではなく、各々の家が政策を決める裁量をもち、長尾家守護代がそれを取りまとめる地方分権型の政策をとっているのだと気がついた。

そしていざ戦となれば、各々の家が兵糧から兵力、兵器、軍馬を用立て参戦する。実際に春日山の兵は、およそ二千の兵力と予想外の少なさに驚いた。

爺さんの話しはよく脱線し、話題がそれて後奈良天皇の名前がふと出てきた。なんだか私の父という方が、天皇家から越後守護代の役職を頂き、日の丸の御旗を下賜された話しが発端だった。

その後奈良天皇といえは105代天皇で、女学校の時に覚えた室町から戦国時代の天皇だと思ひ出す。あの頃の歴史の授業は、歴代の天皇をよく暗誦させられたもので、予想外に確りと覚えていたように安心した。そして、若い時に覚えた知識は意外と忘れてない事にうっかり微笑みをもたらしたことは秘密だ。

とりあえず新たな発見でした。私は、戦国乱世の世界に転生した。私には乱世と言われようが実感はないし、守護代の末子に生まれた事実さえ納得出来ないうでいた。

参・上杉定実 side

五歳にも満たない年なのに、虎千代がわしの話しを深く理解しておるのに驚いた。そして何よりその気性は穏やかで、人の話しを反らさずに、まるで老成した者に話すような愉しさよ、打てば響く相づちに、何やら要らぬことまで話していた。

最初は、外の何時もと違う慌ただしさを訝って、適当に菓子をやって帰そうとした。まして為景の縁者と知って警戒もした。

だが、わしも久しぶりの都合のよい話し相手が嬉しくて、引き留めてしまったのだ。この子が噂に聞く、神仏がえらびし定めの子なのだろうか？

あまりにも純粹で脆弱で、まして戦を嫌い、隠居が夢だと、浮世離れをしすぎている。かといって知恵が無いわけではない、当たり前前の事を知らず、余程の学者や識者かと思うほどの知識力見識力に目を丸くした。

穢れなき魂は神子のしるし。しかしこの世の中はさぞ生きにくいのだろうか……。

憐れな子供だと、優しく頭を撫でてやった。しかし、末子とはいえ長尾の御曹司、まして栖吉衆の期待の子だ。確実に厳しい政局を生き抜く必要が有ろう、力を貸してやりたいと思う気持ちには嘘は

なかった。だから、促す言葉をかけてみた。

「そなた、ここに来る前に外を駆け回る兵をみたじやる。あれは何だと思おう？」

わしが少し話しの水を向けるだけで、この子は顔色を青くした。予想通りの反応に一人ほくそ笑みを漏らす。

「ああつ……もしかしたらあの外の兵は、私を探し回っているのでしょうか？」

うんと頷いてやると、虎千代は慌てだし、何度もわしの顔を伺った。しかし、それ以上にこの子を試したくて、次にどんな言葉を言うのかと興味深く見つめる。

「はあ……一つ聞きたいのですが、私が居なくなって、傳役は責任を問われる事になったりしませんか？」

「傳役の責を問われるのは必定じゃ」

思った通りに、逃がした乳兄弟を心配するより、なにより大局を心配している利発さに舌をまいた。なお、最悪の事態をも呈示する。

「まして栖吉衆にも類は及ぼう、これは栖吉の失態となるだろうのう」

「うーん、と考え込んだこの子は、皆に類が及ばない方法がないかと考えているかのようにわたしには見えた。さて、どうでるか？」

いまやわし自身でさえ動機が激しくなり、虎千代の行く末を

案じていた。

#### 四

虎千代が逃げ込んだ先は、越後守護の上杉定実の幽閉先だったようです。彼らは意気投合したように、話しが弾んでいるようですが、一方の虎御前や傳役の金津は大層気を揉んでいるでしょう。

事態の推移により、傳役の責は明らかであり、虎千代の生死によつては、栖吉にも為景から傳役の任命責任を追求される恐れもあつた。金津の顔にも憔悴するような表情が浮かんでいた。そんな時に、雑兵が走り込んできた！！

「若君が、ご無事でお帰りになりました！！そして新兵衛を呼べと仰せです！！」

金津の顔が変わる、喜ぶとともに不可思議な呼び出しに、なんとも言い様のない顔つきになる。やはり虎御前も、我が子の無事を聞きつけ階にまで現れたが、理解できない伝言に首を捻った。

「なぜ直ぐに二の丸へ帰つて来ぬ。それは、確かに虎千代か？のう金津、やはりそなた行つて確かめてまいれ」

「虎御前の仰せはもつともでしょう、一先ず某が行かせて頂きます。しかし無事に帰られたのに、今更某に御用とは合点がいきませんな？」

みな狐に摘ままれた様な顔つきをする。金津は、伝令にきた雑兵についていく事にした。内心、まこと若君本人であるなら、責をとる最後の奉公に叱りつけようとも思っていたのかもしれない。

金津が行った先には、まさしく虎千代が居た。しかし何やら雰囲気が変わった。すました顔でいる虎千代の周りには、栖吉からの兵やら春日山の兵たちが、神妙な顔つきで膝について虎千代の側に控えていた。

何とも小さいなりに、春日山城の主のような振る舞いをしていたのだ。今まで権威をふりかざすことのない虎千代である。案内に連れてきた雑兵を捕まえて、問いただそうとする金津に虎千代が威厳をもたせた声をかけた。

「来たか新兵衛、こちらへ参れ」

金津は、いまさら引き返せる理由もなく、兵のまえで新兵衛と呼ばれた限りは臣としての礼儀はつくさねば為らない、物言いたげな顔つきはしたものの、虎千代の前に膝をついた。

五・虎千代 side

たったひとつ解決する方法があると上杉の御館様は、もつたいをつけて言い出した。

「己の立場が解つたのなら、それに見合う振る舞いをすれば良い。そうすれば皆は少々強引な言い訳にも従ってくれよう、丸く収まる可能性もある」

なんともいい加減な解決案だと呆れたが、引き起こした事態の張本人が私だから賭けるしかなかった。

そして搜索する、栖吉衆の兵だけをさがして現れ、権限をフルに

使って口裏を合わせるように言いつけた。そして、その者たちを使いアチコチを搜索する春日山城の兵に勘違いだと伝言させる。

危やうい賭けだと自分ながらに思ったが、最後にあの傳役を抱き込もうと使い番をだした。やれやれ新兵衛が乗ってくれるか心配はあった。でも、これしか八方円満解決となる方法がないから、緊張する心をおさえつけ殺気を放つ新兵衛に向かいあった。

「ようきた新兵衛、話しは他でもない。この度の搜索は手違いなのだと、私自ら父上に謝り状を書いておいた。そなたこの文をもって父上の元に行き事態の收拾にあたれ」

「ほう……勘違い？某は意味が分かり兼ねる」

やはり新兵衛が、物言いたげな顔つきで問いなおす。私は一つ咳払いし、ある約束を神妙な顔つきで返すことにした。

「私は、そなたの主ゆえ謝りはせぬ。しかし約しよう今後二度と義務を投げ出したりせぬと、新兵衛いかに？」

金津は、一瞬驚いた顔をするものの意味を理解したと、ニヤリと口の端をゆがめた。私は、新兵衛の態度に急に恥ずかしさを覚え顔をそらした。

「この金津、主の意思を汲み、使者として御実城様にとりついでまいます。ただし、次は某に相談あれ」

これは、誰も責任を取らずに解決するために、爺さんがヒントをだし私があえて取った策なのです。要するに、私の外出が、連絡違いで傳役に伝えそびれ、知らなかった傳役が行方搜索という傳役の

仕事をただけという、極めて小賢しい言い訳である。なんだか私は、前世の悪徳政治家を思い浮かべ嫌な気持ちがしていた。

しかし、小賢しい理由づけであっても、城主以外は誰もつつこみ所がなく、傅役としての金津の顔もたち、荒川兄弟にも類が及ばない配慮だった。

カギは新兵衛だった。はたして厳しい彼が、小賢しい芝居に乗ってくれるのかギリギリの選択だった。

## 六

かくして小賢しい策は為り、為景は我が子の苦し紛れの言い訳も理解したふりをした。それどころか我が子のやりように、舌をまき内心ほくそ笑んでいたようだ。

「幼いようにみえて虎千代は考えが深いのを、ワシでさえタジタジな化かしっぷりよ」

直江に自慢気に話していたらしい。もう一方の傅役の金津といえど、虎千代の政治力に驚いた。あんなに注意しても、身分の上下に拘らず、立場の相違による立ち振舞いにさえ軽い物を感じ、良く下げてしまわれる頭を拳で殴って教育していたのに、あの姿に魅せられ要らぬ期待にときめいたと栃尾城の本庄実乃に漏らしていた。

虎千代に言わせたら、『商売人は頭をさげてナンボ』の持論の元に、頭は低く実利をとり、年長者と思われる者には敬意から自然と頭を下げていた。………実に考え方の方向が違っていたのだ。こちらでは『武士は威張っナンボの商売』と虎千代は持論を書き換えたらしいのだから………それでも商売ってというのはどうだろう?!

皆が虎千代の小賢しい解決のやり口に寛容に対応するなか、気性の真っ直ぐな虎御前だけは小賢しいやり口が気にいらぬ、そして帰ってきた虎千代を殴ったのだ。

「そなたは、母が心配する気持ちは何と考えているのじゃ。まして逃げるような卑怯なまねをして、恥ずかしくないか？」

虎千代は、まだ前世の父母を本当の父母と思っていた。いまさら前世の自分より年下の虎御前が母親だと言われても納得いかない気持ちがあった。そして不本意に殴られたひょうしに、ついに虎千代の本音が零れおちた。

「私は、あなたの事を母と呼べないし、母だと思った事はない！」

売り言葉に買い言葉だった。虎御前は、真っ直ぐな気持ちで母として虎千代を心配していたのです。実は虎千代が隠している、不可解な夜中の行動を知る方でもありません。

まさにボタンは掛け違えられ不仲になった親子には、互いに再び歩み寄る事はあるのでしょうか？虎御前の母としての想いは、虎千代に伝わるのでしょうか？それは神の定めか運命のイタズラか、交差する思いに親子の未来は託された！！

## 第6章・孵化「完」

## 第7章・軒猿

吉

母は強し、いつの世にもお腹を痛めて産んだ子を、無下にしないのが母親です。虎千代の母である虎御前は、母と思ったことなどないと言いきった虎千代のことを、やはり諦めきれなかったようです。

あの事件以来、虎千代はすでに五歳となり、真面目に英才教育を受けていた。ただ、少しだけ教える方が、詰め込み方を配慮するようになり、ゆとりをもって教育するようになっていました。

虎御前は、子から母と認めてもらえなくとも、心配して周囲に気を配っていたのです。今日とて密かに、虎御前の影をつとめていたお扇を部屋に呼んでいた。

「お扇、折り入ってそなたに頼みがある」

灯火に浮かぶ、円熟した虎御前の横顔を、呼ばれたお扇は真剣な眼差しでみていた。彼女にとっての虎御前は、いまだ勇猛果敢な女武者であり、苛烈な生きざまが刻まれていた。

「まあ、怖いですね。いったい何の仕事かしら……もう私も年ですから刺激的な仕事は無理ですよ御前様」

虎御前は、困った顔をしてお扇に頼みをつたえた。

「頼みと言うのは外でもない、我が子の虎千代の子守りを頼みたいのですよ」

「ええ……こ、子守り」

予想外な虎御前の頼みに目を何度も瞬くお扇だった。そんな依頼など軒猿としても受けたことがない、いや虎御前の口から、真つ正直に子守り頼まれるなんて、女武者も只の人に落ちたのかと肩を落としていた。

「そうじゃ子守りを頼みたい。軒猿の腕利きに過ぎた頼み事でもあるまい」

気軽そうに頼む虎御前にますます混乱するお扇。

「御前様のお頼みを引き受けなくてもありませんよ。もしかすると若君がお命など狙われているのですか？」

虎御前は、何故がおかしそうに笑って口元を袖で隠した。

「暗殺について心配はない。ただの我が子可愛さゆえの頼みじゃ、聞き届けて貰えぬか？」

「うふふ……御前様も人がお悪い。若君には、たいそうな難題があるのでしょうか？引き受けるか否かは、若君を見てからで良いでしょうか？」

よほど若君の素行に問題があると思ったお扇は、即答をさけて若君を見定めて答ようと考えた。

「しばらく、虎千代を観察するが良い。お扇ならば私の本意が直ぐに分かると思うゆえな」

楽しそうに話す虎御前をみて、なぜか嵌められような気がするお扇だった。

式・お扇 side

さっそく翌朝から、あたしは若君の素行調査に取りかかった。はつきり言って乗り気ではない、たった5歳の子供の素行なんて面白くないに決まってるわ。

御前様も、若君可愛さに目が曇ったとか、あの勇猛果敢な女武者も落ちたものね！

若君の朝は早い、荒川兄弟と新しく近習衆に加わった吉江景資よしえかげすけと共に武芸の訓練に余念がない。

さすがは御前様の子、太刀筋がよく似て、これだけの才どもの、傳役の金津様もさぞ鼻が高いでしょうね。

「ずるいぞ若さん、そんなにチヨロチヨロ動いたら打ち込めないだろ」

荒川安実が、練習用の剣をふりまわし虎千代に向かっていく。

「小さい私が安実とまともに当たれるわけがないだろ」

若君は、大振りな安実の剣を身軽さを使ってさばくと懐に潜り手数で多さで勝負にでた。兄びいきの長実は、大きな声で声援を送る。

「兄者……年下の若さんに負けたら恥じぞ」

「こら長実、われらは若君の近習ぞ。若君　この景資は応援して  
ますから頑張つて下さい」

長実と同じ年の景資は、律儀な性格なんだろう長実を睨むと、若  
君の応援にまわる。この二人は同じ年のせいか良く衝突してるのか  
しら。

若君は、幼いながら安実と互角にわたりあう剣さばきを身につけ  
ていた。やはり虎御前が手づから教えてるせいもあるのが勇猛な栖  
吉の血が伺えた。

これと言って何も問題がないように思われ、あたしは虎御前の意  
図に気がつかず困っている。確かに普通の子供にくらべて利発そう  
に見える。

昼に寝るからと言って部屋に籠った若君が、傳役と共に密かに抜  
け出し、守護の上杉定実の屋敷へ上がりこみ、茶菓子を貰って話し  
込んでいたり、城内の倉や勘定方の詰所、御台所、工部方の詰所、  
番所を回っているのを、あたしは発見した。

下々の者達に何か話しかけて回ってるらしい。訪問を受けた方も  
慣れたもので若君を歓迎してるふしがある。工部方では絵図の書き  
方を教えて貰ってた。

かなり変わり者の若君だわね。下々の者とも頓着なく話すとは、  
好ましい性格だとは思うけど……。果たしてこれが素行の悪さと言  
えるのか？あの御前様は、何のために子守りを頼まれたのか、理解  
にくるしんだ。

ああ、もう何だというの、もうかれこれ5日も若君を見張っているよ、このお扇姐さんが！……若君には、これといった素行の悪さもないし、良い加減じれてもくるわ、まったく！！

たしかに若君は子供にしては、変に大人びた子供だったが、この世には大人びた子供くらい何人も見かけることがある。それほど世の中がせちがらいのだ。

そつとため息を吐いて側の木立にもたれた。若君たちは、姉の綾姫と庭先で野点を楽しんでいる。先ほどから野点のわりには、わーわきゃあきゃあ煩く騒いでいるようだ……まったく何だか平和だね、あたしはこの依頼を断ろうかと思いはじめていた。

「姉上、知ってるでしょ私は濃い茶は好きではありません」

綾姫が若君と近習衆を客に見立て、茶道の練習をしていた。虎千代は濃い茶の茶碗を片手に、渋い顔して飲みあぐねている。

「若君、濃い茶こそ茶道の基本です。この旨味がわかるのが風流というものですよ」

半東はんとうについている老女の芳野が、目は笑っているが若君を厳しくたしなめる。茶頭ちやうづを努める綾姫あやひめも棗なつめを戻しながら姉ぶって口を出した。

「濃い茶が飲めないなんて、虎千代はこどもねえ」

「うっ……飲めば良いのでしょ！姉上は意地悪です」

荒川兄弟がニヒヒと笑うと若君は、しかたなしに濃い茶を一口すすって隣に座る景資にまわした。

「偉いわ、さすが私の自慢の弟よ。さあ貴方たちも虎千代に負けなように濃い茶を飲むですよ」

綾姫は、芳野と共に顔を見合せ笑いあい、近習衆を睨み付けた。近習衆があわあわと抵抗を見せると虎千代がギツと切れ長の涼しい目元で睨んだ。

うふふ……若君は綾姫には弱いからねえ。そのわりには近習衆をいじめて喜こぶ位には人は悪そう。残念ながら、あたしの守備範囲ではないけれど、良い男になりそうだわ！！

あたしは面白い物を見つけたように唇をなめ、相変わらず退屈そうに、若君達のやり取りを横目に見守っていた。

「へえ　珍しいとこで会うじゃないか、蜉蝣かげろふのお扇姐さん」

唐突に背後から忍びよった影に、厄介な奴に、みられたと内心の動揺を隠して、あたしは色っぽい流し目で、奴をさっさと追い払おうとした。

「うふふ……相変わらず凄腕なこと、ねえ段蔵」

#### 四

この男は、加藤段蔵かとうだんぞう、腕ききの軒猿で又の名を飛びの段蔵といっ

た。軒猿の里では頭領に一目おかれ、特に幻術に秀でる。里では謀報活動で彼の右に出る者はなく、男の一匹狼な性格もあってか里の者には嫌われているらしいのです。

「こりやお褒めにあずかり光栄至極、お扇さんの美貌も変わっちゃいねえな」

くつと喉元で笑うと男は慇懃無礼な口調で言い、手はしつかりとお扇の腰に回ってるようだ。この男かなり女慣れしてるのか、お扇にとつてはやりにくい存在に見受けられた。

「うふふ……そっちこそ水も滴る良い男におなりだね段蔵。何人、女を泣かせたんだろう」

お扇も妖艶な笑みをうかべ、段蔵に流し目を送っちゃいるが警戒心を露にしているようだ。

「さあな、いちいち数えちゃないなあ。で、お扇さん程の女が、こんな所で何の野暮用だい？」

段蔵は、お扇の警戒心を読んだのか、さらりと受け流し本題を切り出した。

「ああ……ちょっと御前様から頼まれちゃってね。若君の子守りさね」

肩をすくめ自嘲ぎみに言うお扇に、段蔵が目を剥いて驚いた。そりやそうだろう、お扇だつて軒猿では古株の忍びだ。古株といえど、いまだ容姿に衰えはみせず、小股の切れ上がった良い女の範疇には数えられる名うての女忍びだ。こんなやらせ仕事をするほど、落ちぶれてはいないのだ。

「ひゅー 豪気なこつたなあ。あの坊主の子守りかい、御前も我が子可愛いさに良くやる」

「……たしかに。そんな事はいいからお前さんこそ、こんな所で油売ってないで、さつさと直江の旦那所へ行っておしまい！」

どさくさ紛れに胸元へ入って来た段蔵の手を、つねって向こう押しやって。お扇は、しっしと追い払う真似をする。

「冷たいねえ。怒った顔も別嬪だぜ」

お扇に追い払われても懲りない男は、お扇の耳に唇をよせて艶を含んだ低い声を響かせる。が、お扇もお扇だ侮れない、襟元の毒針を抜いて段蔵に投げつけた。

「ちっ、またなお扇姐さん。せいぜい頑張な」

段蔵は気配を察して、すでに後方に飛びのきニヒルに笑って、呆れた顔をするお扇に手をふった。

「嫌な男だねえ、まったくこつちの身にもなつて欲しいわ」

お扇は、ひとつため息をつくと、段蔵の消えた地点に腰を屈めて毒針を回収するのだった。

## 五

宵の口のこと、お扇は為景によび出しをうけ、軒猿の頭領に繋ぎ

をつける役目をひきうけた。

不穏な動きをみせる上条定憲が、跡取りがない守護に養子をと擦じ込んできた。幽閉中の守護に養子など為景にとつては大層な事でもないが、養子元によつては長尾家存亡の危機になると危ぶんだ。なにせ次代の守護代は凡庸な晴景だったので、為景は禍根を残すつもりはなく、ここで上条を徹底的に叩く腹積もりなのだろう。

ひと波乱くるわねえ。若君の子守りよりずっと面白いじゃない。御前には悪いけど、やはりこの話はなかつた事にして断ろう。

一度里に戻ることにした彼女は、これで子守りも最後にするつもりで、若君の寝所の屋根裏へ忍んで入った。ちょうど部屋では、灯火のあかりのもと書見しよけんに勤んでいる若君がみえた。そして側では荒川兄弟が二人揃つて口をあけて寝ていたので、お扇は頭をかかえた。

虎千代は、ふと顔をあげると大の字で寝ている乳兄弟を見て、えもいわれぬ綺麗な微笑を浮かべた。ほうと一瞬のうちに目を奪われお扇はひとりごちた。

なんだつて、御前ともあろうお人が、こんなに若君を気になさるのだろう。あの近習はさておき、良い若君ぶりだと、あたしは思つただけど……。

彼女は静かに成り行きを見守っていた。立ち上つた虎千代が、行李から肌掛け物を出して母親がするようにかいがいしく乳兄弟に掛けてやっている。

嫌いじゃないね、よく気がつく若君じゃないかい。

そうこうするうち、若君は寢所をぬけ出し縁先に出た。彼女が後を追う縁先にでると、雲がわずかにかかった三日月の空を、若君は見えない何かを見つめるように遙か遠くを見据えていた。

だが何の前触れもなく若君が、発作的に縁先を飛びだし履き物をつっかけ走りだした。彼女は呆気にとられ、凍りついたように若君の後姿を目でおった。足元のふたしかな宵闇を、なんの迷いもなく突っ走る姿に寒気が這い上がる、お扇は体をブルリと震わせた。

げに恐ろしい！！まるで鬼神がついたよな変貌ぶり、これが御前様の頼み事なのか！！

彼女はキツと唇をかみしめて、若君の後を追いつつ始める。突然の若君の変貌に、腕ききの忍びであつても、考える暇もなく目をこらし、ただ必死に駆けるしかなかった。

## 第7章・軒猿「完」

## 第8章・咆哮

吉

さて、皆様おたちあい。少しだけ時間を戻し、現代よりの転生者虎千代の最近の日常を追ってみることにいたしましょう。

彼はあの家出騒動より立ち直り……いやいや変にテンションをあげて、なにやら動きだしたようです。おや、また今日も傅役の金津を引き連れ二の丸から脱出してきました。

「新兵衛、今日も付き合ってくれちゃってありがとうね」

「別に、好きで付き合っている訳ではない。これも某の努めだからな」

無駄にテンションをあげまくる虎千代にたいし、何時もの仏頂面で口をへの字にまげて答える傅役、なんだか傅役が苛立ちを抑えているのが丸わかりです。

「えへ……某の努めだってえ、じゃあ戦になっても一緒に連れて逃げてね、死ぬの怖いんだから！！それ新兵衛の一番の努めにしてあげ・る！！」

「何をほざくこのへボ主！！一回ブチ殺してやろうか？あんな」

どこかのヤンキー並みに凄む金津に、主は懲りもせず逃げ回る。栖吉からきた兵士たちにも最近人気の主従漫才コンビだったりするのだ。

「おつ、若様お出掛けですかい？」

「ああ、半造か。いつもご苦労様。あの時は助かったよ、また差し入れ作って来てやるから楽しみにしてるよ！」

「差し入れですかい？楽しみにしてますから頑張って来てくださいよ」

と、まあ人当たりの良い若様人気はうなぎのぼり、傳役が睨むのも気にしてない、まして顔馴染みの兵士から、気軽に声をかけられる始末に、金津は苦虫を噛み潰す。

厄介な事に虎千代は、あの事件の顛末から己の立場を知り、あざとくも善い若君に擬態してみせる技を覚えたいのです。傳役という最強のカードを得て、一先ず生命の危機から逃れる算段がつき若様ライフを満喫中なのでした。

「で、今日は何処へいくのだ？」

「んっ……まず、上杉の御館様に菓子をもらって、あとは最近開発中の戦の非常食でも作りに行くか、んじゃとりあえず新兵衛よろしくね」

やれやれ、これじゃ傳役は不憫すぎる。若様は浮かれて好き放題、先がおもいやられますねえ。

式・虎千代 side

私と上杉の御館様とは、プチ家出いらいの茶飲み友達で、まあ前

世でいえば同じシルバー世代だから話しが合う。けして甘味目当てじゃないと主張するが、すでに新兵衛にはバレバレで開き直っていた。

「御館様に菓子を期待するのは、いい加減にしておけよ、栖吉の恥じだ」

「まったく新兵衛は堅物なんだから、大丈夫かげん位は心得てるって！！」

「誰が心得てるって、あんん」

私も慣れたもので、いくら彼が凄んでもちつとも応えない。ある意味信頼していると言っても過言ではない。私たちがいつもの他愛ない言葉を応酬していた時に、彼が後をつける不審者のけはいに気付いた。

「どつやら後を付けられているらしいな」

「……えっ、どっ？」

付けられているの言葉に狼狽えて振り返ろうとすると、金津は裏拳で軽く殴って私をだまらせた。

「馬鹿、狼狽えるな」

こつこついう非常事態に、金津のような鋭い男を味方につけて良かったと、つくづく思った。私は、不満そうに口を尖らせて殴られた箇所をさすり、金津に促されるまま歩きだす。

最近になって、ある事に気がついた。件の刀八のナンチャラ……名は覚えちゃいないが胸に灯ったこの焔が、生命の危険を覚える時にも嫌な感じに灯るのだ。私にはコレをコントロールすら出来ないが、最低私の命だけは守ってくれるらしいと気がついた。

しかし今は、胸の焔が反応しない。後を付ける目的が暗殺ではないのか？

「若、二の丸に引き上げよう」

「新兵衛、ダメだ。このまま行こう、何だか変な感じなんだ」

「槍を持ってくれば良かったか……」

金津は諦めたように私をながめ、トンと刀の鏝を鳴らす。土壇場の判断力は、私の勘が良く当たると、経験で分かってきたのか歩調をわずかにゆるめて私の後ろ手に下がった。

私はいつも通りを装いながら、やはり裏の垣根の破れ目から御館様の屋敷へ入った。しかし金津は、警戒するためか垣根のうちには入ろうとしなかった。

「ダメだよ、新兵衛も来るんだ。一緒に来たほうがいいよ、アレは何もしないと思う……たぶんね」

金津は、諦めたようにひとつ息を吐くと、しかたなく垣根を潜ってきた。さて、アレはどうなのだろうか？

参・虎千代 side

やはりアレは何もして来ない、誰かに頼まれ観察しているだけなのか？私を観察することで利益のある者は誰か？私は布津姫からの言伝てを、御館様に伝えるといつてもより早くに屋敷を後にした。

布津姫という方は、御館様の娘にあたる方で、晴景さんの奥方なのです。世継ぎを亡くし悲しんでいるだろうと、心配した御館様に頼まれて、文を届けにいったのでした。

儂い感じの大人しい方で、ひどく憔悴されているようで可哀想だった。夫婦仲もあまり良くないと溢しておられた事が気になった。

「さて、御台所でも覗いてこよう。いこうか新兵衛」

「んっ……アレはどうする？帰るほうが無難だ」

「ああアレ、ちょっと色々引っ張り回してみようかと思ってね」

さっそく御台所みだいどころに行つて、試作品の出来具合をみてきた。この越後には塩と味噌、酒しか調味料がない、だから酢や醤油、みりんを作ってみようかと、試していたのです。

やはり食べ物を美味しく食べるために、努力をおしんではいけません。それとは別にインスタント味噌汁は良い感じに出来上がり。早速、兵士たちに配ってみようかと思つてたりします。

まあ、味噌に鰹節をまぜて乾燥させた葱を入れ、焼いて乾燥させただけのもの、干飯と一緒に炊けば良い感じの粥が出来るのだ。もちろん楽隠居のために、しっかり家から金をせしめるつもりです。

さてまだアレはついて来てるらしいので、インスタント味噌汁を配りつつ、城内を回ってみます。こういう事は、本当に止めて欲しいよ、ストレスで胃に穴があいたらどうしてくれるんだ。首謀者でてこい！！

結局、こんな事が毎日続いた。出来るだけ一人になるなど金津が言うので、夜も近習が交代でついてくれる。今日も安実と長実が、書見に遅くまで付き合ってくれていた。

すでに彼らは疲れて寝入り、二人そろって口をあけて無邪気に眠る姿に癒された。随分と迷惑をかけている事に、申し訳ない気持ちが胸いつぱいになる。だから、気分転換に、そつと部屋を出た。縁先からみた夜空には、三日月が冴えざえと浮かんでいた。

どの世界であつても月は変わらない。電信柱もビルの影さえみえない、この世界にあつて私は一人、矛盾を抱えて生きるのか？

#### 四・虎千代 side

この世界はすでに狂っている。なぜこの歴史を逆行したような世界に生まれたのか？いきどうる気持ちに拍車が掛かる。

胸の青白い焔が、三日月に呼応して燃え上がり、すべての世界を塗り替える。壊れる壊れてしまえ、何もかもいらぬ私なんか生まれこない方が良かったのだ。衝動に突き動かされ、私は真つ暗な夜のとばりを駆け出した。

「なぜだ！！なぜこんな世界に産み出した！！」

なぜ私は、こんな所に……あああ

。

狂気におそわれ、息もきれぎれに木切れを振りまわす。自分が何で何者であるかも忘れて、獣が慟哭するように暴れまわる。月あかりのもとに、引き裂かれた花びらが舞い散る光景が妙に綺麗だった。私の今の名は虎千代、ほんとうの私は違う！違う！違うのに！

なにが神仏が選ばれし定めの子だ！！神や仏がいると言うのなら、いま直ぐここに出て来るがいい、すべてを……すべてを切り裂いてやる！！

肩でなんども荒い息をつく、ぼんやりとうかぶ三日月だけが私をみているようだった。ふいに虚しさに襲われて、手のなかにある木切れをギリツと握りしめると、手のなかで無惨に折れる音がした。赤の雫が、生を主張し、ドクドクと流れ落ちる。

また、こんな事やってしまった。分かっているんだ私だつて、こんな事しても何も変わらない、虚しいだけだ。

「もう、お気はすまれたか虎千代様」

私が我に返ったところ、ふいに木立の影の向こうから、知らない女の声がした。その声につられて木立のあたりを振り返り見て、唇のはしをつり上げた。そこにはきつとアレがいる！！そして怒りの感情のままに、抑揚もつけず言葉を発した。

「ククツ……おまえは何者だ！！なぜずつつけ回していたのだ！私などつけ回しても何も得などありはしない、ならいつそ殺つてみるか？」

殺意のこもった目をむけると、草をかき分けて忍び装束の女が現れた。少し呆れた目をした忍びの女は、何かを含んだような妖艶な微笑みを浮かべ、用心ぶかく私に近づくと膝をおる。

「うふふ……お可愛らしいこと。失礼しました若君、わが名はお扇と申します。虎御前様より若君の守護を、命ぜられました軒猿の忍にございます」

その女は、ひとつ頭を下げると、落ち着いた声で話し出す。今まで分からなかった事が、何もかも一つの線でつながり、答えがストンと胸に落ち着いた。

「よけいなことを……お扇とやら、もうよい後はつけられたくない」

私の脳裏に母たる虎御前の顔がうかんだ。何のつもりなのだろう、いつもいつもあの方は私をかまいすぎる。そんな私の不服そうな顔をみあげ、お扇は、ひどくまじめな顔でいい返した。

「されども、お扇にとって虎御前さまの命は絶対。まだ五歳になっただばかりの若君さまの奇行を、ご心配されてのことですよ。忍びは主の命めいを守るものです」

その言葉に、冷静になった私は思い返してみた。もし私が母親であつたら、こんな暴拳をする子を放置出来るだろうか？いや私だつたら放置できない、きつと心配で心配でどうにかなる。お腹を痛めて子を産む母は、いつの時代にも変わらない思いを持つものだ。

忍びまで使うとは、あなたはたいした母です虎御前。最低限、心配をかけないようにこれからは生きましよう。心配かけてごめんな

さい、あなたは何も悪くない……ただ、私が生まれたせいで、誰かに不幸な思いをさせるのだけはやってはいけなかった。

たとえ、理不尽な定めであったとしても受け入れる。この世界のかたすみで、ひっそりと生きてゆこう、最後の瞬間まで私はあなたが、苦勞して産んだ子に違いはありません。

納得づくで肩の力をぬくと、私の手から血のついた木切れが、覺りを受けたようにポトリとおちた。

「わかった。どうやら私は母上の心配の種だったらしいな。夜歩きは憤むことにしよう、だからもう心配はするなと伝えて欲しい」

この世界に生まれ5年もたった、私が虎千代である現実をみとめよう。そう私は虎千代、神仏が選びし定めの子！！夜空に浮かぶ三日月が笑った。私は声をあげて、腹のそこから叫ぶ！！

「神よ仏よ覚悟しろ、私は虎千代として生きる

」

## 第8章・咆哮「完」

## 第8章・咆哮（後書き）

こんにちは有坂です。これで長くなりましたが幼年編は終わりになります。

今回は葬儀編、父である為景の死、一斉に蜂起する反逆者たち、それに立ち向かう虎千代を書いていきます。戦闘場面が出てきますが、上手く書けると良いなと思ってます。

改めて、評価感想を頂いた。ツエツト様、クラウドス・リッター様、桃川 弥様ありがとうございます。貴方の励ましのお陰様でここまで書くことが出来ました。

そして、拙い文章ではありますが毎回読んでくださる読者のみなさま、本当にありがとうございます。

長い物語になりますが、こんごともヨロシクお願いいたします。有坂は未熟者ゆえ、なにか感想やご指摘を頂けるとすごく喜びます。

とりあえず第2部の間にある後書きは、読みにくいので消します。後書きは区切りで書きたいのですが、つい嬉しくなって書いてしまいました（笑）

第3部・葬儀編 第1章・逝去（前書き）

第3部・葬儀編

第1章・逝去

### 第3部・葬儀編 第1章・逝去

吉

天文5年（1536年）長尾為景は、隠居を決意し嫡男の晴景に家督をゆずりました。為景は、もともと目の黒いうちに家督を譲り、晴景の治世を安泰なものにしたいと考え、それを実行したにすぎませんでした。

晴景に家督をゆずると、まず為景は朝廷と幕府へ働きかけて、名ばかりの守護を廃して、長尾晴景を越後国主と認めさせた。証として朝廷より毛氈鞍覆もうせんくらおおいと白傘袋しろかさぶくろの許可を頂くことになる。

守護を廃すにあたり、越後の国人衆からの風あたりは強かった。特に守護の甥にあたる上条を中心に揚北衆、守護の直臣たちは反旗の狼煙をあげた。そして隠居するはずの為景は、軍勢を引き連れ内乱の平定に追われていきます。

そんな無理が祟ったのが為景は、戦乱のおおよその終息をみると、発病し病の床につきました。さすがに奸雄と呼ばれる為景だけあって、病床にあっても越後流軍学の手解きを疎かにしない、今日もまた虎千代を枕元に呼び出していました。

「虎千代にごぞいます」

「虎千代か、こちらへ参れ」

礼儀を正すと、虎千代は為景の寝所へと上がり、病床の父を見た。この日は雪が深くつもり部屋にもシンとした冷たさがひろがって

た。為景は、病で細くなつた手で虎千代を側に呼んだ。

「ちこう。んっ……なんじゃその顔は、ワシはまだ死んではおらんぞ、まだ死ぬ訳にもいかんがな」

痛々しい顔つきをした虎千代に、茶化したように声を掛けた。虎千代は父の床近くに座ると、冷えて冷たくなつていた父の手をとり、そつと夜衣にさし入れた。

「そうですね、まだ死ぬのは早すぎますよ父上。もう少し私に越後流軍学を教えて下さらないと……」

「うそを言え、すでにお前には総てを伝えてある。後は実践あるのみじゃ！！まだまだ晴景は甘い国主じゃ、そなたは兄を助け活躍して貰わねばのう」

どこか遠くを見るように嬉しそうな顔をする為景に、虎千代は死の影をみて苦しそうに眉をよせた。

「そうじゃ、あの城攻めの模型を使ってくれているか？そなたは戦の勘がするどいからの、あれで何度も研究すると良いぞ」

「ああ……あれですか？近習と遊んではいますが、私には勿体なさすぎます父上」

そう為景は虎千代に、たたみ2畳分ほどになる城攻め模型を与えていた。武器も兵士も巧妙に作り込んだものでした。

「お前は相変わらず戦が嫌いか？」

「……はい」

虎千代は為景の思いにも気がついて、なお言いにくそうにうつむき答えた。屋根から滑り落ちる重たい雪が、ドサリと庭で大きな音をたてる。部屋の中は静かに父が目をつむっていた。

「戦が嫌いでもいい。たのむからこれだけは約束してくれ、民を家族を家臣たちを城で働く者たちを守ると……言ってくれ虎千代」

私にとって大切な者たちだから、守るのは吝かちかではない、しかし戦など恐くてたまらない、だが世話になった父上の最後の頼みに、うんと首を立てにふった。

「すまない……すまない虎千代。お前が優しい子だと分かって、こんな事を言う父を許してくれるか」

私には父上に何も声をかける事が出来なかった、ただ漠然とした恐怖が足音をたてやって来るような気がしてたまらなかった。

私は、ちつとも優しい子なんかじゃない、ただ怯えているのだ。怖いのだ何もかも、この世界が何もかも怖い。逃げ出したくても逃げられない現実には怖れを抱いているだけだ。

腹をくくる時がきた、出来るか出来ないかは別にして信頼にこそ応えるべきだった。

「父上、私には何の力もありません。非才の身なれば期待にそえぬかもしれない。それでも守れと仰るならば、その信頼にかけて守

ると約束します」

「そうか礼を言う、……ゲホツゲホツ……晴景をよく支え越後を守ってくれよ、……頼んだぞ虎千代」

そして父は、高ぶった感情を表すように咳が止まらなくなった。現代であれば治る病気なのかもしれないのに、医療技術のないこの環境に落胆し、父を抱えて背中を懸命に擦った。

「……伝えておかなければならぬ事がある……直江を呼べ」

「なりませぬ……薬師をいま呼びますから……治してから……」

「駄目じゃ……直江を呼べ……」

苦しむ父に為すすべもなく、薬師を呼び、直江も呼んで、私は父の部屋を出た。これが生きている父を見た最後だった。

この年の12月長尾為景は手当てのかいなく病死する。その報は、越後をゆるがし波乱をよぶ。

参・虎千代 side

越後の冬は早い、12月ともなれば一面の銀世界に閉ざされる。ここ府中春日山にも重たいぼたん雪が降りつづく。

私は、暗い天井をぼんやりとみあげた。闇のなかの運命という魔物がほくそ笑み、私の不安なこころを乱していた。

強い父上がいたから、戦のことなど身近に感じたことがなか

った。あの時の約束を守れる自信などなかった。

為景死去の報を受けた味方の国人衆は、弔問のためつぎつぎと春日山城を訪れた。みな甲冑にみをかため武器をたずさえ、多数の軍勢をひき連れている。

「若さん、たいへんだ。早くきてみる。敵の大群がみえるぞ」

近習衆の安実は、はじめてみる大軍勢に驚いて、慌て私を呼びにきたらしい。私は、安実にさそわれるまま見晴らしのよい場所に立った。

「……………これは！！」

この時、対立関係にあった上条上杉方の大軍団が、春日山城にはどちかい山野に伏陣している。何百何千となんなんとする武装した人の群れ。

凄い！！なんて恐ろしい光景なんだ。

私の時は、こおりついたかのように止まり。足元から恐怖による震えが這い上がる。初めてみる戦場の、なんともいえない濃厚な空気にあてられ目眩がした。

現代人だった私は、戦争と無縁に生きていた。越後に、生まれてからも城をこれほどの軍勢に取りまかれることなど体験したことがなかった。

きつと綾姫は、怖がっているのだろう。

兄上は春日山城を、守ることが出来るのだろうか？兄上が、もし負けることになったら母上や姉上、春日山城に寝起きする下々の者はどうなってしまうのか。

みんな怖い思いをしているのだろ。そしてあの約束を実行する時がきた。為景の息子として兄上を支えるんだ。

恐怖に震える心を強引に抑えて、ふつつつと胸のなかの青白い焔が燃え上がるのを感じた。そしてグツとへそのあたりに力を入れたら丹田がカツと熱くなった。

「うふふ……さがしましたよ若君、これよりお支度をして頂きます」

お扇の、普段とおりの声が頼もしい。ふつと肩の力がぬけ、やわらかな目でお扇をみた。

「ありがとうございます、すぐに行きます。行こう安実」

#### 四・虎千代 side

安実たちと別れ部屋へもどると、すでにお猪が甲冑をよういして待っていた。初めて見る甲冑は鈍い色を放ち、圧倒されるような存在感があった。

「待たせたね、ありがとうございますお猪」

おちついた態度の私をみて、お猪の目から涙がこぼれる。お猪は勇ましい女で良く乳兄弟と共に悪さをしては怒られ、棒をふりまわし追いかけられた事もあった。

「若様の、なんと落ち着いていらっしやることか。お猪は嬉しゅうございます」

お猪の感動ぶりに、くすぐったさを覚えて身をすくめた。まさか彼女が泣くななんて思ってもみなかった。

「お猪、心配してくれたのだな。ありがとう、さっそく着替えようか」

「はい、承知しました」

初めて着る甲冑は、曇天の空のように重くわたしを締めつける。体を締めつける鈍い痛みにも、心がひき締まっていく気がする。

甲冑の重みは、責任の重み。長尾為景の子として責任を果たそう。

「若君さまに申し上げます。弔問客がお揃いになりましたので、広間でご挨拶をお受けくださりませ」

「わかった、参ろう」

知らせをもたらせた者に頷いてみせると、お猪に礼を言って広間へとむかう重苦しい廊下を歩いた。金津や近習たちは、今ごろ走り回って準備しているだろう。私は、胸の青白い焔を燃えあがらせ、顔をあげ胸をはって、一步一步廊下をふみしめる。

父上見ていてください、私は兄上をたすけ必ず責任を果たしてみせましょう。母上や妹、春日山城に暮らす者たちのために……

なんの根拠もない考えだけれども、なんの力も持たない子供だけれども。兄上を助けるといふ思い込みでしかないが、それで私には十分戦う理由だった。

手のうちに2連の数珠を握りしめる。さきほどお猪から虎御前様からです、と言われ受けとったもの。水晶の硬質な煌めきが、熱をもった手のひらをひんやりと冷やす。

今日は、父上の葬儀なるぞ。事に乗じて兵をおこすなど、礼儀を知らぬゲスな奴等め！

キツと大軍が伏陣するであろう方角を睨み付け。胸に、かつかと燃える清浄なる青白い焰を宿す。不義なるものに罰をあたえん！

胸にきざみおくが、いい不義なる者の末路を。戦鬼、為景の供養の贄としてみせよう。

## 第1章・逝去

## 第2章・慟哭

吉

積雪におおわれた春日山城は静まりかえっていた。曲輪には府中長尾の旗さしものが、なん本もひるがえる。

晴景は、直垂をまとい上座をしめていた。そして広間をうめつくす戦支度の侍を、イライラと見ていたようだ。

「直江、何だあやつらの態度は、わしは実城ぞ！！すこし無礼なのではないか？」

直江実綱は、眉じりをさげ困りはてた顔をしていた。老獪な政治家である彼の内心では、広間にいる皆が何を考へてるかくらい、手に取る様にわかっていた。

晴景は、神経質に爪をかんだ。彼は父である為景の死をさかいに、味方武将の態度が、明らかに変わった事に腹をたて苛立っている。

「わしは、新しき実城ぞ！！天朝さまより認められし越後の国主なるぞ！！あやつらわしを何と心得ておるのだ！！」

晴景は、苛立ちを露にカタカタとせわしなく貧乏揺すりをする。この広間では晴景の存在さえ忘れさった様に話を聞かぬ者や、臣下の礼さえまともにしない者が数知れず。

「なんじゃ、あの栖吉のジシイは態度がでかすぎるのじゃ！！もうろくジシイが！！」

この広間では、虎御前の実家の栖吉から当主の長尾房景が、老骨にムチを打ち最強を誇る軍団を引き連れ参内し、戦の手配りを始めていた。上田からは弔問に代参の者しか訪れていない、味方からすれば心強い一門衆にみえたが、晴景にすれば嫌いな虎御前の実家を頼りにするしかない現状が、ひどく口惜しかったのだ。

「……気に入くない」

「まあまあ新城さま、喪主はどしつと構えておられよ」

直江は晴景の機嫌をとるように、口先だけの甘い言葉をはいた。事態は悪い方向に転がりはじめていると直江は直感していた。まだ栖吉の老体がいるから抑えは効いている、はたして人望のない晴景の指揮に、皆の心が一丸となれるのか？

ストレスが高まったのか晴景は喘息の発作に苦しみだした。息苦しいあえぎに広間にあつまる者の視線が冷たくささる。ひゅーひゅーと胸がなる、小姓に背中をさすらせる晴景。

「何もかも何もかも、広間にあつまる不忠者のせいじゃ」

広間のものは、そこかしこでひそひそ話を始める。葬儀のまえとも思われぬ騒がしさに包まれていた。そんな広間に、凄烈な一陣の風が吹き抜ける。

「者共、鎮まれよ！！父、長尾為景が葬儀の場なるぞ！！」

式・晴景 side

広間に朗々たる声がひびく、戦場をきりさく凄烈な声。わずか七歳の少年は甲冑を身にまとい、2連の数珠を前に押し出す。

さしもの歴戦の剛のものさえ、気迫にのまれ。かつての主、為景にささげるばかりの深い臣従の礼を一斉にする。広間には、静かな緊張感がみなぎっていった。

弟は、みんなが平伏するのを認めると、重々しく頷き顔をあげ胸をはり、確かなあゆみで上座にむかい怯まずにすすむ。

なんなのだ、こいつ。これがあの大人しい虎千代か？

わしは、腰抜けだとばかり思い込んでた弟の変貌に戦慄した。わしは、父の関心をすべて集める、こやつが嫌いだった。

わしに近習する者を引き連れ、21歳年下の弟に泥だんごをお見舞いにいったこともある。女狐に似る弟が悪いのだ、あやつは怒れる栖吉のバカ兄弟を両手で制止し、黙って泥だんごを受けていた。

「なげるなら、この景資に投げなさい。私がいるかぎり、若君に泥など被らせぬ」

涙をためた勇将吉江の息子が、勇敢にもあやつの前に立ちはだかった。それで泥団子が当たらなくなり、煩い傳役の金津が出て来たら困ると思って逃げだした。

あやつは、女狐に似た切れ長の目で、静かにじつと我らを見つめ、なんの抵抗すらしらない腰抜けだと、今日までバカにして齒牙にもかけなんだ。

そういえば父上が、死ぬまえに、虎千代の事でこんな事を言っていたな。

「のう晴景、わしが死んだら虎千代を頼るのじゃ。年下じゃからと言つて侮るな。あの者はお前が真摯に頼みとすれば、きっと最後まで尽くしてくれる信義ある者だ」

わしの前でどつかと腰おとし、弟は誰よりも深々と臣下の礼をとる。わしはみわたす家臣たちの低く頭を下げた様子に、これでこそ本来のありようと満足そうに頷いた。

「うむ、大義。面をあげよ」

胸をこれでもかと反り返し年の離れた弟を得意げに見た。どうじや、わしは偉いんだぞ！！

「虎千代、御前にまかりこしてござりまする。このうえは、新城様を奉りひつきょうな奴腹を、父為景の供養の贄とすることをお誓い申し上げます」

参

そう、虎千代には兄・晴景の思いを、すべて理解できていた。子供にとって親の関心がなへんにあるかと言うことは、最大の関心事だ。

偉ぶって胸をそりかえす晴景の姿は、誰の目にも滑稽にしか見えなかった。それでも、虎千代はかりそめの父上の言葉を忘れることなど出来ない。

「晴景を良くささえ、越後をたのんだぞ虎千代」

本当に私は馬鹿だと思う。前世でも今世に於いても、こんな信義にてらす生き方しか出来ないのだから。

「あつはつはつ……さすがわしの孫じゃ！！よう言つた虎千代！！それでこそ栖吉を継ぐものじゃ」

栖吉の御大が広間の注目をひくように、高く大きな笑い声をあげた。虎千代は、苦笑すると爺さまに向き直る。

「お爺さま、お久しぶりでございました。この度は父・為景の葬儀のためにご出陣感謝いたします」

爺さまは、野太く笑うと虎千代の肩をパンパンと張る。晴景は苦り切った顔で二人を見つめ、お株をとられたと立腹しているのだから。

「なんの心配もせんでええ。お前がたは、父上を弔うことだけ考えておれ。ここに居並ぶお味方衆が一丸となって、ひつきょうな奴腹を凝らしめてくれよう。のう、ご列席の皆々よ！！」

おおおお

一際大きくときの声があがり、春日山城を揺るがせた。心がバラバラになっていた春日山城に、一本の筋がピシッと通る。

広間につどう皆々の顔付きが変わる、たった一人の少年の毅然とした態度に、勝機がみえたのだ。弔問にきた腹の底のしれない味方衆も、勝ち馬なら必ずにのる。

「おお、そなたが主為景の秘蔵つ子か？なんとも頼もしい奴じゃ！よし、一番槍はわしに任せろ、ひきょうな奴らを存分に蹴散らしてくれろ！！」

武辺者の柿崎が、虎千代の決然たる態度に気炎をはいて盛り上がる。この盛り上がりにも皆も乗じて、さらに城方の士気は大いにあがった。

ことの推移を見守っていた軒猿の頭領が重い腰をあげた。何百人の忍びが、情報収集に飛び出した。為景を亡くし様子見を決め込んだが、あらたな盟主たる者を見出し、本来の力を発揮しはじめた。

「お扇、軒猿は若様の味方につく。さっそく繋ぎをつけてまいれ」  
「承知」

広間にみなぎる力は、城全体を活気づかせ、それは城の外からでも、見るものが見れば一目瞭然、敵方のなかにも敏感に気配を察する者がいた。

#### 四

その男こそ琵琶島城主宇佐美定満、その名を後世にのこす名軍師。しかしまだこの時点で、彼の本質を理解し、縦横無尽に使いこなせる主には恵まれていない。

当時の軍師のありようも、現代の認識とはズレがある。林泉寺の天室光育を思いだしてほしい、軍を采配する立場ではなく戦の吉凶

を占うことが主たる役目でありました。

宇佐美は、三國志さんごくしに登場する蜀の諸葛亮孔明しよかつりやうきやうめいのように軍略を生かし、じっさいに軍を動かす軍師となる望みがあった。

孔明においても武田の名軍師山本勘助においても、つかえるべき将たる器に出会うのは晩年になってからの事。宇佐美とて、もう中年の域に達する年である。

この越後においての彼のたち位置は微妙だ。かつて為景に滅ぼされた守護の上杉房能うえすぢふさよしの重臣。いまは関東管領から禄をもらう立場にある。

彼は、劣勢になった守護をみすてず。戦鬼為景を寡兵でしりぞけた武勇伝をもつ。その武人としての功名にひかれ反為景派と目されている。

だが彼の胸内にあるのは信義を重んじるという思いのみ。まあ、変わり者なのはたしかだ。その飄々とした風貌もあいまって上条上杉方でも扱いかねているように思える。

みはらしのよい場所で府中春日山城を睨んで立つ宇佐美定満。白髪のみじりはじめた髪をかいて考えあぐねている。

「何が城内でおこっているのだ。あの暗愚な晴景にあればど城の士気をあげることなど出来まい……このままでは我が方は負ける」

もともとわしは、空き巣狙いのような戦には反対だった。

強引な陣運びをしたのは、守護の甥・上条定憲その人である。参

戦する者達も利にさとい寄せ集めの国人衆だ。負けるとなれば我さきに逃げるにちがいなし。

対する城方は、譜代のものを中心に団結した故為景が誇る精鋭軍団なのだ。その城方の気持ちが一つになった今、万に一つの勝ち目もないだろう。

わしの杞憂であればよいが。ああ……厄介なことになりそう  
だ。

## 第2章・慟哭「完」

### 第3章・盟主

吉

広間には、髪を切った虎御前があらわれ、さらに士気が上がる。主役の座を奪われた晴景は、喘息の発作にみまわれ葬列の出発まで退出することになった。

あきらかに虎御前に戦の主導権を奪われたのが、ショックだったのだろう。虎千代はまだ元服もしていない年齢のため、葬列には参加するが戦闘にまで参加しないことになった。

父上、これで良かったのでしょうか？私はお爺さまの言葉通り葬儀のことだけを考えておこう。

「うふふ……退屈そうですね若様、改まってお話があるのですが？」

「へっ？改まって話して何かな」

戦の門外漢となった虎千代は、暇そうにしていたが、お扇に声をかけられ、誘われて人気の少ない庭先に出た。

「頭領、虎千代君をお連れ致しました」

「えっ……頭領？」

雪が樹氷のように凍りついた木立の影から、好好爺の顔をした男が表れる。いわねなければ、軒猿の頭領とは思えない垂れた目元の優しい風貌をして、かえって商人とでも言われたほうが納得できそ

うな男だった。

「若様、わざわざ呼び立ててすまんかったの。わしは源流げんりゅうともうす軒猿の頭領ですじゃ」

「ほう……軒猿の頭領・源流殿ですか、お初におめにかかる為景が末子虎千代にございます。いまだ元服前の若輩の身に、頭領みずからのご用件とは何でありましょう」

私は、初めて会う軒猿の頭領に内心の動揺を悟られないよう、ゆっくりと落ち着いたふりで挨拶をした。なぜ軒猿の頭領ともあるう者が、私なんかに話しをしたがるのか見当もつかなかった。

「のう若様、軒猿の盟主になつてみませんか？」

源流は気軽な口調で本題をズバリ問いかける。私は思ってもない要請にうろたえ、いったい何をどう返して良いものか、判断がつきかね腕を組んで考え込んだ。

「堅苦しく考えんでもええですじゃ、若様とてこ度の戦に勝ちたかろう。ならば迷わずお引き受けあるのが肝要ですじゃ……！」

「たしかに勝ちたいと思うのは、春日山に居るものすべての願い……盟主などと、まだ年若い私などが勤めるのはどうかと思いますが？」

新たな出会いに困惑する虎千代、そして運命が回りはじめた。

式・虎千代 side

だいたい子供の私に盟主などと持ちかける、軒猿の頭領の意図する所が理解できない。困惑をつのらせる私に、源流が悪戯っ子のように目尻のしわを寄せ笑った。

「ほう……さすが為景殿の秘蔵っ子、なかなか思慮ぶかき子じゃ！晴景殿ならば、小躍りして即答されるであろう」

「……それは」

兄上ならば喜びそうなことだと、簡単に予測がついた。それにもまして軒猿忍軍が、自ら盟主を選ぶという事実には驚いた。

「そのような粗忽者に、軒猿の盟主など誰がすると思いますか？それゆえ若様と盟約を結ぼうと思いましたが。これから晴景殿を支える為に我らの力が必要になる……悪い話ではありませんまい」

嵌められてる気はするが、長尾家を見捨てられても困ることになる。

「たしかに、私は降参するしかありませんね。長尾家を質にとるなど、源流殿はたいした方です」

なるようになれと、はんば自棄っぱちで引き受けると、したりと源流は人の悪い笑みをうかべた。そして、ひらき直った私は、源流と戦術を検討することになった。

栖吉のお爺さまや上杉の御館様、それにこの源流殿といい元気の良い爺さんには負ける。私にとってジジイは鬼門らしい。

為景直伝の軍学をいかして、絵図をみながら検討する。この頃の

私には戦をする実感は殆んどなく、高揚してくる頭のなかには、はつきりと相手をとらえ何通りもの戦術が浮かびあがった。

「ならば敵後方の山側に弓を配し、味方に躍り掛かる敵に弓をいかけるというのはどうでしょう？ただし敵方の退路は開けたいと思います」

絵図を睨み、しばらく考えていた源流が私を試すように聞いてくる。

「なぜ敵方の退路を開けようと思われたのじゃ」

「葬儀ゆえ長い戦はさけたいもの、逃げる敵には逃げ道を用意するほうが得策と考えました」

私は、たわいない悪戯を企む子供のように、源流の目を覗き込む、源流は垂れた目を細め、満足そうにポンと膝を打った。

「それは良い、ならば敵方に間者を紛れこませ、戦鬼が生き返ったと流言を流せば、きつと効率よく逃げ失せましょう」

流言など好きにはなれないが、犠牲を少なくするためには仕方がないのだろうか？

参

虎千代が源流のもとを立ち去るやいなや、段蔵が雪を被った植え込みの影から頭領のまえに出た。

「へえ……あの坊主ただのガキかと思ったら、怖いくらいに頭がキ

しる。さすがに頭領が選んだ通りのくわせもんだ」

段蔵は、ヒューと口笛を吹くと妙に感心した顔をした。それに応え源流は、口を歪めてニヤツと笑った。

「この越後は虎千代様でなくば落ち着かぬ、なにより軒猿の盟主にふさわしい方じゃ。直江殿に事の顛末を、こつそり教えてさしあげろ」

「おいおい頭領……そんなデタラメな事を言つと直江の旦那が腰を抜かす！越後国主はあの坊主にしろとでも言つ寸法かい？頭領も食えぬお人よ、可哀想に……あの坊主そこまで考えに無かつたとおもつぜ」

段蔵はブツブツ文句を言いながら、広間にいる直江実綱に繋ぎをつけに行く。広間の直江の耳にだけ聞こえるように、幻術をほどこして人目のない場所に誘いだす。

「直江の旦那！面白い事になつたぜ」

直江は、思わせ振りの段蔵を眉をさげていぶかしそうに見た。その胸中にあの偏屈な軒猿の頭領が、何かとんでもない事を言い出したのではないかと危ぶんだ。

「段蔵、はつきりとした物言いのお前にしては、思わせ振りな言い方だな。それに珍しく機嫌が良いのは、何かとんでもない事のような気がしてならん」

直江は疑り深い目をしてジツと段蔵をうかがった。段蔵は、喉元をふるわせ笑いを噛み殺す。

「ククツ……正解、かなり破天荒なこったぜ！聞いたら、ぶったまげるぞ直江の旦那」

すっかり片手をだす段蔵に、直江はしぶしぶ小金を握らせた。そして早く言えとばかりに顎をしゃくる。

「ええい……は、早くいわんか。まさかあの幼い虎千代様を盟主にした。なんて話してはあるまいな？」

「またまたせー解。軒猿は若様を国主に据えたいって寸法らしいぜ」

段蔵はふざけた態度で直江に指をさす、直江は酔を飲んだような顔付きをした。しかし内心ではすでに予測はついていた。先ほどの広間での一件からある意味覚悟すらしていた。

#### 四

「やはり源流殿は、目利きでいらっしやる」

「へえ、じゃあ何かい直江の旦那も坊主を認めているのか？」

段蔵は興味深く目をギョロリとして直江に問うた。故為景の腹心は、腕を組んで考え込んだように首を横に振り、覚悟した目をして語りだした。

「いやわしは、ついぞ虎千代君の才を認めては居らなんだ。しかし主為景も源流殿と同じに、あの方をかっておられた。そして死の間際にわしを呼んで、あれは天翔ける龍の雛じゃ、いずれは越後の王となる。とまあ予言めいた事を仰せになった」

「ほう、『龍の雛』だってアノ為景もよく言ったもんだ。面白くなつてきやがったじゃねえか、でどうするつもりだい直江の旦那」

直江は、眉をしかめて調子のいい段蔵を睨み、深いため息をひとつ吐いた。

「だがな段蔵、虎千代君は幼すぎる。まして政治の表舞台になどは出せぬが道理じゃ」

「……まあな」

いくら亡き主が夢をみたとしても、現実的には無理がある。幼い君主はまあ良いとして、長尾一門衆の内部分裂を引き起こしかねない危険がある。長尾家の力が弱まることには、賛成できかねる直江であった。

「だがなあ旦那、答えは早く決めたほうが良い。ありやあゲス野郎の晴景がほつとかないぜ！！可哀想にあの坊主殺られるな……」

「……ああ、あり得る」

あの晴景は執念深い、それになにより権力に固執するタイプだ。目障りと思えば汚い手にでないとも限らず、直江の葛藤は深くなる。しかしあの広間にいる武将達が、虎千代の覇気に魅せられた事は間違いないと直江にも理解できた。

「旦那、あの坊主は頭が恐ろしく切れる。おそらく並みのガキじゃねえ。あれだつたらほっておいても、自力で越後を切り取ってしまつかもな。なんせ栖吉という背景もあるし、おそらく頭領もほつと

かないだろう。晴景を認めていない武将も荷担するだろうしな」

「お、おい段蔵！物騒な事を言うてくれるな！しかたがない、虎千代様のお命は必ず守ってくれよ。かの者が長じて後は、この直江に考えがあると頭領に伝えてくれ！」

越後の安定化を望む直江にとって笑い事ではすまなかった。当の本人は預かり知らぬ所で、すでに運命の歯車が回りだしていた。

### 第3章・盟主

## 第4章・臥籠

吉・直江side

ああは言いはしたものの、わしはどうしても納得がいかなかった。段蔵を見送ると再び広間に戻り、栖吉の御大に声をかけた。それは戦の手配りもあつたが、栖吉の考えも知りたかつたからだつた。

「栖吉の御大お待たせしましたな、ところで手配りは如何様になり申したか？」

「ああ直江殿、そなたは後詰めをたのんだ！！先発は柿崎殿が名乗りを挙げよつたから、ワシヤ本陣に詰めようかと思つての！すでに勝つたも同然じゃ」

土気の上がつた広間を見回して、御大は満足そうに頷いた。わしは慎重に言葉をえらび真意をさぐつた。

「つかぬことをお聞きしますが、御大はお孫様をどの様に考えておいでですか？」

わしの不躰ともとれる発言に、気軽に応えちヨイチヨイと片手をふつて手元によび小声で耳打ちをした。

「実はのう直江殿、皆には言つなよ虎千代は戦ギライでな、戦になつたら連れて逃げると傳役に言つておつたそうじゃ！あいつめ心配をかけよつてジジイ不幸な奴じゃわい」

あれが、戦ギライだと……何の冗談だ。分けがわからん、わ

しは虎視眈々と次代の主を狙っているものと思っていた。

そんな弱腰にはとうてい見えない、いやかえって覇気のあるたのもしい少年に見えた。だからこそ城中の者も勝機がみえて、協力しようとい丸となったのだ。

ならば、いつたい若様は何を考えているのだ？

栖吉の御大との話しもそこに、戦の下準備のために倉へと向かっていった。直江の持論は『戦は下準備で決まる』であった。単に猪武者では戦に勝ち目などない、色々な可能性を追求して端々に目を向け丹念に戦の備を立ち上げる。

そうして直江は、米や炭薪の残りを確認しようと倉に入ると、戦に沸き立ち人気のない倉には件の虎千代がいた。

「わ、若様！！供もつれずこんな所で何をなされています」

「あわわっ、直江さん？新兵衛が戦支度に忙しくしてたのでつい…すいません勝手に倉へ入らせて貰いました」

若様は頭を掻きながら決まりわるそうに上目遣いでわしを見上げた。あの広間での覇気はどこへ行ったのか？と目を疑った。ましてやさん付けでわしを呼び気安い雰囲気に拍子抜けしてしまった。

弐・直江side

「いやいや、若様は主家の方、直江とお呼びください」

「はあ、直江って……やはり無理ですよ私には呼べません。さん付

「けで我慢して貰えませんか？」

若様があんまり下手に出られるので、わしもどうすれば良いかあぐねていた。だいたいさん付けうんぬんの話しをしたい訳でもなく、あるうことかつい吹き出してしまった。

「ぶつ……まあ人目がないところなら直江さんでも、何でも結構です。しかしなぜここへ来られたのか教えて頂けませんか？」

「ああ、それは簡単なことです。葬列と共に撃つて出て、もし敗戦したときに物質が保つか調べにきました」

それは子供とは思えない危惧だと驚いた。それ以上に穢れを知らぬ澄みきつた目が印象的で、偉ぶらない態度が何より気に入った。

「なかなかの慧眼でございますな。草葉の陰から亡き為景公も喜んでおられますよ」

「慧眼だなんてとんでもありません。私は越後の民と家族、家臣、春日山に住まいする者を守ると父に約束しました。だから信頼にかけて己にできる最善を尽くすのです」

言いきつた若様の決然とした態度が、わしの凝り固まった心を打ち砕いた。この者を我が主と頂けるなら、苦勞のしがいがあると図らずも頬を弛めてしまった己を笑う。わしが、夢をみるようになったら終わりだろう、価値観さえ塗り替える若様の影響力に憧憬をおぼえた。

「信頼に応えますか……いやはや若様は、わしの予想の遙か上をい

きなさる」

「……はあ」

意味の分からない顔つきをする若様の肩をバンバン叩いて、こちらにはわしに任せておきなされと倉から追い出した。

「では、直江さん。後はよろしくお願いします」

そう言っただけで敬意から軽く頭を下げていった若様に、笑いが込み上げてきた。なんと無欲な子だろう……あれならば必ずやよき主となるだろう。

険しい道だが、越後には天翔ける龍の雛がいる。いまはまだ地に臥龍として眠っているが、いつか必ず越後の龍となつて、天高く飛翔し雲さえも掴んでしまわれるだろう。こ度の戦、越後の未来のために勝たずばなるまい。

参

さてところ変わりました。上条上杉軍の方は、この時期とくゆうな突風が山側から吹き下ろす高台に、いまだ宇佐美が立ち尽くしておりました。

うんと唸ると、宇佐美は凍りついたカンジキをトンと払い、考えをまとめながら、自陣へもどる道をたどって行きました。

不可解としか言いようがない。あの猛将『栖吉のお虎』が、晴景をおしのけ陣営を仕切ったか？

宇佐美は曇天の空のように鬱々とした気持ちをはきづりあるく。やがて自陣近くにつくと、間者を束ねる物見頭が駆けてきた。

「だ、旦那さま大変じゃ」

いまだ地元なまりがある小男の物見頭が、泡をとばして話し出す。宇佐美は、とつじょ閃いた悪い予感に戦慄をおぼえ、物見頭を陣幕のうちに引き入れた。

「なにがあつた？」

宇佐美はいつになく緊迫した様子で問いかけ、物見頭の肩をつかんで揺さぶっている。そんないつもと違う宇佐美に不安を感じとつたのか、物見頭もあわてて話し出した。

「今になって城中へ放つた間者が、誰一人帰ってきとりませんのじや」

「一人もか……やられた軒猿の奴らか、退き陣になるやもしれん。そちは数名をひきつれ退路の索敵をたのむ！間者として、ただで育て上げた訳でなし、何とということをするんじや」

額のを拭いながら見る物見頭に下がって良いと手で示した宇佐美は、憤慨する心のまま絵図をおいた机を殴り、ひとつ深呼吸をして心を落ち着かせると、普段通りの足り取りで本陣へと向かった。

さても厄介なことに！軒猿が本腰をいれたということは、杞憂が現実になった証。お虎が仕切ったとて晴景と亀裂を生むだけだと思つておつた。

誰だ？

誰が、為景の軍勢を再びまとめあげた！！天道は、あちらに軍杯をあげ、地の理、人の理はすでに城方に有利に動いた。もはや勝ち目は薄い。

奇策を弄せば……あるいは。このような寄せ集めではそれも無理な話し。

「功にあせる上条殿に、なんと言おう？おそらく、うるさい奴と遠ざけられような」

宇佐美は困りはて手を後ろで交差し天空をにらんだ。その彼の胸中をかけるものは何か？余人には将たる器を渴望する宇佐美の口惜しさなどついぞ解るはずもない。

ああ、一を言えば十を知る将の将たる器に巡り会いたいものじゃ。

#### 四

宇佐美は、さっそく注進のため本陣へと向かった。しかし功に焦り、晴景をばかにしている上条は、宇佐美の忠告に素直に従おうとはしなかった。

「いや私も、僭越ながら宇佐美殿のご意見、おとりあげ願わしゅう存じます、こたびは退き陣のしやすき陣形が、宜しかろうと思いましたが皆様いかがでしょう」

「な、中条。そなた臆したか？晴景ヅレに何ほどの事が出来よう！

「！」

「まあまあ、長尾の晴景ごときに臆したわけではございません。関東菅領・上杉様の肝いりで参戦された宇佐美殿を、あたり無下にはできませんまい。ここは総大将として、上杉様の顔を立ておかれるが肝心かんじんでござりましょう」

老練の揚北にあつて年若い中条藤資ふじすけが、利を諭して柔らかく上条をたしなめる。この男、いっけん女が好みそうな役者顔の優男に見えるが、猛者ぞろいの揚北衆にあつて、異彩を放つ策士の一面を持ち、武勇に於いても猛者にひけはとらないと最近評判の目端のきく男である。

「むづ……ならば致し方ない宇佐美殿の申す陣立てをとろう、こたびは関東菅領の顔をたてる！！」

「正気か上条殿。この兵法者くずれが余計なことを言いおつて！！わしの申す挟み撃ちの策が上策じゃ」

揚北衆の猛者・本床繁長ほんじょうしげながが、鬼瓦のような顔を赤く染めてドンと床棋をけ倒して立ち上がる。続いて揚北の色部いろべも立ち上がる。

「さよう、あの戦鬼が亡くなった今こそ我らの好機でござる。腰の引けた賢しい策など必要ごござらん！！」

気炎を吐く猛者たちに中条が、怯むことなくおつとりと仲立ちをした。

「流石は武勇でならずご両所、この中条感服つかまつた。ご両所ならば、どの様な陣立てであろうとも、武勇これなしと長尾の晴景も、

きつと尻尾をまいて逃げましょぞ！！いや結構な事でござります  
なあ総大将殿」

「まこと中条殿の申すことは的を得ておる。小賢しい陣立てじゃが、  
お頼みもつしたぞ本庄どのに色部どの！！」

と言うわけで、上条も中条のしり馬に乗り二人を持ち上げ、その  
場はなんとか納まった。上条もいらぬ気をつかわす宇佐美に、冷た  
い視線を浴びせる。

「気がすんだか兵法者きどりの宇佐美殿……そなたのお陰でわしも  
散々じゃ！！」

あしざまに罵りを受けた宇佐美は、冷静にその場を辞した。しか  
し内心の落胆は予想してあまりある。

## 五

さて戦支度に騒々しい通夜の晩も一夜あけ、ここ府中春日山城で  
は、山降ろしの風がゴーゴーと旗指物をなびかせる。そして黄泉路  
からまかりこした戦鬼と詠われし為景公の軍勢が、今か今かと打ち  
そろつ。

まさか、このように意気揚々と林泉寺へ葬列がだせるとはお  
もわなんだ。主為景公もご覧あれ、あの軍勢の頼もしきことよ。

軍勢でござつた返す千貫門を見下ろして直江は満足そうにうなずい  
た。そこへ晴景が出ばって一騒動が起こり、直江は静かに事の推移  
を見守った。

「わしは馬に乗る、天朝さまより許されし毛氈鞍覆、賊徒どもに見せつけるのじゃ」

晴景は、天皇家の威信を借り、位の違いをみせつけようとの魂胆だったが、この大雪で馬が乗れるわけもなく虎御前……いや仏道に入った青岩院せいがんいんに、一蹴されて渋々あきらめ白傘袋を小姓に持たせた。

「戯けが、我が殿ですら大雪の時には馬には乗らぬ。カンジキ姿に徒で出陣しておったわ」

尼僧すがたで裾をひるがえす青岩院に、かつての女武者をみたように、誰もが頼もしく注目した。そして彼女は軽く腕をふって、先陣をきる柿崎に出陣の合図を送った。

「よし先陣承った！柿崎隊これより進発！！出陣じゃあ　！！」

オオオオオ

ときの声があがり、春日山城をふるわせた。まさに亡き為景公の軍勢よとみなその勇姿を称えた。先陣を見守る虎千代は、固い決意にあふれグツと拳を握りしめておりました。

「昨日の広間での一件、若にしては珍しく上出来だ」

「傳役の鼻は高くなりすぎてだよね、若さん」

怖い者知らずか傳役の話をまぜっかえす長実に、虎千代はクスツと笑みを溢す。戦場のけはいに少し緊張していたのか肩の力がぬけた虎千代と近習たち。

「長実、金津殿に失礼だぞ!!」

兄の安実や傳役の金津に本気で殴られ、長実は頭をかかえた。

「もう許してやれ!! 新兵衛こちらに。私は戦をしらぬ若輩者ゆえよしなに頼む」

「承知!! 金津新兵衛この無双の槍にて、若をお守り致たす!!」

続いて安実が長実が、景資が口々に、我が剣にかけてと唱和する。虎千代は胸に宿る、青白い焰が静かに燃え猛るのを感じた。

そつだ絶望と恐怖をあたえる青白い焰に飲み込まれ私は『戦  
さ人』になる!!

第4章・臥龍「完」

## 第5章・葬送

吉

春日山城には山本寺さんほんじらを留守居役に兵力1000をのこし、長尾晴景をよつする2000の兵は、春日山城から東北東約2キロ先にある、長尾家代々の菩提寺・林泉寺の墓所へと向かう葬列を守るために出陣した。

待ち受ける上条上杉連合軍は、上条を総大将に本庄・色部・中条など揚北衆あがきたしゅう、宇佐美など旧守護家臣団合わせて約3000。

当日は、前日から降りつづいた雪がやみ、すこし晴れ間が覗く風の強い日でした。越後独特の積雪は重く、城方の行軍はゆっくりとしたペースで進んでいた。

陣を張って待ち受ける上条上杉勢に、物見に出した者共が、息を切らせて帰ってきた。

「ご注進!!!ご注進!!!春日山より葬列ただいま進発!!!」

上条はすぐさま主だつ将をあつめ、物見より報告を受けていた。

「晴景は城に兵力を残し、先発は柿崎隊700、本隊は為景の棺を守る栖吉一門衆800、最後は直江隊500およそ総勢2000で行軍してきます!!!」

晴景の陣容を知り、精銳栖吉が先陣を切らずに本隊の守りに回つたと知り、柿崎ら国人衆は利にさとく、人望のない晴景を見放した

と勘違いして受け取った。そして狙うは本隊と意気投合する。

「上条殿ここは軍勢を分け、敵が陣場を作るまえに晴景を襲ってやろう！先駆けとしてわしと色部殿で撃って出る」

「その通り、先駆けの我らだけでも晴景の首をとれる！！皆は高見の見物でもしとるんじゃない」

「御両所で勝手にやって下さい。私は私で城のおさえにでも動きま  
す」

勝手に盛り上がる本庄と色部に、中条が憤慨をあらわにする。先駆けは本庄と色部の1500が受け持ち、陣をはる前の晴景本隊を狙い強襲、中条の800は城の抑えに向かう手筈になった。寄せ集めらしく上条軍の心はバラバラとなり、訝る宇佐美が止めに入る。

「陣を分けるのは早計すぎる。ここは油断せず全軍で一斉にかかる  
ほうが良いでしょう」

「またか宇佐美殿、お手前は退路の準備に励むがいい！本庄殿色部  
殿たのんだ」

ふたたびの宇佐美の助言に、上条は冷やややか態度をみせる。すでに楽勝ムードが出来上がり、負けるとは誰もおもわなかった。中条は先駆けを見送ると、勝ったら城へ先のりが出来そうだと城の抑えに、自軍800を動かす準備を始めた。

式・虎千代 side

本隊が出発する。葬列の親族であっても手に弓や槍、そして盾を

引つ提げて、屈強な栖吉衆に守られ肅々と積雪の道を進んだ。

途中で盟主となった軒猿から敵勢力の布陣が報告される。敵兵力およそ3000、うち半数が本陣をのこし別に行動すると聞いた。

内部分裂したか？思い通りだ。

上条本陣が布陣する場所から別れ、先駆けは晴景の想定する陣場より手前の、行軍中をねらい雪のなかに伏す。我らの結束を侮り、陣場に向かう柿崎ら先発隊をみのがし、晴景本隊の行軍中に狙うのだ。

本隊をえさに、侮る彼らに鉄槌を下す。

敵が背にする山の中には、密かに軒猿の弓隊を隠してある。敵先駆けが隠れている後ろ手に移動させることにした。柿崎隊や直江隊にも連絡を送る。

決意を新たにした私は、ふと目についた兄上とその近習衆の緊張感のなさに眉をしかめる。そして荒川兄弟に注意して見ておくよう頼んだ。

私は、少し後ろを歩く栖吉の爺さまの隣にならび、ガツチリとした体格の爺さまを物問いたげにみあげた。

「どうした虎千代、戦が怖くなったのか？」

「いえ、子供の私だとて、怖いからと言って、戦から逃れられるとは思えませんよお爺さま」

戦に向かう鬪牙をもつ快活な声に答えて、私はニツと歯をみせ笑う。爺さまの目の色が変わる瞬間を狙って軒猿の報告をする。

「実は軒猿衆から敵陣の詳細が届きました。敵兵力3000、うち先駆け1500が敵本陣からはなれ、陣場に向かう道の山を背に伏せております。おそらくは、本隊を狙ってきましょう」

「虎千代?……そうか軒猿に選ばれたか?すまんの小さいのに戦などに負担させて……」

少しの会話で私の身の上を察した爺さまは、陰りをみせる。私は爺さまから顔をそむけ、葬列の前方に視線を向け落ち着いて話し出した。

「軒猿の弓隊を、敵の後ろに忍ばせるよう手配しました。出来るだけ相手を弓で引きつけてから懸かって下さいますか?」

「……いや。伺わずともよい好機となれば軍配をもつわしに合図をだすんじゃ。忘れるなよ虎千代いつでもわしは、お前の味方じゃからな」

見合せた爺さまの目は優しくそして戦に臨む者の厳しさがあった。

参・虎千代 side

敵の先駆けが潜むあたりに差し掛かると、兄を侮る伏兵が兄を狙って一本の矢を放つ。

「……兄上、伏せてください!」

警戒する私は、雪にひそむ敵兵の甲冑の反射にすぐ気づき、兄の近習衆をかきわけて兄を押し倒す。すぐさま私の声に反応して荒川兄弟が、私たちの前に盾を展開する。

「あわわ……なにをする無礼な！！」

兄をかばい一緒に伏せた私の目のまえに、矢を受けた兄の近習がゆっくりとした軌道で倒れかかり、私は鮮血をあびて一瞬であたりに血の赤がひろがった。それに動揺した兄は私の下でわめきちらす。

私は兄上の言葉を冷えた目線で無視し、兄をかばったまま立ち上がることなく青い顔で棒立ちしている兄の近習をしかりつける。

「なにをしてる！！さつさと盾を展開して兄上を守まれ！」

かたや異変に気がついた栖吉の爺さまの一喝がとぶ！！

「ぼやつとするな、真ん丸になれ！！持ちこたえるのじゃ！！」

さすがに歴戦の猛者たちは、栖吉の爺さまの一喝で円陣を組み盾をすみやかに展開。第二波にそなえ盾の後ろに弓を手にしたものが配置につく。

血を浴びた私を気づかい景資が駆けよろうとしたが、軽く手を振ってそれをさえぎると、許さんと私は血飛沫を拭いもせず立ち上がった。

青白い焰を燃え上がらせ相手を睨み付ける。そして憤怒の感情のまま弓を構え、兄に弓をいかけた不埒者に照準をさだめた。

かような無礼なふるまいを後悔させてやる。

ギリギリといっぱいまで引き絞った弓矢は、怒りの青白い焰をまとわせ、まるでスローモーションみたいな軌道を描いて、不埒者の額に狙ったようにまっすぐ突き刺さった！！

ワアアアア

すぐさま自軍から大きく歓声があがる。敵に動揺がはしり、怒りに染まる顔をした奴らが、応戦の弓を一斉に放つ。次々と自陣の盾に突き刺さる音に笑みを深くする。

怒れ怒ってこちらまで突っ込んでまいれ。それこそこちらの思いつボよ！

「若、お見事」

禍々しい笑みを張りつけ突っ立ったままの私に、新兵衛が駆け寄り抱き抱えて、盾のうちに匿った。

四・虎千代 side

新兵衛に庇われ私は冷静さをとりもどす。改めて怒りのあまりとった己の行動を振り返り、戦慄を覚えガクガクと震えだす。新兵衛は目元をゆるませフツと笑うと、ポンと私の頭に手をのせて言う。

「よくやった！！だが、まだ戦は終わっちゃいない。だから若は若の仕事しろ、いまに俺がイツラシメてやるから期待しとけ、コラ」

しかり、まだ戦は始まったばかり策はまだ為ってない。へっ己の仕事って……変だ。新兵衛には軒猿の盟主になったと言った覚えがない、ハツと気がつき顔をあげて新兵衛を見上げる。

「えっ、知ってたの新兵衛？」

問いたただす私に、さあと肩をすくめ立ち去る新兵衛、よし私だつて負けてられないよと、震える足を叱咤して用心深くたちあがり戦況を見定める。

作戦通り柿崎隊がとって返し、直江隊が本隊に合流するべく移動をはじめた。

本隊は円陣の前面に盾をつらねた弓衆が、油断なく山側に目をくばり弓で応戦する。怒れる敵の矢は、あいかわらず絶え間なく飛来し。私も近習衆と共に弓を片手に果敢に応戦、目は油断なく敵の襲撃にそなえた。

「……だれが戦を始めよと言った。まだ陣場についていないのだぞ！！早く陣場に移動するのだ！！」

後ろで兄上が、泡を飛ばしながら意味不明なことを口走しる。すでに戦はしかけられたのに許しも何もあつたものか。静かに成り行きを見守っていた母が兄を一喝する。

「だまらぬか！！そなたは一軍の大將ぞ。すでに戦は始まっているのじゃ」

その通りだと誰しも兄を笑った。こりない兄は、声を震えさせ母に噛みつく。

「青岩院こそだまれ、わしは国主だぞ命令をきかぬか!！」

母は嘲笑し晴景の言葉をさえぎるように嘆き。自軍の中にもシラケた空気が蔓延する。

「はああ……情けない。それでも戦鬼の子か!! 移動すれば蹂躞されよう、それをなぜ解らぬ」

兄は母のことばに沈黙したようにみえ、兄に愛想をつかした私は敵の最前線に目をやり眩きを漏らす。

「そろそろ敵も焦れてきたな」

予想通り本隊の固い守りに焦れてきた敵は、雪中をもものもせず槍をもち矢よけの盾をズラリと全面にだす。欲につかれ勝気にはやり、突撃陣形で気炎をはき自陣にせまって来た。

第5章・葬送「完」

## 第6章・波紋

吉

「揚北！！押し出せ　　！！晴景を討ち取れ！！褒美は思うままじや！！！」

「オオオ！！！」

上条上杉勢は槍の穂先をズラリとそろえ、怒りにまかせ雪をけつて突進してきた。間近にせまる彼らの大地を揺らす怒号をうけて、味方の金津たち槍衆が今か今かと打って出ようとする。しかし栖吉の爺さまの怒声がとぶ。

「金津　まだじゃ、まだ出るでないぞ！！引き付けて一人もあまさず討ち取るんじゃ！！！」

「承知！！！」

爺さまの怒声にすぐさま応え、鬪牙をはらんだ金津の声が飛ぶ。その目は、決意を秘め泰然として、まるで狩りで獲物を選ぶように敵を見る。

その頃、迫りくる敵に虎千代も雑兵にまじり、弓をかまえ次々矢を放っていた。怒号をあげて近づく敵めがけ、とくに鎧の隙間を狙って射つ。その目は、戦況の機を伺うように用心深く煌めいていた。

「やった　若さん！俺達も負けちゃられないぜ」

「俺だつて やる!!」

子供ながらに近習たちも恐れを知らず、負けじと矢をはなつ。上条上杉勢が雪をけたて本隊に突入しようとする寸前、みなが思いもしない方角から敵が次々と矢をうけ、足並みが乱れ隊列が崩壊し綻びが見えた。

「……な、何が起こつたあ ……!!」

「う、後ろです!!山から矢が ……」

「ひきような!!取り乱すな揚北 ……!!立て直せ ……」

崩れる上条上杉勢をみていた虎千代は、栖吉の爺さまと目を見合せてうなずいた。それを受けて栖吉の爺さまは、すぐさま声を張り上げ、軍杯がグウンと水平に空を切り裂く。

「そりや槍衆出番じゃ、金津 …… 追い討ちをかけよ!!」

「おう!!いくぞ栖吉 ……!!押し出せ!!」

ウオオオ

待ちかねた合図にニイと擽猛そうに犬歯を見せる金津は、槍をもつた手をオーと高々にあげ怒声を放つ。槍をもつ栖吉の軍勢が放たれた猟犬のように、雪をけたて群れをなし敵にくらいついていく。

「うあ ……」

「蹴散らせ!!栖吉」

押し出してくる栖吉の軍勢と、うしろから風にのり容赦なく飛来する矢に、敵兵は雪にまみれ転がって四方に散り散りになり、立て直そうとする敵の指揮系統は乱れに乱れた。

「……逃げるな、立て直せ！！揚北の意地をみせるんじや」

「させるか！！いけえ」

弐

「柿崎隊行くぞ、遅れをとってはならん！！押し出せ！！」

才才才才

新たに、懸命に雪をけって駆け付けてきた柿崎は、隊を整列させるやいなや、栖吉に負けてならじと、果敢に突撃を開始させる。その頃少し遅れて直江隊も到着する。

「うぬう……なぜじゃ、なぜ柿崎まで！！」

「本庄殿　お早く、お早くお引きくだされ」

山手から降る矢嵐と栖吉の突撃に、すでに上条上杉勢は瓦解し、本庄が柿崎の登場にうろたえる。数で上回り勝つと決めてた対陣に、引かねばならぬ悔しさに唇をかむ。

「色部殿、この場は引き上げじや　　！！本陣で立て直す！！」

「おう……、伝令引き上げじや」

躊躇いのあと敵は引き上げの合図をだすが、時すでに遅く多くの兵を討ち取られ、将みずから命からがら逃げ出した。

「ぐわあ……」

「大将首が逃げたぞ　　！！」

敵の引き上げを知った虎千代は、すぐ爺さまに駆け寄り、追い討ちを促した。

「お爺さま、すぐさま上条上杉勢を追って下さい！！おそらく本陣にも軒猿の攪乱が入ってるはずです！！」

「合い分かった、我らは追い討ちをかけつつ上条本陣をうつ！！直江殿葬列を頼む！！」

「承ります。御大ご武運を！！」

栖吉の爺さまは直江に葬列の守りを頼み、新手を加え上条上杉勢の本陣にむけ進撃を開始。虎千代は爺さまの出撃を見送ると、グラリと傾き崩れるように、膝から雪の中に倒れていった。

「……若さん？おい」

「若君！！シツカリして下さい。誰か　　若君が倒れた」

虎千代が倒れた事に長実が気が付き、異常を察した景資が助けを呼ぶ。駆けつける直江、慌てて青岩院を呼ぶ声、入り乱れる人達でその場は騒然となる。

「静まれ　　！！皆の衆、虎千代は大丈夫じゃ。きつと緊張がほぐれ倒れたのじゃろ」

混乱をいち早く鎮めたのは、青岩院の鋭い一喝であった。青岩院は、静かになった皆々を一度見渡すと、僧衣のすそをひるがえし虎千代の元へと歩みを進める。そんな時、今まで何処へ隠れていたのか晴景が現れた。

「な、なんじゃ。戦はどうなった！！ええい……誰かおらぬか、そうじゃ直江は来ておるのか？」

参

かたや上条上杉勢の本陣では、矢を受けて傷だらけの伝令が駆け込み、先駆けの本庄・色部隊が崩れた事を報告している。

「ご注意進！！ご注意進！！お味方総崩れ、先駆けは本陣へ退却、長尾勢が追い討ちをかけています。すぐさま救援を」

「総崩れだと！！馬鹿な、何が起こった！！」

予想の範疇をこえる事態に上条はうろたえ、庄棋を蹴倒す。本陣に詰めていた宇佐美が、すぐさま対応に立ち上がった。

「上条殿は、救援のご指示をお願いします！！わしは中条殿を引き留めてまいりますよう」

「……た、頼んだ。伝令！！本庄殿と色部殿の救援を伝えよ！！」

上条は悪夢を振り払うように頭を振ると、すぐさま伝令を走らせる。宇佐美は足取りもはやく本陣を出た。しばらく歩みを進めると、あの澄まし屋の中条が取り乱し蒼白な顔をして、本陣目指して駆けてくる。

「中条殿！！如何された？！」

「う、宇佐美殿！！丁度よいところへ……あの為景が生き返ったと叫ぶ者が現れて、私のところの雑兵が逃げ出しているのです」

中条に本陣への注進を頼むと、宇佐美はグツと眉間にシワを寄せ中条の陣へ向け走りだす。たどり着いた先は、思いがけない光景が広がり、武器を投げ捨て小荷駄を倒して、逃げる雑兵たちがいた。

「うわあ、逃げろ」

「どー した。ええい逃げるなどならん！！」

業を煮やした宇佐美が慌てて雑兵をとめに入る。しかし逃げる雑兵は、みな話しなど聞かずに必死でにげるだけ。

「戦鬼為景が生き返った！！先駆けは敗走じゃ！！今に戦鬼が来るぞ！！命の惜しい者は、はよ逃げ」

「……助けて ……！！」

大声で雑兵を煽る男をみつけた宇佐美が、怒りを募らせ歩みよる。男はニヤリと笑つと後ろにとびすさり手を振った。

「ふふん……残念だったな宇佐美の旦那。もう皆逃げてしまったあ

とだぜ」

「為景殿が生き返ったなどと謀りおって軒猿が……。おぬしは名は！！」

「ほう、良く解ったな！！確かに軒猿の加藤段蔵つて者だ！！旦那もさっさと逃げた方が無難だぜ。フン今頃前線はガタガタだろう」

宇佐美は地団駄をふみ、自軍の退却にそなえ戻っていった。すなわち上条上杉勢破れたり。あつけないほどの幕切れとなった。

#### 四

雪原を血にそめるほどの激戦は、上条上杉勢からさしたる抵抗もなくあつけないほど短時間で終わる。残兵は、小荷駄を引くまでもなく、武器を投げ捨て逃走したらしい。

上条上杉勢の大半は逃げだし、主だつ武将も又難を免れ命からがら逃げ去り、残された兵はみな物言わぬ骸と成り果てていた。合戦の勝敗は、わずか7歳の虎千代の策により明白に明暗を分ける。

葬列の陣中は、あつけない上条上杉勢の敗走に勝ち戦の歓声でわき返える。さて、本日の立役者・虎千代は、如何しておるのでしょうか。

おやおや未だ眠っているようですよ。その口元には安心しきったような、何事か成し遂げた安堵の微笑みを浮かべ、すやすやと寝息を立てています。

やがて葬列は動きだし、虎千代はいつもの仏頂面を緩めてニヤつ

く傳役に、大切そうに抱き抱えられ近習達が取り巻いて葬列と共に進みます。通りかかった武将達は、それぞれ眠っている虎千代の顔を覗き込み口々に声をかけ、勇姿を称えていきました。

「さすがは戦鬼為景公の子、戦のために生まれたような若様じゃ。長じればさぞ素晴らしき武将になれるだろうのう吉江殿」

「ははは……そうとも柿崎殿、若様がおられる限り越後は安泰じゃ！あの弓さばき、並みではないぞ！息子も良き主を持ったものよ」

みな注目目が虎千代に向けられ、数々の称賛が与えられると、晴景は爪をかみその光景を苛々と眺める。その表情は陰鬱として、腹には何か謀があるような素振りだった。

さきの戦以来、晴景の様子がおかしいと敏感に気配を察した直江は、墓所に行くまでの道中何くれとなく晴景を持ち上げ、甘い言葉をかけていた。

「あつけない勝ち戦でしたな、さすがの上条らも実城様のご威光に逃げ去ってしまいました」

「あたり前じゃ、わしは国主ぞ！わしの威光の前では、武勇ある揚北衆じゃとて形無しよ」

偉ぶる晴景に、葬列に加わる武将達が顔をしかめた。戦の間、国主として何の働きもせず縮こまって隠れていたくせに、勝ったとなると出て来て大威張りをする。誰の目にも嘲りがうかびあがり、晴景を嫌悪の表情で見っていたのです。



## 第7章・別離

吉

為景公の葬儀は、滞りなく執り行われ、林泉寺の墓所へ手厚く葬られた。稀代の奸雄・長尾為景は、善くも悪くも越後に新たな支配体制を築き、戦国大名として天下に名乗りをあげたのでした。

しかるに軍神・上杉謙信公が越後の龍として活躍する土台ができたのは、ひとえに為景公の強硬な地ならしがあつたゆえでしょう。

『漢の高祖劉邦は生涯に七十余回、我が父は百余回戦つた』 謙信公自ら誇らしく記されています。

巨星墮つ、越後統一の夢は次代に託された。

さて、次代の当主・長尾晴景とはいえば、なにやら揉め事を起こしてしまつたようです。葬儀と埋葬をすませた皆は、本堂に会して林泉寺の天室光育から饗応され、振る舞い酒に酔っていました。

「父の葬儀のあいだ、我が弟は寝てばかりな行儀しらず、行儀みならいに寺へでも入れてしまえ。こんな無礼者はこうしてやる!!」

「何をする、我が主を足蹴になさるとは許しませんぞ!!」

酔つた上とはいえ、虎千代を足蹴にする晴景の横暴なやりかたに、激怒した金津新兵衛は刃を抜いて抗議する。片膝をたて主を背に庇いながら、腰だめにした刃を抜き放つ。

「なっ！！わしは仮にも越後国主だぞ、刃を向けるとは不届きな！  
！謀反じゃ！！この者を斬って捨てよ、誰か……わしを助けよ！！」

晴景のやりようは、その場に居合わせた国人衆から反感をかつていたのです。金津の忠義心からくる怒りの刃を向けられて、後退りながら恥ずかしげもなくののしる晴景には、助ける者もなく更に冷たい視線がつき刺さる。

「そこまでじゃ！！金津新兵衛、妾に免じ刀をひけ！！君は君、臣は臣の道があり、そなたの戦場での働きをかんがみ謹慎とする。それで良いな新城殿！！」

いままで静かに座っていた青岩院が、立ち上がり鋭い一喝を飛ばす。晴景は予想もしない援軍に腰を抜かし、その迫力にまけコクコクと何度も頷いた。金津は鞘に刀を納めると青岩院に深く頭を垂れた。

「皆の衆、見苦しき所をお見せ致し詫びを言う。何よりこたびの戦への助勢、今は亡き我が殿に成り代わり礼を言います。さて、我が子虎千代のことじゃが、こたびの葬儀での無作法を新城殿はいたく立腹されておわす。なれば、ここは行儀見習いとして林泉寺の光育殿に預けようと思いますが、如何です」

式

国人衆の間には、不満を表らわにするものが大半を占め、口々に処分を撤回させようと虎千代を擁護する。青岩院は皆を見わたして、わずかに微笑をみせた。

「皆の衆のお気持ちありがたいことじゃ。されど虎千代を寺へ修行

にいかせよと、我が殿たつてのご遺言。どうか聞き分けてはくれま  
いか？いずれ越後の長尾に事ある時は、虎千代は立派な若武者とな  
つて帰つてこよう。それまでは、妾も春日山にあつて晴景殿を支え  
る。まだ未熟な主ではあるが晴景殿を良く支え、皆一丸となって長  
尾家をもり立てようぞ！！」

「喜んで！！」

「若様がお戻りになるのが楽しみじゃ」

その場に集まる者達は、心をひとつにすることを約すことになつ  
た。なによりあの『栖吉のお虎』が、晴景の後見として春日山に残  
ると言う事が、皆には頼もしく思えたのです。

「光育殿、急な申し出じゃが、虎千代を引き受けてはくれまいか？」

「はい承りましょう。この身は非才なれど精一杯勤めさせて頂きま  
する」

光育は、目尻を細くして微笑むと深く頭を下げた。きつとよき師  
匠となつて導いてくださろうと皆はよろこんだ。これ以降、虎千代  
は林泉寺で修行することになる。

「では、虎千代は光育にあずけ、傳役並びに近習衆はその任をとこ  
う、いずれ虎千代が元服したあかつきに、主と仰ぐならばそれもよ  
しとする。これで宜しいか新城殿！！」

青岩院の勢いに相変わらず壊れた人形のように、晴景はカクカク  
と縦に首をふる。まったく逆らえる雰囲気ではない事に、晴景も気  
が付いていたのでしよう。

「では、さつそく虎千代様を離れにお連れしましょう。よく戦われたでしょう血がついておりますな。若様の近習方、最後のご奉公に身体を清めて差し上げる手伝いをお願いできませんか？」

「はい、もちろんです」

「私もお手伝いをします」

「俺もやる」

最後のご奉公と言われて涙をにじませ、三人の近習達は光育について寺の離れへと向かったのです。

この後、疲れたのか晴景は河合親子と共に早々と城へ帰り、青岩院は柿崎ら国人衆と共に仮の陣場に戻り、首実験に立ち会うことになった。また栖吉の御大や金津は、今後の事を話し合うため直江と共に林泉寺にしばし居残ることになる。

参

林泉寺の来客用の広間では、栖吉の爺さまと直江実綱、天室光育、不機嫌なままの金津新兵衛が集まっていました。

「のう金津、その顔はいい加減よさないか？こちらまで重苦しいぞ」

「某は、もともとこんな面だ」

抜き身の刀と云われた男は、傳役の任を解かれた事に納得できな  
いでいた。何を言われようと虎千代の側を離れなくなかったのです。

「生涯、そばで守ると主と約した。なのに……情けない」

「ほほほ……若様も果報者ですな。金津殿のようなご立派な家臣から、忠義をつくされるとは」

天室光育が場の険悪な雰囲気をかえるために、穏やかに笑ってみせた。そしてやおら直江が話します。

「皆様にお集まり頂いたのは、ほかでもありません。今は亡き為景公の残したご遺言……といいますが、予言のような事を打ち明けるためにございます」

「ほう、あの婿殿がのう。直江殿あれは予言を残すほど、信心深くはなかったはず」

もつともだと頷く顔ぶれに、直江は頬を掻いた。主はどんな風に思われていたのかと、想像をふくらませ口をひきつらせた。これでは話が進まんと、苦しまぎれに咳払いし続きを話します。

「まあなんでも宜しいですが、先に進めます。為景公は、亡くなる寸前にわしを呼び、若様の事でこう仰せでした」

かの者は、天翔ける龍の雛じゃ、必ずや越後の王となるう。

「ほう、なかなかに予言みたいじゃな。婿殿にそんな気があったとは、とんと知らなかったわい」

「はあ、わしも初めて言われた時は驚きました。いつも虎千代にワシの後は継がさん、虎千代は栖吉の主とすると仰せで……」

みな、直江の言葉にさもあろうと頷くが、金津だけは眉間にしわを寄せて、苦い顔をして、吐き捨てるように言った。

「期待ばかりじゃあの方は、若は戦嫌いで隠居をのぞみ苦しんでいたのに、まだその上に王になれとは、少し虫がよすぎる」

金津の剣幕にみな感嘆のため息をつく、これほどに主を思いやる家臣は居ないと、建前うんぬんより、本音を晒す彼の心根のまつすぐさを尊いと感じている。光育が感じ入ったと頷いて、金津にすなおな質問をぶつける。

「この光育が金津殿にお伺い致したい。今のことは別にして、あなたの主は王に相応しい方ですか？」

「相応しすぎるくらい、若は生まれながらにして王だ！！あれこそまさしく将の将たる器」

#### 四

しかり、と言いながら軒猿の頭領があらわれた。それは、いつの間にか現れて一同に向かい礼をする。さすがに軒猿の頭領だけあって芸が細かい。

「戦の後始末をして、遅れて申し訳ないご重臣方。本日は無礼講の席と、直江の旦那が仰るので出てまいりました。軒猿の頭領を勤めます源流でござる」

「これは源流殿、初めてお目にかかる天室光育と申す。しかし、直江殿なぜ虎千代様のことで、軒猿の頭領をお呼びになられたのでし

ようか？拙にも訳を教えてはくれまいか」

一人訳の解らぬ者がいたと直江は改めて、虎千代が盟主になったと伝える。そして今後、寺において若様の警護を頼んだと伝えた。盟主それは、光育が息を飲んだほど凄い事なのだ。軒猿を制すは越後を制するのと同義語である。なにより亡き為景であつても、盟主になるのには苦勞した覚えがあつた。

「ほう、なにより心強いこと。なぜか若様は新城様から恨まれておいで、暗殺は危惧しておりました」

「一命にかえて、若様を守る事を請け合いもうそう。あの方はまさしく我らの盟主にあられる」

軒猿は独立性がつよく、独自の考えで動く組織であつた。その頭領の实体は秘匿され、里はどこにあるか謎とされている。元々は盗賊や国を追われた者が寄り添って出来たように聞く。里は鉄の掟をもち動員兵力は1000とも2000ともいわれる。

「わしの孫は、こう考えると周りのお人に恵まれている！これも王たる証かのう金津」

「若は、どこで知り合われるのか、思いがけないお人と縁がある。あの守護殿でさえ、若をたいそう可愛がっておられた」

「なんですと、上杉のお館様とご縁が……とんでもない方だ。この直江ますます若様を気に入りました」

一同は虎千代のうわさ話で盛り上がった。まるで孫を自慢する会のようになり、この場に集まった者は、熱い気持ちに一致団結。い

わゆる『越後の龍プロジェクト』が開始される運びとなった。なにも知らずに気持ちよくスヤスヤ寝ている虎千代には、迷惑極まりないしろものである。

五

こちらは盛り上がる広間とちがい、まるでお通夜のような林泉寺の離れです。虎千代の身体は清めおわったが、誰もが側を離れられずにいました。

「兄者、俺は若さんと別れるのは嫌だ」

「私だつて嫌です。なんとかありませんか安実殿」

なんとかと言われようが安実だつてまだ子供です。そんな大それた事なんかできるはずなかった。

「あんな、お前ら俺のこと何だと思ってる。なんとか若さんが目を覚ますまで、光育様に泣きつき置いてもらうしかない」

「いやだ、ずっと若さんという」

弟の長実は、とうとう泣き出す。景資も目にジンワリと涙を溜めていた。安実は、こっちのほうで泣きたいのと思いつながら、大泣きする長実の背を撫で途方に暮れる。

乳兄弟の荒川兄弟と虎千代は長い、若様が歩き始めてからの付き合いになる。いろんな事があつた不本意な遊びに付き合わされたり、内緒で水遊びや魚つり、悪さをしては母に棒で追いかけられた事さえあつた。

景資が来てからも、みんなでいつも一緒。いまさら別れるなんて実感さえ湧かない、若様を連れて逃げたい気持ちで一杯だった。若様がひどく淋しがりやだと皆が知って、誰か必ず側にいた。このまま離れたら若様はどうなると、心配で心を痛める三人だった。そんな時、傳役と光育が、大人の話し合いが終わり明るい顔で入ってくる。

「お前たちは通夜でもしてるのか？まだ若は死んでいないがな」

「ひどい！！あんまりだ。俺らは若さんと離れない」

安実が、思わず強い口調で金津に反抗するが、金津は咎めもせず、そつと安実の頭を撫でた。

「其も、同じだ。若と別れるのは悲しい、だがこれも試練と受け止めよ。男なら立派な侍となり、また若のもとに仕えるのだ」

それぞれの頭を力強い手でポンとなで金津は、近習たちを促し眠る虎千代に深い臣従の礼をとる。

「若、少しだけご辛抱してください、我らは必ず再び若に仕えらるお誓いいたす」

金津の目からはらりと一滴の涙がおち、虎千代の手をぬらす。鬼の目にも涙、彼らの心は固い決心で結ばれた。眠れる臥龍はいずれ、夢の彼方をさまよっているのでしょうか。

また、ここに新たな運命の歯車がまわる。虎千代にとって何より大切な者達が去っていった。この運命を彼は受け止められるの

でしょうか？

第7章・別離「完」

## 第7章・別離（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございました。これで第3部・葬儀編は終わりになります。

次回からは第4部・林泉寺編に突入致します。虎千代にとって大切な者が去り、春日山城に帰ることができない虎千代の嘆きは深い。待ち受ける新たな運命は過酷なものでした。

というわけで、新たな物語が始まります。虎千代の周りの人々は軒猿以外は新しいキャラになります。今後とも応援よろしく願います。

この物語はおよそ第100部分まで続く予定です。やっと第20部分まで書くことができました。これも読者の皆様のお陰です。ありがとうございました。m ( \_ \_ ) m

さて、物語の区切りの良い所で読者の皆様にお知らせがあります。残念ながら下書きが尽きました……なのでしばらく見直しと書き貯めに回ろうと思います。再会は1〜2週間後、下書きが出来次第となります。

未熟な有坂ですが、今後ともよろしくお願い致します。ご意見ご感想あるいはアドバイスなどありましたらご遠慮なく教えて下さると泣いて喜びます。

追記

ASAHI様、よいさん様、評価感想ありがとうございました。  
凄く嬉しかったです、なので今後とも長くお付き合い下さると嬉しいです。

自サイトのリンクをパソコンページにも、目次のところに張っておきました。ご連絡頂いたmilk様ありがとうございました。

アドバイス頂いたツェット様、鶴様、ありがとうございました。

2009/4/15記

2009/4/24追記

## 第4部・林泉寺編 第1章・迷走（前書き）

### 第4部・林泉寺編

#### 第1章・迷走

第1章は回想部分が入るので独白形式の一人称になります。第2章からは、もとに戻します。

PS・ただいま、帰りました有坂です。今後とも宜しく願います。更新は2〜3日のペースの予定ですが……しばらくは、早めるかもしれません。

#### 脚注

謙信公の宗派は真言宗と史実にあります。あの頃は高野山と比叡山は、宗教人にとって一種別格の位置付けにあったと思われます。なので有坂的には、謙信公は禅の曹洞宗や臨済宗を手始めに学ばれ、最終的に高野山で仕上げられたように思っています。解釈は色々ありましたが、このように有坂の小説では書いて行こうと思っます。

峨山禅師（宗九）様は有坂のオリです。史実に宗九様が越後に来た記録はありませんので鵜呑みにされないようご注意くださいませ。

第4部・林泉寺編 第1章・迷走

吉

まったりとした空気が私を包んでいた。かつて馴染んでいた様な、心が澄みきり静まってゆく様なそんな心境だった。柔らかく揺らされて初めて目にしたのは、心配そうに覗きこむ娘の顔だった。

「……………お……………母さん。お母さんてば。こんな所で眠てちゃダメだつて！」

「……………み、美佐子？」

見慣れた娘の顔をみて、私は理解が追いつけなくて呆然とするしかなかった。そうするうちに込み上げてくる、アンバランスな可笑しさに、お腹の筋肉が意図せずけいれんする。

「うあ……………人がせつかく起こしてあげたのに、笑うなんて失礼しちやうわ」

腰に手をあて肩を怒らせて、拗ねた美佐子の表情に、かつての幼い娘の姿を眩しく重ねてみてた。なんだろう、妙な安堵感がジワジワと私を侵食して、笑いを堪えることさえ出来なくなった。

「母さん、風邪ひいたって、もう知らないんだからねえ」

「……………う、ごめん……………でも……………ちょっと、美佐子つてば！！」

美佐子は今までいたリビングから離れ、対面式のキッチンがある

方向へ、怒りのままに踵を返す。私が上半身を無理に起こして、娘の後ろ姿に声を掛けると、彼女は振り返りアカンベ　と舌をだした。

変わらない娘の態度に、ますます笑い声が止まらなくなってしまふ。ひとしきり笑いおさまると、頭が冷えてきたのか始めて私自身が置かれている状況を、理解できるようになった。

なんで、ソファなんか寝てしまったんだろう？何か夢見が悪かった気がするけど、思いたせない。

私が寝ていた場所は、美佐子の家だった。よく見慣れたリビングには、娘のお気に入りなアリアメリカン調の家具が並んでいる。真向かいの飴色したりビングボードの上には、仲良く写った家族の写真がいくつもあった。

「……お母さん、紅茶飲むよね？」

「……ん、お願い」

娘の訊ねる声と一緒にカタカタと鳴る食器の音、水道の蛇口をひねる音がキッチンから聞こえてきた。なんだか拭えない違和感に、顔を両手で包み込んで、こめかみを軽くおした。

何か、忘れていたような気がする。大切な何かを……。……。、

……

式

何か現実感がおいつかないような、違和感の正体はわからなかつ

た。そして諦めたようにソファアの背もたれに体重をあずけ、私はボンヤリと天井の照明をながめた。するとクリームイエローっぽい天井の色が、しだいに煤けた茶色に変色する。

悲鳴をあげる声は、キツチンに居る娘には届かないらしい、身動きすら出来ないほど身体中が硬直し、身体を受け止める柔らかなソファアの感触は、硬いゆかのような感触にかわって行った。

「あああ

」

悲鳴をあげて、瞳をめいっぱい見開き目覚める。そして見上げた天井は見知らぬものだった。私は美佐子の家にいたはず、あれは何時もの夢だったのか？私は誰なの……………？

そうだ、私は虎千代！！たしかに虎千代だったはずだ。じゃあ、ここはドコ？

何が何だか解らないまま、私は薄暗い室内に視点をうつす。そして軋む身体にムチをうち上半身を起こし、名を呼んでみた。

「……………し、新兵衛、居ないのか？安実は……………？長実……………？……………景資？誰か、誰か居ないの」

いつも返される返事はなく、しんとする独特の静けさが広がって、言い知れぬ怖さが這い上がる。いったい何が起こったのか？ふらつく身体を起こし、状況を確認しようと立ち上がる。

私の立ち上がる動作につれて、虎千代の記憶も目覚めていった。そして、戦の緊張感が身体をかけ抜ける。まず最初に考えたことは、みんなが無事であるかどうか……………だった。

見知らぬ場所にいる怖さもあって知っている人の名を、順番に叫びながら廊下にでると、見たこともない庭先の風景が広がり私を慌てさせる。

「……………何が起きた？」

庭先に続く廊下の冷たさが足の裏を痺れさせ、力がすべて抜け落ちるように、その場所に崩れ落ちた。人は理解が及ばない現実に直面すると、笑いがこみあけると言いが、それは本当のことだなど頭の中で、自分自身に問いかけた。

「ふふふ……………あはは……………」

口をつく笑い声は自嘲するように、己の置かれた現実を認めたくなかった。誰も居ない現実が、ひどく裏切られたような切なさに支配されていた。

参

そうして、私は心を閉ざす。廊下を走る人の声やざわめきさえ、遠くのさざ波を聞くように感じてた。丸まる身体には、凍る樹氷が垂れ下がり雪の中ですら暖かな眠りの世界が広がって私をおし包んだ。

もう、眠っても良いよね。

ゆるやかな眠りがすべてを洗い流す。重く苦い思いでさえ、なにか幸せのひとつになって行くのだ。父との約束は守れたか？守れたなら皆が無事ではいるはず……………もう解放されても良いよね。

ありがとう、楽しかったよ。新兵衛のバカ、嘘つきだよお前。ずっと一緒に居ると約束したのに……なぜ今は、居てくれないの？

閉じていく瞼は雪の結晶を写し出す。綺麗だ、雪の結晶ってこんなに綺麗だったんだ。ごめんね、私は人を殺しちゃった。手には血がベツトリと付いているんだろうな。雪原を染めるほどの血飛沫は私を狂気の世界に染め上げる。

戦なんかキライ。この世界の命の重さは、軽く儚い淡雪のようだ。あの人にも、大切な譲れないものがあつたのかな？

瞼の裏に映りだす光景、コマ送りの様に矢の軌跡を追うと、額に吸い込まれるように刺さる瞬間を思い出す。そして眼前には、鮮血を撒き散らす兄の近習の姿が映りこんだ。込み上げる吐き気に目眩がし、むせかえる鮮血の匂いがまとわりついて私を苦しめる。

もう、終わりにしよう、私は罪をおかしたんだ。これは罰なんだ、そう罰なんだ。

「……虎千代さま、お気をたしかに!!」

「……若様が」

誰かに抱えられた気がする。何かしら言葉がかけられるが、何を言われたかは分からない。でも、生ある人の温もりが嬉しくて嬉しくて、口元が綻んでゆくの最後の記憶だった。

「……虎千代さま、なんでこんな所に……」

「あちゃ……この坊主死ぬつもりだったのかい？とりあえず暖めたほうが良い。お扇姐さんは、和尚を呼んできな坊主は俺が……」

「わ、分かった。若様を頼んだよ」

四

再び目覚めた私の視界には、見慣れたお扇の顔があった。なぜ、彼女がそんな痛々しそうに私をみるのか分からない。

「……お扇？」

「はい、ここに」

「……戦はどうなった？」

本当に聞きたい事でも無かったが、私は抑揚もない声の調子で彼女に問いかけた。『勝ちましたよ』と返された声に安堵のため息を吐いた。

「……そうか」

見上げる天井は、相変わらず知らない天井で、感覚のない指先にお扇の温もりがジワリと広がった。彼女が私の手を取り上げたのだと気がついた。

「虎千代さま、お気が付かれたか？光育にございます。雪の上に倒れておられ、お身体が随分と冷えておりましたが、如何ですか？」

「そうか雪の中に……。世話をかけたな光育殿、私は大事な」

死ねると思った。だが、まだ生きなくてはならないのか？

胸の焔は、ここに今だ留まっていると青白く灯っていた。そして、私は他人事のように眠っている間に起きた事を聞いている。すこしも現実感が湧いてこない……魂が枯れはて、この林泉寺に留め置かれている事実さえ、受け止めかねていた。

「虎千代さま、今は心の整理がつかないかもしれませんが、どうかお力落としなさいませんように」

「……ん、光育殿にも迷惑をかける」

光育に答える言葉さえ、本心からの言葉ではなく、上滑りする言葉の羅列だった。すべてがどうでも良くて、春日山に戻れないという現実に、悲しみさえ浮かんでこない。反って変な解放感が湧いてくるのだった。

「……もう、私は頑張らなくて良いんだな」

「馬鹿め……まだ若いくせにジジイみたいな事を言う坊主だぜ」

知らない声が頭の上から降ってくる。視線を向けると忍び装束の男がいた。彼は、ニタリと人を喰ったような顔をして私を見ていた。

「……えつと、誰？」

「軒猿。軒猿の加藤段蔵……！」

「ちよと段蔵あんだねえ……もうちよと説明したらどうなのよ。若

様、こんな行儀悪い奴だけど、こいつも今日から護衛にはいるから、覚えてやっつくれ」

ああと頷いた。頷いたけど何かが引つ掛かり、お扇を見つめた。

「…………私の護衛？」

「そうですよ護衛ですがなにか？」

いやいや、明らかに可笑しいだろ。なんで軒猿が護衛に……  
もう城を追い出された私など、護衛する価値があるのか？

第1章・迷走「完」

## 第2章・肅正

吉

林泉寺に居る虎千代の落胆は深い、軒猿がいまだ警護する意味すら理解出来ずに、混迷のただ中にいた。もう、何を言われようが気にさえしない、心を深く閉ざしてしまつたようです。

さてさて、一方の府中春日山城では晴景による、あらたな人事の刷新が行われていました。目の上のたんこぶである青岩院には、手を出すことは無かつたが、栖吉の兵は確実に居なくなる。

そして気に入りのオベツ力使いを側に置き、昔気質な工部の親方から、虎千代びいきだつた者達を端から端まで暇をだす。心ある国人衆からは、あきらかな春日山離れが起こりだし、今日も今日とて渋い顔つきの直江が、右往左往と国人衆の機嫌を取りに回るのだった。

「実城さま、無理でございます。これ以上、城内に居宅をかまえる国人衆は追い出せませんぞ」

「何を弱気な、国人衆など恐れるな。なに、ちよつと城下町に、居宅を移せば良いだけの話しじゃ」

「みな、こたびの戦でお味方下された方々ばかり。お目障りでしょうが、我慢なさつて下さりませ」

もともと武辺一辺倒の者達と、晴景は折り合いが悪かつた。なにかと言えば青岩院の肩を持つ彼らが目障りな存在なのは、仕方がな

いのかもしれないが……少し度が過ぎていた。

城内に居宅を持つのは譜代国人衆における、一種のステータスシンボルでもありました。おいそれと居宅を移せとは言えない直江は、頭を掻いて困り顔をする。

「直江、なにか良い知恵はないのか？あんなむさ苦しい連中は、わしの目の届かぬ所に押し込めておけ。分かったな」

「はあ、考えてみますが……」

生返事を返し、その場をあとにした直江は、青岩院の二の丸郭まで足を運んでいた。虎千代が居た時とはうってかわり、兵の影さえみえず閑散とした番所を抜け、直江は郭の玄関口に入って声をかけた。

「お頼み申す」

「ああ、これは直江様。今取り次いで参りますけえ、そちらへ」

あまり、表には出てこない小男の下男が出て来て対応する。直江はよほど手が足りないらしいと下男の後ろ姿を眺めるが、足の運びがいやに軽いものに気がつき、軒猿の守りが入っていたかとひとりごちる。

弐・直江side

通された客間は、ござつぱりとして仏道に入った者らしい内装に変わったと、わしには思えた。やがて衣擦れの音にまじって足音が聞こえ、片膝を立て頭を深くさげて青岩院を待った。

「ようこられた直江殿、楽になされよ」

「はっ」

現れた青岩院は、血色もよく尼僧姿にも覇気があった。やがて彼女が上座にあがると、わしはゆっくりと座り直し再び頭を下げた。

「ほほほ……礼など尼僧には必要なかろう」

「相変わらず青岩院さまには、かないませんな。ましてご不自由をおかけし、面目次第ありません」

「さて、今日は何の困り事かのう。晴景殿におかれては、またぞろ我が儘放題なのか？今度は何と云っていやる」

この方には何もかもお見通しらしく、わしはひきつる頬を搔くしかなかった。そして、ゴホンとひとつ咳払いをして話を続ける事にする。

「はあ……武辺自慢の国人衆が目障りらしく、実城様は居宅を春日町の方へ移せと、仰せ付けられ申した。如何取り計らえば良いのかと、わしも四苦八苦してる次第なのです」

「うつけが、一度痛い目に合ってもらおうか。柿崎殿が、河合親子から謀反を持ちかけられたと、いたく憤慨して来ておったが、使えるのではないか？」

「あ、あの実城様にベッタリの河合親子がですか？」

「そうらしい、中々の策士ぶりよな」

呆れ果てて物も言えないとはこの事よ。実城様にとって、一番頼りにしている忠臣みずから謀反とは……実城様も実城様だが、河合も余程のうつけと見える。

類は友を呼ぶとは、これいかに？しかし乱など起こされては、反乱分子のおもつツボ。さてはて、どうするか？

「それはそうと上条や揚北衆はどうしてる？」

「謝り状を持って来たので、たつぷりと賠償金を吹っ掛けてやりましたわい」

「そうか、戦に勝つたればこそじゃな。虎千代の元服もあと6、7年は掛かるう。それまでは、何としても長尾の権威だけは保つていかねばの」

「しかり、大変な大仕事になりそうですね」

これからは、用心深く政まつりごとを為さねば為らぬ。多少の劣勢は覚悟のうえ、それもこれも、若様が帰られるまでの辛抱と言つもの。

参

大人達の思惑など預かり知らない虎千代は、淡々と無為な日々を過ごしていました。表情も極端に冷たいものへと変貌をとげ、林泉寺の蔵書の類いを読み耽つては日々を過ごす。

林泉寺に住まいする者達は興味津々と、あたらず触らず虎千代の

動向を、遠巻きにして伺っていました。そんな視線に、虎千代は苛々をつのらせ蔵書を読む気も失せ、庭先に近い廊下に出る。

そして庭先に降り、人目も憚らず胸の焰のおもつがままに、暴れたおす。この前は、貴重な石塔まで壊してしまい、光育にため息を吐かせていた。

なんと乱暴な若様じゃと、あれが神仏がえらびし、定めの子か和白い目で見られていた。虎千代にとってそれさえ、鬱陶しいと思う気持ちで一杯だったのか、いつこうに鎮まる気配さえなかった。

そんな日々を過ごす虎千代にも、転機は訪れるのか？いや、あちらから運命が転がり近づいてきたようです。虚しさに狂わんばかりに暴れ終わり、虎千代が雪にまみれて大の字になって寝ていると、恐る恐る近づいて来る影がみえた。

「……な、なんすけ……い、痛いかな」

怖いものしらずなのか、子犬と一緒に覗き込む子供が声をかけた。子犬はクンと匂いをかぎ、ペロリと虎千代の頬をなめあげる。

「ああ、くすぐりたい。大丈夫、どこも痛くない」

「……ひ、冷えるろ……おめ……おめえさ」

「なんだ心配でもしてくれるのか？大丈夫だ、死にはしない……いや死ねないかな」

そう言うと、虎千代はやおら立ち上がり雪をパンパンと払いだす。まあお互いに意味の通じ合わない会話を、成り立たせていた。

「おいで、可愛いなこの子の名は？」

「……た、た、太郎」

「そっか、子犬は太郎って言うんだ」

「ち、ちがうら……じ、次郎ら」

虎千代がいったいどっちなんだと子供をみれば、子犬と自分自身を交互に指差すのが見えて、ああと納得するのだった。

「子犬が次郎で、そなたが太郎か？ 『太郎次郎』まるで猿回しみたいな名だ」

「……さ猿じゃ……ねえろ……こ、小吉」

なにを誤解したのか、山の方へ指差した太郎か『小吉』と言った。また林に指差し『明石』と言い、次々とあちこち指差し名前を教える太郎。

#### 四・虎千代 side

どうやら太郎の友達には皆が猿や小鳥、はては狼のような獣達であると気がついた。やがて私達の距離は近くなり、彼も友達と認めてくれるようだった。友の証にと、どこで拾ってきたのか綺麗な小石を渡される。

彼は寺男の養い子で六歳になる。小さいなりに朝早くから昼すぎ

まで、寺の雑務を手伝って、空いた時間は私を色々と案内してくれるのだ。行き先は、しれたことに彼の友人の住み処だったりするが、太郎と居ると心が穏やかになり、こんな生活も悪くないと想像している己がいた。

出家するのも悪くない、戦だからと言って命を奪う、そんな行為をした己を許せない。だから弔い位、私の手でしてやるのだ。

春日山城には大好きだった姉上や母上もいるが、しょせんもう会えないのだから……幸せで居てほしいと祈れば良い、父上の弔いも出来るんだから良い事づくめの気がしていた。

「よし、出家しよう」

「……な、なんら？」

「私が、お寺の坊さんになると言ってるんだよ。太郎も良い考えだと思わないか？」

ずっと一緒に居られると太郎は喜んだ。まあ、理解してもらうには、手数を踏んだが嬉しくなって太郎に飛び付いた。

「……うあ　な、なんらろ」

「んっ……お前クサイぞ。何だか匂う。身体ちゃんと洗っているのか？」

「……さ、さむいけ……洗ってねえら」

そういえば、私だって風呂に入っていないと気がついた。風呂とい

つても城でさえサウナのような岩風呂だし、ここではどうしてるのかと気になった。いいところ水浴びだろうが、寒いからズツと入ってないとか……あまりにも不潔過ぎる。

「よし、湯を沸かすぞ！ 風呂だ風呂を作るんだ」

「……ふ、ふる？」

「わあクサク、もう風呂でも入らないとやってられない！！いくぞ、太郎」

人とは面白いもので、心を閉ざしている時には、不衛生とか想像もしなかった。出家して僧となったら、生きる希望が湧いてきて、不潔な環境にいたことに我慢ならなくなっていた。

第2章・肅正「完」

### 第3章・変化

吉・天室光育 side

この時点で虎千代が出家しようとは決意していようとは、全く予想すらしていない光育禅師は、若様の奇行に頭を悩ませていました。

若様の痛みを、いかように和らげてやれば良いか、拙には見当すらつかないのです。困りましたな。

光育は、若様を立派な国主とする密約に頭を痛めておりました。それ以上に、若様の変貌についていけず困り果て、庵に籠り座禅をしています。

第一に、出来れば古今東西に、見たこともないくらい、武勇兼知のある武将にお育て申し上げたい。

これは欲であろう、玉石混合したかの若様を、研きあげ立派な武将にしたいのが拙の願い。さて、すべて磨ききるのには、若様自身の同意を必要とするのが頭のいたい事ですねえ。

第二に、出来れば古今東西に、見たこともないくらい、仁徳のある為政者にお育て申し上げたい。

何より越後の民を大切にす統治者にお育てしたい。仁徳は一朝一夕に身につくものでなし、いまの荒れ果てた若様には無理な話じやしのう。

第三に、出来れば古今東西に、見たこともないくらい、美し

き心の君主にお育て申し上げたい。

礼節を重んじ、節目ある行動のできる主であって欲しい。ならばおのずと家臣も習いとしよう。

かように三つの真・善・美が欠けることなく備わった王の器、天高く飛翔する気高き龍に、なんとしてもお育てしなければ、期待して待たれるお歴々に、申し訳なさすぎる。

さてはて、何としようかのう。名案はないものか？

そんな時、転機はあちらから転がり込んできました。建具を蹴破らんばかりに弟子が駆け込んで来るのです。

「お師匠様、大変でございます。またもや若様が、変わった事をお始めに……大量の湯を沸かせと仰せられています」

「また、ですか？今度は何をされるのやら？分かりました拙が出向こう」

はあ　と長い溜め息を吐き、ヨイシヨと重い腰をあげる。いったい何が起こったのやら、若様が起こす問題の数々は拙の予想の遙か上を行きなさる。

弐・加藤段蔵 side

坊主の子守りねえ、こんなチンケな任務なんて俺の性にウツクシあわねえ。まったく、お扇ときたら若様は任せたと、御前のところにトンズラこきやがって！あとで、礼をたっぷり貰わないとな。

なんたつてこの世は、金と色で成り立ってんだ。現実主義さ俺様は、神仏がえらびし、神子たらゆう坊主は、まだガキじゃねえか。あんまり期待してやるのもな、重荷なんじゃないかと俺なりに見ちゃあいる。

期待する大人と、大人に成りきれないガキに、軋轢が起きてグれるのは当たり前だと思っただが……これは俺にも経験がある。

「あの坊主、潰れなきやいいがな」

面白味のない任務に、あいている段蔵は、手下の忍びに子守りをまかせ、サボリの真つ最中です。そんな時、これまた光育と同じに若様の奇行を知らされて、現場に急いで駆け付けた。

はあ まったく何だか問題ばかり起こす坊主だぜ！！

「で！！大量の湯なんて、坊主でめえは何するつもりなんだよ」

「ああ風呂だよ、段蔵さん」

「またさん付けか？あのな、言っておくが風呂なんて上等なもの、こんな所じゃねえぜ！！」

普通のガキらしくないこの若様は、いつも突飛な事をしでかす。風呂なんて春日山の岩風呂か、温泉の湧いている栃尾城くらいしかない、まして寺なんかにあるもんか。これだから若様という、贅沢に育てられたガキにはまいる。

「やはり、ここには無いのか？直ぐには作れないなら、じゃあタライでも良い、とりあえず身綺麗になりたいんだ」

「……む、むりらろ……や、やめるろ」

なんか薄汚い子供の衿首をムンズとおさえたりとか……ありえない。こいつまで風呂に入れようと言う魂胆かい？何考えてんだか頭が痛くなる。

「あのな、坊主。湯を沸かすには、炭や薪が必要なんだ。こんな寺にや、当座の物しかないんだぜ！どうするんだ？」

「ああ、金のこと」

「そうそう金だ金！！」

あんがい、世の中の事が分かってんだなコイツも。こんだけ言えば引き下がるだろう。だいたい城の若様に、金の蓄えなんぞ有るわけないわな。ああ、そんなに考え込んでもナイに決まってるぜ。それとも親にセビルつもりか？

「んんっ……とりあえず金なら蓄えがあるんだが、段蔵さん取って来てくれますか？」

「な、なんだって！！取ってくるのは吝かじゃないが……それは真実か？」

参

またもや虎千代がひと騒動、我が儘に巻き込まれた段蔵は、春日山へと虎千代の蓄えを取りに出た。のこった若様は、寺の者と交渉の真っ最中です。

「だから無理だと、申し上げている。炭や薪は当座のものしかありません。我が儘には付き合えない」

「そこを何とかならないか？炭や薪なら、後で用立てます」

光育の弟子たちとの押し問答が始まった。どちらも譲らず大変な騒ぎになっている。小坊主の珍念ちんねんたちとは折り合いが悪い、彼らは虎千代の事を、暴れ者の我が儘な若様だと、はなっから相手にしてくれない。

「それに、そのウスノ口も使うのでしよう。桶が汚れてしまうのはねえ」

「何んだと？少し聞くがウスノ口とは太郎のことを言ったのか？」

珍念たちは、吃音のある太郎のことを、常に虐めたりバカにした態度を取っていました。友を貶める行為に虎千代は怒り、珍念に訂正しろとつめよった。

「ふん、本当の事だ」

「太郎は、ウスノ口なんかじゃない！！訂正しろ！！」

「……や、やめてける……お、おねげえだ」

口喧嘩がはじまり掴み合いにまで発展する、太郎はなんとか止めようと虎千代を後ろから引っ張る。そんな時に、やっと光育がやって来て仲裁に入った。

「渴　　！！何を騒いでいる。そこになおれ」

ツルの一声、禅でならした光育の湯が入る。珍念たちは正座して神妙な顔つきをする。虎千代と太郎も同じように正座してならんでいた。

「お立ちなさい若様、いかがなされたのじゃ。我が弟子が不手際でもありましたかの？」

「騒がせてすまない光育殿。私が湯を沸かせと、押し問答を始めてしまったのです」

「そうですか、それだけでこの様な騒ぎに、為るものでしょうか？拙は、そうとも思えませんかな」

光育がその場にいる者をジロリと見渡すと、何か居ずらそうにする弟子達と太郎に、視線を合わせてゆきました。耐えられなくなつた、太郎は虎千代の弁護をしようとしたが、虎千代は手で制す。

「いえ、これは私の我が儘なのです。炭や薪が当座のものしか無いのは、知りました。ですが、後程用立てて頂いた炭や薪は返します、ですから湯を用立てては頂けませんか？」

「仕方ないですねえ。皆の事は不問としましょう。さあ、皆のもの若様に湯を沸かして差し上げなさい」

#### 四

騒動は決着がつき、虎千代はやつと身綺麗に出来ると大満足で、小坊主達の手伝いに走り回る。水汲みは井戸が凍って大変だから、

綺麗そつな雪を集めて湯を沸かす。

「珍念さん、ありがとう」

「み、認めた訳じゃないからな。借りは嫌だから……」

「はい」

少し耳を赤くして、言いつのる珍念に笑顔をむける虎千代。光育にとつて若様の態度は好ましくうつり、目尻に小じわをよせて見守っていた。

「光育殿、実は後でご相談があるのです」

「ほう、何か決意された目ですな。身綺麗にされたら拙の部屋までお越しなされ、お待ち申しておりますよ」

今までの気の抜けた虎千代と違ってかわり、目の輝きが違っていると認め、話を聞くことにした。そして光育は約束をして、部屋へ引き上げて行きました。

さてはて、若様は何を決意されたのか興味深いことです。それにあの騒ぎも、只の我が儘と判じるのは無理がある。

光育は、つらつらと虎千代の今までの行動を思い浮かべ、色んな想像を試してみたが見当が付きません。仕方なく、春日山からの頼まれ物の書写をし始めて、虎千代を待ち受ける。

そのうちに時がたち、身綺麗にした虎千代が部屋を訪ねて来ると、中へ入るように促した。

「さて若様、お話と言つのは何んで御座いますか？」

「私は出家しようと思つのです」

「なんと出家で御座いますか、なぜです？」

まさか出家しようとは考えも及ばず、ここは落ち着いて若様の話しを聞こうと先を促した。

「私は、戦だとはいえ人を殺しました。まして策を弄して大勢の兵を殺してしまいました。味方にも戦死者があつたかもしれませんが、ですから出家して皆を弔いたいです」

虎千代は言いにくそうに眉を寄せて話し出す、その話しの内容に、光育は始めて虎千代の衝動的な行動の根っこが、理解できたと納得する。ただ、城を出されたとヤケを起こしてるのではなかった。

「戦を悔やんでおいでか？」

「悔やみなどありません。あれは、家族を春日山に住まいする者を守るために、仕方のない事だと感じています。しかし私には、己が許せないのです。人には各々の未来があり、それをこちらの都合で、閉ざしてしまうのは罪なのだと思います」

光育には、虎千代の相反する心の間に苦悩する姿がみえた。なんと純粹で繊細、穢れない子なんだろと感心し、やはり神仏がえらびし神子だと納得した。しかし……。

拙には、出家の道を進めてやりたいと願う気持ちもあつた。若様はあまりに純粹すぎて、この乱れた世の中では生きにくいのです。しかし、若様を待望する声がある以上、おそらく出家は認められない。

「若様はまだ幼い、春日山の意向もなく長尾の名を捨てることは出来ません。しかしお気持ちは良く分かりました。どうです、元服するまで、見習いとして、小坊主たちと修行されては如何ですか？」

「では、私は一生出家できないのでしょうか？」

「そうではありません。きつちりと修行はして頂きます、ですが厳しくなりますぞ。その厳しい修行を修める事が出来たなら、元服の折りに再び出家の願いを受けましょう。それでは如何ですか？」

春日山の若様という身分で甘やかされてこられた方が、身分を捨てて厳しい禅寺の師弟関係に身を置くのは辛い事だと思い、拙はこんな条件を出した。それに精神修行は、今後とも越後の王になるためには必要なこと、渡りに船だと内心では喜んでいた。

「もし私が厳しい修行を成し遂げたら、聞き届けて下さるのですね」

「はい、その暁には聞き届けましょう。但し、いつ長尾家の危機が起こるやもしれませんが、そうなれば拙のように僧となっても兄上をお助けせねばなりません。ですから軍学も同時に学んで頂きます」

「はい、仕方がありませんね。私は長尾家の子なのですから」

一瞬、諦めた表情をした若様は、仕方なく軍学を学ぶ事を承諾す

る。まさしく拙にはしてやったりの気持ちがありました。しかし、拙が師匠となれば、甘えも出るだろうと信用のおける師匠を与えようと思いついたのです。

「よろしいでしょう、ならば修行して頂きます。拙は春日山の軍師でもあり、林泉寺の住職でもあります。ですから付きっきりで修行を見る訳にもまいりません。新たに若様の師匠となる方をお呼び致します。修行はその方が、お越しになってからとしましょう。それまでは軍学を学んで頂きます。宜しいですか？」

「はい、承知しました」

光育は、若様が部屋を出て行かれるのを待つて、青岩院や直江に事の次第をしたためた文を書き、軒猿の手下にことずける。そして、武術に長けた、特に厳しいく導いてくれそうな師匠を選ぶことにした。

### 第3章・変化「完」

## 第4章・余波

吉

春日山城にある虎千代の寝所へと、やってきた段蔵は床板をはずして、目的の物を探そうとしていた。しかしその時、お扇が現れ声をかける。

「ふふふ……なにしてるんだい段蔵」

「ああ……見りや分かるだろう。あの坊主が、蓄えを持ってこいてさ。まったく人使いが荒い奴だ!!」

ああアレとお扇は気がついた。しかしお金なんか何に使うのだろう。そんなに林泉寺では困っているのかと奇妙な顔をする。

「おかしいね、若様は何に使かわれるんだい」

「風呂に入りたいたさ」

段蔵はしぶしぶながら、若様とのやり取りを話しだす。お扇は、あっけに取られ笑い出した。

「ふふふ……若様らしい。あの方は、いつも身綺麗にされていたからな」

事実、この春日山に於いても、虎千代は毎日か各日に岩風呂に入っている。夏場は水浴びを何度もして、常に身綺麗を保ってたらしい。この時代の人々は、そんなに身綺麗にする者は少ない。第一風

呂なんて、庶民には贅沢極まりない事なのです。

元、現代人だった虎千代にとって、身綺麗にすることは当たり前  
の行為、まして齒も毎朝毎晩手入れをしてました。そして周りの家  
臣も主にならない、出来るだけ身綺麗を心掛けていたものです。

「蓄えと言っても子供がする蓄えなんざしれてるさ。それなのに、  
何でこんな厄介な隠し方をしてるんだよ、まったく」

「ふふふ……開けてみりゃわかるわよ。若様は並みの子供じゃない  
って事がね」

段蔵は、意味不明なお扇の言葉にチツと舌打ちし、なんとかそれ  
らしい物を持ち出した。開けてみてビックリ、嚴重に封をした一抱  
えもする木箱が2つもあらわれた。

「こりゃ 一体どうゆう訳だ。あのガキ何をしてやがった」

「ふふふ……だから並みじゃないのさ。なんだか隠居所を立てると  
かで、戦の常備食を作っては、売って稼いでいらしたのさ」

木箱の中身はすべて砂金と金銀の塊、両手一掬いだけでも普通の  
下級武士なら、一生遊んでくらせる額なのだ。

「なんちゅうガキだ。隠居所どんだけ建てるつもりなんだよ!!こ  
れだけで3つも4つも建つちまわあ」

「さあ、私たちとは金銭感覚が違ってらっしゃるからねえ。さっさ  
と持って行っておやりよ」

「この世の中、なんか不公平に出来ていやがる……」

段蔵は、ブツブツと文句を言いながらも、木箱を2つをどうやって運ぶか思案する。

式

その頃、直江の手元には林泉寺の光育より文が届いておりました。その内容を目にした直江は、驚きと落胆でガツクリと肩を落としていた。

やはりあの方は、『神仏がえらびし、定めの子』だ。戦嫌いと言うのは、あの方の本心だった。

わしらの我が儘勝手に思い込んでいたことは、さぞお辛いことだったに違いない。もし、平和な世なら立派な僧侶に為れたのに、ここに至り若様にお立ち頂かなくては、越後は再び動乱の時代に逆もどりになる。

不憫な方だ。

あの方に功名心など欠片もない、ないが故に越後の主にふさわしいのだ。たとえ、あの方を傷つけることになっても、引きずりだしても越後の主にせねばならん。さぞ、若様には恨まれるだろう鬼と呼ばれてもいい、これがわしの使命なのだ。

この忠誠、かならずや永久に虎千代さまだけに捧げ申す。それにて、どうかお許しくだされ。

「直江の旦那、どうしたんだい暗い顔など珍しいな」

「んっ……段蔵。お前林泉寺に行ってたのではないか？それとも若様に何かあったか」

「いやと首を振る段蔵だが、今ごろなんだといぶかしんだ。そして、段蔵は何やら一人で愚痴りだす。

「あいつは喰えない奴だ。ぐっすりお宝を隠していやがった。最近のガキは生意気だな」

「おいおい段蔵、意味の分かるように話してくれ」

「ああと頷いて段蔵は、今までの成り行きを話しだす。落ち着いて聞いていたが、途方もない話しにわしでさえ知らずと頬がゆるんだ。

「あはは……それはそれは大変じゃな段蔵。分かったついでに城の炭や薪を都合してやろう、それと一緒に運び入れてはどうだ」

「おお、旦那頼んだぜ。まさか、こんな大仕事になるとはな。喰えないガキはキライだぜ」

「それに、工部の親方が職を失って難儀をしている。若様の風呂を建ててくれるよう頼んでやろう、あの偏屈ジジイも喜ぶだろう」

「若様のためなら、次々と必要な手配りが先々と浮かんでくる、己のげんきんさを笑ってしまふ。ヤニ下がっていると、段蔵が不景気な顔でわしを眺めた。

「旦那は、若様に相当イカれてるな」

「おお、惚れて悪いか？」

「俺の周りの奴は、アイツに骨抜きな奴ばかり。ああもつやったらん！！」

「大丈夫。そのうちお前も若様に惚れ込むさ」

段蔵は、チツと舌打ちをして手配りに戻っていった。そしてわたしは、新たな計画を頭に浮かべ、上杉のお館様に会って来ようと考えていた。今のうちに若様の地盤をしっかりと固めなければ、有無を言わず若様を越後の主とさせる為に苦勞は惜しまん。

参・虎御前side

直江と時を違わず青岩院にも、光育禅師より文が届けられた。文を読んだ青岩院は、ひとり観音菩薩象と向き合っている。

出家したいとは、まさしくあの子は、『神仏がえらばれし、定めの子』じゃ。ならば、越後の王となる予言も叶えられてしまつかもしれん。

不思議な僧と、再び会ったあの時に、あの子の行く末を言い渡されていた。これは、亡き我が殿との間の秘密なのだ。

『かの者は天翔ける龍の雛なり、いずれは越後の王となる者。良く仏道を学ばせ、日本の本の御国における東北の要と導かれたし。このこと神の心算にあり、余人には決して漏らすべからず』

そのように二人して聞いていた。我が殿は、あまりお信じではな

かったが、妾は心の内で密かに信じておった。いま、この言葉が重くのし掛かつて来るわ。まさか、自ら仏道を修める気になるとは不思議なことよ。

ただの越後の王ではないのだ、天下の要を任せると仰せられたあなたの方は、刀八毘沙門と名乗られた。この事、やはり光育にも知らせおいた方が、良いのではないか？

神仏が定められた運命の子、虎千代あなたは出家しても、その運命からは決して逃れることは出来ないのです。我が子ながら不憫なことよ。

青岩院は、ひとつため息を吐くと、虎千代が出家の決意をしたことを、栖吉に知らせる事にした。その一方で光育に予言の内容を伝える決意をしたのでした。

「荻野、文をしたためる準備を頼む。後ほど、お扇に来るよう使いをだせ」

「はい、承知しました」

そして、青岩院は書状をしたためる。その時にバタバタと高い足音を響かせて綾が駆け込んできた。

「母上、聞いてください兄上ったら酷いのです。父上の喪も明けぬうちに、上田に嫁に行けと言うのですよ！！」

「なんと、そなたはまだ九つになったばかり、何を考えていやるのか？安心いたせ、この母がある限りそんな勝手は許しません」

晴景殿の魂胆は見え透いておるわ。どれだけ栖吉を嫌えば気がすむのдарう、栖吉と上田に競わせようとの腹積もりか？まだ幼い妹を道具とするとは、俗物め許るさぬ。

泣き崩れる綾の背中をそつとなで、虎千代の為になら上田に嫁にやる事も出来よう。しかし、晴景の保身の為になぞ、誰が嫁にやるものか？せいぜい足掻くがよい、いつか吠え面かせてやるわ。

#### 四

そして青岩院から栖吉城にも急報が届けられていた。これも又、光育の書状の内容を知らせるものである。

為景の葬儀いらい、栖吉長尾の房景は床に伏していた。腰痛はいつもの事だが、この度は胸の病まで併発していた。そんな時に届いた書状は、なおさら衝撃をもたらした。

「誰かある、わしゃ林泉寺にまいるぞ。虎千代に会って来るのじゃ」

「あなた様、そんな身体では、林泉寺まで行くのは無理で御座います」

奥方に止められようが、頑として行く気満々な房景に、皆は閉口していた。とりあえず直ぐさま、謹慎中の金津新兵衛と、栖吉の出城である栃尾城の城代、本庄実乃を呼び出すことにした。

「奥方様、謹慎中の某まで、お呼び出しとは何事ですか？」

「ああ、よう来られた。済まぬのう金津、先ずはこの書状を見てはくれまいか」

金津は、拝見しますと青岩院からの書状をといた。みるみる顔色が変わる金津に奥方は驚いている。そんな時に、もう一方の本庄実乃が、遅れて駆け付けてきた。

「奥方様、遅うなつて申し訳ござらん。おや新兵衛、そなた謹慎中の身だろ？」

「ああ実乃も呼ばれたのか？ 謹慎などと悠長な事は言っておられん。すぐさま若にお会いせねば」

金津は、ホレと言って青岩院の書状を実乃に手渡した。夫と同じような反応をみせる金津を不審そうに眺める奥方は、話しを切りだした。

「二人とも、よう来られた。話しは他でもない、我が殿は娘の書状をみて、矢もたても堪らず虎千代に会いに行くと言せじゃ。しかし病に侵されたお身体、無理はさせられぬ。そこでそなたらに相談しようと呼び寄せたのじゃ」

実乃は、書状を読んで首を傾げていた。若様は遊学のために林泉寺に行かれたのではないか、いまさら出家すると言われても栖吉衆は納得しないだろう。

「実乃、俺が林泉寺に行つてくる」

「新兵衛、無茶だぞ。お前謹慎中じゃないか？ 拙者が行つて来る。

新兵衛は待つてる」

「ふん、我が主のことだぞ、某が行かねばどうする。それに実乃で

は若を止められぬ」

何を言うと二人で口論を始めてしまふ、間に立たされた奥方はため息を吐き、二人の侍を宥めるのだった。

「二人の気持ちは分かった。じゃが私は虎千代が栖吉を継がなくても良いと思おている。我が孫には、好きな道を行かせたい」

「奥方様、何をおっしゃいます。栖吉長尾は虎千代様がお次になるべきですぞ！！亡き為景公もそのように仰せでした」

「実乃は、小さい。若は越後の王となるのだ。栖吉じゃなんじゃと言つ前に、若の定めは越後の王でしかない。元から、そのようにお生まれよ出家など某がさせぬわ」

五

金津の剣幕に奥方も、実乃も戸惑った。まさか虎千代に越後をとらせる腹積もりなのだ、いまさらながらに気がついた。

「それは、我が殿も承知の上か？」

「しかり！！直江実綱、軒猿の頭領、光育禅師など同土もたくさん居ります。これは亡き為景公の予言でもある」

「なんと、直江様までが……そのような予言があったとは」

為景公の予言に始まり、虎千代を越後の王とするために、あの実利主義の直江実綱でさえ、加担しているのかと、なおさら奥方や実乃は驚いていた。

「房景様が、病床にあるのなら、事情を知る某が行かねばならぬ」

「新兵衛、その仕事を拙者にゆずれ。越後の未来が掛かっているなら尚更じや。お前が出歩いては、虎千代様にも迷惑がかかる。いまは大切な時だ、慎んでおけ」

「そうじや、本庄に任せるのじや。金津の悔しい気持ちも良く分かる。今は自重するがよい」

金津は悔しそうに膝を打つ、竹馬の友である実乃にまで止められ  
ては、行く事もままならず深い後悔の顔付きをする。

実乃と新兵衛は、幼い頃より、良きライバルとしてお互い切磋琢磨してきた仲である。長じてからは、唯一本音を語れる友となっていた。

性格も水と油のように正反対で、型破りで猪突猛進の新兵衛に、かたや堅実な性格で真面目が取り柄の実乃。意外な取り合わせだが、結構馬が合うらしい。

「実乃、若を頼む」

「ああ承知した、まかせろ新兵衛！！」

「では本庄、そなたに虎千代の説得を頼みます。光育殿にも、良く話しを聞いて来るのじや。これで我が殿も落ち着かれよう」

ははつと二人の侍が頭を下げて、揃って部屋を退出する。そして二人は並んで廊下をあるきだし、実乃は金津に声を掛けた。

「拙者は、あまり虎千代さまの事は知らん。新兵衛ほどの男が惚れ込む主とは、一体どんな方なんだ？」

「お優しい方じゃ」

遙か遠くを愛しむように見つめる新兵衛の表情に、実乃は困ったように頬を掻いた。この友に、こんな表情をさせる相手に興味があった。

「優しいだけじゃ分らん。他になにかないのか？」

「会ってみれば分かる。どんなに言葉として現わそうとしても、若の事は語りつくせぬ」

「おお、言いおるな新兵衛。会って来てやるわい、その性根たしかめて来てやるう」

第4章・余波「完」

## 第5章・闘神

吉・本庄実乃side

拙者は、伸びやかに山野を駆けまわる、僧衣を纏った少年に出会った。少々細っこいが、凜とした清々しい受け答えは、殺伐とした世にあつて胸ときめかすほど、長閑かで清涼な新たな風を感じた。

だから、つい城へ働きに来ぬかと誘ったのだ。

だが、その少年は首を縦には振ってくれなかった。そして、斬った張ったのお武家の暮らしは嫌じゃとぬかしおった。腕つぶしはなかなか強いと、一緒にいた吃りの少年が自慢してはいたが……果たしてどれ程か拙者には分からん。

その少年に会ったのは、友の新兵衛に頼まれて、若様に会いに行く道中の事であつた。拙者が、雪解けで緩くなった道を踏み外し、崖下へ落ちそうになつた所を助けられた。

なかなか腰の低い、気持ち良い少年だったな。さてさて件の新兵衛自慢の若様とは、どの様な方だろう。春日山歸りの兵達の噂では、戦のために生まれたような猛々しさ、軍略においては為景公ゆずりの奇才の持ち主、なお寛容さを持ち合わせ未は名君と謳いあげ、皆は熱狂的な答えをかえす。戦場での気丈さもあり、弓の腕もかなりなものよと新兵衛が自慢しておつた。さて、どんな偉丈夫いじょうぶな若様が、会つのが楽しみよ。

武勇兼知の若様か……さぞ遅しく威厳のある方なんだろう。新兵衛にあんな顔させる位だから期待外れでは無かるう。

若様は越後の王か……楽しみじゃ。しかし、期待の若様が出家したいと言ひ出して、家中が取り乱したのが始まりで、拙者まで借り出され、なんとした事か林泉寺まで行く羽目になったのだ。説得するのが拙者の勤め、さて何と言おう。

この頃までは、拙者も樂觀しておった。しかし林泉寺に着きはしたものの、若様はお出掛け中と、光育和尚に伺った。先に人をやつておればと悔やんだが、光育和尚も泊まって行けと仰るので、気長に待つ事にした。

我らを避けておいでか、一向に姿を現してはくださらぬ。

「これは出家も、春日山を睨んでのハツタリでは無いのかもしれん」

栖吉の殿が取り乱し、新兵衛を苛つかせ、何ほどの事かと軽視しておった。戦鬼為景公の秘蔵つ子と言われている若様が、越後の覇権を狙つて、虎視眈々とされてるだけじゃと思ひ込んでいた。迂濶だった、もう少し新兵衛から話しを聞いて来るのであった。

若様に会うまでは、拙者はここから動かんぞ。このままじゃ皆に顔向け出来やせんわ。

式・虎千代 side

あの者が栖吉の重臣であることは、少し話ただけですぐに気がついた。見掛けは熊のような大柄な偉丈夫で、それに反して目は可愛らしいつぶらな瞳だと思った。

どこか、愛嬌のある男で性格は生真面目、小坊主のなりをした私

にも丁寧な口調で話しをする。傳役の新兵衛と同じ栖吉の者とは、到底おもえない温厚そうな人だ。また栖吉の重臣であることにも鼻を高くするでなし、高潔な人柄に好感がもてた。

しかし、栖吉のお爺さまの使いに間違いはなく、おそらく出家志願を止めに来たのか？何故だろう今更……

符に落ちないから、知らぬふりを通していた。しかし相手もさるもの長期戦のかまえを見せている。あの母上からは、長尾家の息子だと忘れぬなら、出家志願も認めようと文まで貰っているのだ。

今更、出家志願を取り下げない。だってあの母上が心良く許してくれたんだ。まして僧衣まで手づから縫ってくれて、すごく嬉しかった。いつか必ずこの恩返しはするつもりでいる。

それに長尾の家督は兄上が継いだのだから、私は末っ子だし自由にしても良いじゃないか。もし戦となれば僧になっても駆け付け、光育様と同じく軍師として働けば問題ないと思う。

なんだか、符におちない気分だった。

「会うだけでも、会ってやりなされ」

そう光育様に諭されても、何だか会う気になれなくて、逃げていく。実はあんまり良い気分でもない、あの男が、温厚で良い人そのなのが罪悪感をつのらせる。

「はあ……早く諦めて帰ってくれないかなあ。気になって仕方ない」

ちょっとだけ、ほんのちよと覗いてこようか？私が若様だとバラ

さなければ、大丈夫だろう。茶でも持って行ってやるう。

そして私は、厨に行つて茶の準備を始める。そう、彼が新兵衛や安実、長実と同じ栖吉だから気になつていた。彼らはどうして居るのかと、最後の挨拶すらせずに別れた事が、なおさらに心に掛かつていた。

あの時目覚めたら、既に誰も居なかつた。光育様から事情は聞いて、察することは出来たが……あの頃は、手酷く裏切られたと思ひ込み、自棄になつた。けれど、これで良かったんだと、今では納得もしている。

彼らは武士、進む道が違う。あたらの武勇を、私と共に腐らせてはいけない。別れは時には必要な事、そんな事わかつてるつもりだつた。人の心は複雑で、頭で分かつても、心は悲しがる。時が解決の力ギ、本当にそつだ。

参・虎千代 side

私が茶の用意をしていると、光育様が厨に顔を覗かせた。そして、私に何も問いかけず、また厨をそつと出て行かれた。

最近、もう小坊主のふりも板についた。まだ師匠は来られてないが、見習いとして他の小坊主と一緒に作務をこなしている。光育禅師に、頭を下げるのもケジメだと思つて自然と頭を下げていた。

ちゃんと光育様とお呼びし、殊勝な行いをしてるつもりです。初めては気恥ずかしく照れてもいたが、周りも慣れてくれて落ち着いてきた。今では私の真剣な願いを皆受け入れてくれて、ありがたいと感謝している。

もう、若様に戻るつもりはない。ただの林泉寺のお虎で充分だ。

「失礼します、お茶をおもち致しました」

「入りなさい」

光育様の答えを聞いて、賓客を応接する広間へ入って頭をさげた。そして作法通り、栖吉から来た武士の前に茶を置き頭を下げた。

「粗茶ですが、どうぞお召し上がり下さいませ」

「これはありがたい。おや、あの時の小坊主ではないか？ いやいや奇遇だな」

「はい、奇遇でございますな。ところで足のお具合はいかがですか？」

「おお、もう痛みも引いた、大丈夫じゃ」

はつきり言つて、私の顔を見て気がつかない方がどうかしてる。私は母上と目元がソックリで、おそらく母上を知ってる方なら、間違ひなく虎千代だと判じる筈。この男、すこぶる抜けているのか？

まともに小坊主だと信じきっている男が、哀れに見えて、込み上げる可笑しさを抑えきれず、クスツと微笑んだ。ましてや、城に働きに来ないかと真顔で言っていた。

「なんだ、何かおかしかったか？」

あれえ、と周りを確かめたり頭を掻いたり、とんでもなく頓珍漢な反応を返す。これが栃尾城の城代か、人の良い男これなら皆が付いていくだろ。

「いえいえ、何もおかしくはございません。ご無礼を致しました」

「ほほっ……もう宜しかろう。正体をみせてさしあげなされ若様」

あんまりにも、この男が可哀想だと思ったのか、光育様が種明かしをしてしまった。

「なっ……まさか？」

啞然として私の顔を見つめ直す男に、私はひとつ溜め息を吐いて光育様を睨んだ。もう宜しかるなんて勝手な事を、やはり出て来るんじゃないかった。

#### 四・虎千代 side

恐縮して頭を深く下げたままの男、仕方ないもう偽らぬ。喰えないジジイだ光育様も、わしゃ知らんとすました顔をする。

ジジイは鬼門。

私が動かなければ、この場は納まらないだろう、仕方なく立ち上がり上座へと座り直した。

「よう来た長尾虎千代である。栖吉栃尾城代、本庄実乃面をあげよ」

威厳を持った顔つきで、白々しくも若様ぶって話しだす。こうでもしなきゃ、顔を青くして床に頭をすり付けている男の顔が、立たないだろと配慮した。

むろん初めて会った時に名前も役職もすでに聞いて覚えていた。これもなにかの縁か、袖すれあうも何とやら腐れ縁だな。本庄実乃は恐縮しきった面持ちで、ながれる汗を拭きつつ面をあげた。

「数々のご無礼、まことに申し訳ござらん」

なんだか今にも切腹とか何とか、言い出しそうな生真面目な雰囲気にも負けた。だから気にしなくて良いと、声をかけた。

「……しかし、そう言う訳にもいきません」

「実乃、もうよい私が言わぬのが悪かった。許せ」

はつきり言って白旗を上げたのは私の方、この雰囲気にも謝るほかなかった。お爺さまも人が悪い、なぜこんな男を使いにした。ああ新兵衛の鉄拳制裁のほうか、なんぼかマシだよ。

「ははあ、すでにお会いしていたのに……気付かぬのは拙者の不徳でござる。よう見れば青岩院さまに生き写し、いや参りました」

「ああ、もう良い。して私に何か用があったのではないか？」

「はい、何とぞ出家志願はお取り下げ願わしゅう存じます。栖吉の殿も心配してござる」

汗を拭いながら、必死の覚悟で言いつのる実乃に、説得されそう

になる。しかし、今更決めたことを覆す謂われはない。

「話しはそれだけか？私の気持ちは変わらない。お爺さまも体を悪くされてるように聞く、お大事にと申し上げてくれ」

もう関わりになりたくないと言っただけ言っただけで部屋をあとにした。落胆してるのだろうか、すまない決めてしまったのだ。

胸の奥の焔が、いとわしげに揺れる。ひどく後味が悪かった。どうせよと言うのか？私の進む道は出家しかない。それでいい、それで良いんだ。

五・実乃side

ああ、この方が新兵衛自慢の若なのだ。上座に付かれると極端な変貌をみせられた。あの威厳、たしかに主と仰ぐに相応しいお方。

主にとって不足ない人柄、なにより情け深い心。拙者の目は節穴だったわい。皆の申す噂をうのみにして、若様の人物像を誤解して捉えていた。だから本物が分からなくなっていた、申し訳ない限りだ。

冷や汗か何の汗だか分からないものが、タラタラと額から流れ落ちる。それを必死に拭うて説得を試みた。しかし、若様は言うだけ言っくと部屋を出ていかれ、もう駄目だとガツクリと肩を落とす、最初から負けていた。

「ほほっ……そう気落ちなさいますな。若様とて、本庄様のお気持ち、痛いほどお分かりの筈」

「しかし……このままでは栖吉に戻れませぬ」

光育和尚が、拙者を労り慰めてくださるが、心が晴れやしない。新兵衛に何と言おう、栖吉の殿はさぞ落胆なさるだろうな。グルグルと同じ事を考えては、途方にくれた。

「実はの、青岩院さまから明かされた秘密がございます。余人には漏らすなどのご指示ゆえ、すべては申せませんが……すこし耳を拝借いたしますぞ」

そう言つて光育和尚が伝えて来た内容は、驚くべき話だった。恐らく若様は神憑きであると、それも強力な闘神が憑いてるのではないかと申された。ゆえに、苛烈なご気性はそのせいであるうと……信じられない話しに目を剥いた。

だから仏道を修めることは、若様の為にも善い事なのだと申された。仏道の精神修養は必ず益となり、越後の王となるのは、若様の定められた運命。誰も本人でさえ覆すことは難しいと諭された。

「それは真実まことでござるか？」

「はい、おそらくは真実でございましょう」

もう、これで思い残すことはない。若様の出家志願は、とりあえず静観しようと思つた。この事、いち早く栖吉の殿と新兵衛に知らせなくてはならん。

「くれぐれも余人には漏らされるな本庄様。みな心に留められ秘匿されよ」

「はい、承知しました。光育和尚ありがたい。さぞ、栖吉で待つ皆も安堵しましょう」

そうして拙者は、林泉寺を後にした。まだ心残りもあつたが、胸に大きな秘密を携えて足取りも軽くなり、いつかあの方と一緒に戦場を駆ける夢をみながら栖吉へ帰える。

あの若様の、越後の王になられたお姿が早く見たいもんじゃ。さぞ凛々しく麗しい事だろう。

## 第5章・闘神「完」

## 第6章・修練

吉

待ちに待った師匠が来たのは春の終わりの事でした。少しづつ春らしくなる気配に、虎千代……いえ林泉寺のお虎も、うきうきと作務をこなしておりました。

のんびりとした寺の暮らしに、すでに馴染んだのか？ 兄弟子ぶる珍念たちともまあそこそこ、ケンカらしいケンカもせず、仲良く小坊主らしく暮らしていました。

そのように偉ぶらないお虎の態度に、寺に住まいする者は好感を持って迎え、光育和尚からの軍学や星占などの教えも、砂が水を吸い込むように身に付けて、林泉寺の神童と呼び声も高くなっていました。

はやく師匠が来ないかな。修行が待ちきれず、私は毎日何度も門のあたりに佇んでいた。

「頼もうー!」

やってきた高僧は、巖のような顔でしかめっ面をした大きな体躯の男で、墨染の衣を纏い威風堂々の登場だった。お虎はその威厳に憧れを抱き、かいがいしく足洗いの水桶を持ち出迎えた。

なんとという威風、このような立派な師匠に、教えを受けられるのは楽しみな事。

皆が、教えを受けるお虎を羨ましく見るなかで、峨山がせん禅師は、光育和尚と丁寧な挨拶を交わされ、弟子となるお虎を紹介された。

「遠路遙々、ようこそお越しなされた峨山禅師。拙が林泉寺の和尚をつとめる、天室光育ですじゃ。そしてそこに居る子が、今日より教えを受けるお虎です。お虎や挨拶おし」

お虎が、峨山禅師の足を水桶で洗っていると、光育の声がかかり手を止めて殊勝な態度で挨拶をはじめ。

「お虎と申します。どうぞよろし………」

峨山禅師の錫杖がお虎を打つ、打たれたお虎は。挨拶もろくに言えずあせんと師匠を見上げる。

「渴　　ッ！！なんだその顔付きは　　！！生意気な態度は許さん！！警策を　　！！」

他の小坊主たちは、恐々と警策を峨山禅師に手渡した。胸に込み上げるものはあったが、お虎は禅寺のならい通り、無言で両手を合わせ背中をだした。

酷い屈辱だった。

お虎は必死に唇をかみ、警策の音がなりやむまで耐えた。周りの者も止める手段もなく、為すすべなく呆然と二人を見ている。光育ですら、顔を青白くさせても見守っているのだ。誰もが仲裁に入れる状況じゃない。

こうして、厳しく辛い修行が始まったのでした。

こんなに修行が厳しいなんて聞いてない。師匠は私に何か恨みでもあるんだろうか、情け容赦なく警策で背中を打たれ、なんの弁解の余地すら与えられぬ。

こんな理不尽なことを、許せない。まして負けるのは嫌だ。負けてたまるか？

初っぱなから警策で何度も打ちすえられた。この反抗的な目が気に入くわぬと……生まれた家を誇る態度が好かない。だれが誇ったと言っのだろう、まして目など生まれもった物だ。

悔しかった。なすすべさえない暴力の数々が、じっと耐えるしかない己が厭わしい。

私の望んだ事は、心穏やかになる出家の道だ。あの峨山がなんぜんじ禅師がくるまでは、心が解放されたように、伸びやかに小坊主の生活を営んでいた。

出家の修行は厳しいですぞ。確かに光育様はおっしゃって

た。  
「大丈夫ですか、お虎さま」

「……大事な」

妙に珍念たち小坊主が優しく気づかい同情してくれるのが、屈辱だった。だれに情けをかけられるのも、負けた気がして嫌だった。

「それにしても、あの峨山禅師のやり方は酷すぎる。お虎さま、何も意地になって修行をされなくとも……師匠は求めれば他にもおりましよう」

「……嫌だ。私は峨山禅師でよい。一矢むくいなければ気がすまぬ」  
「分かりました、ああ頑固ですねえ。こちらに膏薬を置いておきますからね」

流石に珍念も呆れたのか膏薬を置いて、さつさと部屋を出る。泣いてる姿を見られたくないと、私はずっと後ろを向いていたが、本当は彼らの心使いが嬉しかった。

のそのそと膏薬に手を伸ばし、届かない背中に薬を塗りつける。どうせ治療しても明日にはまた、警策で打たれる。傷は治りかけては、また傷口が開き血が滲むのだ。

母上から頂いた僧衣も、いたるところが擦りきれてボロになっていた。でもまた明日もあるから繕いしても着なければ。あの方は身繕いにも煩いからな。

己に負けそうになる。でも修行が辛いからと、逃げだせば笑い者になるだけ。それだけではどうしても嫌だ。

自分ながらに嫌になる、なんでこんな負けず嫌いなんだろ。逃げればすむのに、ほんと馬鹿だ。だけど己に課した茨の道、なにほど悔やむことがある。どうしても出家の道は諦めたくない。

密かに光育和尚は、峨山禅師を部屋に呼び寄せた。光育は内心心配でヤキモキとしていたのです。厳しい修行をとあえて頼んだ手前、厳しすぎるとは言えないでいた。今日こそは峨山禅師の、本音を聞かせて頂こうと待っていた。

「光育殿、お呼びでありましたか？峨山でございます」

「峨山殿、お待ち申しておりました」

峨山禅師の巖のような武骨な顔には、意外な事に柔和な笑みが見えました。

「そろそろ、呼び出される頃だろうと思っておりましたよ。光育殿」

「何ゆえ、そのように」

ゆつくりと流れる水のような動作で、光育の前に座ると丁寧な一礼をする。

「ほんに善き教え子に廻り合い申した。光育殿にはさぞ、ご心労をかけた筈、申し訳ない」

「なんと、若様は善き教え子ですと？拙はその様に、峨山殿が思っ  
て下されているとは……気付かず相済まぬこと」

「いやいやと、峨山禅師は顔の前で片手を振った。光育は、その時はたと閃くように気がついた。」

「峨山殿……いえ宗九様は若様の本質を、試されておいでか？」

「さよう。神憑きの神童ならばこそ試させて頂き申した。しかしながら毎晩、鬩神が襲ってきおって難儀も致しましたが……何とか生き永らえてございますよ」

「ほう、それほどですか？成る程、当代一の名僧と呼び声高き宗九様でこそ、出来た離れ業。有難いことです」

林泉寺は曹洞宗の禅寺でしたが、臨済宗の流れをくむ名僧と名高い宗九に、特別に若様の手解きを頼んだのは、光育から見て彼の精神の成長には、禅に主眼をおく曹洞宗より、なにより考案に重きをおく臨済禅の心を学ばせる方が、良いと決心したからだった。

「いえ、名僧などんでもない。あのような逸材に会うのは初めてにござります。誉れなこと。何とか一念を自在に操る術すべを覚えて下されば、あとはシメタもの修行は進みましよう」

「勿体無いお言葉、この光育ご恩は忘れません」

床に頭をすりつけて、礼を言う光育和尚に、お顔を上げて下さいと峨山禅師が声をかける。

「若様は光育和尚のような、賢明な師匠を持たれた……光育和尚は今伯楽にござろう」

「その様に仰いますな。宗派は違えど、曹洞宗の教えも学ばれた貴方に教えて頂き、若様も果報なことですな」

「光育和尚、暫くのご辛抱お願い申し上げます」

四

修行はますます厳しさをましてゆくのです。その一つが廊下の雑巾がけでありました。日に何度も同じ場所をやり直しさせる峨山禅師に、さすがにお虎も怒りを現わにする。

「もう、こちらは雑巾がけが済んでおります。そんなに何度もやり直す必要がありますか？」

「渴　　ツ！！お前の目は節穴かあ　　！！まだ終わっておらぬ、今一度やり直せ！！何事も心眼じゃ、心眼でとらえよ！！！」

峨山禅師は、わざと水桶を足で蹴って廊下を汚す。せつかく研ぎあげた廊下を汚されて、お虎も頭にきた。そして体躯の違いも、気にするでなし、峨山禅師に掴み掛かっていくのです。

「何ゆえですか？私を苛めて楽しいか？」

「渴　　ツ！！その性根歪んでおるわ！！歪みある一念では掃除さえ口々に出来ぬ。良く考えよ！！馬鹿者！！！」

体躯の違いもあつて、簡単に投げ飛ばされ、汚れた水に僧衣を濡らし悔し涙さえ、飲み込もうと峨山禅師を睨みあげ、胸には憤怒の焰が猛々しく燃え盛る。

「その目が気に入くわぬ！！そこか邪念め！！邪念ある邪な一念、それが抑え切れねば修行など無用！！今一度やり直せ！！！」

そう言い放つと、お虎に背中をむけ立ち去ろうとする峨山禅師に、お虎は熱き焰の狂うばかりの心をのせて、重心を低く移動させてバ

ネをつけ拳をふりあげ背中に殴り掛かる。

「うわああ　　！！！」

「渴　　ッ！！みえたり邪念！！！」

気合いと共に、お虎の拳を受け取ると、右足を低く外側に出し流れる水の如くに力を受け流す。峨山禅師は合気道に通じる受け流しの要領で、お虎の力を封じ込めた。

「修行が不服ならば、いつなりと打ち込んでまいれ！！！」

「ああ、打ち込んでやるとも。こんなのは修行なんかじゃない！！私を苛めてなんになる！！！」

フンと鼻でお虎を笑い、蔑む目をして挑発する峨山禅師。かくて二人の争いは始まった。お虎は、隙あらば師匠に一本打ち込もうと虎視眈々と伺って、その悉くが返り討ちにあうのだが……お虎も負けず嫌いな性格、執拗に何度も拳を打ち込もうとする。

この二人の攻防は3年あまりも続き……お虎も強く大きく成長してゆくのでした。

五・お虎 side

なにより峨山禅師の教えは私の心に響いていった。一念の自己管理から、自在に操る術まで手解きをつけた。

いまだから解りもする。峨山禅師の仰る意味が……さぞ、生意気な子であつたらう。

三年たつても、まだ打ち込むことさえできぬ。そして、なお山伏達の棒術も会得させて頂き、得がたき師匠でありました。落ち着いてみれば、かの方は柔和な笑みでいつも私を見て下された。

「おや、お虎何をしているんだ」

「はい、母上から頂いた。かつての僧衣を見ておりました。さぞ、峨山禅師様もお辛かったでありましょうな」

「何程もなかつたわい」

言葉少なく照れたように見て見ぬ振りをなさる。そのような控えめに頭がさがる。そして小さくなつた僧衣を大切に行李にいれて、今日1日も修行三昧。

このような静けさが私のものに為つた。この時代に生まれて、光育和尚さまや峨山禅師さまにお会い出来て良かった。生まれた事さえ呪っていたが、修行出来て良かった。出家の道は遠いけど、たしかな道を歩いてゆこう。

「托鉢に出る。用意をたのむ」

「はい、承知しました」

明るい声ははずんで返され、峨山禅師も目元のシワを刻まれた。二人の師弟に残された時間は短い、峨山禅師には臨済宗のかつての法壇に戻る時が迫っていた。

そして、お虎にも新たな風が吹き始め、生涯の友と出会い、

そして容赦ない運命の歯車が回り始める音がする。

春もさかり、お虎はひととき大きく成長していたのでした。そして少年は、大人への階段を登りはじめた。かの「聖将」上杉謙信はいまはまだ、林泉寺のお虎でしかない。

運命は回る、乱世の風は容赦なく彼に牙を向け始めた!!

第6章・修練「完」

## 第6章・修練（後書き）

いつも臥龍転生を読んでくださりありがとうございます。ここで第4部・林泉寺編を終わりと致します。

第5部・絆編は、あらたな無二の友との出会いを書いています。腹心鬼小島弥太郎や蔵田との出会い。そして新たな飛躍。お虎は大人への階段をかけあがる。出来たら初恋なども織り込んでいければ良いなと思います。

正直、この章は駆け足すぎて心残りも多々あります。有坂の未熟でしかありません、お詫び申し上げます。もう少し私に文才があれば納得いく物語も書けたのにと後悔がつのります。本当に文才のない有坂で申し訳ないです。

ツエツト様いつも、励ましのメッセージを有り難うございます（生き返ります）。鶴様のアドバイスも嬉しく身にしました感謝いたします。

宜しければご感想など頂けましたら嬉しく思います。またご意見ご指摘も大歓迎でございます。有坂は未熟者ですが、なんとか頑張りますので、長い目で見て下さると有難いですm（ ）（ ）m。

読者様に感謝を。私ごときの未熟な文章でも、読んで頂けるのが有坂の幸せです（は〜と）

追記

第21部分・第4部・林泉寺編の前書きに、謙信公の宗派について  
脚注加えました。峨山禅師についても脚注加えました。宜しければ  
参考にして下さいませ。

2009/5/1記

第5部・絆編 第1章・斜陽（前書き）

第5部・絆編

第1章・斜陽

## 第5部・絆編 第1章・斜陽

吉

すこし話しを戻し当時の越後事情を振り返りますれば、為景公の死去後、天文6年（1537年）およそ一年ぶりに守護の上杉定実が、守護に返り咲いた。それは、越後における動乱をいち早く押さえるために、穏健政策として行われた。

その背景には、春日山方が守護の甥である上条をはじめ、揚北衆の武力を警戒したことによる。やがて、越後国内は政局が二元化するようになる。

その事により守護方の勢力を今以上に固めるために、鳥坂城主中条藤資が暗躍し、同年に奥州伊達家より時宗丸を養子を迎える話しが決まっていった。

しかし、この養子問題は波紋を呼び上条方の間でも、賛否両論が現れた。中でも強硬に反対したのは、本庄である。彼の城は奥州と隣接する地域にあり、隣国の主が風上に立つのを嫌い、反乱を起こして抵抗した。

天文八年（1539年）ついに揚北衆の結束も乱れ、中条による本庄城襲撃が行われた。そんな越後の内乱のさなか、奥州伊達家でも養子縁組みに反対する家臣の抵抗が激しくなり、この養子縁組みは、無にかえされることになる。

また一方の春日山城でも乗っ取りが企てられ、晴景派閥と思われていた河合親子が反旗を翻す。あわや、春日山城乗っ取り寸前に、

河合に同調していた柿崎景家の返り忠（元の主に寝返る）により、ことなきを得て河合親子は敗走することになった。

かくして、越後国内は乱れに乱れゆく、守護代の長尾晴景の醜聞もあり、打ち続く飢饉にも国策が二転三転して対策がとられることがなかった。そんな二極化した支配体制下では、税が何倍にもはね上がっていき、やがて越後の民からも見放されていく事になる。

そのことで春日山方が支配のおよぶ範囲も、しだいに狭くなりやがては府中春日山付近の治安のみに終始するようになり、食いあぶれた民は野盗になり、おちぶれた侍たちは野武士集団となり村を襲う、そのような不穏な輩が闊歩する地域となっていた。

まさに、為景公以来の治世の礎はうしなわれつつあった。

三

さて当時、春日山のふもとは春日町と呼ばれる城下町が広がっていた。直臣団や側近馬廻り衆、商人、手工業者らが軒のきを連ねていた。しかし、そのような時勢のなかのこと往時の活気もなく、全国からやってきていた商人たちは、関税が値あがりし治安の悪さも手伝って、次々と越後を去っていきつつあった。

「おい、聞いたか？あのバ力殿、また派手に女狩りをやりやがったぜ」

「ほんとうかい。相変わらすヒデエこつたな、城も家臣に乗っ取られかけたそうじゃねえか、あんなゲス野郎じゃ長尾も終わりだなあ」

春日町の一角、うらぶれた酒場でくだをまく男達、彼ら荷担ぎ人

足は、お店が滅<sup>たな</sup>つて仕事にあぶれ、昼間<sup>たな</sup>つから酒場でくだをまいていた。そんななか、彼らの話しを聞いて、怒りだす常連の飲んだくれ親父。ガダンと空いた酒瓶がひっくり返す。

「るせー、長尾は終わらねえ！！あの方が居るのに終わったたまるか！！」

「なんだと　！！酔っぱらいのくそジジイに言われたかない！！そんな奴が居やがるなら引っ張ってこいよ、えっジジイ」

毎度のごとく喧嘩がはじまる。この酒場にいる連中は、みんなケンカを見慣れている。だから関わりになりたくない奴は、さっさと端へと非難したり、面白可笑しく囃し立て野次を飛ばす。

「いいぞ、もつと遣れ　！！」

「ああ、ケンカなら外でやってくる。店が壊れるう　」

一触即発、罵りあいが始まり最後には、つかみあいの乱闘にまで発展する。いつもお決まりのパターンに、店主はオロオロと外に出てやれと喚きたてる。だけど今日はなんだか違ってた。一人の男が、ケンカを始めた人足に近寄った。

「まあまあ、お兄さん方。あんな狂言信じてケンカしちゃ、もったいないですよ。ここは一つ、手前に免じて手を引いてはどうですか？」

「んっ……越後屋の旦那。こりゃどうも」

越後屋の旦那と呼ばれる男は、柔らかな物言いに反して、およそ

商人と言うには、似つかわしくない迫力のある眼光と、ガツチリとした身体つきをしていた。そして、旦那と呼ばれた男は、そつと彼らに小金を握らせ黙らせる。

「飲みなおして下さいな。このジイさんは、手前が連れて帰りましよう」

「なんでえ、俺はまだ飲むぞ!!酒持ってこい!!」

「はは……そうですね、なら今の事詳しく聞かせて下されば、うちで酒を飲ませて差し上げます。そら立つてください」

この旦那、物腰が柔らかい割に、力があるのか酔った男を楽に肩に担ぎ上げ、お騒がせさまと愛想を振って酒屋を出たのだった。

参・蔵田 side

まったく良いひろいものをした。昨日は越後の旦那衆で寄り合いがあり、手前も新参者ながら呼び出され、しぶしぶ集まりに出掛けていった。

越後の商人の座に集う旦那衆は、日増しにその構成員を失いつつあった。そのなかでも大店の多くは、いち早く越後を見捨て他国へと出ていった。残ったのは、出ていく力もない小さな商いをするお店か、手前のような新参者しか居残らなかったのだ。

話し合いは、無駄に終わり商人の司さえ決まらずに、話し合いはお開きとなった。だれが貧乏クジなど引くものか、商人の司も越後が安定化すれば旨みがあるが、先行きが読めなさすぎる。帰りがけに酒場に立ち寄り、手前は一杯引っ掛けて帰ろうとしていた。

「長尾は終わりじゃねえ!!」

こんな言葉を正気で吐く奴が、いまだに居ることに驚いた。そして話しの続きが妙に聞きたくなつた。

そして手前は、少しの金を喧嘩を買つた男に渡し、そんな発言をした件の酔っ払いジジイを店に連れて帰つた。かつてより、働く者の人数が少ない店内を見渡して、件の酔っ払いは悪態をつく。

「なんでえ、不景気な店だな。俺に飲ませる酒は、本当にあるんだろうな」

「ああ、ちゃんと用意するさ。佐野助や上物の酒をたんと買つてこい、お代はつけにして貰えよ」

「旦那様、ツケは無理でございますよ。最近じゃツケでは売ってくれません」

手前は佐野助の言い様に、あやうく舌打ちしそうになりながら、しぶしぶ懐から金をだして渡した。為景公存命中は、派手な商いをして越後各地に店を出していたが、最近の治安の悪さから、店もたたみ春日町の本店だけにして凌いでいた。税も高くなり、実入りも格段に悪いので、よけいな出費に舌打ちもしたくなる。

このジジイ、本当に長尾家の内情を知ってるのか？店に利益となる事なら、身銭を切つてやつてもいいが、ロクでもない話しながら叩き斬つてやる。

そんな事を内心では考えていたが、おくびにも出さず対応する。

手前だつて元は伊勢の武士だ、商人風情になつては居るが人を斬る腕は鈍つてない。

「すぐに上物の酒が届きますよ。まあ、一先ず奥で話しの続きを頼みます」

「チツ、酒呑んでからじゃなきゃ話せねえからな」

上手く奥へと誘導していく、件の酔っ払いはさそわれ、疑うこともせずほいほい奥へついてきた。

#### 四・蔵田 side

「さあ、続きを話して下さいませんか？ああ、まだ名も伺つてませんな、貴方は何者でいらつしやる」

「フン、酒がないうちは喋らねえ」

「困りましたね、では手前から素性を申し上げましょう。手前は、元は伊勢神宮の御師おしでした。名を蔵田五郎左衛門くらたごろうざゑもんと申します。かつては都で公家衆相手に商いをしておりましたが、打ち続く戦乱に嫌気がさして、生前の為景公の威風を聞いて、越後でお店を始めたばかりの新参商人でございます」

「ふん」

件の酔っ払いは、妙に偏屈なジジイだった。酒が無いと口は軽くなるまいようで、どつかりと胡座をかき自分の家のように、気のおけない振る舞いをする。我が家は、これでも大店の商人あきんどのつもりで、奥は贅沢なしつらえになっている。

普通の男だったら、豪勢な部屋のしつらえに、縮こまって萎縮するだろうに、このクソ度胸はなんなのだ。

「ほほう、ここは手の込んだ作りになってるじゃねえか。この床柱が、気に入ったぜ！俺は源三郎という大工の棟梁だ！！かつて為景様のもと城勤めをしていてな、工部の親方なんぞをやってたんだ」

「ふむ、成る程」

どこが気に入ったのか、我が家の床柱を丁寧に撫であげ、酒もなののにペラペラと喋りだす。どんだけ偏屈者なのかと呆れ果て、源三郎の言うがまま、ふむふむと合いの手を打ち聞いていた。

「俺が言ってたのは、為景様の秘蔵っ子で、栖吉の総領息子のこつた」

「ほほう、栖吉の総領はたしか長尾房景様の跡を継いだ越ノ十郎景信さまでしたかな。あの方が為景様の秘蔵っ子ですか？」

「あ、馬鹿かお前。あの景信って奴は栖吉長尾傍流の使い走りよ。直系は栖吉のお虎って呼ばれた虎御前さまだぜ、覚えときなよ。笑われるぜ」

この源三郎は、城勤めしていただけあって長尾家の内部事情にやたら詳しくかった。そして為景様の秘蔵っ子の事が知りたくなり、先をうながした。

「で、為景様の秘蔵っ子とはどなたの事でしょう」

「そんな事も知らないのか？あれだあれ……神仏がえらばれし、定め  
の神子さまよ」

「ああ、それは十年前位に騒がれた、為景公の末子で虎千代様とか  
仰いましたな。あの方が本来の栖吉の総領息子ですか、なるほど。  
しかしあの方なら、すでに出家されたと噂に聞き及んでますが、春  
日山にまだ居られるのですか？」

そうして深いところまで問いかけると、源三郎は急に黙り込んだ。

## 五

源三郎は、あれ以来酒が入ろうともちつとも喋ろうともしない。

そこで蔵田は話しを違う方向に持っていく事にした。

「それにしても晴景さまのご乱行には困ったものですな。女を囲う  
どころか寵童ちゆうどうまでも侍らせているとか……長尾も終わりでしょうな」

「るせ　　！！長尾は終わりなんかじゃねえ。今に虎千代さまが、  
春日山へ帰ってきなさる。賊徒どもは、又虎千代さまに殺られて、  
逃げていくに決まってるなあ」

かかったと内心喜んだ蔵田は、膝をすすめて虎千代なる者の動向  
をさぐるうとした。

「ほう、凄くお強い方なのですな。しかし又とは以前にも同じ事が  
ありましたか？」

「あつ……これは内緒だぞ。いいか虎千代さまが七つの頃の戦を知  
ってるか？あの上条に勝った戦だが、あの見事な勝ちっぷりは、晴

景なんぞの手柄でなく、虎千代さまの手柄なんだぜ」

そうして源三郎は、虎千代さまの事を自慢気に話します。それはもう、たっぷりと身振り手振り、微にいり細にいり詳しくかつ饒舌に語った。語り終わった頃合いをみさだめて、蔵田が質問をはじめ

る。  
「本当に帰って来なさるんですか？ なんだか話しを聞くと、相当晴景さまに恨まれてるようで……あの晴景様が戻してくれるのでしようかな」

「あたりまえだ、殆どどの春日山城の重臣たちは信じてるんだ。虎千代さまが帰られるまでの辛抱だって言っただけでなさる」

「ははあん、だからこんなに劣勢でも、まだ春日山城は以前と同様に確りとしとられるんですねえ」

蔵田は、おおよその察しはついたと納得するような顔付きをする。そして一計を案じる。……もし長尾家がまた再生するなら、賭ける価値はあると判断をくだす。

これは全財産を投げ売ってでも、虎千代さまなるお人に賭けてみよう。それが転機となる筈だ。

「源三郎さん、いや棟梁！！この越後屋の蔵田五郎左衛門、虎千代さまのお味方になりたく存じ上げます。ぜひ虎千代さまにお取り次ぎくださいませ」

そう言うと、源三郎に深々と頭を下げた。ビックリしたのは棟梁の方で、酒気も抜けたように呆然と蔵田を見つめた。

「……い、良いけどよ、変わった男だな、お前さんも」

「そうですか、これでも商才はあるんですよ。けして虎千代さまに損な事にはなりません、ひとつ宜しくお願い申し上げます」

そんなこんなで越後屋の旦那である蔵田は、虎千代に興味を抱き、源三郎の仲介で会いに行くことになる。出家を志す虎千代にとっては、迷惑きわまりない展開に発展しそうな予感がします。

第1章・斜陽「完」

## 第2章・朋友

吉

春日町の一角で、蔵田と源三郎の密談が行われているころ、知るよしもない林泉寺のお虎はどうしているのでしょうか。

「は、はくしょん」

「んっ……風邪か？いつまでも俺の膝になついているからだぞ、ガキだな」

今まで、奇妙な縁で知り合った小島弥太郎（こじまやたろう）の膝を借りて横になり、お虎は上杉定実から来た手紙を読んでいた。あいかわらず、お館様らしく隠居したいとボヤキ、たまには顔を見せると言う、たわいもない手紙だった。

「いや、誰か私の噂をしているらしい」

「噂ってな……お虎、お前何かした？」

「私が何かしなくとも、災難は向こうからやってくる」

ほら、と謎な答えを弥太郎にかえし、今まで読んでいた手紙を、赤鬼のような太い眉毛を寄せて悩む弥太郎に手渡すと、やおらムクツと起き上がり、背中を丸め無邪気に笑いだす。

「ククツ……定実殿らしいだろ。木戸はあけてあるから、垣根はやめろと手紙が来たぞ！久しぶりに菓子でも頂きにいくかな」

「定実殿って？……おいそれって守護様じゃなかったか？それよりお虎、菓子って何の意味だ？お前の言うことは俺にはサッパリ分かんらん」

お虎はうんと大きく背伸びをすると、答えるつもりもなく縁先へと歩みを進める。そんなお虎の後ろ姿を弥太郎は視線で追いかけるが、諦めたようにため息をついて、上杉定実の手紙に目を落とす。

「……守護殿から手紙を戴くなんて、お前はいったい何者なんだ？」

「私は、ただの林泉寺のお虎だ。何者にも成る気などない」

お虎の内心では、またぞろ春日山に引き戻そうと、誰かの思惑が動きだした感じがして嫌だった。なぜか虫網にジワジワと絡め取られるように、身動きさえ出来なくなる予感に恐れてさえいる。

弥太郎は守護から親しげに手紙をもらう、お虎の素性をまったく知らされずにいた。だが、なんとなく良い所の生まれじゃないかとは、薄々気がついていいる。この弥太郎という男、元は為景公に弑された前の上杉顕定の家臣で、最後まで守護と共に戦った小島家の総領息子だった。

今では、落ちぶれ領地も持たず、縁者を養うのにも難儀している。彼は大きな体躯を持ち武芸の腕も抜きん出ているが、いまさら敵方に奉公しようとは考えていない。

式・弥太郎 side

この林泉寺のお虎は、驚くほど交際範囲が広い、それも越後の実

力者達から町人、百姓まで様々だ。皆に人気のある美貌のお虎は、以外と人使いが荒いとおもつのは俺だけか？

だからといって俺は、お虎の側を離れる意思是さらさらない。お虎の隣は、なぜかとても居心地が良い。お虎の内在する危うさを知つてからは、なお目が離せなくて過保護になつた。

初めてお虎と会つたのは、まだ俺が野盗まがいの頭を気取つていた時のことだつた。元々、俺は有力な国人衆の長男に生まれ、俺の家は度重なる守護代為景との戦にまけて没落してしまつた一族のものだ。

そして父母を先に亡くしてしまい、残つた家臣や頼る一族を支えるために、俺はしかたなく野盗に身を落とす。家臣や一族のなかで腕に覚えのある者を引き連れ、あちこちの村をおそつのが日常茶飯事になつていた。

ある日いつものように村を襲つていた俺たちは、変に大人びた目をした僧形のお虎に遭遇した。まあ今から思い返すと、アイツに会つたことが運のつきなのた。年端のいかぬ小坊主に何が出来ると馬鹿にして、お虎を7人程で取り囲んだ。

「かような殺生働きをするなど、そなたらは虚しくならないか？」

「ふん、小坊主の分際で舐めた口をきく、ねえ親分」

その頃の俺は、思い返すとヘドがでるのだが、すでに野盗稼業にどっぷりとつかり。正論をふりかざす、切れ長の目元もすしげなお虎を、憎み苛ついた目で睨んでいたと思う。

「俺達だって、好きで野盗になった訳じゃない。そんな減らず口叩けないようにしてやる！！おい皆、やつつけて思い知らせてやるんだ！！！」

俺達は、すさんだ目付きで抜刀し小坊主のお虎を取り囲んだ。だがお虎は、動じる気配すらみせず、哀れみのこもった悲しそうな目で俺達を見回した。

「……そうか、野盗とは哀れなものだ。こんなに荒れ果てた世の中でなければ良かったのに」

「だまりやがれ、小坊主ずれが偉そうなんだよ」

お虎のいいざまに頭にきた手練れの秋山源蔵あきやまげんぞうが、怒りのままに切りかかり、皆も源蔵に続いて間合いをつめて殺到する。かつては武士だった腕に覚えのある俺達にとって、無力にみえた小坊主などに切つて捨てる自信があった。

参・弥太郎 side

ところがだ、どうした事か一瞬にして5人の仲間が、手傷を負い地に倒れていた。ただ一人平然と立っていたのは、血のりのついた刀を片手にした小坊主だけだった。

「このクソが、仲間は何をしやがった！！」

信じられない光景に頭に血がのぼり、参謀格の戸倉与八郎とくらのやむちろうが、止める間もなく小坊主に切りかかる。与八郎の力押しに圧する刀は、華麗な剣捌きで受け流され、タタラを踏んだ所へ、一撃が加えられあっさり倒された。そして俺をみて薄く微笑んだお虎に、はじめて

戦慄をおぼえた。

「そなたに問う、なぜ野盗になった？」

刀を突き付けて、この場に至っておきながら、なお切る様子も見せずに俺に質問する。とんでもなく変わったお虎に、俺は半ばやくそに叫んで答えた。

「俺たちは元上杉家の家臣、為景との戦に破れ没落した一族だ！幼い子や一族の者を生かすために、俺たちが野盗に成り下がるしかなかったんだ！！」

「……そうか、すまない。怪我人の手当てをするぞ。そなたも手伝え」

あっさりと謝るとサッと刀を鞘にもどし、懐から塗り薬やら白い布きれを出す。まさか、こんな場面でいきなり刀を引いて傷ついた者の治療にあたるとは……まして何に謝るのだ。俺は毒気を抜かれ呆然と刀を抜いたまま立ちつくす。

「なんだ、まだ仕合たかったのか？野盗の頭」

治療の途中で振り返えると、からかい口調で声をかけるお虎に、俺は呆れて少し肩を竦めると刀を鞘におさめた。なんだか、コイツには敵わないと思った。

「盗賊の頭などと呼ぶな、俺は小島弥太郎という名がある」

「……ふうん、弥太郎か。じゃあこの男の傷にこの薬を塗ってやれ」

お虎は、傷ついた仲間を嫌な顔ひとつせず、迅速に手当てをする。でも、なぜあれだけ剣の腕がたつのに、手傷だけで殺さずにしたのだろ。俺たちの常識に当てはまらない、件の小坊主をしげしげと見つめていると、不意に声が掛けられ戸惑った。

「そんなに殺してほしかったのか？」

お虎は、まるで俺の考えを読んだかのように問いかける。俺は思わず顔を硬直させて首を横にふっていた、おそらく顔は真っ赤になつてたと思う。そんな俺の顔を見て、お虎は思わず忍び笑いをもらした。

「……な、なんだお前。人が悪いぞ」

ずいぶんと年下の小坊主は変に人が悪い、まるで数百年生きた老人が、まだ年若い若者をからかうような雰囲気をもつ。

#### 四

「おい坊主、こっちは無事に避難させたぜ。……何してやがる」

「んっ……段蔵さんか。見れば解るだろ。手当てをしてるんだ」

段蔵は刀の鐔に手を掛けたまま、弥太郎たちを用心深く睨み付けた。なんだか身のこなしが、只物でない雰囲気とその場に緊張が走る。

「ああ、弥太郎この人は味方だから気にするな」

「……いやしかし俺達は野盗してた方で、つまり……」

だいたい弥太郎たちは、野盗なのだ。気にするなと言われても気になってしまうのが道理だ。俺達は訳が解らずおかなしな顔をしていると、段蔵が刀から手を離し肩をすくめた。

「そうそう、そうゆうこつた。まさか野盗ふぜいを助けるとは、呆れてものが言えないがな」

「ふふつ……たまには、こんな事もあつても良いじゃないか？段蔵、村の人を返しても良いよ、もう終わったと伝えてくれ」

「チエツ、わあつたよ。それで坊主はどうする」

「気の毒をしたから、彼らを送つて来るよ。心配はいらない、もう私に手出しはしないだろうさ」

年かさの男に平気でタメ口調で話すお虎に、弥太郎はコイツ何者なんだと太い眉毛を寄せて考え込んだ。やる事なす事、変わっている小坊主で、見た目は細っこいが、剣筋は冴えざえとして迷いがなかった。

「まあ、いいだろう。その大男！！うち坊主、ちゃんと送つて来るんだぞ！！」

「……あ、うん」

何故かわからないが、段蔵のあまりの剣幕に、弥太郎は何度も頷いた。お虎はよほど、大切にされているのだと雰囲気でわかったが、内心は釈然としない思いで段蔵を見送っていた。

「おい、あいつ何者なんだ？」

「さあ、あれ変わり者じゃないのかな？そんな事より、いい加減手伝つたらどうだ」

噛み合わない会話に、弥太郎は肩を落とし、小坊主の逆らえない秀囲気に、唯々諾々と仲間の手当てを手伝った。お虎にしても、若様じゃないのに、いまだに世話を焼く軒猿のことを、変わり者の集まりと呆れて好きにさせている、おおよそ的<sup>ま</sup>ハズレな答えでもないのだが……弥太郎としては符に落ちないのは当たり前前の事だった。

五

そうして、お虎は弥太郎たちを、隠れ家まで送ってきた。彼らの隠れ家には一族郎党あわせて、おおよそ40〜50人程になる大所帯だ。そして半分以上が年端もいかない子供ばかりで、お虎はたいそう驚いてた。

「子供達ばかりだな？」

「ああ、子達はみなお頭が連れて来なさるんでな、仕方なく養っていたのよ」

帰る道中で、風変わりな小坊主と馴染んだのか、源蔵が気安く答えを返す。言わなくて良いのにと弥太郎が睨むのもお構無しに、平気でペラペラと話してしまう。

「ふうん、弥太郎殿はなかなか良い奴なのだな」

「おい、殿は付けなくていい、源蔵は口が軽すぎる」

「よし、決めた。お前達、私を手伝ってみないか？ちゃんと給金はだす」

「な、なんだ藪から棒に……給金って……」

弥太郎達は一瞬戸惑ったが、この風変わりな小坊主の事を何だか気に入って、話しだけは聞いてやろうと言う雰囲気になっていた。いや、まごうかたなく強き武に惹かれるのは、侍だった彼らにはありえる事だったのだろう。

「孤児院をつくるのだ」

「おいおい、寝言を言うなよ。そんなもの直ぐに作れる筈がない」

「な、なんで俺達が孤児院を手伝うんだ？」

おおかたの意見はマユツバナ話しと受け取り、不服そうな顔をするが、頭の弥太郎だけは真剣に考え込んでいた。そして、お虎は弥太郎を伺い答えを待つ。

「出来るのか？」

「出来る！！私に任せる」

「なら、俺は話しに乗る」

いつもは、皆の意見を聞きながら一人勝手に決めたりしない弥太郎だったが、この時は様子が違ってた。真剣に受け答えして、己だけで答えをだした。仲間も頭の言う事なので、仕方なく従う事にし

た。

やがて、お虎は林泉寺の敷地を借りて、言葉どおり早々と孤児院を建ててしまうのだが、呆れたのは弥太郎以外の仲間達で、頭の弥太郎は当然と言う顔をしてたとか、後で与八郎が皆に語って聞かせている。

「弥太郎、そろそろ皆が畑から帰って来る頃だな」

「ああ、迎えに行くか？」

お虎は、子供達がたいそう好きらしい。何だか正体不明の奴だが、そういう所が信頼出来ると俺は思っている。コイツは俺らを何処に連れて行くのだろう、妙にこの先が見たくなった。変わり者と言われようが、一生付きまとうつもりになっていた。

第2章・朋友「完」

### 第3部・分岐（前書き）

注

歴史的資料には、いまから語る内容はありません。これは架空のお話です。

脚注

京都雑掌とは、長尾家の京都における外交窓口を司る長尾家の官僚の事です。

論旨とは、天皇家より発布される指示書のようなもの。内外の戦の仲裁や大義名分を得る内容でした。おもに戦国大名は内乱を静める役割に使っていたと云われています。

### 第3部・分岐

吉・お虎 side

さやさやと木々のこすれる音がする。禅堂に神聖なくつきが充ち  
ピンと張った静寂が私をつつみこむ。ただ教導師が静かにゆかを  
歩く音と、たまに警策の音が鋭い音を響かせる。

長尾家の暮らしと比べてずいぶんと質素な暮らしたが、心は遙か  
に高く澄みきって気狂いの私には、丁度いいところだ。俗世のしが  
らみを捨て素直な私自身となれる。

気狂い、私は胸の青白き焰のおもむくままに、気が狂ったよ  
うになる。だから気狂いの病と呼んでいる。もうこれとも長い付き  
合いになり、精神修行と身体的な成長により、ある程度抑える工夫  
が ついた。

精神修行を始めた頃はまだ甘い小坊主だった。私を徹底的に厳し  
く教導したのは、峨山禅師。いや本当は大徳寺の徹岫宗九禅師で  
した。次代の大徳寺を担う方であるのに、私の為に越後まで来て下  
されていたのだ。いまでは感謝しています。そして正体を教えて頂  
いたのは、京の都へ帰られる少し前のこと。

そして、峨山禅師と共に近隣の各国を巡礼しつつ、京の都に  
登りました。心には密かに出家を決意して……いまから三年も前の  
話しになります。

私と峨山禅師、お供には段蔵を伴って林泉寺を後にした。当初、  
光育様は私が京に行く事を、なかなか賛成しては下さらなかった。

それは、私の本心をすでに見極めておられたのだらう。ただ、暗殺者が多くなつた事を考慮して許されたのです。

最終目的地は京の都、私たちは巡礼の目的もあり、まずは信濃の善光寺へ向かつたのです。善光寺には、生きている仏像と評判をよぶ一光三尊阿弥陀如来さまがいると聞いて、出家の発願をしようと強く考えていました。もう長尾の軛から解放されたいと願つてたのです。

善光寺は山号を定額山<sup>じやうがくざん</sup>。いにしえより四門四額<sup>しもんしがく</sup>として、東門を定額山善光寺と、南門を南命山無量寿寺<sup>なんみょうざんむりょうじゆじ</sup>、北門を北空山雲上寺<sup>ほくくうざんつんじやうじ</sup>、西門を不捨山浄土寺と申します。

そしてなにより宗派を越えて、宿願を叶えてくれる靈驗あらたかなお寺として、古来より敬われ。また公家方から女人をおつれし、お上人様とする尼寺でもありました。

この時、私は京で出家を遂げて、二度と越後に帰るつもりはありませんでした。しかし、旅を続けるうちに気持ちに変化が現れて来たのです。

式・お虎 side

私の決心を根底から覆す出会いがあった。それは、甲斐の名刹ときこえのたかい、臨濟宗の恵林寺に参禅した時のことでした。

そこは、荒れ果てた名刹とは名ばかりのボロ寺であつたのです。国の民も暗い顔付きで、見て回つた近隣の国々とは、雲泥の差があつたので、おおよそ何が国の民を、虐げているのか私にはすぐに理解出来ました。

仏道を軽んじる行為と民の嘆きに、堪らない苛立ちと、慚愧の念が湧いて来たのです。

為す統べさえなく、毎日出来る限りの禅寺の掃除と修復にあけくれ、救うべき力のない事に落胆し、容赦ない現実を前に、見えない神仏に何故救わないと糾弾し、虚しさに囚われた。

人の世に、神仏の救いの手は差しのべられないのです。人を助けるのは又人でしかないと思い知りました。

そんなある日、寺にやって来たのは板垣信方いたがきのぶかたという武士だった。彼は、切迫つまった様子で、寺までかように願いにこられた。

「甲斐の未来のために、今すぐどうしても、歌が習いたいのでござる」

板垣さまと言う方は、仏道の寂れた甲斐にあつて、恵林寺を影からお支え下さっている奇特なお人と、和尚から伺つて、私は拙いながら昔習い覚えた歌の手解きを、見て差し上げたのです。

少しでも、嘆く民のために為るのならと……甲斐の未来の為に、その言葉に力を尽くそうと思いました。

現代を生きた私には、越後も甲斐も区別する気持ちは少しも無かった。だって皆同じ日本人だもの、もしかして遠い未来で、縁者となる人が苦しんでるのではと思うと、けして他人事とは思えなかつたのです。

そして板垣さまに歌の基本を教え終わり、長居した甲斐を出立し

よう考えていた頃、恵林寺に板垣さまと主の晴信さまが、私に会って見たいとお越しになりました。

晴信さまは、中肉中背ガツシリとした体躯に、武将とは思えない、文学を愛され聡明さを兼ね備えた立派な方に見えました。しかし、この方が甲斐武田の跡取りだと伺って、急に世俗の噂話を思いだし、なお憤る気持ちが高まって、キツイ言葉を吐いてしまったのです。

「嘆く甲斐の民のため、力を振るえるお立場なのに、わざとウツケのふりをして、何故国政に関わらないのです！！民を哀れに思し召した事はあるのですか？」

「おことには、ワシの気持ちなど判らぬ！！その顔みとうない、命まではとらぬゆえ甲斐を去るが良い」

参・お虎 side

言葉どおり命ばかりは助けられ、甲斐を後にした。しかし、道中の私はずっと黙りこくりに、己に問いかけて居たのです。あれは、私自身にも言えるのではないかと……長尾の家に末子とはいえ生まれついたのに、私は越後の民を省みた事があるのか？

越後では、父為景の治世とは遙かに異なつて、あちこちで戦禍に見舞われ、どれほど民は難儀しているのだろう。それは、出家へと逃げ出す己の真実を写しだし、長尾家に生まれた因縁を感じさせ、罪の意識に苛まれたのです。

私はまだ何も為してはいない。このままでは、父上の末期の約束にも背いてしまう。

『越後の民と、家族と家臣、城に働く者たちを守ってくれ。よく晴景を支え、越後を頼のむ』

そのように固く約束した事を鮮明に思い返した。バカだ今の今まで、記憶の端にも思い返さなかったのに……目の前の出来事に嫌悪し、簡単に約束を忘れた己に怒りを感じる。

出家は今で無くとも出来る。今は越後の民を救うのが先決。それが、亡き父上の信頼に答える道なのだ。

そう、私は決心を覆したのです。『越後の民を守りたい』、私が心おきなく出家出来るまで、越後の民を守り父の信頼に答えたいと思っただのです。

しかし、春日山を追い出された今の私に出来るのは何だ。どうすれば兄上を支える事になる、答えはまったく出なかった。

京への旅の間、心に懸かる事はその事だけ、いくら禅を組んだとしても、集中出来なかった。そしてついに京に到着し、元師匠の芳野を頼り近衛家に居候し、二月ばかり、あちこちの名刹を巡っても同じことで答えは見つからない。

自棄になつて、都人と詩歌に興じたり、近衛家の娘の絶姫とストレス発散とばかり、装身具や衣装の買い物にあけくれて、およそ褒められた態度ではなかったのです。浮わつた気持ちは、宗九禅師にも伝わったのか、ある言葉を頂いた。

『禅は只今に生きる教え。静中の静より静中の動、静中の動より動中の静こそ難しい。頭で考えずとも動けば自ずと道は開かれよう』

答えはまさしく、簡単な事だった。越後の民の側近くで見守り、己の出来る事から助けとなれば良いんだ。

丁度その頃、越後で乱が起こり府中春日山城が危ないと、軒猿の手の者から密使があつた。私は直ぐに長尾家の京の都における、雑掌しやうの要職にある、金余昌綱かなまりまさつなを訪れ、密かに綸旨りんじの発布をたのみ、一足早く海路で越後へ帰つたのでした。

#### 四

お虎と晴信は、僅かな出会いを切っ掛けとして、互いの正道を歩き始めた。武田晴信は、父である信虎を、クーデターにより駿河へと追放し、家臣団を強固にまとめ歴史の表舞台へと躍り出ました。そして長尾家の末子は、越後の民を救うため、出家の道を今は諦め、二年ぶりに越後に舞い戻つたのでした。

さてさて、縁とは奇妙なるもの、この二人はどの様に生きて行くのでしょうか、それは神仏のみが知り得る事なのかもしれませぬ。

おや、禅堂の鐘の音が聞こえます。お虎の座禅が終わる頃合いでしようか、早々と弥太郎が待ち受けているようです。彼はじつと静かに禅堂の前に佇んでおりました。

お虎は合図のリンが鳴ると、深く一礼し禅堂を退出し、ゆっくり空を見上げ緑がふかく目にしみたように目をすがめた。そして弥太郎の存在に気がつくと、少しだけ口元を引き上げて笑んだ。

へえ、誰にも言わず禅堂に隠っていたのに、いつも犬のよう

に私の居場所を嗅ぎ付ける。やはり仇討ちを考えてるせいか……。

「お虎、光育様がお呼びだ。それと、あの偏屈ジイさんが来てるぞ」

「ああ、わかった。まずは光育様に会ってこよう。源三郎には、待っていてくれるように伝えてくれるか？」

「わかった、伝えよう」

そして、お虎は光育様の部屋へ向かい、弥太郎は腕を組んだまま林泉寺の離れに向かう。お互い背を向けあつて別方向に数歩あゆむと、お虎は立ち止まり、弥太郎に背を向けたまま声を掛けた。そして弥太郎も歩みを止める。

「すでに、知れてるのだろう、私が為景の子なんだと……父母の敵が討ちたいのなら答えよう」

「俺はお虎に着いていくと決めている。今更だ……阿呆め」

「……しかり。私は大阿呆だな」

お虎はくつくつと笑いだし、弥太郎は照れを隠すように頬を掻いた。そして、二人は無言のまま互いに歩むべき方向に歩きだした。別たれる運命もあり、また添う運命もあった。

その待ち受ける先には、一体何があるのだろうか。また大きく運命の歯車が回りだした。それは、新たな出会いを引き寄せて、お虎を過酷な運命へと誘うのでした。

林泉寺のお虎13歳、歴史の表舞台へと上がる、一年ほど前

の話しです。

第3章・分岐「完」

## 第4章・転機

吉

静寂が包み込む林泉寺の最奥に光育禅師の部屋はあった。お虎は正座しひとつ深呼吸をして肩の力を抜くと、部屋の中に声を掛ける。

「お虎です。お呼びと伺い参上しました」

「ああ、お虎。待っておつた入ってこられよ」

なんだか何時もと違う緊張した雰囲気、私を押し包み胸の焔が異常を感じ揺らめていた。

お虎は、建具をそつと引いて中へ入り、作法どおりの手順で建具を元に戻すと、光育禅師に向かい一礼をする。光育の部屋はござっぱりと片付いて、抹香の匂いがした。

「内密の話しゆえ、近こつ来て貰えますかな」

光育の顔は、深くシワが刻まれて内心の苦悩が表に現れていました。お虎は、はいと低く返事を返し、いざつて膝を前に進ませる。

「実は、上杉のお館様が隠居されると、お実城様に誓書を下されたのです」

「誠ですか？それは不味いですね」

守護を帰り咲かせたからこそ、揚北衆とは小康状態が維持出来て

いたのです。国が乱れてる今、守護が隠居すればもつと事態は悪くなる。事に乗じて乱を企む者もあり、すべての争いが表面化して、小競り合いでは済まなくなる。

「拙は、しばらく春日山に詰め、対策を検討することになりました。貴方も覚悟をしておいて下さい」

「……覚悟？」

「貴方も元服出来る年、城に呼び戻されるかもしれませんが、その覚悟です」

お虎の眉間にシワが寄り、深く黙考するように天井を睨んだ。光育禅師は深いため息を吐き、じゅんじゅんと子供に説くように、論していくのだが、お虎は黙り込んだまま返事を返さないのです。そこで光育禅師は、お虎の内心に一步踏み込んだ。

「お虎や、何を恐れているのですか？」

「春日山に帰れば、出家は叶いますまい。それを恐れているのです」

それは、お虎にとって重大なことだった。越後の民を側で守るため、出家はいつでも出来ると思いつき帰って来た。そして近隣の農家を助けるために野盗狩りを始める。今は孤児院も作り上げ、未来の越後の為に人材の育成につとめている。孤児院の運営は赤字つきだが、身銭を切って補っていた。しかし出家を諦めたわけではないのだ。

「お虎は頑固者ですね。分かりました考え時間をあげましょう。良く己に問いかけてみるのです」

お虎は何も答えず、静かに頭を下げて部屋を辞した。光育禅師は、苦汁を飲んだ顔付きでお虎を見送ると、春日山城に伺う準備を始めたのでした。

式

天文11年（1542年）4月5日、守護の上杉定実は隠居を決意し、越後一ノ宮に参詣し誓いを立て、誓書を守護代長尾晴景に送る。

それは越後をゆるがし、動乱を呼ぶ。

揚北衆の領地は、下越に集中している、おそらく最前線となるのは栖吉長尾氏の支城である栃尾城と、長尾守護代家の被官、山吉豊守もりが城代を勤める三糸城になると予想される。

揚北衆の領地と栖吉栃尾城とは、間にいくつかの元守護上杉の家臣だった者の拝領地や小領主がいたが、各々が敵対し凌ぎをけずっていたのです。今まで長尾に敵対する領主は居なかったが、守護が隠居した今そうとも言えない事態になっていくのでした。

「光育和尚、若様は如何ですかな」

「直江さま、あれは頑固者ゆえ説得は難しかろうと思います」

「困りましたな、これで何とか若様さまを引っ張りだす腹づもりでしたが、いやはや虎御前さまとよう似て頑固者でいらっしゃる」

春日山城にある直江屋敷の一室で、直江と光育は密かに会ってい

た。二人が思い返すのは、虎御前の輿入れの時のこと、あの方を説得するのに難儀した覚えがあったと、二人揃ってため息を吐いた。

「青岩院さまから、説得頂けば折れて下されようか？如何でしょう  
光育和尚」

「いえ、おそらく無理でしょう。あれは己で決めた事は、己で考え直さねば納得しない者です。京へ行く時も説得すら受け付けず、出家されてしまうのではと覚悟しておりましたが、不思議な事に自ら決めて越後に帰ってきよりました」

「そう、あれは不思議な出来事でしたな。不測の事態に綸旨の準備までされて、若様は越後を見捨てた訳ではないと、このわしでも感じ入り申した」

あの頃、なぜ若様が戻って来たのか、周りは憶測を深めた。しかし、お虎にはお虎の理由があり、手回しよく綸旨を準備させたのは、己の決意にもとずいて考えた最良の手だった。だから城にも戻らず、相変わらず林泉寺に居座っていたのだが……周りは不思議がっていたのです。あれは大手柄だというのに、一向に城へ戻る気配もない若様の行動原理が皆読めなかった。

「若様は、何を考えておいでなのやら、わしにはさっぱり分かりません」

「まあ直江様、急いては事を仕損じると申します。もう少し、かの者に考える時間を与えては貰えまいか」

実は、守護の隠居も裏では直江が動いていたのです。巢穴に籠った若様を引っ張りだす危うい賭けでありました。

参

お虎は、そんな周りの思惑さえつゆ知らずに、光育禅師の部屋を後にして、林泉寺の離れにある自室に向かつて足早に歩いていきます。この頃、離れには源三郎だけでなく、件の蔵田を伴って待ち受けていたのでした。

「ああ、遅くなって悪い、源さん……」

お虎は、離れに入つて驚き急に言葉を止めた。弥太郎と源三郎以外に、ピシツと背筋を正して座り、商人の格好をしているが、武人のような気配が伺える人物が居たのです。

「こらりやどうも。今日はね、どうしても若様に会いたいという、変わり者を連れてきたんですぜ」

「源さん、私はただのお虎です」

お虎は、人前で若様と呼ぶ源三郎を一睨みすると、上座には上がらずに、弥太郎の隣にそ知らぬ顔して並んで座つた。源三郎は、そわそわとして蔵田に目をやると、落ち着いた声で蔵田は話し始めた。

「ほう、ただという言葉は普通の方は使いません。成る程この方が、源三郎さんご自慢の若様なのです。ご挨拶が遅れて申し訳ございません。手前、越後屋の蔵田五郎左衛門でございます。本日は若様にお話があつて参りました」

蔵田という男、肝がよほど太いのか変わり者なのか、平気で若様と何度も言った。お虎の眉間のシワは深くなり、弥太郎は内心ハラ

ハラと見守って、源三郎はてえしたもんだとご満悦な様子です。

「どうでい、立派な変わり者でしょう」

「ああ、変わり者だ」

お虎は、どれだけ私の周りには、偏屈な変わり者が多いんだとこぼし、弥太郎は、類は友をよぶと考えて肩を竦め、蔵田は平然となりゆきを見守っていました。あきらめてお虎は、蔵田に口を開いた。

「私は、あくまでも若様と呼ばれる立場ではありませんが、話しとは何です」

「たいした事ではありません。手前は若様のお味方が致したく参上しました」

深々と頭を下げる蔵田に対し、お虎は何だか軒猿の源流と、言い回しが似ているなど、あの柔らかな目元を思いだす。急に物思いに耽るお虎を、弥太郎が困ったように袖を引っ張る。一度思考の海にハマり込むと、なかなか戻ってこないお虎を気使ったの事だった。

「頭をお上げ下さいますませんか越後屋の蔵田さん、味方とはどうゆう意味でしょうか？」

「言葉のままです」

不穏な空気その場に流れ、さすがの源三郎も黙って見守っていた。

とうとう念願の若様に会うことになって、あの源三郎ジイさんと林泉寺へと出掛けることになった。林泉寺の離れに若様は逗留され、今は孤児院を經營されていると、供侍のような者に聞いた。

急な事だったので、随分待たされたのだが、初めて会った若様は、僧衣をまとい髪は高く纏めて、清廉とし凜とした清々しさのある若者でした。その容貌は、類をみない程美しく、人を惹き付けるキツく上がった目と、知性を感じさせるギョツと引き結ばれた唇が印象的だった。

武人としての気配も申し分なく、手前が故意に発した気配を直ぐに察した事で、かなり腕は立つと推測する。めっけ者だと笑みを深くして、初めから若様と呼んで翻さなかった。あのジイさんに変わり者と紹介されたのだから、開き直り変わり者で通すことにする。

「はあ……越後屋の蔵田さん。味方という意味は良く分からないが、味方になるなら素性位教えて下さってもよいでしょう。あなた、ただの商人ではありませんね」

沈黙にあきたらめたように、話しだす若様は驚くような質問を投げ掛けた。やはりそう来たか、ここは本当の素性を話すことにしたのです。

「手前は元は伊勢神宮の御師をしておりました。今では商人をしておりますが、それも25年ごとに執り行う伊勢神宮の祭祀の、費用を稼ぎ出すためなのです」

「そうですか、帝におかれては酷くお困りの様子嘆かわしい事です。伊勢神宮もその庇護を受けるお立場にあり、苦しさはひとしおです」

よう。貴方は金余殿をご存知か？」

この若様は良く京の都の事情を知っているらしい、金余殿といえば御師の仲間だ。越後で商いをする切っ掛けは彼がくれたものだった。

「金余殿とは同じ御師仲間でございます。長尾家の京の雑掌を長く勤めておられ、手前もその縁故で越後に参りました」

「なるほど、長尾家は勤王の家柄おそらくその縁で、亡き父為景の代より雑掌となられたのでしよう。そうですねか金余殿の縁者ですか、かの者には京の都に逗留中、随分と世話になりました。特に小次郎とは年も近く、よく歌会に付き合ってくれたものです」

京の歌会とは、公家をはじめ文化人の集まりで、どれ程望んでもなかなか縁故と歌の才がなければ、入れて頂けない会合であり、そんな素養まで持ち合わせた若様に、手前は憧憬の念が湧いてきたのでございます。

## 五

蔵田とお虎は京の都の話題で盛り上がった。話題においていかれた源三郎と弥太郎は、何だか分からない話しに何度も首を捻っている。

「どうやら蔵田さんは、信頼のおける方のようにです。段蔵さん居るのでしょうアレ持って来て下さい」

若様が、呼び出すと影のように段蔵が現れた。そしてチツと舌打ちすると木箱を一つ差し出した。およそ軒猿を知らない面々は、呆

れたように若様を見つめ、弥太郎はため息を吐いた。

「これは、貴方と同じ変わり者の軒猿の手の者です。味方を望まれるなら、彼らにも便宜を図って頂く事になるでしょう。それと、これは私の手元にある資金、これを蔵田さんに預けます。孤児院も赤字なので、増やす手伝いを頂けませんか？」

お虎は、しれっと重大な事を打ち明け、面々は軒猿の出現にも驚いたが、資金の提供にも腰を抜かした。蔵田から資金を提供するはずだったのに、当の若様から資金提供を受けて面喰らっている蔵田の様子が伺える。

「手前を信用なさったのでしょうか？」

「いえ、御師の生業を信用したのです。御師は誇り高くあるのですよ、これも天照大御神の導きと考え、協力くだされば有難いのですが、如何です？」

「いやはや、これは一本取られましたな。手前は、若様の資金を持つ積りでまいりました。これでは、逆でございます」

蔵田はお虎の知識の豊富さに驚いた。そして、頭の回転のよさに舌をまき、人を惹き付ける潔さに感心したのです。御師の実像を知る者は少なく、まして御師で有ることに信を置くとは、余程の教養と知性がなければ及ばない事なのだ。実はお虎にしてみれば、金余の自負をいつも耳にタコが出来る程、京に居る間じゅう聞いてたから理解していただけなのだが……蔵田は深読みした。

「これは、投資です。私にはお金で繋がった縁の方が、はるかに信

用できます」

「ほう……その様なものでしょうか、手前には投資との言葉の意味は分かりかねておりますが、お手伝いさせて頂きます」

投資の意味を理解しないまでも、お虎の気持ちに答え蔵田は気持ち良く協力してくれる事になった。そして、蔵田とお虎は近寄り、ヒソヒソと密談を始めたのです。二人の密談が、あまりに異様な雰囲気、弥太郎は思わず距離を取り、源三郎はというと額の流れる汗を拭いていたとか……さてさて如何になりますか、楽しみな事です。

#### 第4章・転機「完」

## 第6章・緑生

吉・お虎 side

私は出家を諦めたわけではない、長尾家に生まれた因縁や、亡き父との約束を守るために一年まえ、越後に舞い戻ったのです。

帰って来た頃の越後は、荒廃が進みあちこちで小競り合いが起り、力なき者は蹂躪され、守る者もなく野に晒される。解ってしまったのだ。何が越後を変えてしまったのか……為政者の心が国に影響を与えているのは確かだった。

越後には新しい秩序が必要だと思った。しかし私にはその力がない、出来る事をやるしかないのだ。

そして野盗退治をしている時に、弥太郎たちと出会い、孤児院を経営する事になった。孤児院になった子供達に教育を施し、次代の有用な人材に育て上げようと試みてはいる。しかし戦禍は広がりをみせ、孤児の数は右肩あがりが増え、孤児院の経営は行き詰まる。だが、蔵田との縁で上手く行きそうな気がしていた。

この世界に生まれ変わって、すでに13年もたった。時々思い出すのは前世の家族の事だった。もう夢でしか会えない、私がこんな大昔に生まれたと、知ったならどんな顔をするかな。

「お虎……書き物しながら居眠りとは器用だな」

「……弥太郎。違うぞ寝てはいないから……やはり寝ていたのか？」

気が付くと私は寝入っていたようだった。書き物机にうつ伏せになって、思わず口の周りを拭いたが、紙に点々とした水痕は涎だった。ここ何日か徹夜したからな、今は内乱で長く滞ってる青芋あおぞの流通を狙って、計画を練っていたのです。

「まったく、お虎は根を詰めすぎだ。これは源三郎ジイさんから届いた見取り図、意見を聞かせるって言うってたな。青芋しかないあんな険しい山の中に隠れ里を作るなんて、正気か？」

「正気だ。林泉寺も手狭になったから府内組と青芋調達組に分ける。太郎も獣達と住み処が出来て喜んでいたぞ。後はあの近辺の野武士と野盗を片付けるだけ、弥太郎そちらの手筈はどうだ」

「ああ、桑取り辺の破落戸は段蔵殿の活躍で味方に引き入れてきた。あとは庄ノ内という川賊の根城を潰せば終わりだ。しかしあれは守護の元家臣が親玉だ、潰すには憚びない」

弥太郎は心根の良い男だとおもっ、かつて野盗を生業にしていたにしては、義侠心に厚く弱きを助け強きを挫く、さすがに野盗の頭を張るだけの器量がある。彼らの事を己の境遇に置き換えて、深く考えているのだろ。

「では、潰す前に私が説得に行こう。弥太郎達のこともある、けっこう良い男かもしれないしな」

「駄目だ！！お虎に危険なマネはさせられぬ。荒事は俺に任せておけ」

式・虎千代 side

まんまと弥太郎を出し抜いて、私は桑取りに向かっている。最近  
は特に過保護になって、危ない荒事はさせようとしないのだ。丁度  
書類仕事ばかりで退屈していたから、良い気分転換になると思い林  
泉寺を抜け出した。

私は、仲間の誰もが傷ついて欲しくない、まして死なせてな  
どやるものか、私が傷ついて死ぬ方がどれくらいましだろう。偽善  
だろうが欺瞞だろうが、知った事か……私が私を許せなくなるのが  
嫌なのだ。

私は僧衣をまとい網代笠を目深にかぶり、錫杖ひとつを片手にや  
つて来た。やってきた桑取りの自然は、雄大で雄々しさのなかに慈  
愛が満ちあふれ、己がちっぼけな存在だと気づかせる。山々の風景  
はのびやかに、新たな芽生えの季節をむかえ、残雪はそこかしこに  
残っている。

いい季節だ。豊かな実りは人を人らしくし、国を富ませてく  
れる。越後は豊かな自然に恵まれて、人が人らしく生きられる。そ  
んな、美しい国になればいい、いや美しい国にするんだ。

ちっぼけな私に何が出来なのか、それは分からない。だけど、夢  
を叶えたいと望み、足掻いてみる事くらいは出来る筈だ。ああ、バ  
カだな私って、こんな事くらい分かっていたのに、何に囚われてい  
たのだろ。

もし私が、ここを無事に切り抜けられたら、春日山へ帰ろう。  
人が人らしく笑顔の絶えない国、そんな美しい国に越後がなれば、  
何もいらぬ私はそれだけで満足できる。

雄大な自然それは神の御寵、人のことは人が力を尽くせば良い、

人だから間違う事もあるだろう、その時は立ち止まり又この気持ち  
を思い返そう。人は数百年と生きられない、私は未来に産まれてく  
る子供達のために、何か夢を残せればそれが幸せなんだ。

戻ることの出来ない未来、そこにいるあなた達に届けばいい、  
豊かな自然と人の愛。きつと夢は繋がり続く、夢を担う人がいる限  
り、私がいなくとも繋がりを続ける。

「さあ、行くか」

覚悟を決めて一歩踏み出し、いつ果てても良いと観念して、庄ノ  
内の者たちが居る根城を目指した。心は軽いうきうきとして、新た  
な出会いはあるのだろうか、どうかそれが良い夢に繋がりますよう  
に、私と出会い彼らにも幸せになって欲しい、彼らも人ならば私も  
人、話せばきつと分かり合える。きつと……優しい未来はやってく  
る。

参

お虎がこっそりと抜け出して、庄ノ内へ向かっている頃、林泉寺  
では弥太郎が、アイツはそろそろ諦めたのかと、茶を持って再び離  
れの部屋を訪ねていた。しかし、彼が訪れた部屋はもぬけの殻で、  
机には一枚の紙が残されていた。

「あのバカ!!直接会いに行くなんて、命知らずなことを平気でし  
て、まったくアノ頑固者めっ」

くしゃりと書き置きを握り潰し、何故一人で出掛けたんだと呟い  
て、弥太郎は取るものも取り敢えず、お虎の後を追いかけてようと、  
必死の形相で走りだす。途中、見掛けた林泉寺の小坊主をつかまえ

て、連絡を頼むと言いおいて厩舎へ向かい、馬を借り桑取りを目指した。

「お虎、俺を置いて往くな、何処までも着いて行くと決めたんだ」

間に合え、間に合ってくれ。アイツは俺たちの未来にとって必要な奴なんだ。こんな所で死んで良い奴じゃない……頼む間に合ってくれ。

庄ノ内を睨んで5キロほど手前、仲間が陣地を組んでいる場所へと、弥太郎はたどり着いた。乗ってきた馬は、かなり無理をして飛ばしてきたので、大量の汗をかきバテているようだった。弥太郎は劣るように馬の首を、ひとなですると飛び降りて、仲間へと声をかける。

「お虎が、一人で説得しに庄ノ内に向かった!!」

「……な、なんだって、そりゃ大変だ!!どうするんだよ」

「おい、何で止めなかったんだよ!!」

皆の責めるような眼差しにも、弥太郎は寡黙に口を引き締めて、言い訳ひとつさえせずに、黙々と庄ノ内へ助けに行く準備を始める。みかねた戸倉与八郎が、陣地の仲間をなだめ指揮をとり、庄ノ内に踏み込む手筈を整えた。

「弥太郎、こっちの準備は整った。俺たちの若様を迎えに行こうぜ」

「すまない与八郎、みんな悪いが俺に付き合ってくれ……」

「オラ、弥太郎シヨボイ顔すんな。そんな顔したら置いて行くぞ」

「ああ、源蔵行こう」

彼らは、荒んだ毎日から救いだし、未来の夢を与えてくれたお虎を、なにより大切にしていた。だから、無謀な賭けであっても、彼を救いだしたいと願うのです。

そして彼らは、手に手に武器を携えて陣地を後にした。目指すは5キロ先にある庄ノ内の根城、固い決意を胸に秘め皆の心はひとつになる。

お虎、頼むから無事でいてくれよ。俺がいる限り、お前を絶対死なせてやらないからな。

第6章・緑生「完」

## 第6章・緑生（後書き）

こんにちは有坂です。現地取材に向かったので、投稿が遅くなり申し訳ないです。文章も短くなつて、区切りの良い所で旅先より投稿しました。悪しからず、ご了承下さいませ。

霜月さま、評価感想ありがとうございました。また、本日テンジさまより嬉しい評価感想を頂き、ありがとうございます。自宅にたどり着きましたら、ゆつくりとレスを付けさせて頂きますのでお許し下さいませ。

### 注意

大河でもありました桑取りの話は、歴史的資料には確認できません、恐らく原作者さまの創作になると思います。

しかし有坂的には良い話だなと心に残っていたので、謙信公の場合を想定してお話しを作りました。これは、あくまでも架空の物語、笑って許して下さいと有難いです。

## 第7章・川賊

吉

お虎は、桑取り川の流れをたどって、庄ノ内の根城に向かっていた。その足取りは早く、かつては太郎と共に山中を巡り、鍛えた足で苦もなく山道を切り抜ける。

すると突然、道端の藪から二ヨキと現れた手が、お虎の手首を捕まえて引き寄せた。予期せぬ事態に手を振りほどこうとするが、反対に口を相手が塞いでしまい、とうとう藪の中まで、引っ張りこまれてしまった。

「…………モガッ」

「シッ、馬鹿。俺だ段蔵だ…………坊主何しに来やがった？」

引っ張りこまれた藪の中には、軒猿の加藤段蔵が居た。そして、よく見ると何人かの手下も一緒のようだ。彼は拘束をとくと、心底呆れたようにお虎を見るが、お虎はキョトンとした顔付きをして言葉を返す。

「…………なんだ段蔵さんか、驚かさないでよ」

「驚かさないでよじゃないだろ…………、こっちが驚いたぜ。まったく林泉寺に置いて来た奴らは、何をしてたんだ」

段蔵は痛くなる頭を抑えて、ブツブツと文句を言うが、お虎は平気な顔で、先を急ぎますからと藪から出ようとする。段蔵は慌てて

それを引き留め、眉間にシワを寄せた。

「まさか、交渉しに行くつもりか？」

「バレました」

「いやいや、バレたも何も真顔で言うな。……それに、刀も持って来て無いようだが正気か？」

お虎の突拍子もない行動に、いつも振り回されている段蔵は、彼が何を考えているかくらい検討がついた。しかし、武器を何も持たず交渉に行かせるなんて、許せる訳がない。

「ただ、交渉しに行くのに刀はいらないでしょ」

「死んでも知らんぞ」

「いいよ、人はいつだって死と共に生きている。生きているうちに何を為すかという事が、肝心なんだ」

「……参った。但し、危なくなったら有無を言わず割って入るかな、おぼえとけ」

達観するお虎の決意にまけて、段蔵はチツと舌打ちすると手下の手配りを始める。お虎は、薄く笑って手を振ると、藪を割りもとの道に出て、たった一人で庄ノ内の根城へ向かったのです。

ありがとう、これで心置きなく行ける。

やって来た庄ノ内の根城は、砦のように頑丈な柵で周りを巡らせ

ている。お虎が門番に声を掛けようと近づくと、砦の中が変に慌ただしい事に気がついた。そして、中から駆けてきた男が、僧衣姿のお虎に気がつくと、丁度いいと言って、すんなりとなかに招き入れる。

「おお、坊さんがいた。丁度良かった来てくだせえ」

弐

荷かつき人足のように尻をからげた件の男は、お虎を中に招くと、早く早くと急かせて、砦の裏手へ連れて行く。

すんなりと入れたのは良いけれど……何を急いでるんだろう。

「頭　つ、坊さん連れて来やしたぜ」

「馬鹿野郎、坊さんなんか連れて来やがって、医者だ医者を呼べ」

お虎が連れて行かれた場所は、砦の裏手にある船着き場のような所だった。河原には、まるで着物を着たまま川へ入ったように、全身ずぶ濡れで、岸に引き下げられた若い男が、ぐったりと横たわり、その周りには、何人もの屈強そうな男達が心配そうに見つめていた。

あれは川で溺れたのか？今から町まで医者を呼びに行っても間に合わない。いちかばちか、試してみよう。

お虎は、男達をかき分けて、倒れている若い男の側により、脈拍を確かめようと手を取り、心音を確かめるために心臓のあたりに片耳を寄せた。すると、見ていた男の一人が、坊さんの不審な行動を、止めさせようと手をだし叫ぶ。

「コイツ医者でもないのに、何をする！！」

「まあ、この坊さん医術の心得があるようだ。おい坊さん、出来るか？死なせたら只じゃおかないぜ！！」

頭と呼ばれた男は、さすがに武人だけはあり、落ち着いた態度でお虎に手を出した手下を止めると、威嚇するようなダミ声で話しかけた。お虎は威嚇をしれつとかわして、平然と事実だけを述べる。

「分からない、心の臓は既に止まっています。でも方法はある、やるだけやってみます。皆さん手伝いをお願いします。ああ、私は医者ではないので、医者は念のために呼んで来て下さい」

「ああ、頼む助けてやってくれ。誰か医者を呼んでこい！！みな坊さんの言う通りにするんだ！！」

人工呼吸なんて実際に人相手にやった事はない。ただ自治会の役が当たった時に、消防署で救命訓練を人形を使ってやっただけ。

「この方の名前を教えてください」

「わしの倅で、伊之助と言う」

お虎は、伊之助と何度も呼び掛ける事を周りに居た男に頼むと、錫杖と笠をほりだして人工呼吸の準備を始める。皆はあぜんとして坊さんを見守り、ただ従うしかなかった。

「まずは、気道確保からだな」

はつきりと覚えているかはあやしいが、救命訓練を思いだしブツブツと一人で呟いて、伊之助の顎を上にあげて固定すると、胸を開いて両手を重ね心臓の上に置き、123と数を数えながら渾身の力で強く胸を押ししていく、ただ助けたいと一心に祈りながら……

参

お虎は、迷いなく伊之助の口の中に手を入れると、上がりきった舌を下げ鼻をつまんで、一定の間隔をあけ長く息を吹き込む。周りにいた伊之助の仲間達は、人工呼吸してるだなんて知らないから、驚いて止めようとし、頭が落ち着いた仕草でそれを制止する。

「お前ら、黙ってみとけ。あの坊さんも必死なんだ」

「……しかし」

代わる代わる胸を押ししたり、息を吹き込んだむが反応はまだない。時が過ぎ、お虎にも焦りがみえ、目に落ちてくる汗を片手で乱暴に拭った。丁度時を同じくして、表のほうに急に騒がしくなり、転がるようにして、さつき医者を呼びに走っていった男がやって来た。

「頭　　っ、大変だ！！変な奴らが、凄い剣幕でこっちにやって来ます」

「チィ……こんな時に誰だ！！手の空いてる者は表に回れ、門を閉め門をかけて守るんだ！！」

頭は、顔を歪めて悔しそうにし、たまりかねたように指示を飛ばす。外野の混乱した空気を一切きり離し、お虎は懸命に人工呼吸を続ける。命を助けるには一刻をあらそう、たとえ弥太郎達が追って

来たからと思いついても、手を離すことは出来ないのだ。胸に灯る蒼白い焔は、ゆらゆらと揺らぎ焦りを煽る。あの消防署の講師は、30分が限界と言ってたが、時を厳密に測るものは、この時代のこんな山の中にある筈もなく、ひたすら続けるしかなかった。

神や仏が居るのなら伊之助を返してくれ。彼もまた守るべき越後の民なのだ。どうかどうか頼む、動け、動いってくれ。

一心に深く祈りながらお虎は必死に続ける。そんな緊張感をはらんだ一瞬、とつぜんゴボリと伊之助が水を吐き出し、止まっていた彼の心臓が再び命の鼓動を刻みはじめた。お虎は、嬉しさのあまり大きな声をあげて、ドンと尻餅をつき、這いつくばって伊之助を覗き込み、ペシペシと頬を打つ。

「う、動いた！……伊之助わかるか？助かったんだよ目を開けて！！」

「何、生き返つただと……伊之助、おい伊之助起きろ起きるんだ。川賊が溺れ死んだら笑い者だぞ」

頭が、慌てて駆け寄り声をかけると、伊之助はうつすらと目を開けて父を見て手をのばす。危機が迫っているのも忘れて、頭は伊之助の手を握りしめると、己の額を息子の手に擦り付けて泣いた。そんな感動的な一瞬に、お虎はホツと胸をなでおろし、気がゆるむと弥太郎達の事を思いだし、間抜けな声をあげる。お虎にかかつては、弥太郎達も哀れなもんだ。

「ああ　っ、すっかり忘れてた！！ちよと外に来てる奴らを、止めてこなきゃ不味いよな」

「……な、なんだいアレあんたの仲間か？」

#### 四・曾根平兵衛 side

まったくこの坊さんは、喰わせ者だった。こいつは偉丈夫な男達を黙らせ、数人の共をえらび武器まで持たさずに、この砦に帰って来た。どうやら、この坊さんがアイツらの親玉だったようだ。まったく豪胆なのか、抜けてるんだか分からん奴だ。

わしは坊さんと向かいあって座り、お共は後ろに控えて座らせた。後ろの奴らは、殺気だった気配をしじゅう放っているが、この若い奴だけは、剣のたつ素振りを見せずに、ニコニコと満面の笑みを湛えていた。

コイツらは、青芋の収穫のために力を貸してくれと、頼みを打ち明けてくれたが……全てを聞いても、どうにも符に落ちない気分になって、わしは黙りこくって相手をジツと見定めていた。

「伊之助さん、本当に助かって良かったですね」

件の坊さんはのほほんとした言い方で、倅が助かった事を心から喜んでくれているようだった。伊之助を不可思議な術で、助けてくれた事には深く感謝してる、あれは俺にとって最後に残った血縁者。守護代との戦で、妻を失い領地を失って、命からがら倅を連れて逃げて来た。

場合によっては、若い坊さんに、協力してやっても良いと思いは始めている。しかし、こいつの真意を確かめなきゃならん。

「お前、何で伊之助を助けたりした」

「簡単な事です。あれもまた守るべき越後の民だからです」

「守るべき越後の民だと。何をぬかす。お前、何者だ？」

あの混乱でまだ名前も聞いていない、まして素性すら確かめていないのだ。わしは、殺気を放って睨み付けた。坊さんは、殺気に動じることなく、ふと柔らかな笑みをみせ淡々と言葉を連ねた。

「私は、あなたの仇敵長尾家の末子です。名は虎千代、いまは林泉寺のお虎と呼ばれています」

「た、為景の末子だと？よくも、わしの前でのうのうと言えるものだ。あれが我らに何をしたか知ってるのか？」

「はい、悲しい戦だったと思います。謝ったとしても気持ちには収まらないでしょう、仇を打つつもりなら応えましょう」

お虎と名乗った奴は、慌てだすお共を片手で抑え、懐から数珠をだすと両手を合わせ、まるで静かに凧いだ湖面を思わせるような目をして、わしを見つめていた。

わしは、この時コイツには叶わないと思った。

「馬鹿野郎、倅の命の恩人に手をあげる程、わしだって落ちぶれちゃいない。……仕方ない協力してやるか」

「ありがとう。庄ノ内のお頭さん」

「お頭さんてなあ。まったく気の抜ける奴だ。わしの名は曾根平兵そねへえべえ

衛と言つ覚えとけ」

五

庄ノ内との交渉が無事にすみ陣地へ帰ると、弥太郎はお虎をグウで殴りつけ、本気で怒った。二三日たつたいまでもお虎の頬は腫れて、真つ赤になつていたとか……勝手なことをして、仲間に心配をかけたのですから、当たり前です。

「まだ、痛む。誰かさんが本気で殴るからだよね。頼むから顔だけは辞めて欲しかったなあ」

「……お、俺は知らん。断じて知らんぞ」

お虎はからかい口調でジイと見ると、人の良い弥太郎は顔を硬直させて、赤くなり嘘ぶいた。そして、赤くなった顔を見られたくないで、そわそわとして堪らず逃げて行く。あれなりに殴った事を悪いと思つているんだなど、お虎にも理解出来ていたが、ついからかつてしまつらしいのです。なんとも弥太郎が可哀想になります。

そんなこんな騒ぎのあと、源三郎の指揮のもと、桑取りで里の建築が始まった。6月になれば里も完成し7月から青芋も収穫出来るだろう、越後青芋座の方は蔵田が座長に名乗り出て支配を固め、金余と三条西家へ宛てたお虎の書状を携え京の都に向かっている。帰りには流通経路の確保にまわるらしい。

青芋とはイラクサ科の植物で、茎からは丈夫な繊維がとれる。当時の庶民にとっては必要不可欠な、着る物を作る材料で、麻のようなぎつくりとした手触りの織物になるのです。

元々、為景が守護と敵対した理由は、青苧などの権益があったからです。守護は打ち続く京都の戦乱での出費の穴を、国人衆が各々持っている固有の特権を、無理矢理に取り上げて、その利益で埋め合わせようとしたから、反感を買ったのです。

そして実権を手に入れた為景は、従来安く買い叩いて持っていた天王寺青苧座を追い出して、三条西家の許可をとりつけ、独自に青苧を売ろう画策するが、天王寺青苧座の邪魔が入り、思うようには行かなかつたらしい。流通量は、謙信公の時と比べて少なかったよ  
うだ。

さてさて、彼らの企みは何とか上手く軌道に乗るのだろうか？お虎は、ホントに春日山へ帰るのか？運命の時が、刻一刻ときざまれ残る時間はあとわずか……。

## 第6章・川賊「完」

## 第8章・元服

壱・直江side

ことは以外と上手くすすんでいる。若様が林泉寺に行かれてから、もう6年も経つ。わしは春日山の番人のようになり、実城様の懐深かくに入り込んで、ともすればおざなりになさる政を一手に引き受けた。

ひたすら注意深く、疑われないように、少しづつ実城様に近づいて、敵対する者はどんな手段を取っても排除し、お実城様の周りには誰も入り込めないように固めていった。

今では、政はすべてわし一人の手に委ねられたも同然。お実城様におかれては酒色おぼれ、嘆かわしい限りだ。

もとは賢明な所もあつた方なのに、もう少し冷静になつて下されたなら、また違った未来もあつただろうにと、長いため息を吐いて下をむいた。いまでは、実城様を排除しないことには、越後が立ち行かない所まで来ている。

参勤する国人衆はめつきりと少なくなり、宇佐美のような守護側の奴らがチラホラ現れて、我らの様子を伺いに来る。まったく気が抜けないにも程がある。ましてや実城様を今地位から降ろすには、政局がそれを許さない。まずは、若様をすんなり春日山に呼び戻すのが肝心。

なんとか実城様みずから、虎千代様元服を言いだして下さるように、仕向けなくてはならん。

若様を呼び戻す事は光育和尚に頼んである。あの虎千代様を嫌っている実城様に、邪魔をされては、上手く事は運ばない。あちらから要請させて若様に借りをつくらせ、手出しが出来なくさせるのが今一番の難題だ。

「さて、そろそろ皆も集まった頃合いだろう、評定にいくか」

ぐつと腹に力を入れて立ち上がると、執務を取っていた部屋から出て、本丸の評定の間へと歩きだす。わしにとってここが正念場、気合いを入れて挑み、必ず認めさせてみせる。

渡り廊下を歩き、何人かの顔見知りの国人衆に挨拶をかわし、事前に陽動を頼んである者に会えば、目線で確認して頷いてみせ評定の間に入った。

まだ実城様は、今日も出るのを愚図られるのだろうか？どれだけ、政を蔑ろになさるおつもりなのだ。

余計な予測をたてながら筆頭家老の席につき待ったのだ。やはり、わしが危惧したとおり、ずいぶん皆を待たせてから、浮腫んだ顔を不機嫌にゆがめ、実城様はやって来た。

酒を飲んで評定に来るとはあまりに情けない。

式・宇佐美 side

わしは、あの六年前の為景の葬儀戦で散々に負けてから、素直に金を出し臣従する。そして守護の定実様が隠居されてからは、度々春日山城を訪れていた。今日も評定が行われると言うからやって来

た。

けして真から臣従した訳ではない、元守護の定実様に手を出さないかと思張っている。それとあの時あの戦で誰が家臣団を、再び纏めあげたのか気になり、様子を探っているのだった。

長尾守護代家の実情は、思っていた通りのありさまで、晴景ごときに越後を守る器量などなく、どうやら筆頭家老が中心になり重臣が、よってたかつて支えている。

では、誰だろう？見事な手腕でわしらを撃退した立役者は…  
…あれは軒猿まで使役していたな。

評定の間を見回すが、重臣や国人衆の誰を見ても、当てはまらない。ましてや虎御前である可能性は、これ迄の晴景の行いから無いとみた。あんな芸当が出来るのは、よほど頭の切れる長尾直系の男に違いない筈じゃ。

ああ、下膨れ殿がようやっとご出座か？

もの思いを辞めて、一応の会釈だけはする。他の国人衆も会釈し敬意のかけらも晴景には示さない。下膨れの晴景は、我らを見ると眉尾を逆立て更に不機嫌な顔をする。まったく権威を振りかざすだけがお得意のようじゃ。

議題は、栃尾城代からの救援の要請に、どう応えるかだった。一門衆の大事には守護代みずから凶徒を打ちに行かなければ顔が立たん。皆もそう思っている顔付きだが、これまでも晴景はみずから立つのを敬遠している。

何時もあれは弱腰で、まだ自ら戦した事はないのう。この前も困って、新興の国人衆に土地まで与え行かせている。さても、面白くなってきた。

「お実城、一門衆の一大事。こたひこそ守護代みずから後詰めせねば、恥をかき笑われよう！」

柿崎殿が、齒に衣をきせず、声を荒げて晴景に詰めよつた。そうだそうだと何人も国人衆が相づちを打ち不機嫌さを隠しもしない晴景に詰め寄せる。わしはゆっくりと、ひとり高見の見物に回る。

推移を見守っていると、直江殿が冷静に対応し、なんとか諸将をなだめに回って説得し、晴景の顔を伺っている。下膨れ殿の顔は、逃れようもない事態を前に、真っ青になったり真っ赤になったり、クルクルと顔色が変わえひどく面白い。

参

評定は紛糾し、騒がしくあちこちで内輪話しがはじまる。そんな時、以外な人物が晴景の前に出て、献策をするのです。

「お実城様も、ずいぶんとお困りのご様子、わしなどでよろしければ、お許しを受けて献策致したいのですが、如何」

「……う字佐美、ゆゆ許すぞ」

「実城様！」

直江の誰何する声を無視して、晴景はピンチを救う者ならば、見境なく藁にもすがる思いで、吃りながらも許す。それをうけ字佐美

定満は、丁寧に会釈すると勿体をつけこう切り出した。

「拝見いたします所、こたびは一門衆の栖吉長尾殿がお困りのご様子、これは長尾守護代家の威勢を示すためにも負けられぬ戦、お実城さま自ら軍勢を率い後詰めを勤められるが定石。されど、守護代旗をもたせ、守護代長尾直系の無類の戦上手を遣わされても、こと足りると存じ上げます。お実城さまにおかれましては、どなたかそのような勇將の心当たりが、ありませんうや？」

「長尾直系の勇將か……そんな戦上手がいたか？」

長々と講釈を垂れる宇佐美を、晴景はひどく嫌そうな顔をしてながめ、考えを巡らせてゆく……今回ばかりは己の命が掛かっているので真剣にもなるとゆうもの。直江は思わぬ援軍に口の端を歪めるが、宇佐美の真の目的が分からず、一切の口を挟まず成り行きを見守った。

アレはもう幾つになるのだろ？そろそろ元服しても良い頃か。アレの戦場での活躍はうたがいが無い。べつにアレが死んでも痛くも痒くもなし、かえって好都合だ。

晴景は閃いたように膝を打つ、そして喜色をにじませ直江に問う。

「直江、虎千代はどうしてる？あれは幾つになった」

「はい、虎千代様は林泉寺に居られ御歳13歳、年明けと共に14歳となります。それが何か？」

直江は、白々しくも分からないふりで晴景に答える。宇佐美は、額にシワを深くして一瞬変な顔つきをし、虎千代を知る者は、密か

にニンマリ喜んだ。

「虎千代を林泉寺より連れ戻せ、元服させて栃尾に遣わせ」

「ははあ、さつそく仰せ付けの通り、虎千代様を春日山にお呼び致します。つきましては、虎千代様に許可状と栖吉栃尾城に励ましの書状を願います」

「相分かった」

栖吉衆も、きつと喜びましょう。流石は実城さま慧眼にごぞいます。と、直江はおだて上げ晴景は胸を反らした。

#### 四

晩秋のころ、林泉寺に一通の書状が届けられる。それは件の評定で決まった内容を、知らせるものでありました。光育禅師は直ぐ様お虎を呼びにいかせ、ニンマリと笑った。

やっと待っていた書状が来ましたか、若様には春日山に帰るよう、是が非でも説得しなければいけませんね。

光育禅師は、決意をにじませお虎と向かい合うつもりです。やって来た、お虎は静かに澄んだ瞳で丁寧に一礼すると、光育禅師に向かい合い先駆けて話しかけた。

「来ましたか？」

「ええ」

お虎は簡単な受け答えをし、口を真一文字に結び考え込む。そして、着物をただし深く一礼をする。

「光育さま、長らくお世話になり、ありがとうございます。さぞや生意気な小坊主であつたでしょう、このご恩は一生わすれやしません。私は春日山へ帰ります」

潔い挨拶だつた。面を上げたお虎は決心を決めた潔があり、光育禅師は、呆気ない結末に腰を抜かしそうになるが、落ち着きを取り戻し場所を上座から改めると、お虎に対し丁寧に頭を下げる。

「いえいえ礼には及びません。拙も良い弟子をさずかり誉れな事でありました。この上は、春日山へと参られ立派な武将とおなりあそばせ。亡き為景公や栖吉長尾の御大も、さぞや草葉の影からお喜びで御座りましょう」

光育禅師はそつと袖口で目を押さえ、その目元には涙の後が見えた。お虎も光育禅師の涙に感動し、林泉寺に居た間の様々な出来事を振り返り、泣き笑いのような顔をする。

「そして、これは私からの心ばかりの品、選りすぐつた仏像でございます。どうかご笑納くだされませ」

光育禅師は床の間に置いてある包みを、両手で捧げもちお虎に渡す。これは、光育禅師が先日わざわざ自ら足を運び、特別に頂いて来た仏像。お虎は胸をドキドキさせながら、細長い包みを解いた。しかし中から出て来た仏像は、観音や如来と違い猛々しい焰を背負つた普通の仏像とは掛け離れたものでありました。

「……ご、これは？」

「刀八毘沙門にございます。これは四天王のお一柱にて北方を守護なさる多聞天とも申され、主に戦勝を守り導く毘沙門天にあらせられます。貴方様にはうつつけと思ひ貰ひ受けて参りました」

お虎は、かつて刀八の毘沙門天と名乗るあの僧を思い出し、ガタガタと震えだす。そして、魂が離れゆくように急にバタリと倒れ伏し気を失った。

## 五

お虎は、三日三晩深い眠りの中にありました。そして不可思議な夢の中で、涼しげな目元をする件の僧に出会い、ある言葉を受けた。

「許す！！そなたは、毘沙門天の化身となり、力なき者を守るのだ」  
相変わらず勝手な物言いだつたが、不思議とすんなり受け止められた。

そして、お虎は夢うつつから目を覚ます。すると枕元に刀八毘沙門の仏像が置かれているのを知って、ほろりと笑った。恐かった仏像の顔が、ひどく優しげに見える。

「お虎、やっと目覚めたか心配したぞ。光育さまも心配されて、何度も顔を見に来られていた」

「弥太郎、心配させてすまない。実は話がある皆を集めてくれな  
いか？」

そうかと頷くと、弥太郎は部屋からぬけだして、林泉寺に居る皆

を集めて回った。おおよその所は、何を話すか弥太郎には検討がついていた。そして、呼び掛けに応じて皆が揃うと、お虎はゆっくりと見回して事の顛末を話しだす。

「私は春日山へ帰る。皆には世話になりありがたいと思っている。そして、勝手な願いだが、これからも私に力を貸してくれないだろうか？」

「承知！！」

頼もしい声が次々と返されと、お虎は華が咲いたように微笑んだ。そして、少し照れたように『ありがとう』と言う。

「ご帰参、誠におめでとございます。我らは剣にかけて、お虎さまに忠誠を誓います」

弥太郎をはしめ侍達は改まり、衿を正すと一斉に深く頭を下げた。お虎は予期せぬ出来事にポロポロと涙をこぼし、弥太郎達は照れて苦笑を浮かべる。とつくに彼らは、お虎についてゆく覚悟は出来ていたのです。ただ、言い出せない雰囲気黙っていただけなのです。

「よし、残った仕事をかたづけよう。立つ鳥、後を濁さずだ」

それからお虎達は、忙しくたち働いて、青芋の刈り入れを全てすませ、水に浸しておいた茎の皮を剥いて、次々と糸を作りだす。そして庄ノ内の協力のもと全ての荷を船に積み込み、後は蔵田に挨拶をして、京の都へと見送った。

「あつ、初雪」

「ああ、お虎期限が来たようだ」

「弥太郎、春日山に帰ろうか……」

越後に初雪が舞散る頃になり、お虎は弥太郎達のうち5人を引き連れて林泉寺を後にした。そして年が開けると、お虎の元服の義が執り行われ、名を長尾平蔵景虎ながおへいそうかげとらと改めた。

祖は、神仏が選ばれし、定め御子。名を長尾景虎と称す。  
かの者は毘沙門天の化身なり。

第8章・元服「完」

## 第8章・元服（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。とうとうお虎は、景虎になりましたね。有坂も今後の執筆が楽しみです。

これで第5部・絆編は終わりとなります。次回は第6部・栃尾編に突入です。雪があげると、景虎は兄の晴景の命をうけて、守護代旗を持って栃尾城に出発します。本庄実乃のまつ栃尾城までには、敵地を通り抜けて行く必要があります、賊徒は数しれず襲いかかる。戦え、景虎！！

ああ、やっと戦記っぽくなってきましたね（笑）。本当にたどり着くまで随分と苦労しました。執筆を諦めかけた時もあったけど、頑張って書いて良かったです。応援して下さいました愛読者様には、心から感謝致します。

そして嬉しい評価感想を頂いた霜月様、テンジ様ツエツト様。お陰様で、ここまでたどり着きました。ありがとうございます。

とりわけ読者さまのご感想やご指摘、コメントなどは嬉しいものです。もちろんツツコミも大歓迎です。未熟者ですが、今後ともヨロシクお願い致します。

ここで、申し訳ないですが、見直すと下書きのためにインターバルをはさみます。再開はおよそ1〜2週間後、次章の下書きが完成するまでとなります。

良い作品がお届け出来ますよう、頑張ってまいります。暖かい目で、見守って下さると幸いです。

2  
0  
9  
/  
5  
/  
1  
3  
記

第6部・枋尾編 第1章・諏訪（前書き）

第6部・枋尾編

第1章・諏訪

## 第6部・栃尾編 第1章・諏訪

吉

甲斐の武田晴信は、父信虎を追放し天文十年（1541年）6月家督を相続す。御年21歳にして甲斐守護職に任ぜられる。その追放の裏舞台には今川義元いまがわよしもとの協力があつた。

義元は天文5年の花倉の乱を制して今川氏の家督相続をした男である。駿河と遠江の二ヶ国を版図はんとにおさめ、三河に勢力をのばし、勢力の衰えた幕府を継承するために、上洛する機会を虎視眈々とねらつていた。しかし、相模の北条家との伊豆における覇権をめぐり、長年の対立関係にあつたので、信虎より御しやすく見えた晴信の家督相続は、なによりの優先事項でありました。

お互いの利害の一致、それが現れた結果でありましょう。

今川家と対立関係にあつた相模の北条家は、もとを辿れば今川の被官でもあつた伊勢新九郎盛時いせしんくろふもじときが、その始まりで早雲と名乗り、駿河今川氏の内紛にじょうじ勢力を整え、ついに伊豆をおさえ下克上をなしとげた。

早雲は後に小田原城を奪いとり本拠地を移すと、三浦氏を滅ぼし相模全域を支配下においた。この時北条氏（後北条ともいう）と称し、今は天文10年（1541年）7月に北条家三代目を継いだ北条氏康じちやうけんが、当主を努め関東一帯にその版図を伸ばしつつある。

にらみ合う三国、その利害はいまだ一致せず。お互いを牽制しあつていました。

そのような情勢のさなか武田晴信は、今川氏との同盟のもと諏訪に進撃を開始する。諏訪の諏訪頼重すわよりしげには妹のねねが嫁ぎ縁戚関係にあったのだが、諏訪氏の内紛にじょうじ兵を進め、天文11年（1542年）6月上原城に迫った。

諏訪頼重は、以前より対立する高遠頼継に乱入されると、武田との板挟みになる考え上田城に火を放ち、桑原城にひき移り余儀なく後退するはめになった。そして晴信は桑原城を取り巻いて、板垣信方を和睦交渉に向かわせました。

「我らの主には、縁戚でもある諏訪家を滅ぼす存念はなく、高遠殿の要請を受け入れ諏訪に進行しただけでござる。城を明け渡してさえ下されば、異存なく和睦いたし甲斐に引き上げまする」

板垣は頼重にこう説いたのです。その言葉を信じた頼重は、和睦に応じて城を明け渡すと、敵は高遠だと思いついて再起を図るために甲府へと妻子を伴い向かったのです。

三

ところが頼重は小山田の案内で甲斐に行くと、妻子と離されあげく東光寺において幽閉され、その後切腹させられたのです。乱世とはいえ余りにも哀れな頼重の最後でありました。それ以降、諏訪郡は宮川より西を高遠頼継が治め、東は武田の直轄領となり上原城に代官として秋山を置きました。

武田に同調して兵を起こした高遠頼継は、自分達をダシにまんまと諏訪郡の大半を得た武田に対し、疑念をだいて警戒を強める。これは武田の計略だと、利用された彼らは、いまさらながらに気がつ

いた。

ついに高遠は諏訪上社の矢島満清とはかり、2ヶ月後に拳兵し上原城を襲うのです。事態をさっした秋山は、城兵をまとめて夜陰にまぎれ城を捨て退却し、甲斐に注進におよんだ。これを既に待っていた晴信は、板垣信方に2000の兵を与え、先手として出撃させる。ついで晴信も諏訪頼重と妹ねねの実子である虎王丸を擁し、父の復讐を遂げさせる名目のもと、本隊3000余りを率いて出陣する。やがて高遠に恨みのある諏訪勢力は、虎王丸に合力するべく集まり高遠らを打ち破り、ここに諏訪郡は完全に武田に取り込まれることになるのです。

晴信は、諏訪頼重を滅ぼした元凶でありながら、平然と高遠らに甲い合戦をしかける。なんとも矛盾する戦でありました。

その謀略は、諏訪を武田に帰属させるべく、最初から仕組まれたものであり、これを立案したのは、最近武田に士官した山本勘助やまもとかんすけという、隻眼の軍師である。かの者は、長きにわたり各々の国を巡めぐり独自の軍学を極めておりました。それが晴信の目にとまったのです。

### 戦わずして勝つ

これが山本勘助の持論であり、孫子を学び家臣思いの晴信の考えに合致していたので、彼を軍師として迎え入れたのです。勘助にとっても初めて主に値する者に巡り合い、晴信に対する忠誠心はひとかたならぬ物がありました。

天文12年（1543年）1月晴信の妹が亡くなった。一説には兄の冷酷なしうちに、耐えきれなくなり自殺したとも言われている。

晴信は頼重を自刃させたのち、頼重の先妻の娘である諏訪御料人を側室とした。それも自殺の動機付けだとされ、真相はさだかではない。

晴信は上原城に郡代として板垣信方を入れ、諏訪を守らせ、信濃進行を睨み確固たる体制を整えつつあった。

参

「板垣、これで念願の諏訪が、我らの手におちたか……あとは高遠じゃな」

「誠に祝着。先代信虎公もついに為し得なかつた事にございます。お館様、あとは信濃攻略でございますな」

諏訪を手中にした晴信の顔色は冴えない、いまだ妹の死に後悔する気持ちがあつたからだ。板垣もその気持ちは既に察して、明るく振る舞っている。

「わしはのう板垣、長年に渡る凶作つづきで疲弊する民のため、諏訪や信濃の肥えた大地が欲しかったのじゃ」

「お館様は、頼重のことを後悔なされておいでか？ならばこそ、諏訪の民も甲斐の民どうように大切になされませ」

「民を大切に……あの若き僧のような口を聞きよるの」

主従の脳裏には、かつて晴信に臆することなく諫言した僧の姿があつたのです。あの言葉に、発奮して晴信は甲斐の国主として立つことになった。不思議な巡り合わせに、昔を懐かしむ主従。板垣は

歌を教わるなど会う機会があり、若き僧の才能の深さを見抜いていたのです。

「さようでございますな……あれは潔きよい男でござった。才気も驚くほど持ち合わせ、若いのに立派な僧でありました」

「ああ、たしかに潔き良かった。あれは今ごろ京の都で、修行でもしておるのだろう……いつかまた会って見たいものよな板垣」

「はつ、仰せの通りさぞ立派な高僧になっておるやも知れませぬなあ。行方を探させ呼び寄せては如何ですか？」

「いや、辞めておけ。あれは醜き衆生には馴染めぬ者よ。縁があればまたいずれ会うこともあるう、ほっておけばよい」

さようと板垣が思い出したように笑いだす。晴信においても、あの時は痛い所を突かれて腹をたてたものの、けして悪くは思っていない。今では、もう一度会ってみたいとも思っていたのです。しかしまた、あの清廉な目を持つ僧に、己のなした所業を咎められるのではないかと、危惧する気持ちがあったので会う勇気がなかったのです。

「次は高遠か。板垣、勘助をよべ」

「はつ」

武田にも事情は各々あったのです。大国である今川と北条に領土を境にして、凌ぎを削りあい武田が伸びる余地は、まだ大国に纏まっていない信濃の小国群にしかないのだ。信濃といえ、土地が豊かに肥え田畑の生産性の高い国柄、甲斐は痩せた大地に毎年のごと

く洪水に襲われ、まともな生産性がないのです。

大規模な治水事業も致したが、あまり芳しくない。甲斐の生きる道は、信濃侵略しかないのだ。

#### 四

晴信と板垣が、今後の諏訪経営のことで打ち合わせをしている時に、廊下を片足引きずる音がして、それは部屋の前で立ち止まり、地を這うような低い声をかけた。

「山本勘助にございます。お館様がお呼びと伺い、まかりこしてございます」

「勘助待つておったぞ入るがよい」

応じて入って来た男の片方の目には異様な眼帯があり、開いた目は貪欲に輝いていた。肌は浅黒く幼少の病のせいで、足を引きずっている。異彩をはなつ風貌のこの男は、武田の軍師を勤めるまでになつていた。

「わしはの勘助、先年小県を落としましたものの、未だ信濃侵攻の機運は熟しておらぬと思うのじゃ。高遠のこともケリを付けねばならんと思うておる、何か存念あらば申せ」

「ははあ、それがしの考えでは、高遠は小笠原長時おがさわらながときと結び、きつとその援軍を頼みとし再び拳兵に及ぶかと思われまます。ついでにはこちらも伊那に出兵し、ひと当たりして様子を伺い、兵を一旦引き時を待ちます。あの高遠が図に乗って意気揚々出てきた所を、全軍で叩きますれば、おそらく弱腰になつた小笠原は、すぐには出てこ

れますまい」

こうして、天文13年（1544年）晴信は、伊那に出兵したのでした。この際、諏訪道案内に諏訪衆（むかで組）をたて先陣を頼む。そして、伊那まで侵攻してきた小笠原の重臣を撃破し、かねての打ち合わせどおり兵を引いた。

好機と思った高遠が打って出ると、むかで組の案内のもと待ち構えていた武田軍に、氣勢を制され追い散らされ、城に逃げ帰り籠城することになる。そして数日うちに武田方の素破すっぱにより、内部から火をかけられ、高遠城はあっけなく落城した。

「ようした勘助、そちの知謀にはおそれいる」

「はっ、有りがたき幸せ。それがしもお館様に仕える事が出来き嬉しゅうござる」

勘助は、その半生を不遇のうちにありました。見た目の事もあり、思うような主君にも仕官出来ず、その知謀も、誰もふりむくでもなし諸国を流浪していたのです。そして、板垣の縁で晴信に出会いその人生は一変したのです。

お館様にこそ、日の本を取らせてやりたい。まずは、信濃をひと飲みにして、内乱が絶えない弱体化した越後に攻め入り港を抑え、そして天下にお館様を押し上げるのじゃ。

## 第1章・諏訪

## 第2章・兄弟

吉

天文12年（1543年）1月お虎は元服し、めでたく長尾平蔵影虎となった。あれから数カ月の時はながれ、越後では雪もすっかりとけて、いまでは陽光が眩しい初夏となっていた。

さて春日山の中腹には、為景公のあずち（矢場）があつた。その道すがら、二人の男が談義しつつ登ってきます。彼らは柿崎景家と弟の弥三郎でありました。

「のう兄者、あの若様はそんな凄い方なのか？わしには、軽薄で京かぶれな軟弱者にしか見えんぞい」

「そうじゃのう幼き頃は、武人としての凜々しさがあつたが、寺に入ったせいで、あのような軟弱者になつたのか？我らが手元で、若様をお育て申せば良かったんじゃ」

「あの兄にして、あの軽薄な弟と良くできた兄弟だ。揃いも揃って暗愚とは、長尾もおちたものよ」

景虎が春日山城に帰ってからの行状は、毎晩のことに琵琶をかなで、唄いを歌つたりと夜遅くまで遊び、時には侍女と鬼ごっこ、派手な京風の風雅な狩衣をまとい、二の丸を賑わせていたのです。今では、青岩院もさじを投げ、国人衆の落胆はかくすまでもなく明らかで、景虎は毎りの視線に晒されていました。

「弥三郎や、実はわしも直江殿に噛みついたのじゃ。ところがあや

つめ、若様は些かも変わっておられぬと抜かしおった。しからは証拠をみせいと問うたら、明日の朝早くにあずちに来いと抜かしおった

「ああ、だから兄者は朝も早よからあずちに出向いているんじゃない。しかし、あんな所に何かがあると云うんじゃない」

「さあの、わしにもサツパリ分からん」

かつて為景公は、立派なあづちを作り、日課のように毎朝弓を引きに来ていたのです。先代がお亡くなり、主を失ったあずちも荒れ放題にされ、もちろん今の当主晴景は武芸をたしなむ事もなく、いままで一度たりとも使った事はない、あずちは取り壊すこともなく、朽ちるままに忘れさられていたのです。

「わしものう、若い頃は為景様とよくあづちに通ったものよ」

「そうか兄者は、先代に可愛がられていたものなあ」

「先代は可愛がって下された。ならばこそ、恩に報いるためにも長尾をなんとかせねばなるまいと思っておったにな」

景家の脳裏に浮かぶのは為景公のこと、懐かしい場所に向かう道すがら、忘れていた為景公の思い出を噛みしめていた。いつもお供に選ばれるのは直江と柿崎の二人だったのだ。

直江殿が言いたかったのは、我らの主を思い出せと云うことか？

「兄者！！おかしい誰ぞあずちに居る」

式

「……あれは、為景様」

かつて柿崎らとあずちに來ていた、勇壯な主の後ろ姿が目につつり、柿崎は駆け出したのです。かつて見たことのある主の後ろ姿は、矢をつがえ遠くの的に狙いを定め、いっぱい弓を引き絞っている。今の越後を憂いている、柿崎の目には涙が滲んできた。

「ああ、実城様じゃ。我らの主が甦よみがえりなされた。弥三郎こつちに來てみてみよ」

「……ほんとか兄者、こんな遠くからじゃわからんぞ。あずちに入つて確かめよう」

弟の弥三郎は、驚いて兄にかけより、二人して確かめようと足早にあずちへと入り込んだ。そこには二人の男が控えていて、片方の男があずちに乱入した柿崎兄弟を見とがめると、近づいて静かに控えるように申し渡す。

「ご貴殿は柿崎殿とお見受けいたす。我が主は、稽古中ゆえしばし待たれよ」

「主とは誰だ？」

「景虎様にございます」

「……か、景虎様」

柿崎らは、あつげにとられ腰をぬかしそうになりながら、景虎の方を見つめている。あいた口が塞がらないとは、まさしくこの柿崎兄弟の姿でありました。あの景虎様は直江殿の申すとおり、変わってはおられなかったと得心したのです。そしてあずちには、シーンとした静寂と次々と放たれる矢羽の小気味よい音が響いてた。

「兄者、景虎様とは凄い方でありますな」

「ああ、凄い方じゃ。景虎様は我らを謀ってござったか、見抜けぬわしはうつけじゃ」

呆けている柿崎兄弟の後ろの方から誰かが来て、ポンポンと肩をたたく、柿崎が振り返ってみれば、勝ち誇ったような顔付きの直江実綱がいた。

「お二人とも早かったですな。さぞ驚かれたでしょう、わしも最初は引っ掛かった口ですわい」

「……直江殿もか」

「さよう。矢場に立つ景虎様の後ろ姿は、為景様にそっくりでしょう」

「ああ、甦ってこられたかと肝をつぶしたわい」

柿崎らがなんで早く言わないと咎める目で睨むが、直江は知らん顔を決め込んだ。彼もまた、景虎の後ろ姿に為景公を重ねて涙した口で、いわゆるおなじ穴のむじなのである。柿崎が直江につっかかっていくと若き頃を思いだし、ふざけたような二人の重臣の取っ組み合いが始まる。

「おい、あれはなんだとおもう。やはり止めたほうがよいのかな？」

「さあな、弥太郎の好きにしろ」

「おおい、お前若様だろ」

参・景虎 side

大きな体に似合わず弥太郎は氣遣いがあるのだろう、慌てて重臣の間に割って入り、まあまあと二人を宥めにまわる。

あまりに見たこともない重臣の様子に、不謹慎だがこらえきれずにクスクスと笑いだした。弥太郎が睨むが、なかなか笑いの発作は治まらない。だがあの重臣たちは何とかしなきゃ止まらないのだろ。ちよとした悪戯心で、声に威厳を持たせ昔父が呼んでたように、二人の重臣を呼んでみたのです。

「直江、柿崎。もうそのへんにいたせ」

すると、どうだろう重臣二人は妙ちくりんな顔をして、お互い顔を見合せたと思うと、嬉しそうに揃って膝をついた。悪戯をした私こそ、そんな態度を示されると恐縮してすぐに詫びを言う。

「すみません直江殿、柿崎殿お立ち下さい」

「何も謝ることはありません、これで良いのです。のう柿崎殿」

「おお、間違つてやせんぞ、おい弥三郎も膝をつかんか」

「おおともさ」

何とも言えず弥太郎をみたが、さっきの仕返しか知らんぷりされ、仕方なく重臣達をながめたが、みな私を注目するように見ているだけだ。何とか話しを変えようと件の討伐に向かう人数を聞いた。

「おそらく、晴景様は1000は出さぬお積もりでしょう、悪くすると500ばかりになるやもしれませんぞ」

「なんといわれた直江殿。実城は世間知らずか、討伐にはせめて2000は出さぬと、体裁が悪かろう」

「柿崎殿、よいのです。そんな事だろうと、こちらも林泉寺に兵を集めております。直江殿、こちらがお願いする命令書の内容です。お確かめ下さい」

「承知しました、なるほどこれならば兵を募る事も容易に出来ますな。あと何かお入り用は御座いませんか？」

おそらく蔵田が、入り用の品は、林泉寺に回してくれている。孤立しているなら米やみそなど不足してるだろうと思ひ直し、米の調達をたのんだのです。

「よし決めた、わしらが戦目付けに名乗りですよ。若様、われら柿崎はお味方致しますぞ」

「柿崎殿それは心強い、しかし実城がなんと言われるか」

「お二方の気持ちは嬉しいのですが、直江殿柿崎殿は春日山をお願いしたいのです。私が撃つて出れば、いままでの均衡が崩れ、おも

わぬ敵が迫って来るかもしれない。それに兄上が、何と仰せ付けられるか分かりません」

思わず兄上の郭を見つめたため息を吐いた。私は義経のように名譽を欲して、兄上に疎まれたくはない。ただ越後を守りたいだけなのです。

#### 四・景虎 side

そして直江や柿崎と別れてあずちをでた私達は、井戸端で身体の汗を拭き取ると、段蔵の手引きで、こっそり隠れるように部屋に戻ったのです。そして何時ものように派手な京風の直垂を着こんで支度をする。最後に、頂き物の練り香を少しとり懐中にしのばせる。

「ああそれ、絶姫さんに頂いた練り香じゃないか。……さては坊主も色気づいてきたな」

「い、色気づいてないよ……絶姫は大切な友達だ」

段蔵の下品なからかいに、少しだけ赤くなり、そつと胸元を抑えた。絶姫とは、京で仲良く買い物をした友達で、彼女はひろく教養があり色々話しが会って意気投合しただけ、けして疚しい気持ちは持ち合わせたりしていない。

だって私は心は女だったままで、まだ男の身体には慣れていない。成長期にみられる変化にも、ドキマギとしているのだ。

本当に慣れない、男共というより女の子といたほうが安心するのです。こんなこと、誰にも言えやしないし困ってる。私も子供二人も産んだのだからあれこれと知ってはいるのですが……まさか私が

嫁を貰ってあんな事やこんな事出来る勇氣はまったくない。

「おうおう照れちゃって、若いねえ。……絶姫さんが気に入ったら  
サッサと押し倒したら良かったのにな、惜しいな」

「し、知らぬわ。もう行くぞ」

噓し立てる段蔵をしりめに部屋をでると、話しを聞いていたのか  
弥太郎までニヤニヤとする。なんだろうドツと疲れが押し寄せる。  
確かに、睡眠は足りていない、最近は無理をして真夜中まで情報収  
集や、戦術を検討したり、長尾にとって負けられない戦になるのだ  
から、下準備にも手が抜けずストレスはピークに達している。

まして、段蔵のもたらした武田晴信の話しを聞いて、あれが  
信玄じゃないかと確信を深くした。

なんだか嫌な予感がしたので、軒猿の警戒を頼んである。もしあ  
れが信玄であるならば、容赦なく信濃を侵略する。いや、越後まで  
その視野に入ってるだろう。はやく国内をまとめ、抵抗できる力を  
つけなくては……座して待つつもりもない。しかし、まだ誰もその  
事に気がつかないのが悩ましいことだ。

こたびの評定に全てが掛かっている。何としても、上手くあの命  
令書を周知させ、権威を借りる。勝つためには必要な手、なぜなら  
私が負ければ一気に反乱が加速し、長尾家が滅びる……この戦、負  
けるわけにはいかないのです。

第2章・兄弟「完」

### 第3章・出立

吉・晴景 side

まったく弟の景虎と言えば、そんなに元服させてやったのが嬉しいのか、毎日遊び呆けている。これじゃ武勇のほうも大した事はないな、今まで景虎を意識していたわしが馬鹿みたいじゃ。

景虎に武勇を期待していただけに、討伐へ差し向ける兵さえ惜しくなる。

勇将より暗愚な方が使いよい……景虎が討伐に失敗すれば、必然的にわしが注目されよう、そこで私が多くの將兵をつれ討伐に向かえば、あの生意気な青岩院の里である栖吉にも恩が売れるしな。春日山に参勤しない不屈きな国人衆も、きつとわしを恐れるに違いない。

「むふむふ……なかなか良い考えじゃ」

「お実城様、如何なされましたか？筆頭家老の直江実綱殿が、さきほどより評定前に、お会いしたいとお待ちです」

「ふん、家来ごとき、待たせておけばよいのだ……いや待てよ直江にも言っておくか」

よつこらしよ。最近あまり動かぬから身体が重いのだ。小姓に命じて身体を支えさせ、やっと立ち上がる。今度から寝所を評定の間近くに移すかの、なんども往き来するのが億劫になってきた。

しかし直江は、何の用事で来たのだろ。最近は何でも直江に尋ねなければ、城や国人衆のことは分からなくなつた。便利な家来がいるから、わしは楽を出来ると言うものじゃ。

やっと評定の間の控え部屋につくと、直江がいつものように畏まつて頭を下げている。相変わらず律儀な男よと、気分も浮上した。

「面をあげい、早くから呼びたて何の用事だ」

「これは実城様には、ご機嫌麗しゅう何よりでございます。誠にお呼びだて致して申し訳ありません。早速ですが、この命令書に署名をお願い申し上げます。内容は先代にならない同じように書いております。読み上げましょうか？」

「面倒じゃのう。わしは、景虎に期待などしておらぬし、命令書など形だけのもの、直江のよきにはからえ」

本当は命令書など紙切れ一枚どうともなる。要は景虎があつさり負けて、わしの華々しい出陣が出来ればよいのだ。もちろん春日山の味方からは、武將を出さない、景虎に兵をやるのは勿体無いし、侍大将でも充分じゃ。

「人数は500と侍大将を1人付けてやれ、選んで反抗的な者をつけよ。厄介払いも出来るし、景虎が負ければわしに利となるう」

「まさか、お実城様におかれては討伐が失敗するとお考えか？まして利があるとは思えませぬ」

「利はある。わしには、そなたら凡人には分からぬ策がある、そちは黙って従っておればよい」

実城様に何か策があるらしい、どうせろくでもない策だろう、それに兵もろくに出さないとあまりに酷い仕打ちだ。実城様の狭い見を見越して、景虎様は兵も工面なされている。

さらに国内事情もお詳しく、討伐が失敗すれば長尾は滅びると危惧しておられる。わしですら、春日山の穏健な雰囲気になれ想像すらしなかったが、最悪それはあり得る。いや、それすら視野に入れておかねば、長尾が立ち行かぬ。

命令書の内容が実城様の視野に入っておらぬとは好都合。あとはこれをいかに公然と周知させるかじゃ。

じつと渋い顔で腕を組んで考えこんでいると、斜め前に座った景虎様が、わしに向かって少し困った顔で、笑いかけて下すった。その笑顔だけで、どんな難事も乗り越えられる気になる不思議な方じゃ。

「お実城様のおなりで御座います」

景虎様は、水が高さより低きに流れるように深く頭を下げられた。みなは、釣られたように低く頭を下げる。景虎様が評定にいらしてからは、なぜか評定の場合は、自然なうちに敵かな緊張感をはしるのだ。恐らく自覚はないと思うが、あの実城様だとて、時間に遅れずやってくる。

はたして、どれだけの者が、景虎様の真価に気が付いていようか？

「みな大義である。直江、今日の議事はなんじゃ」

「はい、しからは申し上げます。また栖吉城より火急のしらせが参りました。本来ならば長尾の本領である所へ、反抗的な地侍達が侵蝕し栃尾城が孤立したそうにございます。三条城の山吉殿よりも同じ内容の火急を訴える書状がまいりました。討伐隊を速やかに送るよう書かれております。つきましては景虎様と共にまいる討伐隊の諸般を決めたいと存じます」

「さようか、なに心配はいらん守護代旗さえもって赴けば、賊徒はしずまるう。のう景虎」

「さように存じまする」

その場に居る者はそろって異論を差し挟んだ。旗を持って行くだけで、反乱軍が静まるだなんて誰も思わない、それ相応の討伐隊を出してこそ静まるのだ。

「皆なにを言う、総大将の景虎も了承しているのだ、旗を持って行くだけなら兵は500で良い。武将も要らぬ侍大将程度をつけてやれば充分じゃ」

国人衆が呆れている。実城はお分かりにならないのか、それともこれが策か、わしにはただの嫌がらせとしか思えぬ。

参・宇佐美 side

ほう、あれが長尾の末の子か、皆が騒ぐほど暗愚には見えん。なぜかと言うとわしは春日山の評定に何度も足を運んだが、景虎が居

ると居ないでは大違い、みな自然と儼かな雰囲気になっておる。居るだけで皆に儼かな緊張感を与える景虎とは不思議な男よ。

やはり、あれが六年前の立役者か？なにをばかな景虎は七歳ばかり、子供になにが出来る。

それに旗を持って行くだけじゃと、簡単に納得しているところがまた面白い、あやつは賢人か凡人かサツパリ見当がつかん。難問をまえにし、おのずと解きたくなるのがわしの悪いクセじゃ。

人生は賢人にとっては常に喜劇であり、凡人にとっては常に悲劇であるといわれている。賢人と凡人は紙一重、表裏の差である。

わしは、煩くわめく皆とは一歩引いて、景虎の人品を見定めようとしていた。しかしあやつは、わしをチラリと眺めて意味深に笑いおった、まるでお前の事などお見通しと言わんばかりの態度だ。

評定は紛糾した。あの実城のやり方は露骨すぎて、景虎を暗愚とかがで罵っている者でさえ、申し渡す兵数の少なさに憤っている。こりゃ景虎擁護の風がふいているの。

「お実城様はじめご重臣の皆様方、少しよろしいか」

「なんじゃ？景虎言つてみよ」

ほう、あやつ何を言うのか楽しみじゃ、それに言葉を挟んでもよい時を、見計らっておる。さて賢人か凡人か？

「では。この景虎、若輩ゆえ命令内容をうかと失念致しました。い

「ま一度お聞かせ願えませぬか？」

「なんじゃ、お前うつつけか？直江こやつに分かるように言うてやれ」

「実城や重臣は落胆したような呆れた顔をするが、わしからすれば、命令の内容を念のため周知し、押さえることに一理ある。」

「あの直江は優秀な男だ、すでに命令書を持ち出し読み上げる。いや、これは余りに手回しが良すぎて怪しい、あやつ景虎と謀っているな。余人には分かるまいが、わしには良く分かる。」

「景虎義、守護代に成り代わり中郡・下郡の凶徒制圧、ならびに中郡長尾領をよく統治せよ。しかるべき代々の者これに参勤合力、もつて凶徒を討つべし。長尾弾正左衛門尉晴景 花押」

「畏まり長尾平蔵景虎受け承ります。この上は代々の軍刀をもって凶徒を成敗つかまします。」

「近隣諸公の参勤・徴兵権まで与え、これでは景虎が有利すぎる。皆々異論する者もない凡人どもめ。景虎とはよほどの賢人と見た、この上はお手並み拝見と致そう。」

#### 四

「評定は紛糾したが、景虎が晴景の命令をすべて呑むと伝え、列席の皆々も不承不承うなずいたが、誰一人としてこの討伐が上手くゆくとは、考えていないようだ。皆の表情はなお暗い、晴景だけは満足そうにしている。」

「評定で決まった内容は、すぐさま周知されるようになり、とんで

もない憶測が人々の口にのぼる。お実城様には討伐する気がないやら、討伐隊は厄介払いと変わらない等とアレコレ噂となる。尾ひれがついて晴景様の景虎暗殺説まで蔓延する。

「おい総左衛門、あの噂聞いたかお前ら死ぬぞ、なんとか仮病でも使つて討伐に行くのは辞めたほうがええぞ」

「ああ、お前もそうおもうか……ヤバいかなとは思っていたが、侍大将は俺しかいないらしい。それとも孫太郎が代わり行ってくれるか？」

「そりゃ無理だ。わしも命は惜しい。まあ気張れや」

このたびの侍大将を命じられたのは、しよつだそつぎえもんざたかた庄田総左衛門定賢である。討伐隊とは名ばかり、500程度で何が出来ると憤っていた。まして総大将があれだからなお面白くないに決まってる。

この男、正義感がつよく度々晴景に楯突き、花形の馬周りから外された。いわゆる左遷人事である。与えられた兵は、農民の次男三男で構成される兵たちで、武士の習いも知らず命令さえるくに聞かない者たちの面倒をみていた。もちろん500人の兵はこれらの者達のことだ。

庄田も不承不承だが、真面目な男ゆえ命令とあらば、何処へでも行くつもりだった、なんとかそれまでには兵達を訓練して、まともに戦いたいと前向きに励んでいた。

いよいよ景虎様8月ご出立との沙汰があり、庄田も覚悟を決めてその日に望む。討伐隊の出陣の義は、肅々と儀式ばつて進められ三種の着が振る舞われ、水杯をかわす。

庄田は、その時になって初めて総大将の武者姿をみることに  
なつた。しかしかの人は噂とまるで違い、凜々しく威厳がありました。  
景虎は桜おどしの鎧、長尾の九曜紋を美々しく縫い取つた陣羽織を  
まとい、その威風堂々とした態度は、神々しいばかり、庄田や兵達  
は啞然と見惚れて、なかには盃を取り落とす者まであつた。

「者共、出陣じゃ。エイエイ」

うおおお

景虎の力強く良く通る声に呼応して、討伐隊も自然と意気揚々と  
かえし、皆の心はひとつに纏まつた。隊の士気は驚くほど高く、農  
民あがりの兵士さえ武士らしい顔付きになり、討伐隊は進発する。  
さてさて、如何あいなりますか、運命は誰に微笑むのдар。

第3章・出立「完」

## 第4章・合流

吉

天文12年8月、景虎14歳、お実城様の名代として軍勢を率い春日山を出立す。軍勢は500あまり、侍大将は一名同行するものの討伐隊とは名ばかりの陣容に、世の人は不安をかくせなかった。

「あれじゃ栃尾城まで行ける訳がない、お実城も酷いことをなさる」  
「総大将が、千軍万馬の古つわものであればともかくも、たった十歳の若様だぞ。どうなるかわかったものではない」

ヒソヒソと交わされる、口さがない人々の声が、鋭い刃となって討伐隊に襲いかかる。農民あがりの兵士達の顔には陰りの色が見えた。しかし立ち向かう運命が、恐くともぐつと我慢して隊列を乱すことなく、みな耐えていたのです。

兵達は挫けそうになる心を、大役に動じる気配さえみせず、悠然と馬を進ませる景虎の態度を見て、なけなしの勇気を奮い立たせ我慢しているのです。侍大将を勤める庄田にしてもそうだ、景虎の乱れのなさに安心感すら持ち始めている。

頼もしい、頼もしい総大将だ。景虎様という方は、そこに居られるだけで、万の味方に匹敵する。

庄田は内心、景虎の若さを心配していたのです。兵は総大将の顔色をうかがうもの、不利な現状ならばこそ、なおさら総大将が悠然と構える必要がある。これは老練な指揮官でさえ難しい事なのです。

それなのに彼は、悠然とした態度を崩さないばかりか、初陣にありがちな気負いすら伺えない。

この方に着いていけば大丈夫だと、皆には奇妙な安心感が湧いていたのでした。

さて、景虎を送りだす側の晴景は、8月15日付けの栃尾城代あての書状に『弟の景虎が近日中にそちらへ向かいます。勝利は眼前にあります』と書いて寄越した。あの晴景が本心から書いたのか、それは甚だ怪しいところです。

幸か不幸か、景虎の出陣は揚北衆や反旗の狼煙をあげる地侍たちの侮りを誘い、暫し孤立する栃尾城から目が反らされることになった。

「聞かれましたか中条殿、討伐隊は500だそうですね。春日山は揚北衆を甘く見ているのでしょうか？」

「さあ煩い八工は、早々に地侍共が退治するでしょう、我らが動いては武門の名折れ。まずは高見の見物といたしましょう」

討伐隊出陣の知らせは、揚北衆にも届けられ、このたび初陣をふむという総大将の実績のなさ、まして送られた討伐隊の少なさに、揚北衆の大物たちは侮り、本格的な討伐阻止には動くまでもないと見ていた。

弐・景虎 side

私は戦が好きではない。出来るなら、平凡でもいい静かな暮らしをしたいと願っている。今も昔も……ずっとそう。

前世では、血を流す戦はなかったが経済戦争の真つ只中を生きぬいてきた。それも本心から望んで経営者になった訳でなく、可愛い子供達や従業員を守るために戦って来た。

私が営んでいた飲食店は水物とよばれる商売で、不沈が激しく少しの怠りで、客足が遠退き店が潰れる。店に怠りがなくとも、風評により閉店に追い込まれるケースもあるシビリアな業界だった。

だから資金繰りに、四苦八苦していても、従業員やお客様に、一切その感情を悟らせないようにした。もし正直な感情を表したなら、従業員の生活不安を煽るだけでなく、前向きなやる気を無くさせ、それは怠りを生じ、ダイレクトに売上へと響いてくる。

だから今も不安を打ち消し、痩せ我慢をして平気なふりをする。背筋をシャンとのばし、顎をひき悠然と前だけを睨む。それが一軍の将にとって必要な痩せ我慢だから、あえて下腹にグツと力を入れて、堪えているのです。

しかし内心は激流になげだされた一枚の木の葉のように、たよりなく揺れて渦に飲み込まれそうで酷く恐かった。

「わしゃいつでもお前の味方じゃ」

思い出すのは亡くなった栖吉のお爺さまの言葉、先の戦では少しも怖じける気持ちが湧いて来なかった。振り返ってみると、お爺さまが指揮官として毅然と前に立っていてくれたから、何でも出来た。

今や私はひとり、不安を抱えたまま、毅然と前を向いて歩かなきゃいけないのです。

前途にたいする不安はいくつもあり、そのひとつが兵力の乏しさだった。そのために、蔵田や秋山、戸倉達をつかい林泉寺で兵を募っていた。しかしこんな危うい戦、それも戦いに赴くのは最前線、いくら元野盗や野武士だとて500以上集めるのは、無理だとわかっている。

合わせて1000余り、全てが戦える兵ばかりではない、荷駄を運ぶ者も軍勢には必要なのだ。

少ない兵数であるからこそ、一兵もそこなわず栃尾城に入らなければ、討伐に赴く意味がない。待ち受ける凶徒は数しれず、多勢に無勢で立ち向かうのだ。怖いに決まっている。

目につつる景色はすべて色彩を失って、灰色に染まる。盛夏の照りつける陽射しが、なお息苦しい圧迫感をもたらしていた。そんな私の内心を察し、心配そうに見上げる弥太郎の顔さえ、まともに見ることなど出来ないでいた。

参

景虎の心とは正反対に空は青く澄みわたり、白い入道雲が立ち上がり夏の終わりを感じさせる風が、守護代旗と紺地日の丸の旗を力強く翻す。そして空には、悠然と翼をひろげた一羽の鷹が舞う。

やがて大空を旋回していた鷹は、何かを見つけたように緩やかに降下をはじめ。兵達は何が起こったのかと呆然と空を見つめる。その鷹は三たび隊列の上空を低空で旋回すると、高く差し出された景虎の腕にスツと止まった。

「久しぶり、明石」

その鷹は、慣れた様子で景虎に身をすりよせた。緊張で固くひき結ばれ彼の口元に、柔らかな微笑みがよみがえる。その一連の光景はあまりにも幻想的で、神秘的な美しくしさをともなうて、兵達の心をゆさぶり思わぬ歓声があがる。

「お虎、近いぞ」

「ああ。どうやら太郎まで、着いてきたらしい」

見合せる主従の顔は明るくて、はやる心は踊っていた。やがて稜線の向こうから数騎の馬が駆けてくる。すわ敵が現れたかと、一瞬の緊張が軍勢を支配する。しかし、敵ならばこうも分かりやすい方法で接近してくる訳もなし、ましてや数騎で攻めてくる馬鹿もいない。それでも万が一を考えて、庄田が進軍の足を止めさせ、前に兵を配置しようと動き出すと、景虎は平然とそれを押し留めた。

「……何故です」

「心配は無用、あれは我らの味方です」

景虎の言葉におどろく庄田は、またこれも同じように平然としている弥太郎に詰めよった。

「小島殿も、すでに知っておられたか？」

「申し訳ない庄田殿、主から固く口止めされておりました」

庄田の咎める視線に、弥太郎は顔を赤く硬直させて頬を掻き、し

どろもどろに言い訳を口にした。人の良い彼は、こういう事が大の苦手なのだ。そして恨みがましく斜めに景虎を見上げたが、主は素知らぬ風を装おっていた。いや、かえって人悪く楽しんでるようでもある。

そうこうするまに数騎の馬が近くに駆け寄り、すこし隊列から離れた場所で馬をおりて、景虎の前に膝をついた。

「景虎様、お迎えにあがりました」

「久しいな与八郎、わざわざご苦労でした」

戸倉は、大軍で不用意に近ずくと、討伐隊が敵と見誤るのをおそれ、数騎で景虎を迎えに来たのです。その気配りが、なにより景虎を喜ばせた。そして討伐隊は、戸倉達の先導で林泉寺組と合流すべく動きだしたのです。

#### 四

戸倉達の先導でしばらく馬を進めると、遠くに『昆』の旗を押し立てた軍勢が見えた。景虎はともすると単騎で駆け出したくなる気持ちを押さえつけ、ゆっくりと討伐隊を進ませた。

『昆』の旗を押し立てた陣容が、すべて見渡せる位置になると、景虎の眉尻がピクツとはねた、その表情は以外な驚きでみち溢れ、口角が知らぬまに釣りあがり会心の笑みをみせていた。

「……みんな」

「どつやら皆恐いもの知らずだった様だ。お虎良かったな」

そこには、絆で結ばれた仲間達の力強い顔があつたのです。まして、その軍勢は景虎の予想をはるかに上回り、2000には満たないが1600程度は居るように見えた。

もつと近くなると仲間達は胸をそらし高らかに手を振ってきた。それに応えて景虎も高く手をあげる。そして、明石は案内はすませたとばかり太郎の方へ飛び立った。

うち震える感動を堪えきれず、発作的に景虎は仲間達のもとへと走りだす。弥太郎は許可を求めるように庄田を振り返り、目があうと庄田は呆れたような目で頷いた。それをつけて弥太郎も主の後追つて走りだした。

「景虎さま　！！」

「みんな　、みんな馬鹿野郎だ！！」

景虎は嬉しかった。嬉しくて嬉しくて、馬鹿野郎と叫んでた。言われた方も笑み崩れて、太郎は鼻の下を偉そうにさすってる。そして秋山が前に出て、馬をおりた景虎を迎えいれ、目の前にくると膝をついた。

「お待ちしておりました景虎様、我ら総勢1800余討伐隊にお加え下さい」

「……許す。みな大義であつた」

見回すと源三郎が、秘蔵っ子の工作部隊を連れてきている。それに曾根平兵衛が庄ノ内勢を総動員して来ていた。

「源三郎親方、庄ノ内の頭まで……ありがとう」

「景虎様、わしも柿崎を出奔してきましたわ。騎馬武者30騎、徒武者80人、お好きなように使って下され」

柿崎景家の弟である弥三郎が、野太い声をあげる。武者まで引き連れて出奔してくるとは、あいた口が塞がらない景虎だった。

「弥三郎殿、お味方感謝します」

どうやら裏で何らかのやり取りがあったらしい、驚く援軍に景虎の頬もゆるむ。そして商人のような一団から、細面の男が前に出て口上を述べた。

「越後屋の主、蔵田五郎左衛門からいつかり、店の者20名勘定方を引き受けにまいりました。そして主より医者やそれぞれ必要となる職人を同行させております」

「……蔵田殿が、気使い感謝する。勘定の方はお頼みしました」

五

景虎は、我知らず熱い涙が頬を溢れ落ちていた。そこで太郎が側により、友の手をとり固く結んだ。次郎も嬉しさに太郎の肩まで乗り出して、景虎を眺めて首を傾げる。

「こんな事に付き合わせて、ごめんね太郎」

「……なまら違つる……ありがとう」

暫く会わぬうちに見違えるほど大きくなった太郎の手をギュツと握り返し、片手で涙を拭いた景虎だった。

「ほほっ……若い者はよろしいな」

「頭領、あなたまで来てくださるなんて……」

「なんの、盟主の一大事に馳せ参じたまでじゃ。なんなりと手足のように使って下され。お扇や手のものの女衆も侍女として連れて参りましたぞ、細々とした事はあれらに頼まれると良い」

指し示された先には、久しぶりに見るお扇が侍女姿で手を振っている。景虎もつられて小さく手を振り返す。彼はなんだか面映ゆくちよっぴり照れた顔をしていた。

「お虎、そろそろアイツら焦れてきているらしい。庄田達にも皆を紹介してはどうだ」

「あ、うん。そうだな紹介して来よう」

追い付いて来た討伐隊の面々は、味方らしき大軍に度肝をぬかして呆然と景虎達のようにすを伺っていたのです。そして、その場で互いに名乗りを挙げさせ、面識を持たせたのです。

ちよっどここいら一帯までは、いまだ長尾家の勢力範囲だったこともあり、その日はそこで野営することにした。討伐隊の兵士達はおもわぬ援軍に、顔を綻ばせ、庄田も皆に打ち解けたようだった。

翌朝はやく、討伐隊は動き出した。春日山を出るときには500

だった軍勢が、いつきに2300まで腫れ上がった。その同じころ、栃尾城付近のあちこちの地侍達は、春日山が派遣した討伐隊を阻止し、一躍名を挙げようと画策し、いまや遅しと討伐隊を待ち受けていた。しかし地侍達の動向は、逐次軒猿の報告があり景虎の手のうちにあつたのです。

「景虎様、狙い通り栖吉城への道には、すでに地侍共が伏陣を初めています。お気お付け下され」

「地侍共め、真つ正直に栖吉の道を固めるとは呆れたものだ。しからば我らは一且北へ向かい三条城へ入ることにしよう」

景虎は高らかに笑い声をあげると、全軍を北へ誘導する。

一の先手小島弥太郎、二の先手柿崎弥三郎、本陣旗本として庄田定賢、秋山源蔵、戸倉与八郎、旗本両脇備え、後備えとして討伐隊には多岐に渡る人々が同行する。源三郎ひきいる工作部隊、塗りもの職人、刀剣の鍛冶師、医者、侍女、楽士、曾根平兵衛率いる庄内衆の荷駄人足、とび職、金堀衆、越後屋から勘定方として商人、金物師、指物師、僧侶達それに忍びらしき者に、太郎率いる狼や犬が20頭程と鷹が三羽など、用意周到に物資も潤沢を極めていた。

#### 第4章・合流「完」

#### 第4章・合流（後書き）

有坂です。今回は難産になりましたが、やっと完成しました。

お陰様で読者様も増えて嬉しさでいっぱいです。未熟な物語ですが、読んでくださりありがとうございます。

また、嬉しい評価感想を頂いたつあ様とちよも様ツエツト様ありがとうございます。またご指摘を頂いた雪待兔さま、ありがとうございます。

この場をお借りして御礼申し上げます。

## 第5章・三条

吉

討伐隊の軍勢は、長尾に反旗を翻した地侍たちが、密かに伏陣しはじめた栖吉方面へは行かず、景虎の指示でひとまず中郡の三条城を目指し、整然と隊列を組んで行軍をはじめた。

平時であれば栖吉城に立ち寄る方が栃尾城へは最短距離なのだが、景虎はあえて遠回りな三条城へ向かったのです。三条城は、府中から五十里先にある長尾守護代家の自領、信濃川や五十嵐川がとりかこむ中の島に築かれた城で、城代は長尾氏の被官である山吉行盛が務めていた。

三条、蔵王、栃尾は中郡の中枢にあたり、交通や流通の要所であり軍事的にみても、下郡の揚北周辺を抑止する重要拠点です。そして今回の討伐隊の目的は、中郡の治安回復と下郡の制圧あるいは抑止にある。

「……これは酷い」

「長尾が支配する頸城平野を出ると、どこも似たり寄ったりでございますよ」

いかに長尾守護代家の威信が地に落ちているのか、頸城平野を出た景虎は痛感していた。かつて豊富な雪解け水で潤っていた田園地帯は、無惨に踏み荒らされたまま農作をした様子もない。ようするに野盗に襲われることもしばしばあり、安心して農作業が出来る状態ではないのだ。

通りかかった村の民は家々にかくれ、恐々と軍勢を伺っている。その家だとして満足なものでなく、大風ならば飛ばされそうな掘っ立て小屋なのです。

景虎が何かをこらえたように俯いた、悔しかったのか下唇を噛んでいる。しかしどうする事も出来ない現実に、嘆くでもなく通りすぎる間、ずっと能面のような凍りついた表情をしていたのです。

かくて景虎の思惑通り三条城までの間、これといって行軍を阻む者はいなかった。そして討伐隊は無事に信濃川を渡りきり、三条城に入城する。迎えに現れたのは、城代の山吉で討伐隊の陣容の多さに驚きをかくせなかった。

「景虎様ようこそお越し下さいました。いやはや春日山から知らされていた討伐隊の陣容とは違い、驚きましたぞ」

「山吉殿、しばらく逗留することになるが、宜しく頼む」

山吉に形通りの挨拶を済ますと、景虎は通された客間に早々にこもってしまうのです。山吉はその事態に呆然とするものの、弥三郎や庄田たちが取りなしにまわり、あれこれと山吉に話しかけていた。

弥太郎はといえば心配して景虎の後をおい、そして何も問いかけず客間の前でどっかりと腰をすえて控える事にした。

弐・景虎 side

あんな光景が普通なのか？私にはわからない、何のための政だ。弱き者を守るためじゃないのか？なぜ民はあかも虐げられる。虚し

い、虚しいすぎる……誰も何も感じないのだろうか？

あんな事許せない、普通であってたまるか。なぜもつと民を守ってやらないのだろうか。

己の感情を抑えきれずにただ何も出来ない事に苛立っていた。甲斐も領主の横暴で、ひどいありさまだった。あれよりも越後の状況はもつと悪い。甲斐では、まだ農作業をしていたではないか、越後では農作業すら出来ないでいる。

最低だ。

持って来ていた刀八毘沙門の仏像の前に、禅を組もうと思ったが、次から次へとあの光景を思いだし、集中出来ないでいる。苛々は高まり治まることなく続いている。諦めて、大の字で寝転がると、天井を睨み付けた。

何もかもが不条理すぎて嫌になる。私だけが過剰反応し過ぎなのだろうか？

ふと雨垂れの音が聞こえた。外は夕立なのか、屋根を叩く滴の音がきこえる。私が以前生きた時代と雨音は変わらない。しかしなぜこつと倫理感が違う……。

胸の焔は、私の感情の揺れにあわせて、青白くゆらめいて私を苛む。暴れだす感情は抑えがたく、衝動に突き動かされそうになる。

冷静に己の感情を静めようと長く息を吐き、ゆっくりと息を吸う。宗九様に習った呼吸方を思いだし、息を吸うこと吐くことに集中す

る。

『禅は只今に生きる教え。動中の静こそ難しい、動けば自ずと道は開かれよう』

ダンと床を叩いて跳ね起きて、今やるべき事柄を思い出す。とりあえず今は、孤立する栃尾城に入ることが優先事項だと決めて、この感情は一時据え置くことにした。

正常に頭が回転しはじめると、次々とやるべきこと、打つべき手立てが整理されてゆく。そして私が立ち上がる気配を見せた時、控えていた弥太郎が声をかける。

「お虎さま、俺は何をすれば良い？」

思わず唇の端をつり上げた。待っていてくれた事に嬉しくなり、ついに部屋の外へと歩みを進めた。真摯に問いかけるような弥太郎の目を見て答えた。

「弥太郎、軍義のしたくをせい！！」

「はっ、承知！！」

ニンマリと弥太郎が笑って応えた。そうだ、私には大切な仲間がいる。価値観の違い、倫理観の違いはあれど一緒に戦ってくれる仲間がいる。それで十分だ。

参

軍勢は一旦、軍装をとりて休息をとっていた。城代の山吉からは、

心ばかりの膳や酒も振る舞われ、あれこれと陽気に談義を交わしていたのです。

「庄田殿少しお聞きしたいのだが、本来なら栖吉で軍勢を整える手筈でしたのに、なぜ三条にいらつしやいましたか？」

「さあ、それは我らにも考えの及ばぬ事。山吉殿、それは景虎様に聞かれるが宜しかろう。我らはお指図通り動いたまで」

「そうじゃ景虎様に聞かれるがよい。景虎様はのう、あの先公の秘蔵っ子であられると兄者に聞いた。その知謀は計り知れないと直江殿が手放して絶賛されていたぞ」

「ほう、景虎様が……いやはや聞いていた噂と違い、なかなかのお方でござるな弥三郎殿」

談義は主に、景虎の事に終止した。庄田にしても、山吉にしても景虎に瞠目させられることばかり、訳知り顔で弥三郎が、色々語りだすと皆熱心に聞きいつていた。

「皆様方、景虎様が軍義をなさるそうです。お支度願います」

「軍義か、よし参ろう」

「わしも、やっと景虎様から話しが聞けそうじゃ」

弥太郎は方々に伝令を走らせ、軍義の準備をあれこれ支度する。一方の景虎は、未だ着込んでいた鎧を、お扇たちの手で解いて貰っていた。

「若様、皆様が心配されてましたよ。……ご気性は存じ上げておりましたが、相変わらずですこと」

「そうか、皆に心配をかけたのだな」

そうかじゃありませんよとお扇にたしなめられて、反射的に眉をしかめた。だいたいお扇には、今までの行状を色々と知られているから反論の余地がない。

「なんでも、真面目に考え込んでしまわれるから駄目なのですよ。たまには息抜きすることも覚えられたら如何ですか？」

「……息抜き？」

「そう息抜きです。侍女も選りすぐっておりますゆえ……いつなりと仰せ付け下さいな」

艶かしい視線に、景虎が絶句して目を泳がせると、その態度をみて、お扇がクスクスと忍び笑いを漏らした。

「……わ、私をからかうな」

「さようで、それはそれは申し訳ありませんだ」

お扇はしれっとした態度をすると、つられて侍女達もさざめくように笑いだし、景虎は、耳のふちを赤くして膨れっ面をする。

「もう、良い。後は私がするから下がれ」

「はい、では何時なりとお呼び下さいませ」

事実、景虎は困つてた。なんだか面映ゆく、いてもたつても居られなくなり、着替え終わると足音荒く客間を後にした。

#### 四

さきのやり取りに憤然とした顔をするものの、景虎の頭のなかには冷静に計略を張り巡らせていた。やがて城内の者がかけつけ、案内されるままに広間へと足を踏み入れる。そして、迷う様子もみせず上座へと座り、低頭する一同を見渡し威厳を持たせた声を発した。

「皆の者、大義である。面を上げられよ」

一同を見渡す景虎の顔は生氣にあふれ不敵に唇の端がつりあがっていた。その顔付きに皆は魅いられたように瞠目し、膝を乗り出す者もあらわれた。

「さて、山吉殿こたびは急な申し出だが聞き届けてもらいたい義がある。ここに来るまでの民の暮らしぶりが哀れゆえ、さすがに私も身につまされた。ならばこそ寺社に寄進して、民の安寧と五穀豊穰、戦勝祈願を願いたいかどうかろう」

「それは何よりでございます。早速取り計らいますよ」

いままでの長尾家のやり方では、一揆のこともあり寺社を弾圧する政策が取られていたが、景虎は寺社と迎合することを良しとした。なぜなら、このまま戦況が拡大すると一揆が起こされる可能性がある。つたので、寺社勢力を取り込み牽制するための考えでした。山吉がすぐさま応じると、大きく頷き次にと話し始める。

その内容は、寺社勢力の取り込みと民への喧伝から始まって、しばし三条城に留まり軍勢の訓練をすると告げたのです。

「しかしながら、いま留まっただけでは敵の思うツボにハマりましよう。ここはすぐさま栃尾を目指した方が戦もせずに良いのではありませんか？」

もともと長尾では独立心の強い越後の国人衆が、軍義の場で議論することに躊躇いはないのです。庄田も色濃く馴染んだ風習のまま、異論を挟んだ。そんな次第は慣れっこの景虎は、しずかに一同の異論を順次聞き取り、やおら持論を話します。

「よし、皆の意見はわかった。さすれば私の思う所を話そう。よいが、私は敵の虚をつき勝ちをあげる。皆の申すことは敵もやすく考える事、いずれ栖吉に伏せて居たものも謀られたと気が付き、怒り心頭でろくに物を考えず当たってこよう、そこで一当たりして栃尾城に入る事にする」

「しいて、一戦される訳ですな。しかしそれで何の益がありましたよ  
うや」

「決戦を雪解け後にするためよ。きっと揚北も用心して出てこよう、奴等が来年早々には動きだす。それまでに地侍共の力のある程度削ると、こちらも楽が出来よう。どうか、皆の思う所を聞こう」

五

その場にいる一同は、景虎の計略に驚いた。たった十四歳の若者が語った内容は、戦なれた者にも想像がつかないほど、先々の事を考えた計略だった。景虎はまるで囲碁をするように何手も先読みを

して、勝機を見出し出す手練れの暮打ちのように、すべてが己が手の平にあるよう話す。

「では、どのような訓練をなさります」

「まずは、陣形の練習だな。すぐに戦では、指揮にかなう陣形を速やかに作ることは覚束ない。私が東と言えば、すぐに東を向ける練習をしたい」

「なんと仰る。我らを侮っておられるか？」

己が実力を侮られたと思い、怒りだす者もいたが、景虎は挑戦的な目で、一同を見回すと、それはどうかと言出し、明日それを試して見れば分かると棚上げにし、さつさと客間へ引き取った。

翌朝、一同は三条城の広い馬場に兵を揃えて待っていた。景虎は軍配片手にゆうゆうとした態度で望む。しかし、庄田や弥三郎がやっつて見れば、どうだろっ景虎の申す通り、なかなか揃えることが難しい事だと理解出来た。

「弥太郎、与八郎、源蔵やってみせよ」

「承知」

そして景虎の指示で予てより練習していた弥太郎達林泉寺組が、馬場に兵を引き入れ行ってみせると、見事なほど綺麗な陣形が次々と速やかに作られる。一同は、感嘆して景虎の言い分をのんだ。

「いや、お恥ずかしき次第。成る程、あも綺麗な陣形を作る事が出来るのですな」

「いや、コツさえ掴めば誰にも出来るのです。あれは農兵や野盜、それに野武士もおりますゆえ、精銳の兵なれば直ぐにも出来るようになりましょう。お願い出来ますか弥三郎殿、庄田殿」

弥三郎も庄田も頷くと、弥太郎達にコツを聞きにいった。皆は目を幼子のようにして、一心に練習を始めたのでした。やがて山吉の兵達も混じりあい、毎日練習に励むようになり、すぐにコツを掴んで、陣形を速やかに展開出来るようになっていった。

そして景虎はと言えば、源流を呼び寄せて、ひそかに作戦の打ち合わせを始めていた。多くの忍びを放ち、地侍達の動向を探ると共に、三条城に偵察に入ろうとする相手方の間者を、始末するよう手配する。

その一方本成寺の住職を招き、祈願を頼む代わりに寺領安堵を申し出た。そして景虎は本成寺に寄進し、大戦を前に一揆の自肅を約束させる事に成功したのです。

ついに機は熟した。景虎は九月に入り、三条城を後にし栃尾城を目指すことにした。

いざ、一戦つかまつる！！

第5章・三条「完」

## 第6章・栃尾

吉

三条城を出立した討伐隊は、山吉以下300の兵が付き従った。総勢はおよそ3000近くに膨れ上がっている。計算が合わないと思うかも知れないが、実は新たに下した野盗や農兵を加えることに成功していた。

農兵の多くは、本成寺経由で募られ、野盗の兵に関しては景虎と弥太郎、軒猿の連携で夜な夜な暴れ周り、大きな組織はあらかた潰し吸収していた。まあ、一応の三条地域の治安回復をかねており、お陰で山吉自身が自由に動けるようになり、三条城組が新たに討伐隊に加えられるようになったのです。

「それにしても、愉快でござる。景虎様のお陰で三条は安泰ですな、これならば栃尾もすぐに静まりましよう」

山吉は、景虎の手腕に関心しきりで、もろ手をあげて景虎を誉め称えている。先代の死後、晴景の下で重税に苦渋をなめ民を苦心して保護し、三条城を守ってきた山吉にとって、景虎のありようは驚くべきものであった。

まずは、寺社の保護に始まって野盗の討伐と、百姓を保護する施策として、三年限りの年貢減免を申し付け、新たに種初まで与えていた。そして寺社から、農兵の拠出までさせている。

景虎にしてみれば、民を守るのは当たり前前の行為で、百姓の保護さえ手を打つ時が遅すぎたとも思っている。褒められるほど何かを

為したという自覚はなかったのです。

「山吉殿いい加減になされい、皆々これからが正念場。気を引き締めて下されよ」

「勿論でござる、景虎様には我が槍働きを存分にお目にかける所存」

景虎が、何を言っても暖簾に腕押し糠に釘、土気はいよように高く総大将への信頼は厚い。どういふ訳か、景虎の周りにつめる諸将は、熱い男が多いらしく、景虎は頼もしいとは思うものの、ある意味へきえきとしていた。

「……太郎が居てくれて良かった」

「……な、なんらる？」

「いや、なんでもない」

太郎は、景虎の馬の轡を自ら志願して取っていた。彼の変わらない素朴さに、癒されていた景虎だった。そんな時、敵情視察に栖吉へ行っていた段蔵が、久しぶりに帰って来た。

「よう、大将。地侍共の動きを探ってきたぜ」

「ご苦労様、それで奴らはなんとしてる」

「奴さん達、泡くつて栖吉から大半の兵を引き上げて、この山越えの終わり、ひらけた栃尾平野でご丁重にもお出迎えらしいぜ。長旅の後だ、奴ら1500程度しか来ていないらしい、大将も甘く見られてるな」

段蔵の皮肉まじりの報告に、私は薄ら笑いで答えていた。数を聞けば、いまだ正確な情報を掴んでいない様子が伺える。ならば、数に勝ると確信している敵は、大胆な策を用いてくるに違いない。あまりに単純な思考に、新たな考えが浮かんできた。

「伝令はいるか？」

「はっ、御前に」

すでに伝令は待機していたようで、すぐさま各隊に敵情を知らせ、新たな策を与えていた。それは、相手の油断をさそい、自らが危険な囿となる策だった。

今まで静かだった青白き胸の焰は、私の考えを読み取ったように、一気に燃え猛り本来の私を押し、『戦さ人』へと変貌させる。

それは狂気か、はたまた闘神の目覚めなのか、荒れ狂う奔流は、出口をもとめ身の内を駆け巡る。それでも、ともすれば残虐な思考にうめつくされて、正気を保てなくなる己を律し、悠然と前を向いて進んでゆく。

将兵達も何か感じる所があったのか、あえて誰も私の策に異論は挟まない。みな戦を前に引き締まった顔つきを見せている。逝けるさ、死なんと思えば活路はみえる。その思いを宿し、私は手綱をギョツと引き締めた。

まずは手勢500を庄田の指揮のもと秋山達を馬回りに加え、あ

えて盾とするため空の荷駄を引かせ、私と共に守護代旗を翻し緩やかに先陣を切った。急襲する隊は足の早い馬を揃え弥太郎の隊と弥三郎の二隊に預けている。本陣は、後備えを真ん中に直ぐさま円陣を組んで、状況よしとみれば参戦するよう山吉と与八郎達に申し付けていた。

一見した所、恐らく嵩にかかって挟み撃ちする策だろう。チラリと敵方の急襲隊が伏陣しそうな所を見れば、眉がピクツと動いて、相手の鬪牙を感じ取った。

「さてさて、結構な出迎えだな。これでは土産もたつぷりとくれてやらんとな」

私はうつそりと笑って秋山を見た。秋山は怖じけることをもなく槍でトンと地面をついた。庄田や兵もキリリと引き締めまった顔つきをする。囀としての役割など怖じけるかと思っていたが、春日山からの兵は、みな農兵と変わらない出自にも関わらず、武士らしい誇りを胸に覚悟を決めているようだった。

やがて、敵の本陣が見える位置にくると、すぐさま歩みをとめ小荷駄を蹴倒し円陣をくませる。練習の成果か、一斉に盾を展開させ弓隊が備える。一拍遅れで、敵勢から多数の弓が飛来する。

「知れもの、待ち伏せとは卑怯なり。我は長尾景虎なり、守護代の命をつけし討伐隊なるぞ！！手向かい致さば、守護代に弓引く者とする。その存念如何か?!」

参

景虎は、良く響く声で大音声に呼ばわった。返す敵勢の大将は、

勝利を確信した笑いまじりに応じた。

「長尾の小わっぱが偉そうに、そんな小勢でなにが討伐隊じゃ！！  
者共、笑ろつてやれ」

敵勢が勢いをかり、嘲笑が戦場に響きわたる。しかし景虎達は却つて笑みを深くする。さらに景虎が怒りを露にした、声を上げる。

「なにを、無礼な奴らめ。ならば、早々と掛かって参るがよい」

「者共、あの小癩な小わっぱに一泡くわせてやれ！！懸かれ  
！！」

敵勢は多勢に無勢と三々五々と隊伍を乱して盾を並べて駆けて来る。我勝ちに乗り、抜け駆けせんとの考えだろう。それに後ろの奇襲隊が控えているので、派手に見せかけている積りだろう。

「笑止！！皆守りを固くして、引き付けてから射よ。的は狙い放題だ！！近寄せたなら一斉に槍ぶすまをくれてやれ」

敵勢の奇襲隊は足音を忍ばせ徐々近よってくる。敵勢本隊が近くまで寄せた頃合いを見計らい、襲いかかる腹積りと見受ける景虎は、身の内に激流さながらに渦巻く青白き焰を、いまかいまかと解き放つ瞬間を待っていた。

「弓隊、放て　！！」

萬をじして庄田が叫ぶと弓が次々と寄せ手に降り注いだ。息をつかせぬ弓の応酬が始まると、後方でときの声上がり敵の急襲が始まった。恐らく円陣の後方は薄いと謀ったのだろう。すると円陣か

ら『龍』の旗があがり、それは勢いをつけて左右に振られた。

旗をみた、柿崎弥三郎と小島弥太郎が轟音とともに怒涛の勢いで、前に気をとられていた敵の後方部隊の、どてっ腹を奇襲する形で牙を剥いた。

「な、何が起こった」

「ご注進！！騎馬隊の急襲でございます」

後陣の敵は寄せ集めさながら、有無を言わせぬ急襲に驚き三々五々と逃げ出した。全面は庄田が懸命に凌いでいる。景虎は、庄田にその場をまかせ、なんとか引けた腰で防戦に回った後方の敵を、秋山らを伴い放たれた矢のように後ろから襲い掛かる。

「手向かい致さば容赦せぬ、降参すれば命ばかりは助けよう。武器を捨てい！！武器を捨てい！！」

景虎は、敵の怖じけにつけ込んで怒涛の勢いで、自ら先頭に立ち敵を斬り払う。味方は、大将自らの大太刀まわりに勢いをつけて、再び斬り込んだ。

ほぼ面立つ将を討ち取ると、絶妙なタイミングで本物の本隊が堅固な陣から徒武者を押し出した。それを見た景虎は、やおら全面の敵に襲い掛からんと馬を回し、太刀を振り上げた。

「首は捨て置け狙うは敵本陣なり、死ねや者共」

#### 四

すぐさま手すきの者共は才　と返し、単騎で前を駆ける景虎に続く、既に槍のような陣形は速やかにつくられて、景虎を守らんと次々と前に出る。

「お虎さま、お先に露払いいた　す」

「御大将に先駆けられれば、柿崎の名折れ皆続け　！！」

弥太郎達が主を追い越し先端を請け負うと、負けじと柿崎弥三郎が陣形を紡ぎあげて、景虎の回りを固めつつ速度をあげた。それを見れば全面の敵も恐れをなし、逃げる体制に入る。好機とみた庄田は、槍に持ちかえ穂先を揃えた槍隊を押し出した。

「追い討ちをかけよ、景虎様に続くのじゃ　！！」

景虎達は西に東に縦横無尽に駆け抜けて、すぐさま陣形を整えつつ敵の本陣に突っ込んでいく。敵本陣も迎えうつために弓を配置するものの、味方に邪魔をされ標的が定まらない。すでに時は遅し、先陣を切る弥太郎達がついに敵本陣に錐で穴を穿つように突貫する。

「見参！！見参！！長尾景虎が家臣、小島弥太郎！！大将は名乗りをあげい」

鬼瓦のような顔をした偉丈夫の弥太郎は、ゆうに三尺はある大太刀をグエンと振り回すと、ドツと本陣の前衛が崩れ落ちる。弥太郎が開けた穴に柿崎弥三郎が、押し広げるように騎馬隊を突っ込ませ次々と名乗りを上げる。続く味方の槍隊がドツと押し寄せた。

「柿崎が弟、弥三郎！！手向かう者共は討ち取ってくれん！！」

「長尾景虎が家臣、秋山源蔵！！推参！！」

敵本陣は景虎を小勢と侮り、本陣を薄くしていたので、打ち負かされてちりぢりとなり、景虎は総大将をすでに追い詰めていた。

「お前が、総大将かあ！！」

「いかにも、私が総大将の長尾景虎だ」

「おのれ若造、道連れにしてやる」

景虎の目は冷たく細められ、身のうちに猛る青白き焰をおさえて、泰然とした態度で相対す。敵の総大将は死なばもるともと、思い定め太刀を抜き前にでると、景虎は柳眉をはねあげ、神速で詰め寄り、相手の一ノ太刀を受け流し、返す刀で切り上げる。舞い上がる血飛沫に大地をそめて、敵の総大将は膝から崩れ落ちた。

「ぐわあ」

「敵総大将、討ち取つたり！！手向かい致すな、すでに戦は終わつた！！武器をすて捕縛されよ！！」

高らかに呼ばわる景虎の甲高い声に、敵の戦意はついに萎え次々と武器を投げ捨て下ってゆく。栃尾平野に歓声が大きく響きわたる。

五

地侍供は、あっけなく討ち取られ、多くの兵は景虎達に捕縛された。その頃、すでに後備えが戦場を抜い清め、首実験の用意までし

ていたのです。

山吉は栃尾周辺の地侍に詳しく、彼が首を見聞し各々に名札をつけていた。そして武装解除した捕虜に担がせて本陣で取り囲み、討伐隊は動きだす。

「日暮れまでに、栃尾に入る。皆心せよ栃尾城に入り次第に首実験をおこなう」

「御大將は首を捨て置けと言ったに、誰が討ち取ったかお分かりになるのですか？」

「任せおけ、私に間違いはない」

景虎は不敵な笑みをみせると、源流を呼び寄せ頼んでおいた書き物を見せた。そう、すでに潜入して敵將の顔を見知っていた軒猿が中心になり、誰が誰を討ち取ったか克明に記録していたのでした。

そんなこんななやり取りするうちに、討伐隊は栃尾城の近くまで来ていた。夕暮れにそまる栃尾城は、山城にして三層の郭をそなえる天然の要害ようがいである。山は峻険にして岩肌には幾重も掘りが取り巻いていた。

すでに先触れを出しておいたので、栃尾の城兵が迎えに出ていた。もちろん本庄実乃も大きな体軀をゆらせて駆け付けて、満面の笑顔で討伐隊を迎え入れた。やがて景虎の馬が見えると駆け寄り膝をついた。

「お見事なる勝ち戦、おめでとつござります」

「うむ大義。実乃、私は城へ働きに来たぞ」

からかうような景虎の口振りに、実乃は思わずかつての失態を思  
いだし、冷や汗か何の汗か分からぬものが流れ落ちた。それをみた  
景虎の明朗な笑い声が響き渡り、お止めくださいと実乃はますます  
恐縮する。

「いや、私は本気だ。それに私は若輩者、宜しく頼んだぞ実乃」

景虎の表裏のない言いように、実乃は心よく頷いてお任せあれと  
返した。それに討伐隊の陣容は、知らされていた以上の兵数だった  
こともあり、感激の涙を流した実乃であった。彼は人が良く、素直  
に感激してしまいうらしいのです。

「本庄殿、久しぶりでござる」

「これは……山吉殿までお出でか？」

見た事のある武将の到来に、実乃は驚きを隠せないでいた。やが  
て二の丸に到着すると、闇があたりを包み込み、かがり火が赤々と  
景虎達を迎え入れ、すぐに勝ち戦の宴が始まり夜遅くまで栃尾城を  
賑わした。さてさて、景虎はいかな手で栃尾城を守っていくのか、  
楽しみな事です。

第6章・栃尾「完」

## 第7章・策略

吉・景虎 side

遠くでさざめく人の笑い声、いまごろ討伐隊の皆は、祝宴の真っ最中なのだろうな。皆はたいそう勝ち戦が嬉しかったのか機嫌が良い、城兵も兵数の多さに安心したのか同じように嬉しそうだ。しかし私はといえば、妙に身体がだるいので、早くも祝宴を抜け出して寝所へ引きこもった。

何故だろう、この胸の焔のせいか？……そういえば、この焔が燃え猛ったあとに、昏倒した覚えがあった。

よくわからない不安が嫌な想像を呼び起こす。この胸の青白き焔が、代償として私の生命力を喰らっていると、埒もない懸念が浮かびあがる。

刀八毘沙門、あなたは何を為そうというのか？血ぬられた戦を私の命で購えとでも思し召すか？

いや、今や私が貴方を欲している。越後を守るため、長尾を守るため、民を守るために戦場に立たなければならぬ私が、なにより貴方の力を必要としている。

世の中は、まったくもって不条理に出来ているらしい。いや、それともこれが世の理なのか？

とりとめもない考えに終止符をうち、縁先に出て夜空を見上げた。中秋の名月を思わせる満月が、煌々と庭を照らして美しい陰影を紡

ぎ出している。

一滴の涙が、頬に流れ落ち生ある温もりを私に伝えた。私の命など燃え尽きてもかまわない、この手で守りたいものが守れるのなら、それだけで満足できる。

「お虎様？てつきり寝てるものだとばかり思ってた」

「ああ弥太郎、月があんまり綺麗だからつい寝そびれた」

「そうか」

弥太郎は、そう言って縁先にどっしりと腰を据える。いつも何も聞かずに傍らにいて、まるでこの世に私の命を繋ぎ留めようとしているようにも思える。どれほど弥太郎に救われているのか、あえて本人には語ってやらない。

「すこし膝をかせ」

私はそう言うと、弥太郎の膝を枕にして縁先に寝そべった。こうするとなぜか嫌な事を忘れて、安心して眠れる気がする。

「こんな所で寝たら風邪ひくぞ」

「……少しだけだから」

静寂がつつみ込む縁側には、秋のけはいが忍びよる。この静けさも、しばらくのことなのだろう。この世に人の欲がある限り、戦はさけられぬ。

「で、これからどうする」

「さあな、地侍の動向を探りつつ、城の防備を固めるといった所だろうか。奴ら雪が降る前に一戦挑んでくると見える」

式・弥太郎 side

疲れた顔をしていたお虎の様子が気になり、祝宴を抜け出した。いつものように宿直でもしようかと、主の寝所へと歩いていくと、満月に照らしだされた玲瓏としたお虎の横顔がみえた。

まるで、満月に誘われて天界に帰ってしまったかと思うほど、儂く神々しい横顔だった。

戦場では、活気にみちた荒ぶる鬼神のようなお働きをなさるのに、ある時は儂くも消えてしまわれそうになられる。

『あの方は神仏が選ばれし、定めのお子。御子なれば、醜き人の世は生きにくいのでしょうか』

林泉寺の和尚が言った言葉を思い出す。何があるうとお虎を天界に帰したくない、この地に留まってほしいと強く願う。だからこそ、満月に消えてしまいそうな主に、あえて声をかけたのだった。

「そなたは、どう見る」

「俺には、わからん。お虎様の指図通り動くだけだ」

俺がそう答えると、お虎は低く抑えるように笑いだす。すると居たたまれない空気がみちて、俺はいっぺんに顔の筋肉がひきつれる。

あえて何でもないふりをしようとするが、お虎は顔の変化に気がついたのか、堪えきれずに背中を震わせている。

「人が悪いぞ！」

「あはは……いや、ごめん。気にしないで」

「……いや、そう言われてもなあ」

俺は、困って頬をかいた。お虎はというと、ひとしきり笑った後に真顔になって、ポツリと言った。

「来年の雪が解けたら大戦だな」

「また地侍共か？」

「いや、もっと大物を釣り上げてやる」

こんな時、お虎は青く凍てついた光を目にやどす。吹き出す鬨牙は雪の冴え冴えとした冷たさをはらんで、俺の身の内まで震えさせる。やはり常人ではない、戦う目をしたお虎は神の子なのだ。

「釣れるのか？」

「さあ、どうかな？」

「……良くわからんな。一体なにを企んでる」

俺の言葉に、お虎の唇の端が皮肉につり上がった。

「ひどいな企んでるだなんて……成るようにしか為らない、いや成るべくして為すのか？」

「なんだか僧と問答してるみたいだ。俺の性にあわん」

こんな意味のわからない問答を一人ブツブツ繰り返すと、お虎は立ちあがって寝所に帰ってしまう。俺は問答は好かん。よほど斬った張ったの戦場のやりとりのほうが解りやすいと思う。

いつも、お虎はこんな調子だから、俺は目が離せなくなる。そしてまた満月を見上げれば、満月がうっそりと笑ったような気がした。

参

明朝、早くから景虎は動きだし、実乃らと精力的に栃尾周辺を検分に出歩いていた。

「酷いな、この有り様では最近まで小競り合いが頻繁にあったのだな」

「かようなまでに踏み荒らされて、誠に面目しいもござらん」

そこかしこの集落が焼け落ちて、田畑が大勢の足跡に踏み荒らされ、折れた矢や旗差物などが散乱し、攻防の激しさを伝えていた。城でさえ二の丸付近まで、敵が這い上がった後が歴然と残っている。守るすべを持たない民は、どんな厳しい目に遇ってきたかと、景虎は思んばかっていた。

討伐隊が派遣される頃には、辺りが一斉に静かに成ったと実乃が言う。今では、村人があちらこちらで、焼け跡から家財道具らしき

ものを探したり、戦に踏み荒らされていた田畑に残されし、作物の収穫を急いでいた。

「城兵も少ないのだから、城を守るので手一杯だったはず、咎めはせぬ。私が栃尾城に入ったからには、またぞろ地侍共が押し掛けてこよう。用心して夜は村人達を城へ来させるが良い」

「今度は、総力戦になるのでしょうか？」

「おそらくはな。雪が降る前に用心して総力戦で挑んでこよう。奴らも焦っているだろうから、時はあまりないぞ実乃」

やおら景虎は良いことを思いついたとばかり、太郎を呼びにやらせる。景虎は、実乃に新たな策をあたえていた。それは、夜に犬や狼を放ち、城下をまもらせようと思いついた。夜回りにも犬をつけて、嚴重に致したほうがよいと説いた。そして昼間は鳥達にも警戒をするよう太郎に頼むつもりでいる。

実乃は真面目な性格からか、聞き漏らしのないよう景虎の言うことを逐次書き留めさせている。たった十四歳の若様の言う事に、それ相応の城代ともあるう者が、素直に関心して聞き入ってる様子を、奇異とも思う者がいようが実乃はお構いなしだった。

「景虎様の仰せ付け通り、警戒を密にして、民にも知らせおくように」

「しかし、ご城代。なにも年若な若様のお下知にしたがわなくとも、兵の数も増えおれば杞憂ではござらぬか？」

「お前達は何も分かつてはおらぬ。守護代が出した討伐隊の兵数」

〇〇ぞ、それがどうじゃ今では我らを合わせても三〇〇〇余じゃ。景虎様の器量が分かるであろうて、我らは若様に尽くすのみだ」

側では、こんなやり取りが為されているが、景虎と実乃は余人には見えない信頼の絆で結びついている。景虎も一切聞かぬふりを続けていた。

#### 四

景虎は、城の回りの備えも検分している。未だ敵の手に落ちたことのない天守の掘りを見たときに、こう言った。

「なるほど、この掘りは良く出来ている。どうだろう、もう少し規模は小さくていいが、この様な掘りを山の尾根一帯に埋め尽くすことは出来ぬのか？」

要するに塹壕のようなV字型の掘りを、天守を囲む尾根一帯に張り巡らすという計略でした。それを聞いた源三郎は、さっそく計画をたて、皆が総動員で掘りを作りにつかかった。そして地元の者までも、異例なことだが賃金まで貰って働いた。

それは景虎の指示で、賃金を払うようになったのです。戦が頻繁に起こっては、食い詰める民が出てくると思つてのことだろう。若様のとつた施策はあたり、やがて民は景虎様のことを慕うようになった。どこの現場でも民から気安く声が掛けられる。炊き出しを手伝う女房衆にも若様は人気だった。

景虎はまた、二の丸付近に宿舎を建て皆を住まわしていた。そこらは源三郎の息子の源四郎が携わっている。それに勘定方をつとめる越後屋の者共が、手分けして物質の管理に当たっていたのです。

彼らの算盤は確かな物で逐一景虎に数字を知らせていた。

「民を食い扶持に加えたとしても、兵量は4月まで持ちこたえましよう」

「そうか、相分かった。今後とも引き締めながら物質の確保をたのんだ」

「はい、承知しました。ご城代の本庄様の手腕があつたればこそ、何とか持ちこたえられますな」

「うん、さすがは実乃だ。戦禍にあえぎながらも兵糧と矢だねを尽きせぬように、蓄えておつたとはな。私もおどろかされた」

兵量は充分なゆとりがあつた。それは、討伐隊でもかなりの兵量と飼葉などを持って来ていたのと、実乃が独自で溜め込んでいたものがあつたのでゆとりが生まれた。

あとは、工事で出た木や大石を二の丸や天守へ運び入れて、これも武器とするのだった。そして月が代わり工事に取り掛かつて、およそ60日ようやく掘りは完成をみた。そして10月も末になり、軒猿の手の者により栖吉へ一通の書状が届けられた。

それには、援軍を頼む内容とともに詳細な作戦内容まで付けてあった。もちろん栖吉でも栃尾城に駆け付ける予定であったのだが、地侍共の抵抗にあい、容易に兵が繰り出せないでいた。

五・金津 side

「やっと、若に会える」

景信様からその書状を受け取った某は、景虎の筆跡をみて涙ぐんでいた。状況が許すのなら、直ぐにでも会いに行きたいと思っていた。

若ほどの様な青年におなりだろう。さぞかし、立派な武者ぶりであったのだろうな。

某は、その書状の内容のまま戦支度に励んでいた。何より久しぶりに若に会える喜びで舞い上がっている。近習であった荒川兄弟も稽古に余念がない、若に再びあえると分かって成長ぶりを見せつけようと、思っているらしい。

なにより若からの使者である段蔵殿から聞く、若の活躍ぶりに某は驚いた。すざましいばかりの武者ぶりである。まして統治能力でさえ刮目するべき手腕である。

「某を手こずらせたあの若が……」

春日山でのあれこれが浮かんでは消えてゆく、戦になれば連れて逃げよと言っていたあの幼子は、もはや元服を迎えて、守護代の名代にて討伐隊の総大将になっている。

月日の流れは早いと呟いた。そして一刻も早く若に会いたくて堪らなくなった。そして栃尾城へは1000を数える者が、金津に付き従って出兵することになる。栖吉の景信が景虎様に力添えをするべく動いたのだ。

「我が孫、景虎を頼みましたよ」

尼になられた奥方から激励を賜って、景虎様宛の書状を預かってきた。出兵は若の申し出通り、隠密のうちに行われた。何人かバラバラと城を抜け出し国境に次々と集結する。そして地侍の動向は、逐一段蔵が届けていた。

「金津の旦那、奴さんらは栃尾に結集し始めたぜ。あちらに気が取られているうちに、出立のお下知を」

「わかった。これより密かに栃尾領内に出陣する。少し遠回りだが、山越えを決行する。各自持てるだけの食料と武器を持って荷駄は要らぬぞ」

金津ら援軍は荷駄を持たずに、険しい山越えに向かって行った。それもこれも若の言い付けどおり、忠実に行われていた。

いよいよ、地侍と決戦がはじまる。景虎はいかに栖吉の援軍を使うのか、栃尾城と地侍らとの睨み会いによる、緊張は日々高まりつつある。敵は、いまや決壊する濁流のように、押し寄せんと栃尾城を伺っていた。

## 第7章・秘策「完」

## 第8章・奇襲

吉

栃尾では、雪の降り始めるまえの冷たい雨が、城壁を濡らしていた。そして、この時期特有な長雨は、時に濃い霧を発生させるので

す。  
栃尾の本丸では、景虎が雨にけぐる眼下をみつめていた。景虎の予測通り、冬を間近に控えた11月の初め、ようやく地侍共が総攻撃に動きだす。こたびは復讐戦でもあり、意地でも栃尾城を落とす腹積もりでいるのだろ。

初めに前兆を感じ取ったのは、城下に放った犬の群れだった。真夜中に吠え猛る犬達の声を城にいる太郎が察知して、直ぐさま景虎へ注進に及んだ。

「……厄介な雨だな」

ぼつりと景虎がつぶやくと、控えていた実乃は、はっと顔をあげる。

「厄介などは、何でござる？」

「いや、何でもなし。それで実乃からの報告はなんだ」

景虎は栖吉衆の事を思いやっていた。山歩きの上にこの雨では、さぞや難儀してらるだろうと、作戦の穴を知って悔やんでいた。実乃には、栖吉衆に与えた作戦を話してはいなかったため、適度に誤魔

化した景虎だった。

「はい、しからば。先ほど見回りから情報が参りました。佐井の村の西のはずれに敵勢が忍びよってござる。今はまだ総勢で来た様子もなく、恐らく順次合流すると思われませう。如何いたしまししょう」

景虎は、少しだけ首を傾け柳眉を寄せて考えるそぶりをみせた。そしてやおら立ち上がると即座に命じ始める。

「よし、実乃はみなに知らせをたのむ」

そして次々と命令の内容を話していった。山吉と庄田には城の外門と外郭の警護をもうしつけ、実乃は柿崎弥三郎と共に戦支度で軍勢を引き連れ、佐井に出向くように申し付けた。

「して、景虎様は如何なされますか？」

「私は、弥太郎と共に一足さきに物見に行こう」

「危のうござる、しからば拙者の軍勢と共に参りましょう」

「それでは遅すぎるのだ。わかってくれ実乃、危ない事は一切せぬ」

そう景虎が説得すると実乃はしぶしぶ了承してあちらで合流することを約束させ、念のためと弥太郎らにも忠告して軍勢の準備に向かっていた。

傳役以上に生真面目な実乃を、説得するのは容易くはなかったが、ようやく心配性な実乃から解放された景虎は、軽装のまま物見に出た。そう、景虎は野盗退治の時でも、重たい甲冑を着込まないのが

常なのです。弥太郎たちも、いつも通り鎖帷子を付けるくらいで、特に重装備をしないまま景虎に付き従った。

弐

長雨のせいで道は泥濘ぬかるみ、視界を遮る霧なかを泥を跳ねあげ馬で駆け抜ける。松明をもった軒猿を先導させ、景虎の後続は弥太郎以下30名、夜撃ち朝駆けを得意とする野盗退治にも慣れている仲間達だった。

やがて村外れに近付くと馬から降りて、徒にて見回りの者が忍んでいる辺りまで、前方の様子を伺いつつやってきた。

「景虎様、こちらでございます」

小さく低い声で呼ばわった、景虎が近寄ると見回りの者達が現状を報告する。それによると敵は約20メートル先にいる。見回りの者は敵の行動にあわせて、退きながら様子を伺っていた。ついに敵は村の中央で留まり陣所を築き始めているそうだ。

「幸い、この霧が我らを上手く隠してくれたようです。敵はまだ、こちらに気が付いていません」

「それは良い。よいか我らはここにのこる。そなたらは本庄に伝言を頼みたい。本庄は戦支度で出張って来ているはずだ。ならば出来る限り静かに来るように伝えてくれ」

「承知しました」

景虎達は、実乃のために見張りを残し、身を低くしてもう少し近寄ってみることにした。そして前を確かめつつ行った先には、200程の兵士が戦支度をしていた。おそらく、このあたりに土地勘のある者が、霧が出る事を知っていて、わざと狙って兵馬を進めたいらしい。

霧に乗じて先見隊を進めたのは、城方に目を向けさせぬ為、順次に到着する後続の隊を待っていると確信した。陣中には明かりがそこかしこに灯され、かげが霧に反射して闇に隠れて動くには好都合だった。

「いまが、好機」

「お虎様どうする、やるのか？」

「いや実乃を待とう。実乃が踏み込んだら、弥太郎は物質に火を掛けて回ってくれ。今は取り敢えず手分けして物質のありかを探そう、くれぐれも隠密にな」

奴らは、霧で自らを隠しているつもりだろうが、タネが明かされた以上、数の揃わない今のうちに叩いたほうが得策だった。ついでに物質も使い物にならないようにしようと考えた。

ひとあたり物質のありかを探しだすと、先の見張りを待たせている場所へ引き上げて、村外れの廃屋に隠れて体を暖めつつ実乃を待った。

やがて実乃達がやってきた。各々工夫をこらし轡に布を巻いたりして、音を殺して来たのです。数名の軒猿も用心のため手勢に付いて来ていたので、これ幸いと弥太郎らと共に火付け役に回ってもら

うことに決った。

参・景虎 side

「甲冑一式持って参りましたぞ。もちろん着込んで頂けるでしょうなあ。景虎様！！」

ある意味生き生きとした顔つきをする実乃が、わきわきとして私につめよった。彼にしてみれば、私の軽装が気になって仕方がなかったのだらう。諦めて渋い顔つきで甲冑を着け、軍勢の前に立った。

本当は、身軽な格好で火付け役に回ろうと思っていた。まったくどこぞの傳役以上に手に負えない男だと、満面の笑みを浮かべ満足そうな顔をする実乃を睨んでみる。

「火付け役は先に敵陣に潜入せよ、軍勢の到来と共に火付けにかかれ。無理はするなよ弥太郎」

「承知、では火付け役は俺と一緒に来てくれ」

火付け役は火種を筒に詰めて、敵中深く進行を始めた。のこる軍勢の方には暖まっておくよう指図する。

戦を前に、私の胸にやどる青白き焰が燃え猛り、全身を狂喜が支配する。

「前面より敵襲です、皆々お会いくださいされ敵襲だ　！！」

まだ夜が明けきらぬうちに軍勢を進めた。兵馬の音に敵もようやく気がついたのか、慌て前面に兵が密集しつつあった。

勝てる！！

「実乃、徒は前面を押しつけてゆけ、騎馬は右側面をつく、私に続け！！」

「承知！！景虎様もお気をつけられよ。よし、枳尾衆は前面をつく槍を備えよ、盾をまわせ！！」

オオオオオ

実乃は盾を連ね槍を備えて、敵を引き付けるため陣太鼓を派手にならしながら、前面の敵にぶつかって行った。

ドンカツカツ！！ドンドン！！

「各々前面を守るのじゃ！！敵兵は少勢だ！！押し返せ！！」

オオオオオ

実乃とは別に景虎ら騎馬は、静かに右側に周りこんで情勢を見極めていた。やがて、敵はおっとり刀でバラバラと集まり、密集体形で前面を形成する。好機とみた景虎は、敵の横っ腹に喰らい込み散々に蹴散らしていった。

密集体形は右翼からの奇襲に弱い、獲物を反対に回す動作は密集してるのもあり対応が遅くなる。そして意表をつかれた敵には混乱が生じ、ドツと中程の軍勢が落ちた。

「おのれ　！！奇襲じゃ敵は多いぞ用心しろ！！」

「ぐあ  
」

敵は、騎馬部隊に散々に攪乱された。霧で油断していたのもあってか、鎧を纏ってないものまでいるようだった。やがて火付け役があちこちで物質を焼きはじめ、敵を攪乱する為に声高に叫んで回った。

「火事じゃ　　！！火付けじゃ！！出会え出会え　　！！」

「敵は一万ほどいるぞ！！やられるぞ　　、逃げよ！！早よう逃げ  
　　！！」

#### 四

敵は散々に逃げ惑い、押し寄せる軍勢の数を見誤りちりぢりと逃げ出した。一方の景虎は、敵を大方かたずけると、深追いせず兵を引いた。ちょうど朝日が顔をだす頃になって霧は晴れだし、軍勢は栃尾城に帰りついた。迎えに出たのは山吉で、泥だらけの軍勢に顔をひきつらせた。

「おやまあ、泥だらけですな。それにしてもご無事のお帰り祝着に存じます。景虎様、朝駆けは如何でしたか？」

「なかなか、有意義であったぞ。皆は各々休むがよいご苦勞であった。山吉、引き続き交代で警戒をゆるめるな。外郭には土嚢を積み」

「承知しました」

帰ってきた景虎を見ると太郎が駆け寄って来た。そして次郎や犬達も尻尾をちぎれんばかりに振って、景虎を囲ってゆく。

「太郎、お手柄だ」

「おお……ま、任せるら」

太郎は胸を張って、鼻の下を人差し指で擦り付けた。犬達も誉められと知ってか、景虎と太郎にじゃれかかる。しょうがなく、景虎はしゃがんで次郎たちの首すじを順番に搔いてやった。

「あはは……なんだ次郎達も誉められたかったのか？」

「……だ、だめら……お前クサイらろ」

太郎はクンクンと景虎を匂ぐと、わざと鼻をつまんでみせる。

「ん、太郎ったら昔の仕返しか？よし太郎、風呂へはいるぞついでかい」

「……ま、まつろ……止めれ」

太郎は、否応なしに露天の温泉まで、連行されて行くことになる。やぶ蛇とはこのことだと太郎は後で気がつくのだが、とうやら遅すぎたようだ。景虎の明るい声と太郎の悲鳴が、朝もやの栃尾城に響き渡ったとか渡らなかつたとか。そこはそれ、皆さんの想像にお任せします。

栃尾城は勝利に沸き返っていた。しかし一時の平和は保たれたものの、敵はすでに進撃を始めている。

景虎達は、敵の出鼻を挫くことに成功したが、地侍らはすでに後続部隊が続々と進行中であり、いずれ報復のために、栃尾城に押し寄せるのは明白なことだった。

困難な山越えを決行する金津ひきいる栖吉衆は如何あいなるのか？はたまた敵の来襲を前に、景虎は座して待つ積もりなのか？

## 第8章・奇襲「完」

## 第9章・籠城

吉

景虎達の朝駆けはみごとに枳尾勢に勝利をもたらした。しかし早朝の攻撃で機先を制された地侍達は、後続する部隊を再結集して形勢を挽回するべく、大挙しておしよせると思われた。

やはり、それはちょうど太陽が中点をすぎ傾きかけた時におこった。昼前に再び放っておいた犬達が、城下のおちこちで唸り声をあげていた。

「…………い、犬が…………唸ったら」

「何？奴ら以外と早いお出まじだったな。太郎、犬の回収をいそげ！それに城の者へ伝令をたのむ！」

「…………わ、わかつたる」

太郎は慌ただしく城の表門に向かって走っていったおそらく途中で、伝言を伝えるのだろう。景虎はといえば、朝駆けから帰り太郎と共に風呂へ入ってから、ついさっきまで仮眠を取っていた。睡眠不足なのか、顔を荒っぽく洗うと呼吸を調べ、刀八毘沙門の像の前に対座する。

普通ならば、景虎は太郎のように城門に向かって行くのだが、どついう訳かいきなり座禅を組み出した。変におもつかも知れないが、彼なりに理由がある。それは心にかかる事柄があるからだった。

戦術はかえることが出来る。しかし、気がかりなのは栖吉の援軍のこと。大丈夫だろうか？

最初に立てた戦術に、イレギュラーな天候の変動が加わって、栖吉軍を難渋させているのは明白だった。景虎は天候のことまで考えが至らなかつたといまさらながら後悔している。そして今、気にかかるとは彼らの安否だった。

刀八毘沙門、こい願わくば彼らをお守りあれ。

「金津さま、少しだけ休憩しましょ。皆も辛そうです」

「申し訳ない金津様。こら長実、男が弱音を吐くなと何時も言ってるだろ！！」

「かまわぬ安実、みな少し休め、栃尾までは後少しだぞ」

景虎の策を為すために栖吉勢を選んだのは、山超えから栃尾に侵入する道だった。しかし、行軍を開始した栖吉勢に予期せぬ冷たい雨の洗礼が降り注いだ。

その雨は、雪の降るまえの冷たさにいどられた氷雨と呼ばれている。厄介な事に氷雨は細かい雨が長く降り続くのだ。

長雨は山の地盤を緩め、山道は泥濘になり、勾配の強いところは地滑りする箇所まで出てくる始末。そして雨は止んだら濃い霧が湧いてくる。

こんな時節の山越えは、余程山になれている者でも敬遠する。まして彼らは甲冑を着こんだ戦装束だ。もし崖下に滑り落ちたらなら

確実に助からない。

三

普通でさえ武装した軍勢を率いて山を越えるのは勇気がいる。それなのに悪天候まで重なって、行軍は困難を極めた。事実ゆるんだ崖から滑り落ちたものや、霧で前が見えず危うく道を踏み外し怪我をした者もいる。

栖吉の男達は道中良く堪えていたが、いまや皆憔悴した顔をかくせないでいる。戦に行くどころか、自然の脅威を目の前に士気は落ち、出来るなら帰りたいたいと思っている。

この栖吉勢の中には幼きころの景虎を知る者もいる。皆は景虎の為に力を貸そうと自ら志願した者が多い。そんな彼らでも、この有り様なのだ。そんな状態の彼らをまえに金津が、落ち着いた声で話しかける。

「聞け 栖吉の者達よ、この長雨で残念なことに数名の死傷者を出した。しかし、この様な事態では後に退くのも前に進むも同じだと思わんか？ どうせなら我らは前に進もう、そして若に栖吉衆の底意地みせてくれよう。金津新兵衛、この通り頼む」

金津新兵衛とは誇り高き栖吉の男、その彼が皆に頭を深く下げた。それは皆の心を雷雲にうたれように痺れさせ、腹を潔く決めさせた。

「よおし、もうひと踏ん張り頑張るか」

「オオオオ……どうせなら栖吉の底意地をみせようぜ」

開き直った彼らの目は、明るく澄みきっていた。新たな勇気が湧いて、力が全身にみなぎって来る思いだろう。それぞれが、決意を新たにして山越えを開始する。

「ヒュ、さすがは大将の傳役だけある。やるな金津の旦那」

今まで黙って、一人飄々と行軍を見守っていた段蔵が、ポツリと呟いた。段蔵にとって山越えは、それほど過酷なことでもないと思っていた。彼らはもつと精神的に追い詰められる修行を重ねて来ている。

こんなどうしようもない状況の時こそ、逃げた方が危険だと本能に染み付いているのだ。だから、あの言葉は的を射ると関心していた。指揮官の優劣は、最悪の事態をまえにした時に決まると感じ入ったようだ。

金津にしてみれば雨が降ろうが槍が降ろうが、元からやり遂げる気概がある。それは、夢にまで見た景虎の勇姿を見んがための苦労だった。幼い頃よりその将の将たる器を見極め、苦労して育てあげた若君。

別たれて一時は、やりきれない想いに身を引き裂かれたような気持を味わった。だが、今は盟約通り一生側に仕えることが出来るのだ。

必ずやこの金津、若の策を成らしてみせる。待っている、我が主。

参

一方の景虎といえば、敵はもう目前に終結してきているというのに、軍義さえしようとしなない。あれからずっと刀八毘沙門の前に対座していたのだ。

そして弥太郎は、まるで寺の門前にある仁王像のように、太い眉を寄せて主の部屋の前で待機している。その弥太郎に、実乃や表郭に詰めている山吉がら、使い番が何度も様子を訪ねに来るのだが、彼は何と答えて良いか分からずに沈黙を通してしている。

事実、弥太郎は困っていた。何度もこの様なことはあったが、今回は籠る時間が長すぎて何だか様子が変だと感じとっていた。

そんな時、タレ目の好好爺らしい顔つきをした源流がやって来た。その爺さんは無言のうちに弥太郎へ頭をさげると、ためらいなく景虎の籠る部屋へと入っていった。

止める間もなかった。いや自然な態度に止める必要性を感じなかったと言ったほうがしっくりくる。弥太郎はまえに軒猿の頭領だと聞かされて、顔はよく見知っていた。

あの飄々とした爺さんは掴み処のない笑みをいつも張り付けている。見るものが見れば眼光の奥には冷たい光りがみえるのだが、普通の者からすればただの好好爺としか見えないようだ。

これでお虎は、動くのだろうか？なんだか、俺にはまだ動くような気がしない。

弥太郎が部屋の前で、悶々としている頃、部屋の中では一心に座禅を組む景虎に、声さえ掛けず影のように気配を絶った源流が部屋の端で待っていた。源流が入ってから景虎には一切の変化は見ら

れなかった。

こんな景虎は、今まで誰も見たことがなかった。だから皆は心配をして、ひっきりなしに使い番が往復する。籠城を決意されているのだろうが、景虎から一切の下知がないことに、宿老たちは燻かしんだ。

景虎様はまだ若い、だから迷っておられるのだろうか？それとも臆されたのであろうか？

実乃は居ても立っても居られない、吹き出す汗を拭いながらまるで出産をまつ父親のように、ウロウロと軍義する広間で歩き回っていた。

彼の元へは次々と敵の近況が伝えられてくるのに、景虎は一向に動く気配をみせない。あれ程、強烈な総大将ぶりを見せつけられて信じて待ちたい気持ち八割に、疑う気持ちが二割。錯綜する思いに悩みはつきなかった。

#### 四

外郭で対陣している山吉にとっても、平気な顔付きではいたが内心は実乃と同じような気持ちだった。しかし長尾守護代家の宿老だけあって、弥三郎や庄田を手足のように使い、兵を交代で休ませつつ布陣を整えている。

さすがは一手の城を預かる者、その手腕は見事なものであった。弥三郎や庄田も山吉の落ち着いた指揮にしたがって、それぞれの持ち場で布陣を敷いて、いまや遅しと待ち構えている。

そして搦め手は、弥太郎の部隊が預かっている。今は戸倉や秋山が中心になって布陣を初めていた。そこに合力しているのは彼らと縁のある庄ノ内勢だった。前から頼まれていた武器とする石や大木を配置している。

「石を城壁にならべる。大木は一番前だ。おまえら、しっかり運べ！！手抜きは一切なしだ！！わかったな！！」

「へい、頭！！」

御台所ではお扇を頭に侍女をはじめ近隣の女房衆が、炊き出しを始めていた。城内には近隣の者もいる。女子供合わせても4000以上いる。握り飯ひとつ作るにしても膨大な数がある。ここは、すでに女達の戦場なのだ。

「女将さん達、しっかり頼んだよ」

「あいよ、まかしくくれ！アンタも何ボヤツとしてんだい。搦め手は人手不足らしいから早く行っておやり」

「かー ちゃん」

この時代いざとなったら女は強い、尻をぶつたたかかれて旦那は搦め手の手伝いに追い払われていた。

敵の大軍を前に、少しづつ活気が城内にみちて来る。それぞれが持ち場を固め大軍を前にしても、士気は下がったりしない。

皆の心の中には、総大将の景虎の勇姿があった。総ての戦において、ことごとく勝利を導きだす軍神。神のごとくピタリと戦の流れ

を読むその知謀。憧憬するほどの大将ぶりに、怖じける気持ちさえ浮かばない。

不思議な高揚感に、栃尾の城は包まれて行くのだが、刻一刻とせまる軍勢をまえに、戦端はいつ開かれてもおおしくなかった。

相変わらず籠っている景虎は、何を考え何を為そうと言うのだろうか？ 栖吉衆は無事に山越えを果たしたのだろうか？ それぞれの胸に去来する思いはなにか？ 既に敵の地侍は、城と対峙して陣場をつくりつつあった。

地の理は城方に傾いた、人の輪は上手く回っている。はたして景虎は、天の時を待っているのだろうか？

## 第9章・籠城「完」

## 第10章・龍旗

吉

晩秋の冷気をはらんだ木枯らしが栃尾平野を駆け抜けた。城下は静まりかえり風が旗指物を靡かせている。今まで盛んに唸り声をあげていた犬は姿を消し、眼前に見える栃尾城は、攻め寄せせる軍勢の前にして、静かに悠然と佇んでいた。

「いまましいクソ餓鬼め!!」

地侍達のなかでも最大兵力をもつ池ノ一党を率いる池ノ内定成は、いけのうちさだなり苛立ちを隠せないでいた。景虎たちが栃尾城に移動するさい、一戦を挑んだ地侍達を指揮したのが彼の叔父である。

景虎に対する憎しみは、骨髓にまで達している。剛腕でならず叔父を倒したのは、若干十四歳の長尾の小倅だ。それにもまして一瞬で蹴散らせると侮っていた相手から、軽くあしらわれ散々に翻弄されている。

そんな体たらくを目にして、地侍達の中にも連合を躊躇う者が出て来ていた。このままでは池ノ一党の沽券にも関わる。この乱世、強き者が正義。ならばこそ、是が非でも汚名返上する必要があった。

「池ノ内殿、こちらの手配りは終わった」

「鮎川殿か、こたびは援軍を感謝する」

鮎川は揚北衆に属する領主であり、池ノ一党とは縁戚にあたる。

池ノ一党にとって今度こそ負けられない戦ゆえ、再三頼み込んで後詰めに来て貰っていた。

「それにしても、豪勇でしられた池ノ一党を手こずらせるとはのう。あの守護代の弟は中々やり手とみえる」

「戯れ事を申されるな、たまたま油断してただけの事よ。今度こそ捻り潰してやる」

「そうじゃ、その息よ。こたびは揚北からも兵力をつのつて増援に来たのだから、勝って貰わぬとな」

地侍達は、およそ4000の兵力で来ていた。後詰めを合わせたら7000にもなる。地侍達は最大兵力でもって押し掛けたのだ。

揚北衆の間でも、景虎の器量が取り沙汰されている。たった500だと侮っていた討伐隊が、蓋をあけたら3000にも膨らんでいたのだから、彼らは狐に摘ままれのような気分だった。

1000程しか居なかった栃尾城は、いまや4000もの兵が詰めている。侮れない勢力にまで成長した討伐隊を、揚北衆は無視出来なくなっていた。まして景虎は、数に於いて上回る地侍達を翻弄し、その悉くを勝利している。

いまや揚北にとって侮れない脅威となった男。長尾景虎、その手並み、嘘か真か確かめさせて頂こう。

式・景虎 side

城の表が敵兵に取り巻かれている頃、私はいまだ刀八毘沙門と向

かい会っていた。城外は喧騒に包まれていたが、山頂に程近い部屋は静けさに包まれている。

身動きすらせず対座していると、突然胸の青白き焰がグワツと一気に身体を押し包みはじめた。己の精神とは別に、暴れはじめる焰をいなしていると声がした。

「そろそろ、戦の先端が開かれておりましょう」

突然、部屋のなかにのんびりした口調が聞こえて来たので、景虎は声のする方向へ顔を向けると、源流が好好爺のような顔で控えていた。

「……………源流さん？」

「どうですか若様、踏ん切りは付きましたかな？彼らには段蔵もついておりますし、イザとなれば何とでもするじゃろ。彼らを信じておやりなされ」

源流の言葉が胸に滲みた。私は己に完璧を求めすぎたと気がついた。総大将の重責に知らずと肩肘を張っていたのだ。己の矮小さに笑ってしまう、己の策におぼれ、窮地に陥れたかもしれないことを悔やんだ。助けられない己を嘆き、仲間を信じ待つことを忘れていた。

彼らの最善を信じよう。そして私は私なりの最善を尽くせば良い。結果は天に委ねよう

「……………行くところか」

景虎は刀八毘沙門に一礼すると、戦場に出る決意を秘めて部屋を出る。するとどうだろう、向かって右方向の山あいから、細く白い煙が上がっていた。

私は一瞬動きを留め、その後腹の底から笑いが込み上げ自然と頬まで緩んでいた。悩みの雲も晴れ、待ちかねたように青白い鬪牙が私を押し包み、知らずと唇は笑みの形を作りあげ高く笑い声をあげていた。

「ふはは……天は我に味方した」

「……お虎様？」

部屋の前はずっと控えて居た弥太郎が、眩しいものを見るように目をすがめる。

「弥太郎、搦め手から兵を割いて二の丸に詰めよ」

「承知！！」

動くとなつたら景虎の行動は早い。景虎の姿に実乃は安堵のため息を漏らした。そして暑くもないのに流れる汗を拭く、実乃が尋ねてきた。

「軍義は如何なさいますか？」

「軍義は無用じゃ。私が前にでよう、乃は二の丸郭に詰めよ」

私は明るい声で実乃に返して、大股に外郭へ駆け出した。駆ける足は羽が生えたように軽かった。栖吉の兵には謝ろう、信じて居な

かったことを謝ろう。

何より生きていてくれた事に感謝した。これですべての条件は揃った。あとは敵を罠に誘い込むだけだ。

参

かたや城の表では、勝ち気にはやる地侍達が布陣を完成させるやいなや、兵を動かし始めていた。今度こそ一揉みにしてくれんと、数を頼みに力攻めで城を落とすつもりだった。

いまだ軍義さえしない景虎を不審に思いつつも、山吉らは数を頼りに力まかせに歓声をあげて押し寄せる敵に対し、矢狭間から矢を容赦なく浴びせかけていた。

「放て　　！！」

押し寄せる蟻の群れは途切れることなく、山肌を押し登ってくる。敵は盾を前面に押しだし、倒されたも次々と兵を繰り出してくる。外郭にいる者達の奮闘虚しく、次第に形勢は敵に有利に働いてきていた。

「者共、あのような柵押し倒してしまえ！！」

「おおお　　！！やれ押し！！」

前面につらねた強固な柵を、敵は数を頼みとして力まかせに押し倒しに掛かってきた。柵はいまにも倒れそうになりながら、ギシギシと揺り動かされ危なげない様子になっていた。

守る方にしてみれば、これはかなり精神を圧迫させられる事態だった。いつ敵が柵を倒し乗り込んでくるか分からないのだ。戦慣れた者は必死の形相をして弓を放つが、農兵の多くは恐怖に足がすくみ動けなくなる者もいた。

こんな有り様に山吉以下誰もが一樣に、この場は引かざるおえないと覚悟した矢先、景虎が外郭に姿を見せた。彼は落ち着いた様子で柵を眺めている。景虎が現れた事で、萎えかけた将兵達の士気が一気に盛り上がった。信仰めいた思いまで湧いてくる。

景虎様が居られる限り、我らは負けはせぬ！！

勢い込んで山吉が景虎に尋ねた。彼の顔が緩んでくいるのが端目に良くわかった。

「景虎様、如何なさいますか？」

「うむ一旦、繰り退いて二の丸郭へ誘い込む」

「わかり申した。皆の者合図がありしだい繰り退きに掛かれ。先の一手は庄田にまかせた陣を構えろ。後の一手は柿崎にまさせる持ちこたえるのじゃ」

オオオ

繰り退きとは、二手に別れて、互い違いに援護しながら退いていく戦術である。これは兵の練度が高くなければ成功しない高度な退き方である。一方が崩れてしまえば終いなのだ。

敵兵はじれて柵に取り付き、身体を乗り出そうとするが、すべて

討ち取られる。そんな攻防が続いた後、柵は砂煙を立て倒される。勝ち気に逸った地侍の群れは、一気に外郭へとなだれ込んできた。

「いまだ、退け!!」

#### 四

「ほう上手いもんじゃ、あの若造なかなかやりおる」

「鮎川殿!!何を言うか、あんなのは見掛け倒しだ。みなボヤツとするな押せ!!」

みごとな繰り退きに、一瞬躊躇いをみせた池ノ内だが、考えなしにひたすら力まかせに兵を押しだす。しかし景虎達に上手くあしらわれて、怒り狂っていた。

それは敵が二の丸郭まで押して行った時に起こった。二の丸に逃げ込む敵を、深くまで追い縋った先頭の者達が、斜め上からの矢嵐に次々と討ち取られゆく。そう二の丸郭は高所にあり門は固く口を閉じ、山から射ち下ろされる弓に寄せて行くわけにもいかず。池ノ内は齒噛みをして悔しがった。

「うぬっ……若造めこしやくな」

「池ノ内殿、ここは一旦退いて装備を整えて出直そう。どうせ奴らはとじ込もって出てくるまいて」

敵は矢嵐に一旦退き、外郭まで退いてゆく。しかし、それを見ていた景虎は動いた。

「我らは追い討ちをかける」

「お待ち下さい。景虎様いくらなんでも無謀すぎる」

景虎をいくら戦上手と認めていても、実乃は堅実な男だけあって、さすがに無謀だと止めに入った。

「実乃、栖吉が来たのだ」

「なんと……」

実乃にとって栖吉からの援軍は、すでに栃尾が孤立した時点で諦めていた。しかし今、援軍が来ている事を知って、思わず涙ぐんだ。

景虎は実乃の肩をポンと叩くと二の丸郭うちに集まった将兵の前に立つ。景虎はひとわたり兵を見渡し皆の注目が集まったとき、よく通る声で叫んだ。

「みな聞けい、運は天にあり、鎧は胸にあり、手柄は足にあり、何時も敵を我が掌中に入れて合戦すべし。死なんと戦えば生き、生きんと戦えば死するものなり。運は一定にいぢょうつあらず、時の次第と思うは間違いなりに。武士なれば、われ進む道はこれほかなしと、自らに運を定めるべし！！城兵、龍旗を振れ、懸かり乱れ龍の旗を！！」

景虎は、片手を高々と振り上げた。すると龍旗が高々と掲げられ、風を巻き上げ大きくたわみ左右に振られると、将兵は腹の底にずっしりとした覚悟が定まり、皆の顔付きが変わる。

「よいか者共、運は我らに味方した。我が軍勢に刃向かうは凶徒なり、悪きものに天誅をあたえん！！いざ、参る」

景虎の腕が振り下ろされると、貝のように固く閉じた門が解き放たれ、兵は氣勢を吐き一斉に雪崩をうって山を駆け下りた。

第10章・龍旗「完」

## 第11章・再会

吉

「……あれは？」

「何が起こったのじゃ」

池ノ内をはじめ随陣する兵達は、二の丸攻略のために一時兵を退くことにしたが、枳尾を下り行く際に右の山手に乱立する旗指物の目に入った。それは何百すらありそうな旗指物の群れ、そのなかに栖吉勢の旗指物もあった。

「……援軍？」

「まさか？……栖吉が動いたとは聞いていない」

「このままでは、退路が断たれよう、如何するのじゃ池ノ内殿」

慌て始めた地侍達は、すぐさま陣場に戻ろうとすると、右山手の旗指物のむれが一斉に隊列を保って山の下へと移動してくる。また、時同じくして枳尾城の二の丸から関の声が上がった。

うおおおお

「……挟み撃ちか？」

「ええい逃げるな！！恐れず迎え撃つのだ！！」

山上から、軍馬の嘶きと共に氣勢を吐きながら、勢いをつけて駆け降りてくる軍勢の音は次第に激しくなる。池ノ内は、我先に逃げゆく兵を押し留めようと奮闘するものの、一旦恐慌状態をきたした軍勢は、踏み留まれる訳もない。

「いたぞ！！奴らだ！！」

「逃げるな卑怯もの！！」

兵を押し留めるために逃げ遅れた池ノ内は数名の兵士と共に、濁流に呑み込まれるように景虎勢に取り囲まれた。

「柿崎弥三郎。うぬが首わしが貰った！！」

「ぬっ……長尾の犬め！！」

弥三郎が上手からの勢いを借りて池ノ内に突進し、刀を振り上げ火の粉を散らして斬り結ぶ。池ノ内も剛腕で鳴らした男、勢いを丈夫な足腰で受け止めるが、じりじりと圧される。ついに一合二合と斬り結ぶうちに、あたりを景虎勢に囲まれて呆気なく討ち取られた。

「敵将、討ち取ったり！！」

うおおおお

敵将討ち取ったの報告があたりに響き渡ると、逃げる敵は三々五々と駆け降りて逃走を始める。栖吉勢だとて、これを見過ごす訳もなく山の下へ降りて追撃に兵を繰り出す。

「栖吉、押し出せ！！一人たりと逃すでないぞ！！」

おおお

思いがけない山上からの追い討ちと、栖吉勢との挟み撃ちにあい敵は壊滅状態に陥った。揚北の鮎川自身は辛くも戦線を離脱するものの、揚北から募った殆んど兵を損なっていた。

栖吉からの追撃は執拗をきわめ、少なからず地侍達に手痛い打撃を与えることになった。それに反し追い討ちに出た景虎勢と栖吉勢の死傷者は数える程しか出なかったという。景虎側の完全勝利で戦は幕を閉じた。

弐・景虎 side

戦は勝利に終わった。私は、早く栖吉衆に会って一言謝りたいと思ってた。しかし栖吉衆は追い討ちに行ったまま、戦後のどさくさに紛れて声を掛けそびれている。

私が待ちに待ってやっと栖吉の者達に会えたのは、夜になって戦勝の宴が開かれた時だった。真実彼らを待ちわびていたのだが、当人達を前にすれば気恥ずかしさと後ろめたさが邪魔をして、すぐには声を掛けられないでいた。

「いや、まったく景虎様の策はピタリと当たりましたな」

「まこと、神のように戦の流れを掴んでくれる」

「さよう先陣に立たれる景虎様は、まさしく軍神が降臨されたように神々しく見え申した」

宴は私の称賛に始まりあれやこれやと神のごとくと誉め称え始める。しばらくは、拳を握りしめ黙って聞いていたのだが、堪えられなくて何も言わずに宴の席を飛び出した。

私が神なものか、神なら間違いを犯すわけがない。ましてや神なら天候位は左右できるだろうし、神なら先ぐらい読めるだろ。まして栖吉に過酷な策など与えなかった筈だ。

私は策の綻びさえ見抜けぬ阿呆だ。それなのに神と喩えられる。なぜだろう、この世界の者は神仏を特別視する。病気や怪我でさえ祈禱師を呼んで高価な札を求めたり、呪いやら祈禱する。医者と名の付くものだって似たり寄ったり、埒のない迷信を信じ込んでいた。神秘的な物と実生活の狭間が薄らいている。そんな所が現代を生きた私には、理解することが出来なかった。私は決して神じゃない。ただ、訳の分からない物がこの胸に灯っているだけ。

この胸の焰とて、己から望んで灯した訳じゃない。

『しばし、借り受ける』

あの言葉が恨めしい、なぜ私だったのか、なぜ忘れかけていた前世の記憶を与えた。そんなもの無い方が幸せに生きられるし、素直にこの世界にも馴染めたらう。

宴の席を抜け出して、発作的に庭に飛び降り裸足で駆け出した。理不尽な思いを昇華できず、思いの長けを何にぶつければよいのかも分からない。まして前世の記憶のことを、生まれてから十四年のあいだ誰にも相談出来ないうでいた。

こんな事打ち明けたって、だれが信じてくれるのか？

そのうち何処をどう走ったかまるで分からなくなって、気がつく  
と小さな祠の前にいた。このような祠は、たいていどこの城にもあ  
る。何の為にあるかは知らないが春日山にもあった。

参・景虎 side

春日山と同じ、虎千代と呼ばれたあの時にも二の丸の近くに同じ  
ような祠を見つけた覚えがあった。

実は郷里のお地藏さんが、こんな祠に納められ各町内に祭られて  
いたものだから、つい懐かしさも手伝って愚痴を呟きにきたり、嫌  
な事があった時は祠の前に来ていた。あの時分は前世と今を結びつ  
ける物を見つけ、懐かしいあれこれを思いだし己を慰めていたのか  
も知れないな。

「……………痛っ」

小さな祠の前に屈もうとしたら足の裏にピリツとした痛みを感じ  
た。裸足で闇雲に走ったから、足の裏が切れてしまっているのだろ  
うか、その場で腰をおろし足首に手をやって持ち上げてみるが、月  
が雲にかくれてあたりが薄暗くて傷が見えにくかった。

「早く、消毒しないと……………」

何気に飛び出した言葉に皮肉に笑う。こんな時知らずに飛び出す  
言葉ひとつ、この世界の者ではないと思いきらされる。

いままで、必死でこの世界の者であろうと生きて来た。戦だって

怖かったし嫌ってもいたのに、家族や民の為にやむにやまれず血をあらう戦場に身を投じ、この刀で軍配で何人もの人を葬り去った。

血にまみれた私は神なんかじゃない、まして策に溺れた私を神と喩えるのはどうかしてる。

神に喩えられても、何も救えない。栖吉の兵は、崖に落ちて死んだものがあるらしいと実乃から聞いた。神ならば救えたはずなのに私は無力だ。

頬を濡らすのは悔し涙、涙を隠そうと膝をまるめ両手で抱き込み顔を埋める。その体勢のまま、暫く泣き続けた。

「ここに居たのか？まつたく、若は幾つになっても変わらん」

「……え」

昔聞きなれた低音の声に顔をあげると、手燭をかざした新兵衛が心底呆れた顔をして、こちらを覗き込んでいた。涙を見られたくないで腕で目を擦りながら顔をあげる。

「実乃や山吉殿からたいした大将つぶりだと聞いたぞ。さて、どんな立派な男に成長したかと楽しみにしていたが、泣き虫は治らんと見える」

「う……」

以前と変わらない、からかうような調子で、私の頬を軽くつねりながら語りかける。私は新兵衛を恨めしいそうに睨み上げた。

「何かとか言え」

「この嘘つき」

そんな事本当は言いたくなかったが、からかわれてつい本音が出る。事情は聞かされて納得もしていたが心の内では消化しきれないものをもっていた。

五・景虎 side

新兵衛は言葉につまり、苦しそうに眉を寄せて悪かったと一言だけ呟いた。気まずい空気が流れ、何か言い訳を言える雰囲気では無くなり、私は照れ隠しに身動きをしてから真面目くさってこう言った。

「許す。これからは離れるな」

「そのつもりだ」

見交わす彼の目には真剣な目の輝きがあった。わだかまりがなくなつて素直な気持ちになり、私はかねてよりの謝罪の言葉を口にした。

「……すまない。栖吉の兵に過酷な策を押し付けてしまった」

「主はあやまらない、だつたら？」

「それでも、死傷者が出たのは私のせいだ」

「くどい!」

私は、謝る言葉をばっさり斬られ俯いた。すると新兵衛の手が伸びてきて、軽く私の頭を叩きそして慰めるように撫でた。

「間違わない大将なんていない。大将が間違っただなら家臣がなんとかするから、気にするな」

「……新兵衛らしい」

「何とでも言え。それにしてもあの策は上出来だった。若にしては頑張ったほうだな」

口は悪いが新兵衛のこういう所が安心できる。神に喩えたりしない、等身大の私を見てくれるような気がして嬉しかった。

「新兵衛、年が開けたら大戦になる」

「揚北か？ 奴らお互い仲が悪いのに、長尾に対してだけは一致団結する厄介な奴らだ」

私は何も言わず肯定の意味でうんと頷いた。新兵衛は考え込むように片手で無精髭の生えた顎髭を撫でている。その無精髭に私は随分と過酷な行軍だったことを感じとり、すまない気持ちになっってしまう。

もう誰の血も流して欲しくない、なのに……。

「また血が流れる」

「そうだな。若は今も戦は嫌いか？」

「嫌い！この世界は戦ばかり人の命が軽く扱われる」

「この世界か……、春日山に居る時もそう言ってたな。埒もない幼子の言葉だと気にしなかったが、若は天から生まれ落ちたのか？」

新兵衛の言葉に呆気にとられ彼を見つめ直す。私は小さい時から知らず『この世界』と言ってたのか？以前生きていたのは、おそらく数百年以上未来の日本であって、天ではなかった筈だ。

「天じゃない。私が生まれる前に生きていた所は、ここと違って随分と平和な世界だった」

「……若が言つと奇想天外な話しでも、本当の事に思えるから不思議だな」

「別に信じなくて良いよ。私だって信じたくない」

「……いや某は、若を信じる。それなら何もかも辻褄があつような気がする。今から思えばあの言葉使いも、普通ではなかった」

## 六・新兵衛 side

若が発作的に庭を飛び降りたのが見え、思わず後を追いかけた。小島という男も同じように追いかけてようとしていたが、あえて譲れと掛け合つて一人で若の後を追いかけた。

あれは尋常な走り方ではなかった。まるで鬼神に憑かれたような走りっぷりに、必死で追いかけたが見失う。仕方なく一旦手燭を取

りに戻り再び探しに向かうと、祠の前に膝を抱えた若を見つけた。

その姿に、春日山に居た頃を思い出す。あの頃も見ないとおもえば二の丸近くの祠の前で膝を抱えて丸まっていたものだった。

あの頃と変わらない雰囲気に、わだかまりなく話しかけた。実は某、若の見事すぎる大将っぷりに声を掛けそびれていた。いや、若が若じゃない別物にみえて、わざと避けた。

そして今、話し掛けた若は少しも昔とかわりなく、あの山吉殿が手放して褒めるほどの華々しい戦歴を持つとは思えないほど、その精神は脆弱なままだった。相変わらず人の死を極端に恐れ戦を嫌っているように見える。

それにもまして、生まれる前に居た所を覚えていると聞いた時には、驚くよりさきに、妙に納得できた。昔から若は、変わった子だった。それは言葉使いから生活の端々まで違っていた。あたり前な身分の違いさえ分からないのに、子供らしくない分別だけは人一倍あった。そう考えるとここでの暮らしは、随分と辛かったんだろうと口に出していた。

「……辛いけど、諦める事も覚えたから大丈夫」

大丈夫と口では言うが少しも大丈夫には見えないと感じる。勝手なことだが弱い部分が見えるから側にいても良いと思えた。傳役として……いや幼いまま大きくなった若の、父親がわりとして一生かけて守ろうと決めた。

「下手に頑張るな。辛いときは某が側にいてやる」

「……そうだね。これからは一緒だね」

「そうだ。安実や長実も一緒だ」

笑った顔はいつもの若らしく、ずっとこんな顔で居てほしいと願う。口には決して出さないが、若はやはり天からの貴重な授かり物で、いずれ天高く飛翔する龍なのだと思えた。

「新兵衛、明日から忙しくなるな!!」

「……なんだ急に」

「明日から雪が積もるまで地侍を潰してまわり、ついでに治安維持をかね盗賊退治。あと戦後のあれこれが山のようにある。新兵衛頼んだ」

「あ……ああ」

この若らしい変わり身の早さに先が思いやられるが、毒を食らわば皿までもだ。この龍が、何処まで飛翔するか某が見届けてやるのもまた面白い。

第11章・再会【完】

## 第11章・再会（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。第6部栃尾編はこれで終わりになります。

今回は、第7部・飛翔編です。雪が溶けたころ、揚北が栃尾城に2万の大群で押し寄せてきた……その結果中条が景虎に接近を図るようになり、三条の本成寺からの関わりで長尾の仇敵一向衆も動きだす……。

また、いつものように見直しと書き貯めにまわります（笑）。

色々と細部にまでご教授頂けたので、読みやすいように語尾と誤字の修正を徹底的にやるつもりです（笑）。

そして物語は転生らしい部分のプロットの再構成を重点的に手直しを加える予定です。

投稿作品の物語の筋は変えませんが、ご安心して下さいませ。

再開は1〜2週間後、プロットと見直しが終わるまでとします。

嬉しいご感想ご評価を頂きました。つぁ様、ちよも様、七房様ありがとうございます。

貴重なご感想やご指摘頂いた。雪待兔様、やまなみなつ様、あかいる様ありがとうございます。教えて下さった事を生かして見直し頑張つて来ます。

また、メッセージで感想など送って頂いた。ツエツト様、鵜様、ちよも様、峰様ありがとうございます。やる気を頂き、精神的に本当に助けられています。

『ネット小説更新チエク』様のWeb拍手を頂いた皆様ありがとうございました。6/9日23:19様、6/12日けん様、嬉しい拍手コメントありがとうございます。遅くなりましたがレスはhomeにて付けさせて頂きました(笑)。また、お暇な時にもお立ち寄り下さいませ。

そして数々のWeb拍手ありがとうございます。homeまで出向いて下さった皆様に感謝します。

完結まで頑張ろうと思いますので、長い目で応援下さると嬉しいです。また評価感想からご指摘まで、忌憚なくお聞かせ下さると幸いです(お辞儀)。

2009/06/11記

2009/06/12改

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2316e/>

---

臥龍転生《がりゅうてんせい》

2010年10月8日22時53分発行